



帰宅は未定

紅は、失恋旅行に発つ～十一月十五日（土）午前十時

「これっていわゆる失恋旅行って言うのかなあ」

越川紅（べに）は最大限に倒した高速バスのリクライニングシートに身をうずめて呟いた。ウィンドウの外を流れていく新宿の街は、デパートの開店時刻をすぎたばかりなのに、休日を楽しもうとする人の波が動き始めている。温暖化で十一月に入ってようやく訪れた短い秋を楽しもうと街にくり出す人たちは、休日を満喫するのだろう。しかしほんの十分前までの紅は、街をぶらつく人たちよりもっと楽しい休日をすごそうと舞い上がっていたのだ――聡史との初めての旅行に出かけるところだったのだから。

しかし聡史が座るはずだった隣のシートは今、荷物置き場となり、ピンクのエナメル地のボストンバッグが虚しく置かれている。バッグの中に入っているセクシーランジェリーを考えると、自分を呪いたくなる。本来なら赤と黒の新品ゴージャスなブラとショーツとベビードールの三点セットが、ミステリアスな大人の女の自分と最高にロマンチックな夜を演出してくれるはずだった。でもそれは見せる相手がいてこそだ。温泉宿に女一人で、やる気まんまんの勝負下着を身につけるかと思うと、苦笑いも引きつる。

こんな予定変更は考えたこともなかった。出発直前の九時五十分を過ぎても、聡史はまだ来なかった。紅はシートの上でじっとしていられず、出発を待つバスから降りた。カンカンと音を立ててステップを降り、アスファルトに細いヒールを下ろしたとき、紅は完全に腹を立てていた。荷物があるのだから、家まで迎えに来てくれたっていいはずなのに、バスターミナルでの待ち合わせに譲歩したのだ。自分が聡史にどれだけ我慢しているのか、わかっているのだろうか。

そのとき携帯電話が鳴った――聡史からだった。こんな日に遅刻するつもりならいい加減にしてほしい。自分に謝ったってバスは待っててくれないのだから――紅が電話に出ると、聡史はいきなり言った。

「ごめん、今日行けなくなった」

「え？」

紅には一瞬何のことかわからなかった。聡史はいやな用事をさっさと片づけてしまおうとするかのように、早口で続けた。

「旅行、行けなくなったから」

「ちょっとまって。今の意味不明……」

「ごめん」

それだけ言うと、聡史は電話を切った。紅は呆然と立ちすくんだ。何の説明もなく、一方的に電話一本で出発当日に旅行をキャンセルされるなんてありえない。紅は怒りで顔が赤くなるのを感じた。すぐに電話をかけ直すが、聡史の携帯は電源を切られていた。そのとき紅の頭の中に浮かんだのは、聡史は逃げたのだということだった。怒りの熱風が胸中を吹き荒れた――このままフェードアウトするつもりなら絶対に許さないから――紅はつながらない電話を何度もかけ続

けた。

「あのう、お客さま、そろそろ出発しますけど……」

温厚そうなバスの運転手が恐れるように声をかけてきた。それがいっそう紅の気に障り、怒りの頂点に達して吠えた。

「乗りますっ！」

紅は運転手を睨みつけると、細いヒールでステップをガンガン踏み鳴らし、シートにどすんと腰を下ろした。直後、アナウンスが流れる。

「本日はご乗車ありがとうございます。河原崎温泉行き、発車いたします」

バスはゆっくりと動き出した。そのときの紅は、せめて温泉とおいしい料理を満喫しなければ気がおさまらないと思っただけだった。つきあっている男からこんな仕打ちを受けたのだから、世界中の女が紅の選択に賛成してくれるだろう。しかしそんな紅が「来るんじゃないかった」と心の中でうめくのは、それから三時間後のこととなる。

ミスター誘拐とその愛人は、不倫旅行中事故にあう～十一月十五日（土）午後十二時

人間とはいつでもどんなときでも後悔する生き物だ。やっぱり別の選択があったのではないかと、あっちの道を進んだほうがよかったのではないかと、隙あらば後悔のネタを探す。そのネタはレストランでオーダーし終えたばかりのランチメニューから、挙式をすませた直後の配偶者まで、尽きることがない。後悔とは人間の習性なのだろう。

このときの大塚杏子はやわらかな微笑を浮かべながら、多くの人間の習性にもれず、大いに後悔していたが、そのネタはかなり深刻だった。隣の運転席に座っている柏木晴信と隠れ宿温泉不倫旅行に向かっているからではない。どう見ても若葉マークとしか思えない柏木の運転で、山道を走っているからだ。ここまで事故にあっていないのは、後続車と対向車が少なかったからである。来るんじゃないかったというのが、杏子の単純明快かつ深刻な後悔だった。

車がカーブを曲がりきれずに何度目か反対車線にはみ出したとき、杏子は決心した。顔を窺うために小首をかしげ、気遣うようなやさしい声で言う。

「ねえ晴信さん、ちょっとお疲れなんじゃないかしら。昨夜も夜のニュース番組に出演されてたでしょ。それで、あの、よかったら、わたしが運転を……キャーッ！」

眼前に崖が迫った。急ブレーキがかかり、シートベルトが杏子の腹に食いこむ。杏子は頭部を突き出した前傾姿勢で、目を大きく見開き、荒い呼吸をくり返した。続く言葉はもう出てこない。

隣では柏木が、同じく激しい呼吸をしていた。髪を乱れさせ、額に脂汗をにじませ、目を血走らせて怒鳴る。

「テレビ出演くらいで疲れたりするか！ おまえのせいだ！ おまえが話しかけるから、運転に集中できないんだ！」

それから柏木は車をバックさせると、乱暴にアクセルを踏んだ。車は急発進して、杏子の体はシートに押しつけられる。杏子はもう一度頼んでみようかと思ったが、男の運転に口出しをしてはいけないという鉄則を思い出し、それを押し殺した。柏木が怒鳴ったとき顔にかけられた唾を、震える指先で拭ってから、潤んだ瞳で柏木を見つめる。色気で柏木を説得しようとしたのではない。死への恐怖からだ。しかし柏木は肩を怒らせたままハンドルを握りしめており、杏子のほうを見ようともなかった。杏子は柏木がこれほどまでに運転下手だということを知らなかった。知っていたら、決してドライブ旅行をおねだりしなかった。しかしテレビで活躍中のミスター誘拐と柏木晴信が、免許取消申請をしたくなるほど運転が下手だとは、誰が考えるだろうか。

ゲリラによる誘拐事件が大きな社会問題となっている現在、誘拐評論家である柏木はテレビで人気のコメンテーターだ。日に焼けた肌、白く並びのよい歯、整えられた眉、二重の目は意味があろうとなかろうといつでもきらきらと輝き、四十三歳になっても爽やかなスポーツマンのような風貌を演出した。さらに「誘拐犯を恐れてはいけない」「犯人には毅然とした態度で臨むべ

きだ」という強気の発言が、杏子を含めたお茶の間の女性たちには頼もしく映り、絶大な人気を得ていた。もっとも杏子の夫である和己を含めた男性たちからは「こういうタイプの男は抜け目ない詐欺師だ」という評判だったが。

杏子が柏木と出会ったのは、今年の夏の昼下がり、ショッピングの帰りに一台のタクシーを二人が同時に呼び止めたという偶然からだった。そんなきっかけで恋が始まるなんてドラマの中だけだと思われがちだが、杏子という女はそんなメロドラマのような恋愛を次々と現実のものにしてきた女だった。艶のあるロングヘア、上質かつ胸元がほどよく開いたワンピース、真っ白なレースの日傘、そして色白できめの細かい肌はいつでもしっとり潤いながらも汗をかかない。清楚さと華やかさ、そして内に秘めた色気をあわせ持つ杏子は、四十歳になっていっそう癒し系マドンナと呼ぶにふさわしくなり、レストランでトイレに立つときでも男たちの視線を引きつけていた。

杏子は運転中の柏木の姿を見て、彼とのつきあいを考えるべき時期かもしれないと思い始めていた。もちろん、運転下手な男は魅力半減ということも大きかったが、それを自分のせいにされたことがいちばんの理由だった。自分の行動に責任をとれない男は人間性に問題があるに違いない。

もし車中に蚊が一匹でもまぎれこんだら大惨事になるだろうという緊迫感の中、車は前後左右に揺れながら進んだ。杏子は柏木との心中を回避すべく、どうやってこの車から降りようかと思案していると、視界の端にふとバックミラーが入った。ぎょっとしてうしろを振り向き、杏子は叫ぶ。

「晴信さん、うしろのトランクから煙が出てる！」

「話しかけるな！」

「でもおかしいわ、煙よ！ 止めて！」

「うるさい！ そんなにぎゃあぎゃあ言うなら止めてやる！」

柏木はカーブを曲がりきったところで、突然急ブレーキをかけ、またも急停車した。杏子はあわてて言った。

「ここは道の真ん中よ！ 路肩に寄せて！」

「本当に注文の多い女だな！ 自分がどれだけわがままを言っているかわかっているのか？ 止めろというから止めてやったのに、今度は止める位置が気に入らないときた！ ほんの数分黙っていることすらできない女の機嫌をとってられるか！ もうやめだやめだ、旅行なんて！」

柏木はシートベルトを外し、車の外に飛び出した。杏子の脳裏に一瞬、このまま車を奪って東京に帰ってしまおうかという考えがよぎったが、さすがにそれはできなかった。しかし杏子はこのとき情をかけたことを、またも深く後悔することとなる。杏子もシートベルトを外し、キーをとると、柏木を追って外に出た。

「ねえ、ごめんなさい。心配なのよ、あなたが……」

「この車は最新式のボディガード仕様車なんだよ！ トランクの煙は誘拐犯を欺くための装置がちょっと故障しただけだ！ それを大ごとみたいに騒ぎ立てやがって！」

柏木は杏子の言葉に耳を貸す気はないようだったが、杏子が差し出した車のキーは奪いとった

。息巻いてトランクを開けると、中から煙があふれ出てくる。柏木は咳きこみ、顔の前で手を左右に振って、煙を散らしながら叫んだ。

「何だ、この煙は！ 何がボディガード車だ、このポンコツが！ ふざけやがって！」

〇〇七映画に出てくるような車なのだと、愛車を自慢の種にしていた男の言葉とは思えなかった。煙の中に手を突っこんだ柏木は、つかんだものを引き上げて、目を見開いた。

「何だ、これは？ 発煙筒に目覚まし時計がついている……」

そのとき車が近づいてくる音がした。杏子は叫んだ。

「晴信さん、車よ！ うしろ！」

もはや車を移動させる時間はない。杏子は車から急いで離れ、柏木もとっさにあとを追った。後続車は何も知らずに煙の中に突っこんできて、急ブレーキをかける音と同時に激突音が響く。杏子は青ざめた。

「どうしよう……事故よ」

「大丈夫だ、自動車保険は使わない。ぶつけた向こうも前方不注意なんだから、示談で済ませて、他言しないよう口止め料も積んでやる。これで俺たちの関係もばれない。それなら、おまえも安心だろう」

「厭味を言っている場合じゃないでしょ！ 人が怪我したかもしれないのよ！」

杏子はついに柏木に見切りをつけて、後続車にきびきびと駆け寄った。エアバッグに圧迫された運転席と助手席の男が、ドアを開けて、這い出てくる。杏子は白いレースのハンカチを差し出しながら、腰を屈めて声をかけた。

「大丈夫ですか」

煙を吸いこんだらしく、二人の男は苦しそうにむせ始める。

「歩けるかしら。さあ、こちらへいらして」

杏子は二人の男を煙のない反対車線側のガードレール寄りに誘導した。柏木は被害者を助ける気もないらしく、煙のおさまった愛車のトランクを調べていた。

運転席側から出てきたのはこけた頬をした三十代の男だった。よれよれのシャツとすりきれたジャケットを着ている。眼鏡を外し、衝突のショックで曲がったらしい黒いフレームを伸ばそうとしていた。助手席側の男はガードレールに掴まり、上体を折り曲げて、深呼吸をくり返していた。杏子は言った。

「お怪我はございません？」

男は上体を起こすと、げじげじ眉をつり上げ、三白眼で杏子を睨んだ。二メートルはあろうかというほど背が高く、太い首とがっしりした肩がつながっている。杏子は巨漢に見下ろされ、思わずあどずさった。

男は野太い声で怒鳴った。

「トランクから煙が出たからって、急カーブの山道のだ真ん中に車を止める奴があるか！ 他の車の迷惑にならない場所に移動してから停車するのは常識だろう！ 道路交通法を守れないなら、車に乗るな！」

「ご、ごめんなさい。お、おっしゃるとおりだと思うわ……」

この体格なら怪我があってもたいしたことはないだろうという安堵感半分、やくざみたいに怖

い相手にぶつかってしまったという恐怖感半分で同意した。

巨漢は怒鳴った。

「おいスパイダーマン、女を捕まえろ！」

スパイダーマンと呼ばれた運転席の男は眼鏡をかけ直すと、尻ポケットから手錠を出した。杏子は震え上がる。

「あなたたち、警察なの？」

壁など決して登れないだろうというひよわそうな体型のスパイダーマンは「自分たちの目的は日本の平和だ」とだけ言った。それから杏子の腕をつかむと、後ろ手に手錠をかける。不倫は日本の公序良俗のためにはまずかったのかもしれないと、杏子はまた後悔した。

巨漢は柏木のもとに突進した。柏木はテレビ向けの洗練された物腰を失い、トランクを指さしながら喚く。

「警察ならちょうどいい！ 事故は陰謀だ！ 見てくれ、発煙筒にタイマーがついている！ そのせいで煙が出て、車を止めたんだ！ 不可抗力だ！」

巨漢は鼻の穴をふくらませ、柏木の手首に手錠を振り下ろす。金属音とともに、柏木の腕は固定された。

何かがおかしいと杏子は察した。それから空気を読んで、逆らわないほうがいいと判断し、静観を決めた。しかしまったく空気を読めない柏木は、口から唾を飛ばしながら喚いた。

「いきなり逮捕か？ だから警察は横暴だって嫌われるんだよ！ 俺が誰だかわかっているのか？ 柏木晴信だぞ！ テレビでこの不当逮捕のことは全部喋ってやるからな！ 人権派のジャーナリストやニュースキャスターに言って特集番組を作ってやる！ 無実の男を逮捕したって叩かせてやる！ そうすりゃおまえらなんか終わりだ！」

スパイダーマンが冷静に口を開く。

「どうする、ランボー？」

「非常識な馬鹿のせいで、車をつぶされた。市民の協力を要請するしかない」

「誰が非常識な馬鹿だ！ 何も調べず、逮捕する警察のほうが非常識な馬鹿だろうが！」

「調べる必要はない。タイマーつき発煙筒をトランクに入れたのは自分だ」

柏木は目をぱちくりとさせた。ランボーは柏木の口にガムテープを貼ってから、なぜ自分がここまで説明しなければならないのだというように言った。

「自分たちは警察じゃなくゲリラだ。そしておまえたち二人は今から人質だ」

紅は、バスジャック中誘拐される～十一月十五日（土）午後十二時三十分

結局聡史への電話はつながらなかった。紅は恨みメールを入れておこうと思いつき、ネイルアートをほどこした爪が今にも折れそうな勢いで、千字に及ぶメールを送信した。しかしそのあとすることがなくなり、バスのシートに沈んでデコ電を睨んだ――ピンクのラインストーンがキラキラ光るマイケータイ。真ん中に大きなハートを貼ったときには、これで恋愛運アップになると喜んだのに、ご利益はなかった。帰ったらケータイを買い替えよう。

紅の脳裏には、失敗に終わった過去の恋愛群が浮かんできた。ジャニーズ系の温、スポーツマン系の雅寛、エリート系の宏樹、この三人がマイ三大イケメンだった。それからその他もろもろ。紅はファッション雑誌を研究し、手間暇かけてヘアメイクや服をととのえ、自分を可愛いめOLに作り上げていたから、合コンでは六割の確率で声をかけられた。それから恋愛が始まるが、いつも長続きせず、平均四ヶ月で関係は終わった。そして今日また三ヶ月で聡史に逃げられて、失恋記録更新というわけだ。失恋はどんなに回数を重ねても、慣れることはない。回数を重ねるほど、傷は深くなる。自分を責めたくなる――どうして嫌われるの？ あたしの何がいけないの？ あたしってそんなに魅力ない？ すごくがんばって女磨きをしているのに、運命の人はいないの？

聡史との別れの予感もあった。最近の聡史はつまらなさそうな表情を隠さなくなったし、デートの帰り、送ろうと言ってくれなくなっていた。つきあい始めて三ヶ月は世間的に微妙な時期と言われるが、十一月半ばに入っており、別の意味でも微妙な時期だった。ここで別れ、すぐ次の男が見つからなかったら、二十五歳のクリスマスを一人で過ごす羽目になる。そんな寂しい女にはなりたくなかった。そこで紅は巻き返しを図るべく、押せ押せ作戦で聡史に旅行に誘った。聡史が承諾してくれたとき、紅はこれで聡史をつなぎとめられると安堵した。だから紅は本当はリッチなホテルに泊まりたかったが、会社で若年寄と呼ばれる聡史に合わせて、G県内のひなびた温泉宿に譲歩した。聡史が運転免許を持っていないと言うので、車ではなく高速バスにまた譲歩した。それは仕方がないと思っていた。

そんなことを考えていたとき、突然バスが急停車し、紅はその勢いで前の座席に額をぶつけてしまった。額を押さえながら、何が起きたのか確かめようと首を伸ばす。

車内アナウンスが入った。

「ご乗車中のお客様にご案内申し上げます。ただいま前方に……」

運転手は突然言葉を呑みこんだ。乗車口のドアが開く。低い男の声が聞こえた。

「緊急通報したら、殺す」

運転手はアナウンスのマイクを置いて、両手を上げた。青いマスクで頭部を覆った男が太い首を曲げて車内に押し入ってくる。右手には自動小銃が握られており、銃口は客のほうを向いている。首を伸ばしていた紅は、マスクの穴にある鋭い目と、視線を合わせてしまった。紅は授業中に教師の視線を避けるように俯き、座席に腰を下ろした。

そのうしろから手錠をかけられた男女、そしてもう一人レッドマスクを眼鏡の上からかぶり、自動小銃を手にした男が続く――バスジャックだ。

車内は騒然となった。悲鳴を上げる者、シートに身を隠そうとする者、あわてて通路に飛び出したが、すぐに思い直して自分の座席に戻る者。しかし多くの乗客のとった行動は無抵抗だった。抵抗して犯人を怒らせ、わが身を危険にさらすよりは、無抵抗で生き延びようという姿勢に、事なかれ主義の日本人は即一致する。車内はすぐに静かになった。

ブルーマスクの男は言った。

「全員携帯の電源を切ってから出せ。もし隠しているのがわかったら、その場で殺す」

レッドマスクがビニール袋を手に、通路の前から順に左右の座席から差し出された携帯電話を回収して回った。紅も涙を吞んで、デコ電とお別れした。

ブルーマスクは銃口を揺らして、手錠をかけられた男女を誘導した。二人はちょうど空席だった、通路を挟んで紅と同じ並びのシートに座らされる。紅は二人を見て、思わず声を上げた。

「ミスター誘拐！」

有名人、しかもよりによってあのミスター誘拐が誘拐されている。車内が一瞬だけざわついた。ブルーマスクの男がじろりと紅を見る。紅はあわてて俯いた。

ブルーマスクの男は運転手に向かって言った。

「出せ」

運転手はすぐにバスを動かした。ブルーマスクの男は、次に乗客たちに命じた。

「頭を伏せてろ。窓の外を見るな。少しでも頭を上げたら殺す」

従順な乗客たちは幼稚園のおゆうぎのごとく一斉に頭を伏せた。これで外は見えなくなり、自分たちがどこにいるのか確認することはできなくなる。聞こえるのはブルーマスクの男のくぐもった声だけで、ときおり「右折」「左折」と運転手に指示を出す声が聞こえた。

紅は頭を下げたまま状況を考えて、少し気持ちが落ち着いてきた。なぜならミスター誘拐の姿を見たからだ。柏木晴信は誘拐評論家だし、テレビのコメントからはスーパーヒーローぶりがにじみ出ていた。たとえ今は囚われの身だとしても、彼ならきっと脱出方法を考えているはずだし、乗客たちの力になってくれるだろう。口のガムテープを引き剥がして犯人たちを説得するとか、銃を奪って犯人を捕まえることくらい簡単かもしれない。

紅は期待をふくらませて、柏木が動くのをじりじりと待った。長い時間が過ぎた気がする。昼食をとっていないのに、腹もすかない。時間の感覚がたぶん狂ったのだろう。それでも柏木は動かなかった――きっとチャンスを待っているのだ。すべてミスター誘拐に任せておけばいい。

そのとき通路に立っていたブルーマスクが運転席に向かって足早に歩いていった。前方で何か異変があったようだ――チャンス到来、ミスター誘拐！　――紅は心の中でエールを送ったが、柏木は動かなかった。バスが減速し、運転手席付近で犯人二人と運転手が何やら話している。

「どうします？」

「うろたえるな。突っこめ」

「む、無理ですよ！　突破してもあとが続きません！　バスがパトカーを振り切れるわけし、防弾ガラスじゃないし……」

「がたがた言うな！」

紅がパトカーという言葉に希望を持ったとき、ブルーマスクは車内マイクを使って言った。

「検問だ」

乗客たちが期待と不安に、一斉にごくりと唾を飲みこむのがわかる。現在の日本では、検問は至るところで行なわれている。わずか五年間で日本の治安は急激に悪化して、こういうゲリラが横行する国になったからだ。政治や社会問題にまったく興味がない紅でも、これくらいは知っている。

ブルーマスクは続けた。

「自分たちは日本の平和のために、市民の協力を要請する。自分たちの言うとおりにすれば、数時間以内には罪のない市民を解放すると約束する。もし協力を拒否すると言うなら、平和を阻止する体制側的行動と見なし、全員射殺する。協力を拒否する者は今ここで申し出てもらおう」

乗客たちからは何の声も上がらなかった。バスは徐行運転となる。男のこの言葉で乗客たちは気づいた――ゲリラたちの狙いは自分たちではないことに。ということは、彼らの狙いはミスター誘拐だけで、このバスは逃亡に利用されているだけなのだ。ゲリラは原則として貧しい人たちの味方だから、狙うのは金持ちだけだ。休日に高速バスを使って温泉旅行に行く庶民を金持ちだとは、ゲリラたちも思わないだろう。逆らわなければ、庶民は安全に解放され、秋の紅葉と露天風呂を楽しめる。「バスジャック、怖かったねー」「本物のゲリラ、初めて見ちゃった」とおしゃべりしながら、酒を飲むこともできるだろう。

ブルーマスクが言った。

「市民の協力を感謝する。全員頭を上げろ。おかしい真似はするな。ちょっとでもおかしい真似をすれば、殺す」

乗客たちは素直に頭を上げた。ブルーマスクが軽く顎をしゃくると、レッドマスクは通路を後部座席に向かって歩いていった。前列から三番目の紅は、ゲリラの一人が視界から消えて、少し気が楽になった。自動小銃が目の前をちらつかないだけでも気が休まる。

しかしブルーマスクは紅のほうにまっすぐ向かってきた。紅のバッグを足元に下ろし、隣にどっかりと座る。紅は悲鳴を上げそうになったが、ぐっところえた。

ゲリラは右手で自動小銃を持ち、左手だけで青いマスクを引っ張り、頭部から外した。紅は好奇心に駆られ、男のほうを見た。見てしまった。顔の輪郭は見事な四角で、鼻は団子型で、鼻の穴が大きい。そしてひさしのような太い眉とその下の三白眼。体型といい顔つきといい特徴が多く、似顔絵を描きやすそうだと紅は思った――これなら解放後に警察に協力できる。

男はマスクを革ジャンパーのポケットに押しこみ、膝に自動小銃を置くと、紅のボストンバッグをその上に置いて、通路から見えないように隠した。銃口を柏木たちのほうに向け、引き金に指をかけて言った。

「おまえらは俯いて、寝たふりしてろ」

柏木とその隣の女はすぐに俯いた。紅はその様子を見て、がっかりした。

バスが止まった。乗車口のドアが開き、たれ目で若い制服姿の警官が明るく声をかけてきた。

「検問にご協力お願いしまーす」

警察はサービス業なのに愛想が悪いという国民の声を受けたせいか、警官はさわやかな笑顔をふりまいた。運転手が尋ねる。

「あの、何か事件でも……あったんですか」

「いえ、抜き打ち検問でありまーす。異常ないですかー」

「ないですよ」

「観光バスですねー？」

「高速バスです。新宿南口発河原崎行き」

「免許証と許可証お願いしまーす」

運転手は言われたとおりに指示された二枚のカードを提示した。警官は何の疑問も持たず、菓子箱サイズのコンピュータにカードを挿入する。ピッという音がして、カードが抜きとられると、すぐにカードを返された。これは検問記録として数日間残され、異常がなければデータ削除されることになっている。

乗客たちは運転手と警官のやりとりをぎらぎらした目で見つめていた。異常を訴える者はいなかったが、内心では誰もがこの警官に異常を気づいてもらえないかと期待していた。警官はステップを二段だけ上がると、首を伸ばして車内を見渡した。乗客たちは異様なほど息をひそめている。さらにどう見ても凶悪犯というゲリラの顔も見たはずだ。しかし警官は快活に言った。

「ハイ、オッケーで一す！」

何がオッケーなのだ、休日の温泉地行きのバスの中で、誰一人笑わず喋らずビールを飲まずなのだから、どう見ても異常じゃないかと紅は憤った。しかしか弱い女の子が自動小銃つきゲリラの隣ではなす術もない。警官は運転手のほうを向いて言った。

「トランクの中はお客様の荷物だけですよねー？」

「そうです」

「じゃあ行っていいですよー。安全運転よろしくお願いしまーす。発車オーライ！」

カードデータを読みとった時点で検問作業は終わったも同然なのか、若い警官はスタスタとステップを降り、ドアは彼の背後でパンッと閉まった。そのとき車内に流れた空気は、何ごともなくやり過ごした安堵感、ゲリラに気づいてくれなかった警官への期待はずれと怒りが混じり合った、複雑なものだった。そう言えば警官の質が低下したと、ニュースで報道されていたことを紅は思い出した。犯罪が増加し、警官の数を増やしたが、訓練や待遇の面で追いつかず、業務に支障が出ているとか何とか。それを補うために機械化を進めているとか何とか。

バスは再び走り出した。紅は、このゲリラが自分の隣の席から立ち上がってどこかに行ってくれることを願った。警察に似顔絵の協力をする気は失せていたし、もはや柏木にも期待していなかった。

しばらくすると、ゲリラはポケットから携帯電話を出し、こそこそと電話をかけ始めた。

「こちらランボー。予定外のことが起きた。ターゲットは予定どおり捕獲したが、車が事故にあって、現在バスジャックをしている。警察には追われていない。乗り換えの車が必要だ。司令部に手配を頼んでくれ。連絡を待つ」

どうやらこの男は乱暴という名前らしい――何てぴったりなんだろう。ちょっとアクセントが変だけど。

乱暴は電話を切ると、再びマスクをかぶって、席を立った。紅の緊張が一気に緩む。乱暴は別の車の手配をした。検問に協力したら乗客を解放すると言っていたのは、嘘ではなかったのだ。まもなくゲリラと柏木は別の車に乗り換えられ、自分たちは解放される。紅は警察や柏木よりも、乱暴に期待したほうがよさそうだった。

乗客たちは再び窓の外を見ないように、頭を伏せさせられた。車体の揺れがゆるくなり、どうやら街中に入ったようだった。乗客たちは静かに耐えていた。終わりが近づいてきたと思えば、異常なドライブも我慢できる。トイレに行きたいと訴える者さえいなかった。

携帯の着信音が流れ、乱暴は電話に出た。

「わかった」

それだけ言うと、電話を切った。全身を耳にして、電話を盗み聞きしようとしていた紅は、拍子抜けした。しかし先ほどの電話で車を頼み、今回は短い「わかった」という返事なのだから、手配がうまくいったということだ。紅はもう少しで解放されるのだ、我慢我慢と、自分に言い聞かせた。

足音がした。前方にいた乱暴がこちらに向かってきた。紅はわずかに頭を上げて、様子を窺った。乱暴は手にハサミを持っている。紅はどきりとした――まさかここでミスター誘拐を刺し殺すつもりだろうか――乱暴はハサミを振りかざす。柏木は目に涙をためて、ガムテープの奥でのどを鳴らした。紅は思わず目をつむる。じゃきじゃきという音がした。目を開いてみると、乱暴は柏木と女の髪をひと房ずつ切りとっていた。それからぐるりと振り向くと、紅に向かってきた。紅は上体をがばっと起こし、声を上げる。

「何するの？」

「髪を切る」

「嘘でしょ、やめてよ！ 今日の巻きはカンペキに成功したんだから！」

「いやなら死ね」

ハサミの刃がきらめいた。紅は半泣きで言った。

「何であたしの髪を切るの！ あたしは人質じゃないでしょ！」

紅は興奮して喚いた。乱暴は汚い顔を近づけて、紅の髪をつかむと、柏木たちと同じようにひと房切りとった。紅の目からぽろっと涙がこぼれた――最悪すぎる。聡史にふられて、旅行を台無しにされて、完璧な髪まで切られるなんて。来るんじゃないかった。

「待ちなさい！」

後部座席のほうから、男の声がした。レッドマスクが「勝手に立つな！」と自動小銃を向けて威嚇した。ゲリラに屈せず立ち上がる勇気ある男もいたのだ。紅は指先で涙を拭ってから、白馬の王子様を見ようと座席から身を乗り出した。絶体絶命のときに自分を助けてくれる人こそ、きっと運命の人だ。彼に会うために、自分はこの危険なバスに乗りこんだのだ。

白馬の王子様は顔に深い皺が刻まれた、痩せた老人だった。白いシャツにグレーのジャケットを着て、胸にはループタイが下がっている。頭ははげて、背が縮んだのか小柄だった。紅の目から滝のような涙が流れた。つけまつ毛がとれそうだ。

老人は毅然として言った。

「その娘さんを放しなさい。人質にするつもりなら、やめなさい」

「てめえ、誰が立っていいと言った？ 座れ！」

レッドマスクの男が自動小銃を向けて怒鳴った。

老人はかまわず続ける。

「若い娘さんを人質にするのはしのびない。このお嬢さんには家で帰りを待っている親がおるだろう。人質にするなら、わたしにしなさい」

「あなた！」

どうやら妻がいるらしい。紅はほっとした。

老人は夫人に向かって言った。

「心配するな、静子。糖尿病の薬なら、多めに持ってきてある」

「糖尿病？ とにかく馬鹿なことはやめてください。あなたが行ったからって……」

「わたしはもう決めた」

「それじゃわたしも行きます！ もう待つのは……」

「そこまでだ」

乱暴が老夫婦の会話を打ち切った。

「ばあさんはいない。じいさんだけだ。こっちに来い」

夫人は夫の手をつかもうとしたが、老人はバッグを手に通路を前方に向かって歩いてきた。バスが揺れるたびに老人はふらつき、乗客たちの心配を掻き立てる。老人は乱暴の前に立った。ただでさえ小柄な老人が、バスの天井に頭をぶつけないよう首を縮めている巨漢の前に立つと、まるで子供と大人だった。しかし老人はひるまなかった。その目とぴんと伸びた背中には、信念のようなものが感じられた。老人は乱暴を見上げ、改めて言った。

「わたしは辻という。人質が必要なら、わたしを連れて行きなさい。娘さんは帰してあげなさい」

乱暴は言った。

「髪を切れ」

それから辻にハサミを差し出した。辻は顔色を変え、たじろいだ。

「髪かね？ だが、切るったって……」

辻の頭頂部は見事に輝いており、後頭部の下のほうにちょろちょろと白髪が残っているだけだった。しかし乱暴は動揺する様子もなく言う。

「かき集めてでも切れ」

容赦ない一言に辻は衝撃を受けたようだった。しかし唇をぐっと真一文字に結び、肘を上げて手を後頭部に回した。白髪を集めると、名残惜しそうにハサミを入れる。まるで時代劇の切腹シーンを見ているかのようだった。紅はゲリラの冷酷さを改めて思い知り、恩人に深く同情した。

バスは土産物センターの駐車場に入ってしまった。その頃には、紅のアイメイクはすっかり落ちていたが、気持ちは落ち着いていた。もちろん辻が人質交代を申し出てくれたからである。辻に対して申し訳ないという気持ちは間違いなくあったが、背に肚は変えられない。

バスは停車し、乱暴は言った。

「じいさんが先だ。それから女」

紅は驚き、前の座席の背中についている把手を握りしめ、座ったまま動かなかった。

「女、立て」

指された紅は無言で前の座席を見つめ、唇を固く結ぶ。

辻が言った。

「わたしが行くから、娘さんは解放してやりなさいと言っただろう」

「だめだ。女は自分の顔を見た」

「それじゃ約束が違う」

「約束した覚えはない。立て、女」

自動小銃の銃口が紅の側頭部にぴたりと当てられる。いやな感触だった。紅は「見てないし、誰にも喋らないから」と小声で言ったが、腕をつかまれ、立たされた。それからピンクのボストンバッグを持たされる。辻、紅、抵抗しないと約束して手錠をはずされた女、手錠を隠すためにジャケットを羽織らされた柏木、それから乱暴が通路に一例に並んだ。乱暴は言った。

「これからおまえたち四人は外に出る。もし騒げば、バスの中の誰かが死ぬ。それは辻のばあさんかもしれないし、他の客かもしれない。もし四人がおとなしく別の車に乗り換えたことを確認したら、このバスは解放する」

ドアが自動で開くと、そこには帽子をかぶり、サングラスをかけた別の男が待っていた。

「四人だ」

「了解」

犯人たちは何もかも心得ているというように、必要最低限のことしか話さない。それがいっそう不気味だった。感情がなさそうで、いざとなったらためらわずに人を殺すだろうと思われた。

辻は覚悟を決めたようだった。うしろを振り返ることなく、たしかな足取りでステップを降り始める。紅は辻ほど強くなれなかった。心臓がどくんどくと鳴った。立ち止まろうとする足を懸命に前に出した。紅はついにバスから外に出た。休日の陽光はあっけらかんとまぶしすぎて、泣けてくる。

誰でもいい、こんな大きな土産物センターなのだから、誰か気づいてほしいと願いながら、紅は辻の背中に続いた。こんな人目の多い場所なのだから、一人ぐらい自分たちに気づいて声をかけてくれるかもしれないと思ったが、他のバスの観光客たちは出発時間に間に合うようトイレと買い物をすませようとしてせわしなく、楽しげで、自分たちを見ようとはしなかった。マイカーの観光客たちは二人きりの休日を楽しんでいるカップルや、幼い子供から目を離せない夫婦が多く、やはり自分たちには目もくれなかった。

四人の人質は、新しい犯人たちに誘導されてワゴン車に乗った。運転席に一人、背後に一人が乗りこんだ。どちらも帽子と手袋をして、サングラスをかけ、不自然な髪形をしていた。おそらくカツラだろう。全員が乗りこむと、ワゴン車はすぐに動き出した。

すぐに紙コップに入ったオレンジジュースが人質全員に配られた。紅はのどの渇きに気づき、オレンジジュースを一気に飲み干した。ジュースは妙に苦かった。紙コップが空になると、犯人は無言で手を差し出し、気前よくおかわりを注いでくれた。紅はまた飲み干した。飲まなくなつて、どうせ逃げられないのだ。それなら眠って、つらい思いを忘れられるほうがいい。しばらく

くすると、案の定まぶたが落ちてきた。

美登里は、夫が誘拐されたあと、豪勢なディナーを食べる～十一月十五日 土曜日
午後五時

美登里は、夫が誘拐されたあと、豪勢なディナーを食べる～十一月十五日（土）午後五時

柏木美登里は冷蔵庫から食材を出して並べた。神戸牛フィレ肉、オレンジ、ローズマリー、マッシュルーム、グリーンアスパラ、サニーレタス、クレソン、カマンベールチーズ、バゲット、赤ワインなど。

今日は銀座のエステティックサロンで入念なお肌のお手入れをしたあと、ネイルサロンの予約をキャンセルし、デパートの地下食品街で食材を買いこんでから、タクシーに乗った。夫の晴信が仕事で外泊すること、家政婦の佐藤が休みであることを思い出し、娘の香と自分のために手のこんだ料理を作ろうという気になったのだ。美登里は結婚前に料理学校に通っていたこともあり、料理は得意だった。しかし夫のために腕を振るう気がなくなって、娘も塾帰りに友だちと食事をとることが多くなり、そのうちに家政婦を雇うようになったので、今ではたまにしかキッチンに立たなくなった。

二階にいた香がキッチンに下りてきた。冷蔵庫を開けて、うんざりしたように言う。

「のどが渴いても、この家には飲むものがない」

「野菜ジュースがあるでしょう」

「あたしは佐藤さんにアップルジュースを買っておいてって頼んだのに」

「ママが買い物リストからはずしておいたのよ。だめよ、あんな添加物だらけのもの。この野菜ジュースにしないで。これは体にいいっていつも言ってるでしょう」

「ママっていつもそう。そうやって自分の趣味を押しつけるの。あたしが佐藤さんに頼んだものを勝手にはずさないでよ。ママの野菜ジュースを飲むくらいなら、水道水のほうがまし」

「ママの趣味じゃありませんって何度言ったらわかるの。あなたのためを思って言ってるのよ。このヘルス&ビューティ野菜ジュースは、二十種類の新鮮で厳選された野菜を使い、コップ一杯で一日に必要なビタミンが摂取できるよう計算されているんだから。ママがいろいろな野菜ジュースを飲み比べた結果いきついた、究極の一品なのよ」

「こんなものを飲むくらいなら、死んだほうがまし」

香は言い返すと、ミネラルウォーターのボトルをとり、冷蔵庫の扉を乱暴に閉めた。美登里はオレンジに包丁を入れながら、ため息をつく。香はミネラルウォーター入りのグラスを手にして、リビングに行き、美登里に背を向け、レザーのソファにどさっと腰を下ろした。その仕草に美登里はまた眉をひそめる。

美登里にとって香は、異星人のように不可解な娘である。香のだらしなさ、エレガンスのかけらもない動作にはいらいらさせられる。美登里と晴信は、日常生活で目に入るもの、肌に触れるもの、口に入れるもの、耳を楽しませるもの、鼻に香るものが感性を刺激し、その人の品格とセンスを支えるという考えにおいては、意見が一致している。だから夫婦仲は冷めていても、二十年も夫婦生活を続けてこられたのだ。家の中は家具からトイレの消臭剤に至るまで、美登里が厳選した高級品を揃えてある。

それなのに香ときたらどうだ。今も着ている服はのびきったチュニックに、だらんとしたロングスカートで、ヘアスタイルは右側が長く、左側が短いというアンバランスなセミロングである。民族風だかボヘミアンだか知らないが、古着屋にお金を払ってぼろ服を買い、前髪を自分でぎざぎざに切って、自分をみすばらしく見せて、素敵に見えろと思っているのだろうか。今どきの女子高校生なら、まともなおしゃれに目覚めてくれてもいいではないか。母親である自分はそのためのハイクオリティな環境をパーフェクトに整えたつもりだ。それなのにどうして香はこんなけったいな娘になってしまったのか。

お腹の子が女の子だとわかったとき、いつかおしゃれな姉妹のような母娘になろうと夢見ていたものだが、その夢は潰えていた。女の子らしい普通の服を着て、母親とブランドショップめぐりをして、「今度のデートのときに、ママのヴィトンのバッグを貸してね」と甘えるということが、どうして香には難しいのだろうか。

お誕生日のプレゼントにほしいものが、もっと大きめのアイロン台とかロックミシンとか機織機とかいうのもやめてほしかった。女の子にとっての最高の実用品とは、歩きにくい華奢で美しい靴、携帯電話と化粧ポーチしか入らない小ぶりのバッグのはずだ。機織は機織職人に任せて、若い娘には織り上がった布で仕立てられたドレスを着て楽しんでもらいたい。

そんなわけで悪い予感があったが、香は高校卒業後の進路を服飾専門学校に希望しており、お嬢様大学として有名なS女子大に進学してほしい両親と対立している。特に晴信とは一週間前「遊んでいないで勉強しろ。服飾専門学校なんかに学費は出さないからな」「女のところに入り浸っている奴なんか父親じゃない」「父親に対してその態度はなんだ」というお決まりの口論が始まり、やがてエスカレートして、最終的に香の大好きなロックバンドのポスターを晴信が破り、香が泣き出すところまで行き着いてしまった。

香はテレビをつけた。それでも美登里は言った。

「香ちゃん、ダロワイヨのマカロンを買ってきたわよ。好きでしょ」

「うん」

「夕食前だから、少しだけなら食べてもいいわよ」

「いいよ、ごはんのあとでママと一緒に食べる。コーヒー淹れてくれるでしょ」

美登里は娘のささやかな一言を嬉しく思い、親ってまったく馬鹿だと自嘲した。香はテレビに視線を向けたまま、美登里を見なかったが、結局一人ではマカロンを食べようとはしなかった。

子供の無邪気さからなのか、大人の寛容さからなのか、その両方を合わせた計算高さからなのかかわからないが、香にはどこか憎めないかわいらしさがある。親の鼻真目といってしまうとそれまでだし、しっかり操縦されている気もするが、これだから美登里は香のために急いで帰ってきてまで、夕食を作ろうと思うのだ。たとえ母親への嫌がらせのために生まれてきたのではないかという娘であっても、香への愛情はあった。喧嘩しても切れない関係は、十ヶ月間お腹の中に入っていた絆のせいだろうか。これが夫との大きな違いである。そして香もまた、母親と対立はしているが、父親よりは母親を愛してくれていると思う。仕事という口実をもうけては、愛人と過ごしてばかりで家に帰ってこない父親よりは「まし」という程度かもしれないが――「父親らしいことなんて何もしないくせに、家ではいばりちらして、外で女つくって。あんな父親ならいな

いほうがまし。離婚すればいいのに」。何かにつけて「まし」と言うのは、香の口癖だった。

香がテレビを見たまま世間話をするように言った。

「ママ、パパが誘拐されちゃったみたい」

「え？　パパが何ですって……誘拐？」

「うん。速報が出てる」

美登里は料理の手を止めて、リビングに行き、テレビを見た。左上に小さく「ミスター誘拐、衝撃の誘拐」という文字が出ており、女性リポーターが「立入禁止」と書かれた黄色いテープの手前でマイクを握っている。背後には車の衝突事故らしい事故現場が映っていた。

「……発見当時、事故車はあったものの、付近に人影はなく、その後高速バスの運転手から通報を受けて、誘拐事件と判明した模様です。運転手の証言によれば、誘拐されたのは、誘拐評論家の柏木晴信氏と同乗していた女性一名、バスの乗客二名とのことです。事故車の持ち主は柏木氏と見られており、警察はまもなく特別捜査本部を設置し、捜査を進めるとともに、誘拐された他の三名の方々の身元確認が急がれています。運転手は犯人から人質の毛髪の束を預かり、警察に通報するよう指示されたと言っている様子です。柏木氏はミスター誘拐という愛称で知られる誘拐評論家で、マスコミを中心に活躍しておられます。その柏木氏を狙ったということは、犯人は何らかの意図があったものと、警察は考えているようです。以上、現場から早見裕子がお伝えいたしました」

画面がスタジオのキャスターに切り替わる。香はあきれたように言った。

「やっぱり女連れかあ。何らかの意図も何も、わかりきってるじゃん。テレビであんだけ強気の発言してれば、ゲリラだって誘拐したくなるんじゃない？」

「当然の報いね。それにしても誘拐なのに、マスコミは報道協定を守らないのかしら」

「警察に髪の毛を届けろって言った時点で、報道協定なんか必要ないんじゃないの」

「そうかもしれないわね。むしろ報道してほしいから、パパを誘拐したのかも。いい宣伝になるでしょうから」

そのときテレビの女性キャスターが緊迫した声を上げる。

「ただいま新しいニュースが入りました。柏木晴信氏誘拐事件に関する最新情報です。報道各局宛に、犯人グループより声明文が入りました。これより声明文を読み上げます。『我々は自称誘拐評論家柏木晴信、大塚杏子、辻明、越川紅以上四名に、社会改革のための協力を要請した。四名は、日本政府の不当な政治から、日本国民を救い、命と自由、秩序と道徳を回復させるために、尽力することを表明した。〈命と自由を守るネットワーク〉』。くり返します……」

香は面白そうに言った。

「やるう！　ゲリラってば声明文をニュース番組の放送時間にぶつけてきたよ。これで今夜のニュース番組はパパの誘拐事件一色になるね。番組を自分たちの宣伝のために買いとったようなもんじゃない。しかもまったく広告料を払わずに」

美登里は香をそっと窺い見た。娘は父親の誘拐にまるで動じていないらしい。それはそれでひと安心であり、不安だ。

女性キャスターが解説員に話を向けると、初老の解説員が話し始めた。

「状況から見て、犯人の目的は柏木氏の誘拐、他の人質はその巻き添えと考えるのが妥当でし

よう。柏木氏はテレビなどでゲリラを糾弾する強気の発言をしていましたから、彼を拉致すれば、宣伝効果は抜群ですからね」

香でも思いついた解説を聞き、美登里はさっさとキッチンに戻ろうとした。そのとき電話が鳴る。美登里はカウンターの上の電話をとった。

「柏木でございます」

「柏木晴信を誘拐した。我々に協力すれば、人質は無事に帰す。また連絡する」

電話は切れた。ボイスチェンジャーでも使っているような、奇妙な声だった。美登里は香に向かって言った。

「犯人からの電話だったわ」

「ふうん。何て？」

「パパを誘拐したって」

「もうわかってるって、そんなの。誘拐犯からの連絡よりマスコミの報道のほうが先なんて怠慢。やる気あるのかな」

香はそれでも気になるのか、テレビを見続けていた。美登里は軽く肩をすくめてから、夕食の支度を再開した。

七時半に夕食の用意が整った。牛肉のオレンジとローズマリーのソースがけ。つけあわせはソテーしたマッシュルームとグリーンアスパラ。カマンベールチーズをあえたグリーンサラダ。ペイザンヌ。ガーリックバターつきバゲット。自分のための赤ワイン。デザートはジェラートは器ごと冷蔵庫で冷やしてある。そのときインターホンが鳴った。美登里は立ち上がった。

「誰かしら、こんな時間に」

「パパじゃないことは確かだよ」

玄関のモニターには、二人の男が映っていた。インターホンから、煙草を吸いすぎている人間特有の、のどに声が絡まっているようなだみ声が聞こえた。

「突然お邪魔して申し訳ありません。G県警警備部公安課の前原と申しますが」

「はい」

「少々お話ししたいことがあります。ただいまお時間よろしいでしょうか」

「どうぞ」

それから美登里は香に言った。

「刑事さんですって」

「やっと来たか。遅いね」

「お食事時に迷惑よね。非常識だわ。刑事が家に来て、お時間よろしいでしょうかなんて訊いてくるのは、断られることはないとわかっていて言ってるのよ。横暴だわ」

美登里はドアを開け、刑事二人を家の中に入れた。二人ともコートを着ていたが、室内でも脱がなかった。ダイニングテーブルの横を通り過ぎ、奥のリビングのソファに腰を下ろした。香はダイニングの椅子に座ったまま、立ち上がりようともせず、刑事たちを見ていた。美登里が儀礼的に「コーヒーでも」と声をかけると、二人は辞退したので、向かいに座った。

年配の男が前原、もう一人のやや若い男が立石と名乗り、立石は手帳をとり出す。美登里は「

わたしが柏木の家内で、あちらが娘の香です」と紹介した。前原はだみ声で「そうですか」と言った。えらの張ったいかつい顔に凄みのある目、柔道選手のように横幅も厚みもある体軀は、チンピラを束ねるやくざの中堅どころで通る。前原は時間を惜しむように話し出した。

「さっそくですがね、本日ご主人の晴信さんの車が事故にあった状態で発見されてね。残念なことに、晴信さんは行方不明です。現場の状況と目撃者の証言から、誘拐事件に巻きこまれたものと考えております」

「存じてます。テレビのニュースで見ましたし、先ほど犯人から脅迫電話がありましたから」
前原は驚いた。

「先ほど？ いつのこと？」

「そうね……ニュースを見ているときだったから、五時過ぎかしら。五時半にはなっていなかったと思いますけど」

「何て言っていました？」

「主人を預かっているとだけ。協力すれば、無事に帰してくれるようですわ。また連絡するとも言っていました。機械を使って声を変えているような、変な声でした」

「身代金などの要求は？」

「何も」

「身代金の要求はおいおい犯人から来るといいますのでね。とにかく焦らないことです。警察への通報は直後にされましたか」

「いいえ」

美登里が言うと、前原はまたわずかに目を見開いた。

「通報しなかった。なぜです」

「警察に通報すれば、主人の命はないと脅されたからです」

美登里はとっさに嘘をついた。前原はわざとらしいほど怪訝そうに言った。

「妙ですね」

「何が妙なんです？」

前原は腕を組んだ。

「犯人はバスの運転手に人質の髪を警察に届けるよう指示したんです。それなのに電話では通報すると言った。模倣犯の可能性もありますなあ」

「模倣犯？」

美登里は驚いたようにくり返して見せて、それ以上のコメントを控えた。

前原は続けた。

「通報の義務があることはご存知ですね」

「いいえ、存じませんでしたわ」

「知らない？ ご主人は有名な誘拐評論家でしょう。その奥さんが通報の義務すら知らないと」

「ええ。わたしは主人の仕事には一切口を出しませんから。主人も仕事については話しませんし……誘拐については素人です」

「なるほどね。それでは通報しなかったのも無理はないですかね。ですが今後は、必ずご協力ください。警察も全力で捜査に当たりますから、気を落とされませんように」

誘拐されたら、通報は当然という居丈高な態度に美登里は腹を立てた。マスコミの報道よりずっと動きの遅い警察に、いちいち通報しろとでも言うのか。

前原は右手で顎を撫でてから言った。

「それで二、三質問とお願いしたいことがありますね」

「何でしょうか」

「まずは最近変わったことはありませんでしたか。些細なことでいいんですがね。家の前に見知らぬ車が長時間停まっていたとか、見かけない人物を目撃したとか」

「ありません」

「本当ですか。よく考えてください。何でもいいんで、どんな些細なことでも」

「本当に何も思い当たることはありません」

「そうですか。お嬢さんは……香さん？ 香さんは何か気がついたことあったかな？」

前原は顔を上げて、ダイニングテーブルで携帯電話をいじっている香に視線を投じた。香はあっさりと言った。

「ないです」

「お父さんを助ける手がかりになるかもしれないだよ。よく考えて」

香は無言で頭を振った。前原は言った。

「それじゃ奥さん、ご主人を恨んでいる人物に心当たりは？」

「山ほどありますよ。ゲリラはみんな主人を恨んでいるんじゃないかしら。そのくらい刑事さんもおわかりになるでしょう」

「個人的なおつきあいの中での心当たりはありますかね？」

「仕事関係は知りません。個人的な交友関係も。わたしたち夫婦はお互いのプライバシーを尊重しているんです」

前原は何か含みがあるように目を細め、先を続けた。

「次に身元の確認のため、人質のものらしい毛髪をDNA鑑定にかけたいんですよ。それでご主人のヘアブラシをお借りしたいんですが」

「うちの主人が誘拐されたのはもう確認済みでしょう。どうしてまたDNA鑑定なんてするんですか」

「他の人質の毛髪と分けるためにです。同じビニール袋に入っているもんですからね。それと柏木氏に見せかけた別の人物という可能性もあるかもしれませんから、念のために」

「そういうことなら、どうぞお持ちください」

それから香に言った。

「香ちゃん、パパのヘアブラシを持ってきてくれる？」

香は「はい、ママ」と言って、素直に出て行った。前原はちょうどいいという顔つきになって切り出す。

「それとですね、このような状況でたいへん申し上げにくいことなのですがね」

「どうぞおっしゃってください」

「実は車には同乗者がいたようなんですよ。この女性も一緒に行方不明というわけでして。四十

代前半らしいんですが、奥さんに心当たりはありますかね」

「存じてますわ、主人の愛人の大塚杏子さんです」

刑事二人は顔色を変えず、美登里の心の中を探るような目つきで見た。美登里は大塚杏子のことはよく知っていた。定期的に興信所に頼み、夫の愛人の身元調査をすませ、ホテルから出てくる写真まで手に入れてあった。彼女の存在を隠すつもりはなかった。

「主人は結婚当初から、複数の女性とのおつきあいがありました。大塚さんは最近親密になった女性です。夫婦仲は冷めていますので、お気遣いなく」

「失礼ですが、離婚はお考えになりませんでしたか」

「香のためです。娘が結婚か就職するまでは、父親の肩書きが必要ですから。でも夫が不倫相手の女と誘拐されたとあっては、素直に心配する気になれないのもおわかりになるでしょう」

香がヘアブラシを手に戻ってきた。刑事に渡すと、立石が礼を言って、ビニール袋に納める。前原が言った。

「それじゃ今夜、電話に録音機器と逆探知機をつける技術者をよこしますんで、ご都合のよろしい時間をお伺いできますか」

美登里は顔色を変えた。

「録音と逆探知？」

「ええ。犯人からの連絡が来たときのためにです」

「勝手に録音なんて困ります。うちの電話には録音機能がついていますから、録音したら、テープを差し上げます」

「いやあ、そういうわけにはいかないんですよ。法律で決められているんです。ご不便でしょうが、ご主人の救出のためですから、ご理解ください」

「法律だか何だか知りませんが、お断りします。うちは被害者家族なんですよ。無神経だわ」

「それではこちらに警官が詰めることになりますけど、よろしいですか」

「警官が居座るですって？ 冗談じゃないわ！」

「ですからご協力をお願いしているんです。最近は技術が発達してまして、オンラインで警察署につながるもんですから、機械さえ設置させていただければ、お宅に警官が居座るなんてことはないんですよ。誘拐事件の場合、長丁場になる可能性もありますからね。ま、そのへんも覚悟しておいてください。もしご希望があれば、もちろんつけますがね」

美登里はむっつりとして口をつぐんだ。前原は言った。

「で、今夜は何時が」

刑事というのは皆こうなのだろうか。事件だけでなく、被害者の家族まで支配下に置こうとするのだろうか。あの目障りな晴信がいなくなったというのに、また別のものに支配されるのは真っ平だった。美登里は完全に引き下がるつもりはなかった。

「今夜は困ります。娘を休ませてあげたいんです。明日の午前中にしてください。十時がいいわ」

「わかりました。それじゃ、明日の十時までに犯人からの電話があったら、その録音機能つき電話に頼むとしましょう。それじゃそろそろ」

前原と立石は「どうもお邪魔しました」と言って、立ち上がる。それからまるで今日に止まっ

たかのように言った。

「豪勢な食事ですね。何かのお祝いですか」

美登里は笑った。

「我が家の夕食は毎晩このくらいのものは用意します」

「そうですか。たいへんなお料理上手ですね。これは奥さんが？」

「ええ」

「全部お一人で？」

「料理は得意ですから」

「たいした腕前だ。それじゃ奥さんもお気を落とさないように」

夫が誘拐された夜、パーティのように豪勢なディナーをとることを責めているように聞こえた。刑事二人はようやく帰り、美登里は塩をまいた。美登里がダイニングに戻ると、香があわてたように言った。

「ママ、あれはまずいよ」

「まずいって何が」

「あの態度！ 疑われたよ、絶対！」

美登里はびっくりして、香を見た。

「どうしてママが何を疑われるの？」

「だって警察に喧嘩を売っているような態度をとっているし、パパのプライバシーを尊重するとか言いながら、女のことを知っているし、パパが誘拐されたのに、フルコースみたいなごはんを用意しているし。ママがゲリラにチクッたと思われたかもよ。パパと愛人の女をまとめて誘拐させたとかさ」

美登里は落ち着きはらって椅子に腰を下ろし、ナプキンをかける。香は向かいに座った。

「大丈夫よ。ママの気持ちは話したもの。愛人と一緒に誘拐された夫を素直に心配する気にはなれないって。それにとり乱さないのはママの性格よ。ママがみっともないことは嫌いだって知ってるでしょ。いただきます」

美登里はワインを口に含んだ。香も「いただきまーす」と言って、牛肉にナイフを入れた。ローズマリーの香りづけをしたオレンジのソースをつけて、口に入れると文句を言った。

「あーあ、冷めちゃった。やっぱり迷惑だよね、警察って」

「本当にそう。そのくせいばってるんだから」

「そうだね。マスコミ、犯人、いちばん連絡が遅かったのが警察じゃない。やっぱ怠慢だよね。さっきテレビで警察の検挙率がまた下がったとか言ってたよ。団塊の世代が集団退職した上、最近は犯罪が増えて、全国的に人手不足だって。パパの捜査ってするのかな」

「してもしなくても、ママはどっちでもいいわ」

こういう形で夫を抹殺するのもいいかもしれないと美登里は考えた。数年後離婚が成立したとしても、慰謝料をとれるだけだが、夫が殺害されれば、全財産と死亡保険を手に入れられる。しかもゲリラに毅然とした態度をとると主張していた夫の信念を支えると言って、身代金を払わないだけでいいのだ。二人は晴信の今までの悪行を並べ立てながら、食事をした。

デザートジェラートを食べ始めた頃から、やたらと電話がかかってくるようになった。それを見越して、美登里は留守電にしておいたのだが、これは正解だった。

「坂本です。テレビ見たわ、大丈夫？ わたしにできることがあれば言ってね」

「美登里？ ママよ。今どこ？ 警察？ パパも晴信さんのこと心配しているのよ、遅くてもいいから電話して。もうどこに行ってるの。携帯にも出ないし。香ちゃんもいないの？ まったくもう高校生の娘がこんな時間にどこをほっつき歩いているんだか。とにかく電話しなさい。待ってるから」

「太陽テレビの山口です。柏木氏とはいつも仕事で一緒しておりまして、今回の事件をたいへん遺憾に思っております。そこでもしよろしければ、奥様に独占取材をお願いできませんでしょうか」

「テレビや雑誌で話題の光明メモリアルです。当社のご葬儀のご相談の一切を承っております。万一の際には、ぜひご用命のほどをお願い申し上げます」

この手の電話にその都度出ては、いつ食事を終えられるかわからない。後片付けが終わったあと、必要なものだけまとめて対応することにした。食事が終わると、香は携帯電話を見て、「メールがうじゃうじゃー！」と楽しそうに言った。美登里は「メールばかりしていたらだめよ。早くお風呂に入りなさい」とたしなめた。

九時、食器洗浄機に食器を入れていると、新しい着信音があり、若い男の声が入った。

「夜分に失礼します。A F 保険の誘拐コンサルタント青山です。このたびはお気の毒なことで、ご心中お察し申し上げます。つきましては、ご主人さまが当社の誘拐保険に加入されておりました関係で、わたくしがご主人さまの救出にご協力申し上げることになりました。明日お時間いただけないでしょうか」

紅は、ウサギ小屋で目を覚ます～十一月十六日（日）午前一時

紅は暗闇の中で目を覚ました。自分の置かれた状況がどういうものだったか、とっさにはわからなかった。仰向けのまま額に手を当てて考え、誘拐されたことを思い出した。聡史との温泉旅行が女一人の失恋旅行に変わり、ついには誘拐旅行になったのだ。着がえや化粧品を持ってきたことを、運がよかったと言うべきか。紅は額から首筋に手を移動させ、同じ動作を三回くり返した。寒い冬の朝、ベッドから出たくない気分と同じだった。いや、月曜日の朝の気分に近いかもしれない。それからようやく重い体を起こす。こんなに体が重いのは睡眠薬のせいだろう。

床に足を下ろすと、もう一台のベッドが見えた。平行に並ぶベッドはまるでホテルのツインルームのようだった。それならと手を伸ばして暗闇を探ると、やはりライトスタンドのスイッチが見つかった。ほの暗い灯りをつけると、隣のベッドに誰かが寝息を立てているのが見えた。どうやら柏木の連れの女性のようなようだった。

足元の向こうがシェードのようなもので覆われている。目を凝らしてみると、金網だった。小学校の校庭の一角にあったウサギ小屋を思い出す。太い針金が波打つ、かろうじて指が入る程度の格子の金網である。それが天井から床に下りており、紅は今ウサギ同様に檻の中にいた。

いや、自分はウサギじゃなくて人間だ。こんなところにいてはいけない。鉄格子でなく金網くらいなら、壊して逃げられるのではないかと思い、両手で金網を掴んで、がたがたと揺らしてみる。金網の向こうの暗闇から声がした。

「やめろ」

紅はびっくりして、ベッドに駆け戻った。布団をかぶり、じっとしていると、まだ睡眠薬の効き目が残っていたのか、まもなくまた眠ってしまった。

美登里は、虫の好かない誘拐保険屋に会う～十一月十六日（日）午後二時

午前中に玄関口で「水道管の修理にやってきました！」とわざとらしいほどの大声で名のる警察がやってきて、自宅の電話に録音機と逆探知機をとりつけられた。今後は私用電話もすべて盗聴され、録音されるのだと思うと、美登里は滅入りそうだった。夫と警察のせいでプライバシーも何もあったものではない。

約束の午後二時きっかりに、昨夜電話してきた男が柏木家に現れた。午後二時五分、柏木家のリビングで家政婦の佐藤がコーヒーを出してから下がると、美登里は男の差し出した名刺を読み上げた。

「『A F 保険誘拐保険部交渉課 誘拐コンサルタント 青山雅羅』さんね。お電話では保険がどうかおっしゃっていたけど、どういうことかしら」

青山は二十代後半の、気味が悪いほど型にはまったエリートサラリーマン風の男だった。すらりと痩せた体を上質のスーツに身を包み、シルバーのアタッシュケースを脇に置いている。髪はしっかりと固められ、毛一筋も乱れていないその姿は、金属でできたロボットを思い出させた――さびないステンレス製で、体温がなく、抑揚のない話し方をするコンピュータプログラムのかたまり。青山は微笑んだ。本人は営業用の笑みのつもりだろうが、美登里にはうすら笑いを浮かべているようにしか見えなかった。青山はケースを開け、中から一枚の書類をとり出し、テーブルの上に置いた。

「ご主人の柏木晴信さまは、万一に備えて二年前に当社の誘拐保険に加入されました。こちらが保険契約書です」

美登里は書類を手にとって見た。たしかに晴信の署名捺印がされている。

隣に座っている香が言った。

「ママ、知ってた？」

「……いいえ、今初めて聞いたわ」

美登里の胸の奥からどす黒い怒りがこみ上げてきた。テレビでは、誘拐犯人に毅然とした態度をとれたの、脅しに屈するななどと調子のいいことを言っておきながら、家族にも内緒で誘拐保険に加入していたのだ。しかも妻子の保険はかけず、自分だけ。美登里が震える指で契約書を返すと、青山は冷静に言った。

「聞いていらっしゃらないのは当然のことです。誘拐保険の場合、ご家族にもご契約に関して話してはいけないことが、加入条件の一つになっております。もしあらかじめご本人さま以外の方が保険加入を知っていた場合、契約は無効となります」

「どうしてそんな」

「失礼ながら、狂言誘拐などの保険金詐欺を防ぐためです」

美登里は怒りを静めるために、拳をぎゅっと握り締める。

「これは狂言じゃないわ」

美登里はこの言葉をプライドを傷つけられたことに対する抗議の意味で言ったのだが、青山は保険金の支払いについて心配していると受けとったようだった。

「今のところ、保険金の支払いについては問題ありません。ご主人さまは外出ルートを日々変更されていらっしゃるし、当社の誘拐対策セミナーにもご出席されましたので」

「あなた、主人の救出に協力すると言ったわね。具体的に何をしてくださるの？」

「まず交渉のアドバイスをさせていただきます。犯人との身代金交渉のほか、警察への対応も含みます。こちらはすべてわたしが担当させていただきます、費用はかかりません。それと犯人との交渉が成立しましたら、当社にて身代金をお支払いいたします。もちろん保険の限度額内ですが」

「いくらまでなら下りるの？」

「二億円です」

美登里は思わず大声を上げた。

「二億！　うちの人ったら、自分の身代金保険に二億円も掛けてたの！」

「ご主人さまは著名人ですから、何かとご心配だったのでしょうか」

「ミスター誘拐ですものね。それなのに恥ずかしげもなくよくも誘拐されたものよ」

青山は無言を返した。

美登里は顔を紅潮させる。

「しかもこの誘拐保険さえあれば、交渉から警察の対応まですべてあなたがやってくれるんでしょう。家族はいらないってことじゃない。馬鹿にしてるわ」

「そういうわけではございません。ご家族さまにも交渉にはご参加いただきます」

青山はあくまでも冷静さを崩さずに言い、それがさらに美登里の怒りをあおった。せめて青山が同情を示してくれば、「わかりますよ、奥さま。でもきっとご主人さまは奥さまを頼りにしているはずですし、救出はご家族さまの協力あってこそですよ。一緒にがんばりましょう」、そんなふうに妻を立ててくれる一言があれば、自分はもう少し冷静になれただろう。美登里は突然契約書をつかむと、真っ二つに切り裂いた。

「ママ！」

「奥さま！」

香と青山は同時に叫んだ。美登里は冷たい怒りを抑えながら、かろうじて言った。

「こんな紙切れ、破ってしまえば契約は無効でしょう。わたしは身代金を支払うつもりはないの。それじゃ青山さんだったわね、お引き取りくださいな」

美登里が睨みつけると、青山は何ごともなかったように言った。

「契約は有効です。こちらはコピーですし、契約解除にできるのは、契約者ご本人さまである晴信さまのみです。ご家族さまが拒否なさっても、こちらで身代金をお支払いいたします」

「ママ、落ち着いてよ！　パパの命がかかっているんだよ！」

香が困りきったような表情を浮かべて、美登里の腕をつかみ、突然殊勝なことを言い出した。美登里は眉間のしわを深くして、裏切り者の香を睨みつける。昨夜は晴信を共通の敵として悪口を言い合い、母娘の絆をしっかりと深めたのに、いったいどういう心変わりだろう。

香は青山のほうを向いた。

「ママは気が立っているんです。昨日刑事さんが来て、パパが女性と一緒にだったって聞いたから、怒ってるんです」

「何言うの、香ちゃん！ よしなさい！」

「だってママ、あたしもつらいんだよ。パパが他の女の人と一緒にだったって聞いて、許せないと思うけど……それでもパパはパパだから。やっぱり生きて帰ってほしいから……」

香は最後には言葉をつまらせ、美登里は口を開けてそんな娘の姿を見ていた。香がここまで父親を慕うなんてありえない。何か考えがあるに違いない。美登里は軽く咳払いをした。とたんに持ち前の見栄が顔を出し、感情的にふるまってしまったことを恥ずかしく思った。

「娘の言うとおりです。今は娘の気持ちと主人の命を第一に考えるべきね」

「そうだよ、ママ。もしママとあたしが一所懸命パパをとり返そうとしたら、パパはきっといろいろ考え直してくれると思うよ」

香は優等生のごとき発言をした。美登里は香が学校でもこのくらいのふるまいをしてくれれば、S女子大くらいかたいのにと考えた。

母と娘が話し合っている間、青山はアタッシュケースの中から、i P a d をとり出し、コーヒーを飲んで、話し合いが終わるのを淡々と待っていた。

香が青山に尋ねた。

「それであたしたちも交渉に参加するって言ってましたよね。何をすればいいんですか」

「具体的には、犯人と電話などで直接交渉をしていただきます」

美登里は驚いて口を挟んだ。

「交渉は青山さんがしてくれるんじゃないの？」

「わたしはあくまでもアドバイザーで、表には出ません。犯人と直接話すのはご家族さまで、わたしはどのように話すべきか、何がポイントになるのかをアドバイスいたします」

「二億円の保険金支払いなんだから、掛金も高かったんでしょう。それなのにただアドバイスするだけなの？ 交渉おまかせコースでも作ったら？ きっと需要があるわよ」

「ママったらやめてよ、もう」

香が美登里をたしなめた。この子はいつからこんな大人になってしまったのだろう。親の育て方が良かったせいなのか悪かったせいなのかわからない。

青山は相変わらず顔色を変えずに話を進めた。

「犯人に、交渉のプロに交渉されていると思わせるよりは、気が動転している家族を相手にしていると思わせたほうが、油断を誘いやすいのです。また誘拐保険がかかっていると犯人が知れば、身代金を不当につり上げられる可能性や、人質期間が長引く可能性が出てきます。あらゆる意味でわたしは背後に隠れている必要があるのです」

ここで青山はi P a d に指をすべらせた。

「誘拐保険が掛けられていると知られた場合、長期化する可能性は六八、二パーセントです」

「六八、二パーセントって何？ そのデータは何なの」

「当社の過去の統計数字です。長期化は三ヶ月以上を指します」

青山は涼しい顔で答えた。美登里はどうしてもこの男は虫が好かないと思った。台本を読んで

いるようにぺらぺらと説明され、統計データを述べられると、小馬鹿にされている気がしてならない。

香が言った。

「昨日の夕方、犯人から電話がかかってきたんです。一度だけ」

「内容を正確に教えてください」

そう言うなり、青山は i P a d に指を当てた。

「時間は？」

美登里が答えた。

「五時過ぎね。テレビを見てたから」

青山の指が弾むように動く。

「男性でしたか、女性でしたか」

「わからないわ。ボイスチェンジャーを使っていたみたい」

「会話の内容をお聞かせください」

「主人を預かっていると。協力すれば無事に帰してくれるですって」

「身代金の要求はございましたか」

「いいえ」

「警察への通報をするなという警告はございましたか」

「いいえ」

「次回の電話の予告はございましたか」

「それはあったわ。また電話するって」

「日時の指定は？」

「指定はなかったわ」

「他に何か指示はありませんでしたか。例えば指定の場所に荷物をとりに行けとかきれいな電話を用意しろとか」

「いいえ、何も。とにかく短い電話で、言うだけ言って、切れちゃったのよ」

美登里が答えるたびに、青山はその回答をメモするように指をせわしなく動かして、i P a d に入力していた。まるでアンケートの回答集計をしているかのようだった。これで昨日の電話も統計データに加わったことだろう。

青山は口を開いた。

「まだ断定的なことは申し上げられませんが、人質の髪を切って残したこと、初回の電話が拉致後六時間以内にかかってきたこと、その電話で身代金要求をしてこなかったことなどから考えますと、犯人は声明文にあったとおり、左翼系ゲリラグループの〈命と自由を守るネットワーク〉、通称 N L F でまず間違いないと思われます。現時点でのその確率は九七．九パーセントです」

「N L F なら知っているわ。以前、政治家や官僚を誘拐して、身代金を慈善団体に寄付したところでしょう」

「そうです」

「いいゲリラじゃない。人を誘拐しておいて、〈命と自由を守るネットワーク〉と名のるあたりがずうずうしいけど。ところで犯人のパーセンテージなんか出して、何の役に立つの？」

「相手の商売の仕方がわかります」

「商売？」

「そうです。誘拐交渉はショッピングだと思えばいいのです。不謹慎に聞こえるかもしれませんが」

「どういうこと？ 意味がわからないわ」

美登里が軽く頭を振ると、青山はアタッシュケースからカラフルなラミネートシートを取り出し、美登里と香に向けてテーブルに置いた。頭のほうには「誘拐はショッピング」というタイトル、その下には図形や矢印の図案があった。青山はその図案を指差しながら、説明を始めた。

「まず犯人はショップです。お客さまである奥さまが買いたい商品を持っています」

「その店の商品が人質……主人というわけね。別にほしくもないけど」

青山は美登里のコメントを無視した。

「犯人は奥さまがその商品を買いたがっていることを知っています。そこでできるだけ高く売りたいと考えます。あれこれ手を打って、売値をつり上げようとするのです。この売値が身代金で、つり上げるための手段が脅迫です」

脅迫という言葉聞いて、美登里と香は息を呑んだ。

青山は続けた。

「暴力的な言葉で脅されることもあれば、傷ついた人質の写真、実際に耳や指などを切りとって送りつけてくる場合もあります。すべて身代金をつり上げるための手段です。ただNLFの場合、過去にそれほど過激な脅迫手段をとったケースは記録されておりません。かと言って、身代金を受けとらずに人質を解放したこともありません。時間をかけて、じっくり交渉してくるタイプの誘拐を得意としています。初回の電話で、身代金の要求をしてこなかったのはその表れです」
「身代金の要求をしないことが、何の表れなの？」

「家族はのどから手が出るほどその商品がほしい。しかし値段は教えてもらえない。そうなるとうなりますか。家族はあれこれ想像をふくらませます。こうしているあいだに大切な夫が暴力を受けているのではないか？ 殺されてしまったのではないか？ 犯人の要求は何なのか？ せめてそれがわかれば、手を打つこともできるのに、と。苦しんでいる人質がいるのに何もできないという状況ほど、ご家族さまにとってつらいものではありません。時間がたつほど、悪い方向に想像はふくらみます。その頃合を見はからって、犯人が一億円の身代金要求をしたとしましょう。家族は簡単に落ちます。これ以上つらい日々を過ごすくらいなら、全財産を処分し、借金をしてでも、一億円を支払おうとするでしょう。次にいつ来るかわからない犯人の電話を待つよりは、一刻も早く金を払ってしまい、人質をとり返してしまったほうが楽だと考えがちなのです。これは沈黙と呼ばれる、脅迫方法の一つです」

「残念ながら、うちはそんな沈黙に屈するつもりはないわ。おあいにくさまね」

「それはそれで結構なことです。とにかく、犯人を特定することは、こちらの作戦を立てるためにも大変重要なのです。そしてこちらの出方を戦略的にしていくことも重要です」

どうやら誘拐技術は進歩して、システム化しているらしい。犯人側の脅迫マニュアルと家族側の交渉マニュアルさえあれば、誰でも誘拐に参加できるようだ。

香が口を挟んだ。

「でも、いいじゃないですか。さっさと身代金を払って、人質を帰してもらったら。どうせ誘拐保険があるんだから、払えるでしょ」

「いいえ、そう簡単にはいかないのです。まず身代金を支払ったとしても、人質を帰してもらえ
る保証はないからです。ここで犯人の立場に立って考えてみてください。この家族はちょっと沈
黙を使っただけで、一億円出した。ということは、もう少し脅せばもっと金をとれるだろう。そ
こで身代金を受けとってから、家族にこう言います。『前金は受け取った。残金を払ってもらい
たい。あと一億円だ』。この罠にはまると、家族は身代金を何度払っても、人質を帰してもらえ
なくなります。身代金は際限なくつり上げられてしまうのです。これを追加払いまたはせびりと
呼びます。次に、最終的に人質を帰してもらったとしましょう。数日後か数週間後かわかりませ
んが、家族の別の人間が誘拐されます。この家は大切な家族のためなら、金を簡単に支払うとい
うことが証明済みだからです。こちらは二重誘拐と呼ばれています」

「せびりと二重誘拐か。なるほどね。あたしが誘拐犯でもそうするなあ」

「香ちゃん、よして。そんな恐ろしいことを言わないで」

美登里は香を止めながら思った。夫はどうでもいいが、娘と自分の身が危険にさらされるのは
困る。青山はそれなりに有能のようだ。この話は真剣に聞いておいたほうがよさそうだった。

「それでその罠にはまらないためには、どうしたらいいの？」

「犯人にこの家族は手ごわいと思わせるのです。そのためには簡単に身代金を支払わないこと
です。率直に言うと、交渉して、身代金を値切るのです」

「身代金を値切る？ そんなことができるの？」

「そのためにわたしが派遣されてきたのです。誘拐交渉をショッピングか、犯人との高度な心
理ゲームだと思ってください。感情に振り回されないように、ご主人さまが常々おっしゃって
おられたことを思い出してください。『犯人には毅然とした態度をとれ。脅しに屈するな』、これ
が大切なのです」

そこまで言って、青山ははっとしたように目を伏せた。

「申し訳ございません、失言でした。ご主人さまのお言葉のくだりは、お忘れください」

夫婦仲が悪いことを気遣ってくれたのだろうが、わざわざ失言として謝られるほうが、かえっ
て失礼だ。せっかく有能だと評価したのに、またがっかりさせるようなことを言わないでほしい
。

青山は顔を上げて、続けた。

「とにかく急いで身代金を支払い、誘拐事件を切り上げてしまおうとするほど、犯人はそういっ
た家族の心理につけこんで、長期戦になりがちです」

香が訊いた。

「値切ったりして、パパが殺されたりしない？」

「それはもちろん、まったくないという保証はできません。ですが、犯人の目的は身代金をと
ることで、殺人ではありません。人質を誘拐して監禁するには、それなりのコストがかかります。
身代金を得られずに殺すのは、コスト割れになりますから、そうそう殺されることはないのです
。特にN L Fが犯人だとすれば、過去に殺害や暴力行為が目的で誘拐することはありませんでし

たから、腰をすえて交渉していく価値はあると思います。解放された人質にアンケートをお願いしたところ、生活は管理され、パニックを起こした方も少なかったようなので、健康な方なら長期の監禁生活にも耐えられると思います。それに交渉はご主人さまのためだけではありません。奥さまとお嬢さまを守るためでもあるのです」

面倒なことになった。それが美登里の率直な感想だった。身代金を支払わずに放っておけばいいと思っていたが、誘拐された夫の妻という立場はそう簡単なものではないらしい。これから犯人と値切り交渉をしていかなければならないのかと思うと、うんざりしてきた。晴信のためではなく香と自分のためだと思えば仕方がないが、こればかりは電話取次係の家政婦佐藤に押しつけるわけにもいかないだろう。

青山が仕切り直すように言った。

「さて、それでは具体的な対応策についてお話しさせていただきます。まず電話ですが、警察の盗聴器、逆探知機はついてますか」

「今朝つけられたわ。盗聴器のほうはオンラインの録音機と言っていたけど」

「わかりました。では、この電話を使うしかありませんね。どなたが交渉に出られますか」

「わたしに決まっていますでしょう。高校生の娘に、誘拐犯との交渉なんてさせられません」

美登里はきっぱりと言った。好奇心旺盛な香は不満そうだったが、これだけは譲るつもりはない。青山はiPadを操作しながら続けた。

「それでは、次に電話がかかってきたら、まず犯人の要求を聞いてください。そしてその要求に対して、できるともできないとも答えないことです。できると言ってできなければ、脅迫のネタに使われます。初めからできないと突っぱねれば、交渉する気がないと見なされてしまいます」

「それじゃ何て言えばいいの？」

「『すぐには用意できないから、時間がほしい』または『できる限りやってみる』です」

「わかったわ、『できる限りやってみる』にします。こちらのほうが気に入ったわ」

まるで今の自分の状況のようだった。

「それから奥さまのほうから犯人に伝えることは二点です。一つは、ご主人さまの無事を確認すること。何かご主人さましか知らないご質問を考えておくといいでしょう。次に電話を受信する時間を指定することです。奥さまが必ずご自宅にいらっしゃる時間帯はありますか。できれば夜がいいのですが」

「午後六時以降ならたいいていいわ。どうして夜がいいの？」

「夜は気持ちが沈みがちなので、犯人は人質の気持ちが暗くなってきたところを見計らって、電話をかけてきます。日中の時間指定をした場合、受け入れられる可能性は約三〇パーセントですが、夜なら約八〇パーセントがすんなりと受け入れられていますから。それでは毎晩午後七時から十五分間だけ電話を待つと伝えてください」

「どうしてそんな指定をするの？」

「奥さまが一日中電話を待たずにすみます。犯人からの電話は、第三者の盗聴を避けるために、固定電話あてになるので、時間の指定をしないと、奥さまは電話のそばから離れられません。それでは日常生活に支障をきたし、それがまた犯人の狙いとなるのです。家族に過度なストレスが

かかりますからね。N L F が犯人なら、そのあたりは心得ていますから、先手を打ちましょう。わたしは毎晩六時半にこちらにお邪魔して、電話を受ける前と後に交渉アドバイスを行ないます」

「わかったわ」

「それと」

「まだあるの！」

美登里はうんざりしてきた。美登里は他人が自宅に上がるのを好まないほうだった。雑菌が持ちこまれるような気がするからだ。それなのに、昨日から刑事は来る、盗聴器の取り付け技術者は来る、さらに毎晩青山が来ると聞かされて、頭痛がしてきた。

「ちょっと待って。わたしはもう疲れたの。あなたの会社の統計データでは、次の電話はいつかかってくると言ってるの？」

「一週間以内にかかってくることは……」

ここで青山はまた i P a d に指をすべらせる。

「三、二パーセント。人質が急病になったというケースです。特殊な場合ですから、まずないと見ていいでしょう。一週間後から十日が五八、九パーセント。この時期の連絡がもっとも高いようです」

「だったらいいでしょう、また明日にして。わたしは朝から警察に電話の説明をされて、午後はあなたに保険の説明をされて、明日はG県まで呼び出されているの。もうくたくたよ」

青山は眉を上げた。

「G県？ 警察に呼び出されているんですか」

「そうよ。G県警に来いですって。被害者家族の合同説明会があるの。あなた、代わりに行ってくれない？」

いやがらせのつもりで言ったのだが、青山は真顔で答えた。

「代理はいたしかねますが、ご同行することは可能です。ご依頼なさいますか」

「けっこうよ。一人で行けますから」

美登里がフンと鼻を鳴らして断ると、香があわてたように言った。

「何言ってるの、ママ！ 青山さんは警察への対応もアドバイスしてくれるんでしょ！ あたしは明日午前中から友だちと布を買いに行くから、つき合えないんだよ！ 青山さんについて行ってもらったほうがいいって、絶対！」

香は母親一人では不安だと思っているらしい。青山と一緒に警察に行くなんて考えたくもなかったが、香がそう言うなら仕方ない。美登里はしぶしぶ言った。

「それじゃ頼むわ。保険契約内でしょうね」

「もちろんです。別料金はかかりませんので、ご安心ください。説明会は何時からでしょうか」

「午後一時」

「わかりました。では明日午前九時に車でお迎えに参ります。残りのご説明はそのあとで」

ようやく青山はアタッシュケースにラミネートシートと i P a d をぴっちりしまい、リビングのソファから立ち上がった。

玄関のドアまで見送ったあと、美登里は佐藤に塩をまくよう言いつけた。

香は自室に下がらず、まだリビングに残っていた。美登里は言った。

「さっきの態度は何なの？ おかげでママ、交渉することになっちゃったじゃない。香ちゃんがパパに帰ってきてほしがっているなんて、ママ知らなかったわ」

クッションを抱えた香が口を開く。

「そんなわけじゃない。でもあたしは、昨日の警察への出方は失敗だったと思うんだよね。もし警察が、ママがゲリラに頼んで、パパを誘拐させたと思いこんだら、まずいよ」

「そんなことはないって言ったでしょ。だってそんな事実はないのよ。調べたって証拠が出てくるわけないんだから」

「でも最近の警察は検挙率が下がっているから、まずは疑わしい人物を特定して、それから証拠を集めるんでしょ。でっち上げもあるってテレビで言ってたよ。それって目をつけられたらお終いってことじゃない。パパはミスター誘拐なんだよ。有名人の家族が人質をまったく助ける気がなさそうだってマスコミに知れたら、警察にも目をつけられるよ。あたしたちヤバくね？」

「そのヤバくねって言葉遣いはやめなさい」

美登里は香を叱りながら、そこまで考えたことがなかったと思った。夫への憎しみで、頭がいっぱいだったのだ。香は続けた。

「ねえママ、ここはうまくやらずに。警察に疑われないようにして、マスコミにも気の毒な被害者家族って思わせて、パパを助け出すしかないよ。少なくとも、助け出すふりくらいはしなきゃ。あたしだっていやだけど、冤罪で逮捕されるよりまし。それには保険屋さんを味方につけておいたほうがいいと思う。こっちの得になる情報をいろいろ教えてくれたじゃない。きっと役に立つよ」

香は自分の考えを見越した上であんな態度をとったのだ。父親を助けたいのではなく、母親と自分の保身のためだった。香の考えはわかった。美登里は息を深く吸ってから、深く息を吐いた。

。

「ごめんね、香ちゃん。ママ、香ちゃんの考えはよくわかったわ。でも、ママにはできない」

「何で？」

「パパのこと許せない」

美登里は首を振った。本当に自分にはできないと思った。新婚当初から浮気され続けた自分が、これ以上良妻の演技を続けられない。妻として裏切られた年月が、いつのまにか怨恨に変わってしまっているのを感じた。

「許せない？ どうしても？ 今だけだよ。帰ってきたら、離婚すればいいじゃない。あたしが結婚するまで待つことないからさ。ねえママ、そうしようよ」

離婚という言葉が美登里の心をふっと軽くした――そうだ、離婚したっていいのだ。妻としての最後の務めを誘拐の交渉と決めて、晴信が帰ってきたら、この家を出よう。いや、晴信を追いつけ――美登里はようやく、香と自分の身を守るため、夫に離婚届を突きつけてやるため誘拐交渉をするしかないのだと、自分自身を説き伏せた。

杏子は、嫌いなタイプの女と朝食をとる～十一月十六日（日）午後三時

紅が目を覚ましたとき、腕時計は三時をさしていた。室内は明るかったから、午後だろう。隣のベッドの女はすでに起き、ベッドの端に腰かけてメイクしているところだった。

「おはよう。顔を洗いたいなら、見張りの彼に言うといいわ。洗面所に連れて行ってくれるわよ」

「ありがと」

紅はあくびをして、ベッドの中で伸びをした。女は手鏡をのぞきこみ、ペンシルで眉を描きながら続けた。

「急いだほうがいいかも。四時からオリエンテーションですって」

「オリエンテーション？ 何の？」

「さあ」

女は片方だけ描かれた眉をひょいと上げてから、小声で言った。

「逆らわないほうがいいわ」

紅はうなずいた。ベッドから出て、ベッドの脇にあったボストンバッグから前髪を上げるヘアピンを出す。それからウサギ小屋の金網を叩いた。

「ねえ、トイレと洗顔に行きたいんだけど」

部屋の反対端で、テレビを見ていた見張りの男がこちらを向いた。ネイビー色のマスクで顔を隠しており、表情は見えない。

「コマーシャルまで待て」

見張りなら真面目に見張りの仕事をしてもらいたいものだ。紅はいらいらしながら待った。

女が声をかけてきた。

「わたしは大塚杏子。お名前は？」

「越川紅です」

「紅ちゃんね。人質同士、仲良くやりましょうね」

「よろしく、杏子さん」

紅と杏子は一瞬だけ視線を合わせて儀礼的な挨拶をすませると、すぐにそれぞれの作業に戻った。杏子はアイラインを引き、紅は金網を握りしめた。

コマーシャルに切り替わったようだった。ネイビーマスクが立ち上がり、小さなテーブルの上の弁当トレーやスナック菓子の袋をかき分けて、自動小銃をとる。尻ポケットから鍵を出すと、右側にある金網のドアの南京錠を外した。自動小銃を紅に向けて構えてから言った。

「出る。出たら、鍵をかけろ」

紅は言われたとおりに金網のドアを押し開けて外に出てから、鍵を受けとり、南京錠をかけた。鍵を返すと、紅が先に立ち、男の指示に従う。両手を上げて頭のうしろで手を組み、部屋のドアから廊下に出た。どこもカーテンが下りていて、外の景色は見えなかったが、柱や天井の梁の

天然木がむきだしになっていることから、山荘ではないかと思った。ネイビーマスクが自動小銃の銃口で紅の背中をつついた。

「さっさと歩け」

男は急いでいるようだった。おそらくコマーシャルが終わって、テレビ番組がまた始まってしまふからだろう。左手にドアがあり、そこが洗面所とトイレだった。紅が中に入ると、男は言った。

「十分間だ」

それから出て行こうとした。紅は尋ねた。

「ねえ、歯ブラシはないの？」

「一本百五十円」

「お金をとるの！」

「いやなら二百円」

「百五十円払います。ピンクの柄のある？」

「あとで持ってくる」

ネイビーマスクはそう言い置くと、せかせかと洗面所を出て、外から鍵をかけ、行ってしまった。十分間と言っていたが、それはテレビ次第だろうと思った。次のコマーシャルになったら、また来るつもりに違いない。紅はあわただしく排尿と洗顔をすませた。とたんに強く空腹を感じる。一度だけドアが開き、「金はあとからもらう」と言われ、ピンクの歯ブラシを投げ入れられた。

なじみのない洗面所で歯を磨いていると、まるで予定どおり旅行に来たみたいだと思った。歯磨きが終わってから、洗面所内の窓を開けようと試してみたが、窓は外からつかえ棒でもしてあるのか、動かなかった。さらに曇りガラスでは外の様子を窺うこともできない。ただやけに静かで、車の音や往来を歩く人の声などがまったく聞こえないので、少なくとも町中ではなさそうだった。

ネイビーマスクがやってきて、紅は部屋に連れ戻された。同じ要領で金網の中に戻され、百五十円を請求され、金網越しに払う。紅が顔の手入れをしていると、ネイビーマスクが二人分の弁当とミネラルウォーターを持ってきて、金網の下の際間から押しこんできた。すでに支度の終わっている杏子がそれを拾って持ってくる。男はまたいそいそとテレビの前に戻っていった。杏子が首をかしげながら小声で言った。

「いったいどれほど面白いテレビ番組なのかしら」

「ドラマの再放送。『必殺仕事人』みたいだった。あ、よかったら、先に食べてください」

「ええ。それじゃ悪いけど、お先に。わたし、食べるの遅いから」

紅はメイクに入り、杏子は弁当の蓋を開けた。

「幕の内弁当ね。コンビニのみたい。でも何時間ぶりの食事かしら。ものすごいごちそうに見える。いただきます」

たおやかな美人という雰囲気杏子がコンビニ弁当をごちそうと言うのは、何だかそぐわなかった。食べ物のおいが漂ってきて、紅の食欲を刺激する。杏子は本当に食べるのが遅かった。杏子が半分まで食べ終わった頃、紅はメイクを終え、一緒に弁当を食べ始める。杏子は尋ねた。

「紅ちゃんは朝食にいつも何を食べてるの？」

「食べたり食べなかったりだけど、食べるときはたいていトースト」

「何枚切れ？」

「八枚。ダイエットしてるから」

「若いのに、よくもつわね」

「杏子さんは？」

「わたしはご飯派。納豆とお味噌汁」

「えー、何かイメージと違う」

「そう？ わたしってどんなイメージなの？」

杏子には高級そうな印象があった。たとえて言えば、ホテルの朝食だ。パンに卵、ベーコン、サラダ、コーヒーにオレンジジュース、フルーツが揃いの食器に見栄えよく盛りつけられている。紅は何となく悔しくなって、まったく違う答えを返した。

「胚芽入りパン」

「どういうイメージ？」

「何となく」

杏子はふふふと魅惑的に笑った。

「朝食のご飯と納豆とお味噌汁は最高よ。紅ちゃんもご飯党に入りましょ」

杏子は納豆のせいばかりではなく、本当に見かけのイメージとは違う女のようにだった。少なくとも、人質にされ、自動小銃を持った見張りのそばで、泣き喚くこともなく、いきなり朝食のメニューを尋ねるような女には見えない。肝が据わっているのか、神経が太いのか。杏子はおしゃべりを楽しみながら、ゆっくりとコンビニ弁当を食べるので、紅のほうが先に食べ終わってしまった。杏子はあわてて「待っててね！」と言った。紅は言った。

「あの二人はどこにいるのかな。柏木さんと辻さん」

「わからないわ。気づいたら、いなかったもの」

「柏木さんのこと心配でしょ？」

「ええ」

「でも柏木さんって杏子さんの旦那さんじゃないですよ」

「どうしてわかるの！」

杏子はうろたえた。紅は杏子の左手の指輪を見て言った。

「だって姓が違うもの」

「ああ、柏木と大塚だから。そうよね」

「でも彼？」

「.....ええ」

「不倫なんだ」

「まあ、そうなんだけど。でもね、たぶんこのドライブで晴信さんとは終わっちゃったから、もう過去なのよ」

杏子は紅に言い訳しているようだった。不倫相手と一緒に誘拐されて人質になったというのは

、かなり最悪な状況ではないだろうかと思った。

不倫している女。紅の胸がざわついた。自分は不倫どころか結婚もできず、結婚どころか男をとどめておくことすらできない。それなのに不倫するほど男に恵まれ、さらに相手はあの容姿と知性と経済力の揃った柏木晴信だというのだから、世の中は不公平だ。紅は杏子に嫉妬し、杏子の夫に同情した。

「不倫でこういう状況になっちゃったら、大変よね。旦那さんって理解ある人？」

杏子は顔色を変えた。

「そうね」

杏子は厭味に気づかないほど、神経のにぶい女ではなさそうだった。

金網の向こうでネイビーマスクが言った。

「まもなく四時だ。オリエンテーションが始まる」

人質たちは、ゲリラ主催の人質オリエンテーションを受ける～十一月十六日 日曜日 午後四時

人質たちは、ゲリラ主催の人質オリエンテーションを受ける～十一月十六日（日）午後四時

紅と杏子は手を頭のうしろで組むよう命じられたあと、ネイビーマスクに連れられて、一階に下りた。階段から右手に行くと、そこは広々としたリビングだった。カーテンが下りて薄暗い中、布張りのソファにはすでに柏木と辻が座っていた。杏子は柏木の姿を見て、ほっと表情を緩めたが、柏木は不快そうに視線をそらした。紅は辻と目が合ったので、結局誘拐されることにはなかったとはいえ、感謝の気持ちをこめて会釈した。辻も軽く会釈を返した。

紅と杏子もソファに腰かけると、手を下ろしていいと許可された。ソファの前にはコーヒーテーブルがあり、その向こうにはテレビが置いてあった。これだけならどこかの家のくつろいだりリビングで通るが、三人の見張りが場の緊張感を高めている。ソファの背後、左、右斜め前に一人ずつ立ち、全員がマスクをして自動小銃を持っていた。

テレビの脇に立ったブラックマスクの男が宣言した。

「これより人質オリエンテーションを行なう」

ブラックマスクはリモコンでテレビをつけた。画面が明るくなり、ジャジャジャジャーンという壮大な音楽が流れる。辻がぼそりと呟いた。

「ベートーベン、『運命』」

画面では追手を気にしながら走る人の姿が映され、次第にこちらに近づいてくる。モザイクのかかった女の顔がアップになり、ボイスチェンジャーで声を変えられたキャーという悲鳴。それから大きな文字が出た。

『人質！ 監禁中の心得！』

楽しげに散歩する親子三人連れの映像に切り替わる。これも目にモザイクがかかっており、やはり声を変えられたナレーションが入る。

「人質とは社会をよりよく変革するための崇高な自己犠牲です。そのことに誇りと信念を持って、人質生活を乗りきってください」

円満な家庭が社会改革目標で、そのための手段が誘拐という理屈がどこから来たのかわからないが、とりあえず誘拐を『運命』だの崇高な自己犠牲だのにされてはたまらない。しかし紅の不満をよそに、プログラムは進んだ。

『日常生活について』

「一日のスケジュールをご案内します。起床は七時、洗顔は譲り合って、すみやかにすませましょう。次に部屋の掃除を行ないます。掃除機は音を立てるので貸し出しできません。室内に雑巾と箒がありますので、床などを清掃しましょう。ベッドメイクは各自で行なってください。誰か一人に作業を押しつけたりせず、平等に働くことが大切です」

洗面所での洗顔から室内の掃除の様子が映る。

「食事は午前八時、午後十二時、午後六時の三回です。金網の下から食事を差し入れますので、

よく噛んで、残さず食べましょう。食べ終わった容器は、まとめて金網の外に出しておいてください」

食事風景が映った。人質は笑顔で弁当を食べている。

「その他の時間は自由時間です。室内には本、新聞、雑誌、ゲーム類があります。娯楽は精神衛生管理に役立ちますので、積極的にご活用ください。その他に要望があれば、実費で娯楽具を差し入れることができます。ただし楽器やマージャンなどの音の出るもの、カメラなどの記録するもの、ダーツなどの凶器になりうるものは許可できません。詳しくは見張りコマンドにお尋ねください」

「入浴は冬期は二日おきに一回、夏期は一日おきに一回、入浴時間は一回三十分です。洗濯もこのときに各自で行なってください。洗濯機と乾燥機の使用方法については、見張りコマンドにお尋ねください」

紅は思わず「ええー」と不満の声を上げる。自動小銃の銃口が一斉に紅に向けられ、紅は口元を押さえた。プログラムは続いた。

「消灯は八時です。恐怖や不安が強く、寝つけない場合は、睡眠薬をもらってください」

人質がベッドに入り、電灯が消された。一区切りらしい音楽が流れる。ひときわかわいらしいボーカルが入っていた。辻がぼそりと呟く。

「『星に願いを』」

プログラムは次の項目に入った。

『健康管理』

「人質生活で心身ともに健康を保つのは大変難しいことです。規則正しい生活を送ること、食事をきちんととること、睡眠をとること、ストレッチ体操をすることが健康管理の基本です。各人の責任で、しっかり行ないましょう。体調がすぐれない場合は、常備薬がありますので、すみやかに見張りコマンドに申し出てください。また協力医師も派遣できますので、健康に不安がある場合はご相談ください」

『買い物』

「ご希望があれば、常備してある生活用品を実費にてお分けします。その他に必要な物があれば、買ってきてお渡しすることも可能です。見張りコマンドにご相談ください」

『貴重品管理』

「荷物、貴重品は各自で管理してください。盗難があっても、見張りコマンドは一切の責任を負いません。ただし、人質間で著しく悪質な盗難があった場合、解放後、警察に通報します」

ここまでくると、本気なのか冗談なのかわからない。

『禁止事項』

「大きな音を立てたり、騒いだりしてはいけません」

「カーテンにふれたり、窓から外を覗いたりしてはいけません」

「電話、メール、手紙などでの、外部への個人的な接触はできません。お預かりしている携帯電話は、解放時に返却いたします」

「煙草は火事の危険性があるため、許可できません。酒類も秩序維持のため、許可できません」

ここでまた一区切りらしい音楽が流れた。

「『川の流れるように』だな。美空ひばり」

辻がぼそぼそ呟き、小声で一緒に歌い始めた。一人音楽当てクイズは続いているらしい。まもなく新しい文字が出た。

『人間関係について』

人質の男が見張りのマスク男に向かって人差し指を突きつけ、怒鳴っている。「おまえらなんか、ただの犯罪集団じゃないか!」。ブブーというブザー音が鳴り、×印が大きく出て、画面が切り替わる。マスクをかぶった女の解説が入る。

「我々は金銭目的の犯罪集団ではなく、社会改革を目的としたゲリラです。見張りのコマンドには敬語を使用しましょう。敬意を持ち、思想を理解しましょう。命令にはすすんで従いましょう」

映像が切り替わり、先ほどの男二人は金網越しに穏やかに話している。「わたしはあなたたちの思想と活動に感銘を受けました。もっとお話を聞かせてください」「喜んで」。ピンポンという正解音と○印。

めまいがした。

新しい映像になった。一人の人質の男が金網にしがみついて大きな音を立てている。同室の男が「やめろ!」と怒鳴ると、「なんだよう!」と言われ、突き飛ばされた。男は立ち上がり、相手を殴った。ブザー音と×印、女の解説。

「人質生活は見知らぬ他人との共同生活です。お互い自分勝手な行動は慎みましょう。思いやりをもって接するよう心がけましょう」

続いての映像では、金網を揺らしている男に向かって、もう一人の男が穏やかに「よせよ、ここで大きな音を立てるのは禁止だぞ。いったいどうしたんだ」と声をかける。相手は素直にに応じてやめ、頭を垂れた。「すまない。いらいらしてたんだ」「なあに、よくあることさ。一緒に人生ゲームでもしよう」。男が肩をぽんと叩き、やさしく金網から引き離す。ピンポン音と○印。

誘拐犯に人間関係のハウツーを説明されるとは思わなかった。紅はすでに杏子に厭味を言っていたが、今後は見張りに注意して言うようにしないと、殺されるかもしれない。

また音楽が流れた。男性ボーカルの穏やかな曲だ。今度は杏子がぼそりと言った。

「ジョン・レノンの『イマジン』ね」

辻がくやしそうな顔で杏子を見た。いつのまにか音楽当てクイズはイントロ当て早押しクイズになったらしい。

この曲なら紅も聞き覚えがあった。たしか平和を願う歌ではなかっただろうか。それがゲリラの人質オリエンテーションに使われては、ジョン・レノンもあの世で激怒しているに違いない。

女のナレーションが入る。

「以上が安全で快適な人質生活を送るための心構えです。ルールを守り、明るい人質生活を送るよう努めましょう」

人質全員の怒りをこらえた表情の中、プログラムは終わった。「安全で快適な」「明るい人質生活」って何だろう。初めから終わりまで、完全に道徳的で常識的だった分、とても非道徳的で

非常識的に思えた。罪のない市民から「安全で快適」で「明るい」生活を奪っておいて、道徳や常識を説かれても、単なるご都合主義でしかない。しかも人質は反論もできない。反論すれば、自動小銃を向けられるからだ。

ブラックマスクが言った。

「それでは今から質問を受けつける」

どうやらこの男が見張りコマンドのリーダーらしい。辻が手を挙げたので、指さした。

「発言を許可する」

辻はうなずいてから口を開いた。

「わたしは糖尿病です。まだ注射をするほどひどくはないが、飲み薬は必要です。一週間分なら手元にあるが、一週間以内に解放してもらえるのかね？」

「自分には答えられない。活動支援金の支払い状況次第だろう」

「活動支援金って何だね？」

「社会改革協力者の家族が、我が組織の活動内容を理解した上で提供する資金を指す」

一言で言うと、身代金のことだろう。誘拐しておいて身代金をとるだけなのに、こういう屁理屈をつければ、犯罪の正当化ができるとでも思っているのだろうか。幼稚園児に聞いたって、誘拐は悪いことだと答えるに決まっている。

辻が続けた。

「一週間以内に解放されなかった場合、薬は手に入れてもらえるのかね？」

「手配する。あとで薬品名を知らせるように」

「薬代はどうなるのかね？ 当然そちら持ちだろうね？」

「当然個人負担である」

「それじゃ、ジェネリックで頼みます。それから食事を変えてほしいのだが」

「弁当以外のものは支給できない」

「でも糖尿病の基本は食事療法なんです。炭水化物や糖분을控え、味付けも薄口にしてもらわねば、血糖値が上がってしまいます。インスリン注射が必要になるかもしれん」

「市井の弁当屋に調理方法の指示はできない。よって却下する」

「それじゃ野菜を買ってきてください。自分で調理するから」

「人質に凶器となりうる包丁を持たせることはできない。よって却下する。与えられた弁当を自分で調節して食べるように」

「そんな殺生な！ コンビニ弁当から炭水化物をとったら、食べるものなんてありませんよ！ わたしに飢え死にしろと言うのかね？」

「個人の勝手な都合で、所内のルールを乱すことはできない。よって却下する。他に質問はあるか」

辻はさっと手を挙げたが、指名してもらえず、紅が当てられた。

「発言を許可する」

「入浴と洗濯が二日おきに一回、しかも一回三十分というのは短すぎると思います。女性はたいてい毎日長風呂なんですよ。もう少し長くしてもらえませんか」

「ここは温泉旅館ではないことを認識してもらいたい。人質は入浴時に逃亡の恐れがあるため、入浴回数と時間を増やすことはできない。よって却下する」

「裸で逃亡なんてできないでしょ。せめて一回一時間はないと、入浴と洗濯同時は無理です」
女としてここは譲れない。紅が自動小銃の様子を窺いながら、なおも食いさがると、杏子が参戦した。

「わたしも越川さんに賛成です。それじゃこうしたらどうかしら。三十分で入浴して、逃げないことを証明するために、いったん顔を出します。それから洗濯をさせてください」

「自分の一存では許可できない」

ブラックマスクの強硬な態度に腹が立ち、今までの不満が爆発した。

「あんた、リーダーでしょ！ 一存で許可してよ！ いい、頭悪そうだけど、よく聞いてよね！
あたしは協力する気もないのに、無理矢理ここに連れてこられたの！ あんなバカみたいなプログラムを見せられて、お風呂の時間までせこく制限されたらたまらないわよ！」

ブラックマスクは怒った口調で言った。

「許可しない。またこの発言を我が組織の活動内容を理解しないものとみなし、懲罰を与える。
越川の入浴は五日おきとする」

「何だって？ もういっぺん言ってみな！」

紅が立ち上がって腕をまくと、見張りコマンドが一斉に自動小銃を紅を向けて構えた。しかし紅は完全に頭に血が上っており、ここで引き下がることは考えられなかった。

ブラックマスクは怒鳴った。

「一週間おきにする！」

「ふざけんじゃないよ、何が社会改革だよ！ どれだけ社会に迷惑かけてんの！ 社会のゴミ！
害虫！」

「十日おき！ 言葉を慎め、越川！」

「あたしを呼び捨てにすんな、バカゲリラ！」

「入浴禁止！」

「紅ちゃん、もう黙って！」

血相を変えた杏子が制止し、柏木は耳をふさいで関係ないふりをし、辻は両手を挙げて振り回しながら叫んだ。

「わたしは糖尿病だっ！ 食事の改善が無理なら、せめて外を散歩させてくれっ！」

「却下！ 全員退出！」

美登里は、警察の被害家族合同説明会で失望する～十一月十七日（月）午前九時

午前九時きっかりに青山が美登里を迎えに来たが、美登里はまだ仕度の途中だった。三十分ほどすると、香が美登里の部屋に来て、せかした。

「ママ、早くしなよ。青山さん、すでにコーヒー二杯目だよ」

美登里はこれをしつけのチャンスととらえた。

「香ちゃん、よく見ていてね。女性なら動作はゆったりと、エレガントにするものよ。どんなときでも急いではいけないの」

「それ、時間を守ってから言えば？ ママっていつもそう。その勘違いエレガンスが人に迷惑かけてるってことに、全然気づいてない。もっと自分を客観的に見たほうがいいと思う」

香はそれだけ言い置いて、部屋を出て行った。美登里は反抗期の娘は難しいとため息をつき、客観的に自分を見るために鏡をのぞいた――大丈夫、夫が誘拐されてもシワは一本も増えていないし、四十二歳の肌には見えない。まだまだ三十歳で通る。

美登里は耳元をピアスで飾りながら思った。こんな短時間でコーヒーを二杯も飲むなんて、あのコンピュータのようにきっちりした男は相当いらだっているのだろう。だが、クライアントはこちらなのだから、待たされたからって文句を言うほうがおかしい。それどころか仕事に来た家でコーヒーを二杯も飲むなんて、あつかましい男だ。あとで佐藤に客へのコーヒーは一杯までと言いつけておかなくては。

四十分遅れで、二人は出発した。かりかりした表情の青山が運転し、美登里は気にせず後部座席に座る。道中はお互い一言も口をきかなかった。東京からの下り道路はすいていたが、結局警察に着いたのは十二時三十五分で、昼食をとっている時間はなかった。

二人は受付で合同説明会の出席者だと言い、ボディチェックを受け、小さな会議室に案内された。細長い折りたたみテーブルがコの字型に配置され、パイプ椅子が添えてある。まだ他の家族は来ておらず、美登里と青山がいちばんらしかった。

若い婦人警官が「昼食をご用意してますけど」と言い、テーブルの上には仕出し弁当のカツ重とお茶とペーパーおしぼりが置かれていた。二人は無言で席に着くと、無言で蓋を開け、無言で食べ始めた。しかしそのカツ重は、卵に火が通り過ぎ、カツの衣は水分でべちゃっとして、豚肉の脂身が多すぎた。究極の逸品ではなく、青山もまずそうに食べている。美登里は一口食べて箸を置き、青山に向かって言った。

「わたし、外に食べに出たいわ」

「ご自由にどうぞ。わたしはここでお待ちしていますので」

青山は涼しい顔で返事をし、カツ重を食べ続けた。どうやらお供する気はないらしい。美登里はやや甘え声で言った。

「ねえ、わかるでしょ。女一人でレストランなんていやなのよ。エスコートしてちょうだい、青山さん、ね？」

「申し訳ありませんが、わたしのクライアントはご主人さまです。奥さまの昼食におつきあいすることは保険契約内容には入っておりません」

青山はきっぱりと断った。美登里は顔色を変えて青山を睨みつけたが、青山は涼しい顔を崩さない。それから二人は競うようにして、カツ重を残さず食べきった。

人が入ってきた。四十代後半の中年夫婦である。女はだるまのような体型をしており、メタボリック症候群なのは間違いなさそうだった。ピンクとオレンジとグリーンの派手なプリントブラウスを着て、シワを埋めこむようにメイクが濃い。十一月なのに顔をてらてらと光らせながら「暑い暑い」と言って、しきりに扇子をあおいでいた。一方男は痩せ型で、紺のポロシャツにスラックス、ジャケットを着ている。両手にビニール袋を提げており、土産物らしい漬物やまんじゅうの箱が透けて見えた。

男が小声で文句を言った。

「何だ、弁当があるじゃないか。電話のときはちゃんとメモをとれっていつも言ってるのに」

女が不満げに言う。

「お弁当のことなんか聞かなかったもの。お昼の用意をしているなら、先に言ってくればいいのに。あたしたち今トンカツ定食を食べてきたばかりよ。これだから日本の警察はだめだと言われるのよ」

それから二人は揃って目の前の席に行き、ガタガタとパイプ椅子を引いて座る。女が重箱の蓋をカパッと開けた。

「あら、カツ重。それじゃ冷めないうちに食べないとね。冷めたらまずくなるからね」

「おまえ、娘が誘拐されたっていうのに、よくそんなに食えるなあ」

「何言ってるのよ。あんたがやったことといったら、紅の赤ん坊のときのビデオを引っ張り出してきて、めそめそしたことだけじゃない。あんたがそれだから、あたしがしっかりするしかないでしょ。あたしまで食が細くなって、紅をとり戻す前に倒れたらどうするの。一時前には食べ終わるから平気よ。あんたが食べないなら、あたしが二人分もらうわ」

女は竹の割り箸をパキンと割ると、カツ重をかきこみ始める。美登里は湯飲みのお茶を飲みながら、二人を呆然と見ていた。

次に入ってきたのは、小柄な老婦人だった。えんじ色のセーターに、灰色のウールのスカート、その下からは厚手のストッキングとウォーキングシューズが覗いている。丸い顔と垂れた目にはきつさがなく、穏やかに齢を重ねてきたのだろうと思わせるが、今回の誘拐事件のせいか、表情は暗く、疲れきっていた。老婦人はカツ重を見ると、案内してきた婦人警官に声をかけた。

「あのう、今は入らないので、お持ち帰りはできますか」

「それはちょっと……重箱を仕出し屋さんに返さなきゃならないので」

「そうですか……じゃあ食べ残してもいいですか、半分くらい」

「どうぞ」

老婦人はそのあとで何度も婦人警官に頭を下げて、礼を言った。婦人警官が行ってしまうと、老婦人は中年夫婦と美登里たちの間の席に座った。弁当には手をつけず、所在なさそうに周囲をきょろきょろ見回すと、思いきったように美登里のほうを向いて、声をかけてきた。

「あのう、人質のご家族の方ですよ？」

「そうですけど」

「あのう、おトイレ、行っても大丈夫だと思います？」

美登里は軽く首をかしげた。

「さあ、大丈夫なんじゃないかしら」

「あなた、済ませました？」

「いいえ」

「大丈夫なんですか。説明会の間、もつんですか」

美登里は答える気もなく冷たく沈黙した。トイレに行くか行かないかくらい、一人で判断しろと言いたい。この調子でよく一人でここまで来られたものだとあきれる。誰かが、下車駅メモとチケットを持たせてやり、電車に乗せてやり、駅からは『G県警までお願いします』と書かれたメモをタクシー運転手に見せて、どうにかここへ到着したというところだろう。

老婦人は心細げに続けた。

「説明会ってどのくらいの時間がかかるんでしょうね。きっと長いですよ。でも、始まるまであと十分しかないんですよ。十分で帰ってこられるでしょうか」

「わかりませんわ」

「どこにあるのでしょうかね、おトイレ」

美登里はプツンと切れた。

「ごめんなさい、わたしは警察の職員じゃございませんの。職員の方に伺ってはいかがかしら」

老婦人は弱々しくうなずいた。

「そうですね。ありがとうございます。職員の方はどこにいるんでしょうね」

「ひと目ご覧になればおわかりになると思いますけど、ここにはいらっしゃいませんわね」

「じゃあ受付にはいますか」

「受付にいらしたら、おわかりになると思いますわ」

「そうですね、受付ね。受付って入ってきたところですよ？」

ようやく老婦人は腰を上げ、小股で会議室を出て行った。トイレに行くために、まず受付を探すのだから、十分で戻ってこれるとは思えない。そんなことを考えていると、カツ重を食べていた女が箸を置き、立ち上がる。

「しょうがないわね。ちょっと行ってくるわ」

「今行くのか。食べ終わってからでもいいだろう」

「何言ってるの。それまでにあのおばあちゃん、迷子になっちゃうわよ」

女は足早にあとを追って出て行った。男は妻の背中を見ながら、とたんに寂しげな表情になる。美登里は老婦人に腹を立てていたが、中年女にはさらに腹が立った。あの態度ではまるで美登里の不親切ぶりを責めるようではないか。ふと隣を見ると、青山が唇の端をわずかに上げて、気味がいいという表情を浮かべていた。美登里は青山をクビにしてやりたいと拳を握りしめる。

十二時五十九分になっても、二人は戻ってこなかった。しかしほとんど駆けこむようにしてビジネススーツの男が二人入ってきた。二人は置いてあるカツ重には目もくれない。

一人は五十代の男で、ビジネススーツが板につき、自信にあふれたロマンスグレー予備軍とい

う風情だった。美登里はもし再婚するなら、こういうタイプもいいかもしれないと思った。

もう一人は四十代で、年齢からこの男が大塚杏子の夫ではないだろうかと考え、じっくりと観察することにした。やせ型で神経質そうに銀縁眼鏡のふちをしきりに持ち上げている。清潔感はあるが、手に触れるものすべてを滅菌するためつねにアルコールを持ち歩いているような、病的な雰囲気のを漂わせていた。仕事があるのか、しきりに腕時計を見ている。

一時になっても始まらず、五分過ぎてから前原が悠然と入ってきた。

「すみませんね、皆さん。東京からG県までご足労いただいて。お昼、終わりました？ まだ全員揃ってないですね。じゃあ、最後の人に来るまで待つとしますか」

前原は口先だけとすぐにわかる口調で詫びて、どっかりとパイプ椅子に腰を下ろした。それからネクタイを締め直し、背広をはおる。

中年女の夫は、妻がトイレに行っていることを前原に伝えるでもなく、目を伏せ背中を丸めて、閉じた扇子を握りしめ、じっと何かに耐えていた。借りてきた猫という言葉がぴったりくる。ドアが開いて、中年女と老婆（これで十分だ）が入ってきた。とたんに男はほっとした表情になる。

女が作り笑顔で言った。

「ごめんなさいね、遅れて。トイレが混んでたもんだから」

「いやいや、越川さんと辻さん、その節はどうも。わたしも遅れてきたところですからね。ま、ま、席に着いてもらって」

二人はいそいそと自分の席に向かう。夫が妻にいらだったような声をかけた。

「どうしてこんなに時間がかかったんだ。刑事さんが心配して、俺は大変だったんだぞ」

「言ったでしょ、トイレが混んでたの」

妻は動じることなく言っただけで、辻に向かって片手をふり、ひそひそと囁いた。

「ほらね、だから大丈夫だって言ったでしょ。今日の主役はあたしたちなんだから、あたしたちが戻らない限り、始まるわきゃないのよ。おばあちゃんが廊下を走ったりして、ころんだら即骨折、寝たきりよ。ゆっくり歩いときゃいいの。もう齢なんだから」

「大変お手数おかけしました。越川さんがいなかったら、どうなっていたことか」

辻が深々と頭を下げ、時間を気にしているらしいビジネスマン二人が鋭い視線を送った。

前原が室内をぐるりと見渡して言った。

「それじゃ始めますかね。皆さん、ひととおりの会合はありますか……あれ、そちらさんは？」

前原は青山に目を止めた。美登里が言った。

「A F 保険の青山さんです。今日は付き添いですわ」

「出席者二名と聞いてましたから、てっきりお嬢さんと来るのかと思ってましたよ」

前原の口調が心もちかたくなった。青山は名刺を手にしち上がったが、前原は座ったままだ。青山が前原の席に出向き、名刺交換するという格好になった。前原は青山の名刺を見ると、ドスのきいた声になって言った。

「ああ、誘拐コンサルタントさんね。まあね、足を引っ張らないように一つ頼みますわ」

「わが社のデータ分析力は業界内でもトップですし、誘拐被害にあわれた顧客の皆さまからもご好評いただいております。むしろ捜査のお役に立てると思いますので、いつでも警察のご相談に

乗りましょう」

青山は刑事というよりやくざにしか見えない前原に怯まず、挑戦的な微笑を浮かべる。お互いの業務内容がかぶっているため、早くも縄張り争いが生じたということか。二人の視線の間に火花が散り、被害者家族一同はただ見つめるしかなかった。青山が席に戻ると、前原はすっかり機嫌を損ねたようで、人さし指を振りながら、ぶっきらぼうに訊いた。

「それと、そこのそちらさんね、誰なの？」

指さされた四十代の男は言った。

「わたしは弁護士の折口です。今回大塚さんに依頼されてまして」

折口も立ち上がって、前原に名刺を届けた。あの神経質そうな男が折口とすると、ロマンスグレー予備軍が大塚杏子の夫ということになる。美登里は驚き、杏子という女と自分は男の好み が似ているのかもしれないと思い、いやな気分になった。

前原は「まったくどいつもこいつも」と一人ごちてから、名刺を見た。

「折口さん、ここに『離婚専門』って書いてあるけど」

「そうです」

「誘拐はやらないの？」

「専門外ですね」

「じゃあ何しにここへ来たの？」

「離婚調停に有利になる証拠があればと思ひまして」

突然前原の表情が緩んだ。いたってにこやかに言う。

「まあ、状況が状況だから、ご主人の気持ちもわかるけどね。奥さん帰ってこなきゃ、離婚調停 もやりようがないでしょう」

「そうなんです。そこでここは一つ警察の方にも早期解決をお願いしようと思ひまして、伺った次第です。頼りにしてますよ」

「わかりましたよ。任せておいてください」

前原が調子よくハッハッハと笑った。

折口は戻り際に美登里に近づいてくると、もう一枚名刺を差し出した。

「よろしければ、ご相談に乗りますので」

美登里は無言で名刺を受けとった。ここに人目がなかったら、目の前で破いてやったところだ。

前原が軽く肩を回してから口を開いた。

「それじゃ今度こそ始めますからね。今回来てもらったのは、人質にされた四人の被害者家族ね。四人同時に誘拐されたから、まとめて捜査することになりました。今後何かとおつき合いがあるかと思うので、顔合わせを兼ねてお呼び立てしたってわけです。じゃあ左側の席から紹介します……」

前原は手元の書類に目を落とす。

「越川紅さんのご両親、正志さんと和江さん。辻明さんの奥さんの静子さん。静子さんは拉致時、現場にいたんだね。それからわたしの正面の席になりまして、柏木晴信さんの奥さんの美登里

さん、保険会社の青山さん。柏木晴信さんは皆さん知っていると思うけど、あの有名なミスター誘拐」

美登里の愛想笑いがひきつった。何もミスター誘拐を強調して、妻に恥をかかせなくてもいいだろう。

前原は右側の席に目を向けた。

「こちらが大塚杏子さんのご主人の和己さん、それと今ご紹介にあった弁護士の折口さん。で、わたしがG県警警備部公安課の前原。以上で全員揃ったってわけね」

前原は指先をなめてから、書類を一枚めくった。

「まずは拉致時の状況を説明しますね。これはバスの乗客全員が目撃者で、事情聴取を行なったからかなり詳しいことまでわかっています。どうやら柏木晴信さんと大塚杏子さんの乗った車に、犯人二人の乗った車が追突した。その後犯人は二人を連れてバスジャックし、車内で越川紅さん、辻明さんを人質に加えた。土産物センターで人質四人は降ろされ、別の犯人に引き渡された。残った犯人は一時間後バスを解放し、逃走した。人質、犯人とも、その後の足取りは不明」

前原は右手で首筋をさすり、左手で書類をもう一枚めくった。

「犯人は人質の髪を切りとって残している。警察ではこれを人質が誰なのかを示す証拠を残したと見ています。まあ、この犯人グループのいつもの犯行手口なんだね。皆さんから預かったヘアブラシでDNA鑑定を行なった結果、間違いなく皆さんのご家族のものと一致しました」

あちこちでため息がもれる。

越川和江が言った。

「もったいぶらないで言ってよ、刑事さん。テレビで、〈命と自由を守るネットワーク〉の犯行だって言ってたわよ」

「わたしのほうでは断定できませんな。まだ捜査中ですから」

「んもう、じれったいわね。あたしたちには言えなくても、警察は犯人グループがわかってるんでしょ。だったら簡単じゃない。そこへ行って、娘をとり返してきてちょうだいよ。それが警察の仕事でしょ」

「犯人グループが特定できたからって、人質の居場所が特定できたわけじゃないんですよ、お母さん。奴らはあちこちにアジトを持っていて、少人数のグループごとに行動するから、運よく犯人の一人を逮捕できても、グループが違えば何の情報も得られないってわけですよ」

「でもリーダーがいるでしょ。リーダーを捕まえて、吐かせればいいじゃないの」

和江はそのくらいも思いつかないのかと馬鹿にした口調で言う。前原は腕組みをした。

「皆さんはそうやって簡単に言いますけどね、組織の幹部ってもんはそうそう捕まりませんよ。ゲリラだろうと暴力団だろうと同じです。実行犯は下っ端、幹部は背後で命令を下すだけっていうのが、どこの組織も定石ですよ。尻尾をつかませないことにかけてやりたいそう熱心な奴らでね。証拠がなきゃ、いくら警察でも逮捕はできませんわな」

「証拠が何よ。うちは娘を誘拐されたのよ。それが立派な証拠じゃない。警察が動かないなら、あたしが動くわよ。テレビのインタビューで文句を言ってやるわ」

「まだ捜査の段階ですんで、勝手な行動は慎んでいただきたいですな」

前原の受け答えはのりくりとしていて、家族たちに対する真摯な態度は見えなかった。前原は言った。

「それと今話に出ましたマスコミですけどね、今後インタビューには応じないでいただきたいんですわ」

「どういうこと？」

和江の目が細くなり、丸い頬に埋もれた。前原は続ける。

「マスコミが情報を流せば、犯人グループにも知れることになりますからね。警察の捜査妨害になるんですよ」

「捜査妨害なんてしょうがないじゃない。詳しいことは何も教えてくれないんだから」

和江が噛みつくように言うと、正志が和江を肘でつついた。

「おまえ、いいかげんにしろ。相手は警察だぞ」

「警察が何よ。あたしたちの税金で給料もらってるんだから、あたしの言い分が通るべきだわ。こんなこと言われるなら、こんな遠くまで来るんじゃないかった。警察ってホントに不親切。少なくともマスコミのほうが被害者家族に親切よ。わざわざうちに来てくれて、いろいろ情報をくれるもの。やっぱり公務員はだめ。民間じゃなきゃねー」

和江は厭味たらしく語尾を伸ばした。前原は鼻の穴をふくらませ、じろりと和江を睨んだ。

正志が首を縮めてぴよこぴよこと頭を下げる。

「すみません、娘がいなくなって、うちのも気が立ってるんで……いいかげんにしろ、和江。捜査が中止されたら、おまえ責任とれるのか」

和江はプーンと頬をふくらませて、そっぽを向いた。美登里は世間一般でオバちゃんと呼ばれる中年女性の代表をあきれて見ていた。ＴＰＯをわきまえず、自分の要求をひたすらごり押しするオバちゃん。同じ女性としてこういう女を恥ずかしく思うし、自分は年齢を重ねることでよりエレガントになれるような、心身ともに美しい人生を送りたいものだ。

前原は怒気をはらんだ表情になり、腹の底から響くような声で言った。

「わたしは一つ訊きたいね。お母さん、あんた、娘に帰ってきてほしくないの？ 帰ってきてほしいでしょ？ え？ かわいい娘さんの顔をもう一度見たいでしょ？ そしたらお母さん、マスコミじゃなくてわたしの言うことをきかなくちゃ。警察だって市民に足を引っ張られちゃ、捜査も何もできませんよ」

前原の言葉も態度も脅迫めいていた。和江はそっぽを向いたまま返事をしなかった。

正志がまた頭を下げる。

「娘をとり返してやってください、刑事さん。お願いします。家内にはしっかり言い聞かせますんで、どうかよろしくお願いします」

「皆さんの協力なしには、捜査も進められないんですよ。そこのところをしっかりと頭に入れてもらわないとね」

前原は左端の越川夫妻から、右端の折口弁護士まで、見栄を切るように睨みをきかせてから言った。

「次の注意事項は電話ね。今からプリントを回すから、とってください。一家に一部ね。一人一

部じゃないからね。経費削減と環境保護にご協力願います」

プリントの束が静子のほうから回される。美登里と青山は一部とり、二人の間に置いて覗きこんだ。タイトルは『電話での誘拐交渉のやり方』。青山はさっと目を通すと、小馬鹿にしたような笑みを浮かべた。プリントが全員に行き渡ると、前原が言った。

「このプリントにも書いてあるけど、とにかく話を引き延ばすこと。これが成功の秘訣だからね。人質の安否は毎回必ず聞いてください。身代金を払えと言われたら、準備中だと言って、できるだけ引っ張ること。そのうち逆探知が成功すれば、人質救出に行けますからね。人質の命は家族の皆さんのがんばりにかかっているわけですよ。ここんところをよおく肝に銘じてね。ご家族ががんばってくれないと、我々も動きようがないからね。プリントをよく読んで、そのとおりに犯人と交渉すること。これ読めば、誰でもできるからね」

前原の説明を聞いていると、不快指数がぐんぐん上昇する。つまり警察は逆探知が成功するまで、何もしないということではないか。青山は誘拐とは高度な心理ゲームだと言った。素人がプリントを読んだくらいで交渉できるようになるものだろうか。

前原は壁の時計にちらっと目をやってから言った。

「何か質問は？」

室内はしんと静まり返った。弱気な静子、完全にむくれた和江とおとなしい正志、一刻も早く帰りたいらしい大塚とその弁護士。青山も質問する気はないようだった。本来の美登里なら気になる点をそのままにはしておけない性分だが、現在は不要となった夫を、できればゲリラのもとに留めておくという計画がある。よけいなことを言うつもりはなかった。

前原は書類を両手でつかみ、パンッとテーブルを叩いて言った。

「それじゃ本日はこれで。お疲れさまでした」

一同はびっくりして目を丸くし、前原を見つめた。今日新たにわかったことと言えば、被害者家族の人物像と、警察にやる気がないということだけである。こんなことのために東京からはるばるG県まで呼びだされたのかと思うと、言葉もなかった。和江の弁ではないが、マスコミのほう情報がくれるというのは真実だ。

人差し指でとんとんとテーブルを叩いていた大塚と折口弁護士は、待ってましたとばかりにドアの外へと出て行った。

前原はパイプ椅子からさっさと立ち上がった。正志が、あわてて和江に声をかける。

「おい、あのことどうすんだ。訊くんじゃなかったのか」

「いやよ。あたしはあんなえらそうな刑事とは二度と口をききたくないわ」

「でもあれはおまえが訊くって言ったじゃないか……」

「知らないわよ！ あんた訊いてきてよ！」

正志は舌打ちをして、びくびくと様子を窺いながら、前原に近づいていく。前原は夫妻の会話を聞いており、立ったまま待っていた。前原は腕組みをしてじろりと正志を睨む。正志は身をすくませて言った。

「あの、ちょっと娘のことでお伺いしたいことがあるんですが」

「何だね。質問の時間をもうけたのに、今ごろになって」

「いやその、公衆の面前ではお聞きしづらいことだったもので」

正志はしきりに頭をかきながら言った。小さな声ながら狭い室内では、現在も全員の耳に筒抜けである。正志は続けた。

「実はその、うちの娘は若いでしょう。まだ二十五歳なものですから。それで、その、犯人グループはどういった感じなんですかね？　つまりその、若い娘に乱暴するようなグループなんですかね？」

前原の顔が緩み、突然親しげな表情になる。

「そうか、紅さんは二十五歳だったっけ。そりゃあお父さんは心配だね」

「はい」

「いちおう我々が犯人と目しているグループは、わりと組織内の統率がとれているんだな。衝動的に暴力行為に出るようなことはほとんどないと聞いている。過去に若い娘さんが誘拐されたときも、性的暴力を受けたという報告はなかった」

正志の体から一気に緊張が抜けた。

「ありがとうございます。いや、わたしは嫁入り前の娘に何かされたらと心配で心配で……嫁に行くまでは親の責任ですから。ありがとうございます」

「うちも娘がいるから、わかりますよ。わたしも全力でやらせてもらいますからね。お父さんもがんばってくださいよ」

「お願いします。ありがとうございます」

何やら父親同士の絆ができたらしい。前原は一転して陽気になり、ハッハッハと大きな笑い声を上げる。それから「お帰りの道中気をつけて！　警察の世話にならんようにしてくださいよ！」とジョークだか何だかわからない別れの言葉を飛ばし、手を振りながら先に出て行った。

ドアが閉まるが早いか、和江は正志に噛みついた。

「あんた、何であの刑事となごんでんのよ！」

「なごんでないだろう。おまえが訊かないって言うから、俺が訊いただけじゃないか」

「あたしが言いたいのは、あんな刑事に丸めこまれるんじゃないってことよ！　あの刑事は絶対に信用できない！　あたしにはわかるんだから！」

「おいよせ、和江！　ここは警察署なんだぞ！　盗聴器がしかけられていて、逮捕されたらどうするんだ！」

正志は警察に何か偏見があるらしい。静子はサメのごとく獐猛な和江のコバンザメになろうと決めたらしく、和江の背後にぴったりとはりつき、大きく頭を上下させている。

美登里は夫婦喧嘩を観戦する気はなかった。静かに立ち上がり、青山に向かって言った。

「さ、行きましょう、青山さん」

青山もうなずき、腰を上げる。和江が青山を見て叫んだ。

「ちょっと待ったっ！」

眼光鋭い和江に睨まれた青山は、全身を硬直させた。壊れたサイボーグのように、いつもの冷静さを完全に失っている。

「ぼぼぼ僕ですか」

「そうよ、あなたよ、保険屋さん。誘拐コンサルタントだって？」

「……そうですが」

「誘拐コンサルタントって、いつだったかワイドショーで見たわ。家族のかわりに交渉してくれるんでしょ」

「……いえ、アドバイスをするだけです」

「細かいことはいいわよ。あなた、うちの娘をとり返すためのアドバイスをしてくれない？」

青山と美登里の視線が瞬間交差し、断固拒否と確認し合った。それは二人の気持ちが初めて一致した瞬間でもあった。

正志がおろおろと口を挟む。

「おい、和江」

「あんたは黙ってて。あの刑事は信用できないんだから、この保険屋さんを逃すわけにはいかないのよ」

和江が巨体をずいと突き出し、その背後で静子がまたうなずいた。

青山は軽く咳払いをして、口を開く。

「申し訳ございませんが、当社でのご契約がない限り、アドバイスできませんので」

「若いくせにかたいこと言わないの。ちょっとくらいいいじゃない。じゃあ、一万円出すわ。会社内に緒でお小遣い稼ぎだと思えばいいでしょ。とっときなさい」

和江は合皮のハンドバッグを開き、財布を探り始める。美登里はここで和江に巻きこまれては逃げられなくなると察し、青山に命じた。

「帰るわよ、青山さん！ さっさと車出して！」

「はいっ！ じゃ、これでっ！」

「あっ、待ちなさいよ、あんた！」

和江が顔を上げたときには、美登里は十センチヒールの靴をカカカッと響かせて走り出し、青山はアタッシュケースを抱え、会議室を飛び出していた。それから二人は脱兎のごとく警察を出て、車に滑りこむ。

「追手は来てないわね！」

「どうにか逃げられたようです！」

「あのサメ女が太っていたのが幸いだったわ！ 車出して、急いで！」

青山はキーを入れ、タイヤをきしませながら車を急発進させる。車が走り出すと、美登里は額の汗を拭い、うしろを振り返りながらようやく安堵の息をもらした。

「危なかったわね。もう少しであのサメ女に飲みこまれるところだったわ」

「そ、そうですね」

青山はまだ動悸がおさまらないのか、声がかすれている。

美登里は不安になった。

「運転は大丈夫？」

「はい……」

「しっかりしてよ。わたしはあなたと心中なんていやですからね」

美登里の一言で、ミラーに映る青山の目は落ち着きを取り戻した。その目は「それはお互い様です」と語っていた。

紅は、杏子に自信を奪われる～十一月十七日（月）午後五時三十分

杏子が湯上がりの女らしく生乾きの髪をゆらすと、シャンプーの香りがふわりと流れてきた。女の紅の目から見ても、色っぽいと思う。紅は自分のベッドの上に膝を抱えて座り、くやしくなって言った。

「あっち行ってよ」

「行くってどこへ？ わたしたちはこの檻の中から出られないんだから、そうつつんしないですよ」

紅は返す言葉もなく、沈黙した。人質生活三日目ともなれば、置いてある雑誌すべてにそれぞれ三回以上目を通し終わり、五分おきに時計を見ては「まだ五分しかたっていない」とうめくことのくり返しで、楽しみといえば三度の食事だけである。そんな生活での入浴は、体を清潔にするというだけではなく、時間つぶしと気分転換という意味でも羨ましかった。

「それよりこれ、紅ちゃんの洗濯物よ」

杏子はビニール袋を差し出した。紅が頼んだ洗濯物がきれいにたたまれて入っていた。

「紅ちゃんのランジェリーってすごくゴージャス。手洗いする時間がなくて、全部一緒に洗っちゃった。ごめんなさいね」

「いいの。ありがとう」

杏子に悪気がないことはわかっている。そしてやさしい。しかしどういいうわけか紅の痛いところをついてくる。

杏子は化粧水で肌をパッティングしながら言った。

「お風呂は温泉旅館並みだったわ。浴槽が石張りで、ライオンの口からお湯が出てくるの。びっくりよ。ここ、どこかの別荘地だと思う。家の外に人の気配がないし」

「あたしもこの家、山荘みたいだって思った。でもゲリラの監禁場所がこんないい家ってありうる？」

「以前誘拐された人の持ち家だったのかもね。身代金代わりに別荘を譲渡することもあるらしいから」

「でも、それじゃ持ち主が通報すれば、ここに警察が突き止められるじゃない。犯人を捕まえられるってことでしょ。あたしたち、助かるかな」

「さあ……持ち主が通報するケースは少ないから。例えば、家族を誘拐されないための前払いとか、スキャンダルをばらされないための口封じとかで家を渡した場合ね」

「杏子さん、いろいろ詳しいんだ」

紅はまたくやしくなった。杏子には知性の面でも負けているみたいだ。

「晴信さんからいろいろ聞いたのよ。紅ちゃんもそんな顔しないで、元気出して。人質生活では落ちこんだら最後、うつ病になるのよ。すぐに入浴許可は下りるわ。今度あのブラックマスクが来たら、わたしも一緒に言ってあげる」

「いい。一人で言えるから」

紅は意固地になっていた。杏子は本当にやさしい。自己紹介早々、自分は杏子の不倫について厭味を言った。それなのに杏子は昨日のオリエンテーションで頭に血が上った自分を止めてくれ、今日は洗濯物を一緒に洗ってきてあげると申し出てくれた。しかし紅は杏子のやさしさを素直に受け入れることができずにいる。時間がありあまっている人質生活で、杏子のような女と一緒に過ごすのは最悪だ。あれこれよけいなことを考えてしまう――杏子はきれいなだけでなくやさしいから、きつともてるのだ。柏木晴信みたいなステイタスのある男だって、杏子を好きになった。自分も杏子みたいだったら、素敵なお付き合いができるだろうか。越川紅ではなく大塚杏子だったらよかったのに――紅は杏子と一緒にいると自信を失い、自分のコンプレックスがふくらんでいくのがわかった。

杏子は顔にクリームを塗りながら、どこか寂しげに言った。

「今日は月曜日。お勤めの方はまた出勤ね」

「あたしたちに曜日なんて関係ないじゃない。こんなに最悪な休日を過ごしたわけだし」

「そうね。でもダーリンが出勤しちゃうから、どうしてるかなって」

紅は興味を引かれて顔を向けた。

「杏子さんの旦那さんってどんな人？」

杏子は肌の手入れの手を止めて、少し考えてから言った。

「とっても愛情が深い人。真面目な人」

「いい人なんだ。仕事は何をやってるの？」

「銀行員」

「いいとこなんだ？」

「そうね。大金持ちじゃないけど、小金はあるかしら。生活は安定してる」

杏子は何の不満もない結婚生活を送っているようだ。それならなぜ不倫に走ったのだろうか。世間でよく言われるように刺激がほしかったのだろうか。そう思うと、紅はやはり杏子を非難がましく見てしまう。

「旦那さんは気になるのに、柏木さんのことは気にならないの？」

「気になるわよ。一度は本気で好きになった相手だもの」

「そうだよ。それに柏木さんなら脱出計画を考えてくれるもんね」

「脱出計画？」

杏子は考えたこともなかったというふうに驚いた。その反応に紅のほうに驚いてしまった。

「どうして驚くの？ だってあの柏木さんだよ。テレビでいつも言っているじゃない。日本人が意識改革する時期が来た、人質になっても決して諦めるな、わたしは日本人全員にエールを送るって」

「.....そんなことも言ってたわね」

「以前はあたしもそれほど熱心に聞いていたわけじゃなかったの。でも今になると、柏木さんの言っていたことがわかる。ここで諦めて、あんなゲリラの言いなりになってちゃだめだよ。一人一人ががんばらなくちゃ。だから柏木さんに何とか会えないかなって思ってるの。そうすれば皆で脱出できるかもしれない」

「あまり期待しないほうがいいと思うわ」

杏子は紅の提案に気乗りしない様子だった。柏木の言葉に元気づけられたりしないのだろうか。柏木とつき合っているのに、彼の言葉を信じないのだろうか。それとも自分より紅のほうが柏木を理解しているから、嫉妬しているのだろうか。いずれにしろ杏子は本当は冷血な女なのかもしれない。

グリーンマスクの見張りコマンドが時計を見て、弁当の入ったビニール袋を提げて近づいてきた。無言でビニール袋ごと差し入れ口に押しこむと、すぐに立ち去ってまた漫画雑誌に目を落とした。見張りの頭部はすっぽりとマスクで覆われているので、顔の判別はできない。さらに行動パターンも同じで、金網から五メートルほど離れた位置にあるテーブルと椅子から動き回ることもなく、漫画雑誌を読んでいるかテレビを見ているかで、時間になると食事を差し入れて片づける。トイレなどの用でこちらから見張りに声をかけなければ、自分たちから話しかけてくることはなかった。

杏子は化粧品を片づけており、紅が弁当を袋から出した。中には製造元のシールをはがしたコンビニのハンバーグ弁当とお茶、その底にクッキーの箱が入っていた。紅は思わず声を上げる。

「わ、クッキー！ 嬉しい！」

杏子も顔を明るくする。

「ほんと？ 久しぶりのスイーツね！」

「こういうサービスって嬉しい。ここって歯ブラシまで有料だし、間食は出ないでしょ。甘いものを食べたかったら、実費購入しかないと思ってたの……ん？」

紅は箱に疵がついていることに気づいた。よく見ると、蓋の糊付けがはがれており、中に手書きのメモが入っている――『内緒で食べてください』。

紅はびっくりして、グリーンマスクに目をやった。男はテレビを見ていて、何も変わった様子はない。紅はメモをそっと杏子に差し出した。

「杏子さん、これ見て」

「何？」

杏子もメモを読み、肩を軽くすくめた。

「わたしたちに同情的な子がいるってことね。誰かしら」

「さあ」

杏子はくすっと笑った。

「きっとわたしたち二人のどっちかに気があるのよ。次は花束かも」

「花束なら杏子さんでしょ」

「あら、どうして」

屈託なく尋ねる杏子に、紅はますます劣等感を募らせる。花束と聞いたとたん杏子宛だと言ってしまった自分は何て卑屈なのだろう。杏子が美人を鼻にかけた女だったら、ここまで落ちこまずにすんだかもしれない。

「とりあえずあたしたち二人のファンってことにして、クッキーは食後に食べよう」

「いいわね。熱いコーヒーか紅茶、欲を言えばワインでもあれば、もっとよかったのに。さらに

欲を言えば、ここから逃がしてもらって、家でくつろいで食べたかったわ」
紅はうなずいた。一刻も早くこの檻から、そして杏子から逃げたかった。

フリーの誘拐コンサルタントは、庶民の依頼を引き受ける～十一月十八日 火曜日
午前九時

フリーの誘拐コンサルタントは、庶民の依頼を引き受ける～十一月十八日（火）午前九時

江崎賢太郎はオフィスに祀ってある神棚の前で柏手を打ち、頭を垂れた。フリーの誘拐コンサルタントである江崎の朝は、毎朝拝むことから始まる。

「明けない夜はない」「雨はいつか必ず上がる」「冬のあとには、春が来る」。これらは一般的に受け入れられているポジティブな言葉だ。しかし誘拐に限っては、これらの言葉は当てはまらないことがある。明けない夜も、上がらない雨も、めぐって来ない春もあるのだ。ある日愛する人が忽然と消え、生きているのか死んでいるのかすらわからず、数年、数十年が過ぎてしまうケースは、誘拐に限って言えば、めずらしいことではない。やがて家族は、あのときああすればよかったこうすればよかったと自分を責めるようになり、出口の見えない闇の中で苦しみ続ける。愛する家族が解放されなければ、永遠にその暗闇の中に居続けるのだ。これが誘拐という犯罪の恐ろしさである。

そんな被害者家族にアドバイスをして、人質を助け出すこと――それが自分の仕事だ。

誘拐交渉の仕事の結果は、もちろんコンサルタントの腕に関わることも大きいが、江崎はそれだけではないと考えていた。人質や家族の持つ生命力――個人的資質と運も関係する。

個人的資質とは性格や体力のことだ。逆境でどれだけ自分の精神と体力を維持できるか、見張りや他の人質と良好な人間関係を保てるかどうかが生き延びるためのカギになる。

そして運も大きく影響する。江崎はFBIと南米での誘拐交渉経験から、運もまた重要な要素だと思わざるを得なくなった。大勢いるグループの中でたった一人選ばれてしまった人質、身代金の受け渡しを失敗させたささいなタイミングのずれ――それが運だ。江崎は、引き受けたケースで無事人質をとり返せるように、日頃から神様をお願いしておく。若い頃は神頼みなど馬鹿にしていたものだが、齢を重ねるにつれてわかってきたのだ――自分一人ではできないことには限界がある。

江崎が誘拐交渉の仕事に携わるきっかけとなったのは、留学先のアメリカでリングと結婚し、その後憧れだったFBIに入局したことである。日系人の犯罪が増加し、その年日本人の捜査官を必要としていたため、運よく入れたのである。キャリアを積んでいく内、ネゴシエーター・チームCINTに抜擢され、誘拐交渉術を学んだが、一方で私生活は破綻し、離婚した。その後FBIを辞め、再出発をはかってペルーに移住、誘拐コンサルタントを始めた。なぜペルーかと言えば、首都リマでスーパーマーケットを営んでいる親戚がいたこと、南米大陸にはコロンビアをはじめとする誘拐大国があり、フリーの誘拐コンサルタント業が繁盛していたからである。実際南米時代の江崎は一度に三件くらいの事件を同時進行させていたものだ。

南米の誘拐犯はラテン気質のせいか気性が荒く、ちょっとした運やタイミングのずれで、人質が殺されてしまうことがあり、神経の休まるときがない。そのせいで途中沈んだ時期もあったが、立ち直り、四十歳を過ぎ、五十歳が目前に迫ると、突然無性に故郷の日本が恋しくなってきた。誘拐交渉の腕を祖国で生かそうと、日本への帰国を決めたのが二年前のことである。

江崎はまもなく来る依頼人のために、自らポットにコーヒーを落とし始めた。フリーの誘拐コンサルタントとして、南米で稼ぎまくった江崎には事務員を雇うくらいの貯えはあったが、あえて雇っていない。この仕事に秘密保持は不可欠だからだ。以前金銭目的で事務員に情報をもらされた経験があり、それ以来江崎は不便を承知で人を使わないことにしている。江崎が欲しいのは、この仕事への高いモラルを持っている、ビジネスパートナーだった。誘拐コンサルタントに危険はつきもので、できれば留守を預けられる人物が欲しいと願っているのだが、江崎の眼鏡にかなう人物はなかなか見つからない。

日本はこの五年ほどですっかり様変わりしており、日本でも誘拐コンサルタントの需要は伸びていた。今のところ、南米の誘拐犯ほど過激な行動に出ないのが幸いだが、件数は着実に増えている。

江崎はこの誘拐ブームの発端は、日本に広がった社会不安、不満だったと見ている。まず経済格差社会が拡大し、ワーキングプアと呼ばれる低所得者層の増加と物価の上昇で、社会不安が高まっていた。そこに震災による経済の悪化が加わり、倒産、自殺者は年毎に倍の伸びを示した。経済力の低下から、今まで親密だったアメリカを始めとする国際社会から「ジャパン・パッシング」と呼ばれる相手にされない状態に陥り、外交上の不安が高まった。このように社会、経済、外交と問題は山積しているのに、政府の対応は後手後手、無為無策。さらに連日マスコミが政治家や官僚の汚職、不始末、税金の無駄遣いを報道した。国民の怒りは募っていった。

そして年金記録問題が全面解決されないまま調査打ち切りを決定されたとき、一部の国民が立ち上がった。もう政府には任せておけない、自分たちも何かしなければならぬというわけだ。それは最初小規模な市民運動として始まった。しかし回を追うごとに規模はふくらみ、東京でのデモ行進には約十万人の人々が集まるようになった。しかし政府は有効な政策を打ち出すどころか何も変わらず、デモ行進は交通の妨げになるとして弾圧され、警察は指導者数名を逮捕した。

その結果、市民運動家の一部から、もっと積極的にこの国の改革にとり組まなければ、日本はとり返しのつかないことになるという考えをもつ者が現れ始めた。逮捕された仲間のためにも、ここで弱気になってはいけないというわけである。彼らに同調したのは、どんなに働いても貧困から抜けられない低所得者層、特に二十代から三十代の若者たちであった。インターネットを中心に、水面下で危険な思想が広まっていた。「この日本という国にいる以上、自分たちの人生は底辺で終わってしまう。しかし革命や戦争が起きれば、社会が一気にひっくり返る。自分たちが革命や戦争を起こすことで、社会の主役に躍り出て、閉塞した人生からも逃げ出せる」。彼らは明確に内戦を望んでおり、あとは現実的な計画を立てて、实际的な行動に移すだけだった。

そしてゲリラが誕生する。スローガンは「国民の手で、誠実な社会をつくろう」という左翼思想を反映したものだったが、昨今の若者の中には左翼が何なのかまったく知らない者も多かった。彼らは官僚の福利厚生施設や宿舎を襲撃し、あとから犯行声明を発表する――例えば「〈命と自由を守るネットワーク〉が粛清した」。破壊活動は火炎ビンを投げる程度のものだったが、世間の注目を集めるには十分だった。マスコミはゲリラ活動をとり上げ、世論の一部にはゲリラ支持の声もあった。暴力行為に問題はあるが、ゲリラを生んだ背景には政府の姿勢に問題があった

というのが、不満を抱えていた国民一般の見方でもあった。

マスコミがゲリラのリーダーに独占インタビューをとれば、テレビの視聴率は跳ね上がった。そこでゲリラはマスコミと二人三脚で動くようになり、世論は完全にゲリラ寄りになった。これで国民の協力を得て、ゲリラの地下潜伏は容易になっていく。

ゲリラは勢いに乗り、社会保険庁長官を誘拐した。個人資産からという条件つきで身代金三億円を要求し、それを受けとると、必要経費として一億円を差し引き、残り二億円を社会保険庁に納めた。「この二億円を年金未払い分の足しにするように」。国民は拍手喝采を送った。今までの鬱憤をゲリラが晴らしてくれたと喜び、この頃のゲリラは英雄だった。

新しいゲリラ組織が雨後の筍のように誕生したのはこの時期である。ほとんどの組織は政治家や大物官僚を狙って誘拐したのち、身代金の一部を社会福祉に役立てた。国からの援助を打ち切られた高齢者や障害者施設、震災被害者に、ゲリラからの援助金が届けられたのである。これによって大義名分が成り立ち、援助金で生き延びられると涙ながらに語る高齢者や障害者の姿がテレビに流れると、ゲリラを悪者にするより、本来の仕事を怠っている政府が悪いという風潮になった。

しかしゲリラの活動は活発化するほど証拠が残り、逮捕者が出始めた。これを機に勢いを盛り返したのは、警察である。検挙率の低下を挽回しようと、捜査に力を入れ始めた。狙った容疑者を逮捕しておいて、証拠をあとづけするという手法が一般的になってきたのは、この頃である。デモ行進に参加した経験があるというだけで、ゲリラ関係者として逮捕され、ほぼかつてのアカ狩りと同じ状態に陥り、逮捕者が急増した。

さらに政治家や大物官僚たちも手をこまねいて誘拐されるのを待ってはいなかった。警備システムを強化し、ボディガードの人数を増やした。しかしもはやゲリラが活動が続けていくには、誘拐をやめるわけにはいなくなっていた。身代金で弱者支援を行なうことで、ゲリラ組織の存在を社会に容認してもらっていたためである。

しかし政治家や大物官僚たちのガードがかたくなり、誘拐が困難になるにつれて、ゲリラ組織の収入は減った。それなのに、警察の追及を逃れるための逃走資金は今まで以上にかかるようになった。そこでゲリラ組織は弱者のための援助金の額を大幅に減らし、富を貯え始めた。万一の場合に備えた蓄財に走ったわけである。ここで組織の幹部は富という金の味を覚えてしまった。彼らが批判していた政治家や官僚同様に、腐敗が始まった。

マスコミは誘拐の身代金で贅沢な暮らしをするゲリラ組織の幹部をスクープ報道した。そのマスコミ関係者が後日誘拐された。マスコミは慎重な対応をとらざるを得なくなった。この頃から世論はゲリラ支持から離れ始める。そして柏木晴信らゲリラに対する強硬派がマスコミに登場し始めた。彼らの主張では、ゲリラとは犯罪者であり、その存在を容認すべきでないとし、その考え方が世論の大半を占めるようになった。裁判の陪審員もゲリラに厳しい姿勢をとるようになった。

ゲリラ組織は完全に大義を失い、人質のターゲットをもっと広範にした。政府関係者ではなくても、裕福な者であれば誘拐するようになった。裕福な者も自衛に金をかけるようになった。

これほどまで混乱した社会状況であっても、庶民と言われる日本人は誘拐を他人事、ある種のエンターテインメントとして見ていた。平和で安全な社会に住む日本人は、かねてから危機管理

意識が薄いと言われたものだが、ここに至ってもまだ意識改革をできずにいる者が多かった。

しかしそれは時間の問題だと、江崎は見ている。ゲリラ組織を維持していくには金がかかる。警察の手を逃れようとする犯罪者である以上、逃走や潜伏に追いつめられれば、同じ穴のむじなである暴力団の力を借りるしかない。彼らとつながり続けるには金が必要であり、金が切れたら最後、殺される。

もはやゲリラは大義に基づいてターゲットを選別している余裕はなくなった。政治家や大物官僚から裕福な民間人にあっさりターゲットを移行したのだから、自分たちが生き延びるために、裕福な民間人からもう少し経済状態の悪い庶民に移行することは十分ありうる。今回の柏木晴信誘拐事件では、特に裕福でもない三人の庶民が巻きこまれた。江崎は、この事件からこの国の誘拐ブームは流れを変えるだろうと見ている。まもなく国民全員が誘拐のターゲットになる。これで日本もコロンビアのような誘拐大国の仲間入りを果たすだろう。

事務所のドアの外に人の気配があった。約束の客が来たようだ。モニターに映っているのは三人の男女だった。江崎はドアのロックを解除し、客を迎えた。

いちばん先に入ってきたのはかなり横幅のある中年女で、江崎を上から下まで眺め回してから、うしろの二人に言った。

「あの保険屋さんとはずいぶん雰囲気が違うわね。ハズレかもしれない」

このときの江崎は首もとのボタンを開けたグレーのダンガリーシャツ、セーター、ジーパン、足元は素足に健康サンダルだった。南米暮らしが長かったため、肌は焼けて黒く、野生的な印象は否めない。オフィス内のラフな格好はビジネスシーンにそぐわないとわかっているが、これがフリーのコンサルタントの気楽さである。

しかし相手の服装を見て人物判断をしたのは、江崎も同じだった。三人は服装から見て庶民であり、金持ちには見えなかった。女のポリエステルの安っぽいブラウス、老婦人の履き古したウォーキングシューズ、男の安物の時計。江崎は相談予約の電話を受けたとき、詳細を聞かなかった。江崎は、これはひょっとすると、と内心考えながら、愛想よく言った。

「まともな服も用意してありますが、オフィス内ではリラックスした格好で失礼させてもらっているんですよ。どうぞこちらへ」

三人を応接室に案内し、白い折りたたみテーブルに横一列に並んで座ってもらった。中年女が真ん中に座り、その左右に男と老婦人がつく形となる。江崎は用意しておいたコーヒーを出した。中年女がさっそくミルクと砂糖を入れ、スプーンでかき混ぜる。

江崎は向かい側に腰を下ろし、名刺を差し出した。

「わたしが江崎と申します。どうぞ」

中年女がカップからスプーンを上げて、名刺を受けとると言った。

「あたしが越川和江、こっちが夫の正志です。柏木晴信さんと一緒に娘の紅が誘拐されたの。テレビでも報道されているから、知っているでしょ。こっちは辻静子さん。旦那さんの明さんがやっぱり人質にされたの。二人をとり戻してちょうだい」

江崎は息を呑んだ。それではやはりこの三人は庶民誘拐の被害者家族というわけか。江崎は言った。

「ご安心ください。わたしはF B Iで誘拐交渉術を学んだあと、フリーのコンサルタントとして、南米で約十年間働きました。解決件数は二百件を越します。きっとお力になれますよ」

たいていの日本人には元F B Iという看板を掲げれば、すぐに信用を勝ちとれる。南米での実戦経験より効果的だから、応接室には額装したF B Iの研修修了証明書を飾ってあるのだ。静子と正志は思惑どおり感心したように目を丸くしたが、和江は眉をひそめた。

「F B Iだとか何とか言って、コンサルタント料をぼったくろうというつもりじゃないの」

江崎は内心唖然とした。F B Iと言ったくらいでは信用しない依頼人もたまにはいるが、いきなりぼったくり扱いされたのは初めてだった。なかなか手ごわいおばさんである。しかし今後の誘拐犯との交渉を考えると、このくらい図太いほうが頼もしい。これが虚勢でないことを願いつつ、今料金の話をしては和江は席を立つだろうと、江崎は判断した。

「まずはお話を伺いましょう。そちらもまだわたしに依頼すると決めたわけではないでしょうが、わたしもお引き受けすると決めたわけじゃありません。お互い納得した上で、契約したほうがいいでしょう」

和江は少し安心したようで、熱いコーヒーをずずっと飲んだ。

「まあ、誰であってもあの刑事よりはましだけどね。G県警の前原って刑事、あなた知ってる？」

「いえ」

「ひどい刑事なのよ。あんな刑事に紅をとり戻せるもんですか。だから、あたし言ってやったのよ、マスコミのほうが親切よって。ねえ、静子さん？」

和江は静子に顔を向けた。静子は仏のような微笑をたたえてうなずき、正志が「すみません」と頭を下げた。警察と被害者家族の顔合わせで、どうやら和江は警察で不快な思いをさせられたらしいが、どんなものかは想像がつく。しかし江崎は興味があるふりを装い、わざと身を乗り出した。

「警察の対応はどんなものだったんですか」

「そりゃあひどかったわよ！ やる気なんかまるでないの！ プリント渡されて、このとおりにゲリラと勝手に交渉してください、交渉内容は報告してください、人質の居場所を突き止めたら、救出に行ってくださいからって、こうよ！」

和江はテーブルをばんと平手打ちし、四つのカップからコーヒーがソーサーに跳ねた。

江崎は説明する。

「警察とご家族の目的は微妙にズレがあるから、仕方ないんですよ」

「ズレ？」

「ほうらやっぱりね！ あたしの思ったとおりよ！ 何かズレてんのよ、あの刑事！」

正志と和江はそれぞれに言葉を発した。静子は驚いた顔を見せたが何も言わず、バッグからティッシュペーパーをとり出し、こぼれたコーヒーを和江の分から順に拭き始める。江崎は静子に布巾を差し出してから、先を続けた。

「ご家族の目的は人質の救出、当然それだけです。しかし警察の目的には人質の救出のほかに犯人逮捕が加わりますから、警察はその二つを念頭において動くというわけです。だから身代金交渉をして人質の居所を突き止めることに重点が置かれるのです。身代金の引渡しするときも同じ

です。家族は無事にお金を渡して、人質をとり返したいとだけ考えますが、警察は同時に現場を押さえて、犯人を逮捕したいと考えます。警察の考えでは犯人の口を割らせれば、人質救出もできるということですが、実際には金をとりに来た犯人が人質の居場所を知っているとは限りません。さらに警察は人手不足で、長い交渉のために人員を割く余裕がないのです。警察には注意が必要です。それとマスコミにもです」

「どうしてよ。マスコミの人は警察とは違うわよ。みんな親切なもの」

「マスコミもご家族に協力したり同情したりしてくれますが、目的はあくまでも報道であって、人質の救出ではありません。報道によって世間の注目を浴び、市民の通報につながり、解決したケースはありますが、一方でスクープ競争で情報もれが起き、交渉に支障をきたしたケースもあります。つまりケースバイケースということで、どっちに転ぶか予測はできないのですね」

和江の感情が落ち着いてきたようだった。

「で、誘拐コンサルタントはどうなの？」

「わたしの目的はご家族と同じですよ。人質をとり返すことだけです。わたしがご家族に雇われたなら、警察ともマスコミとも無関係ですから、同じ目的で動きます」

「だから保険屋さんを連れてきたのね、あの奥さん」

「保険屋さん？」

そういえばオフィスに着いたときも、和江は自分を保険屋さんと違うと言っていた。

「そうよ、ミスター誘拐の奥さんが、警察の説明会のときに保険屋を連れてきたの。A F 保険の誘拐コンサルタントとかいう人。二人とも気どっていて、いけすかないのよ。こっちがアドバイスしてほしいって頼んだら、走って逃げたんだから、失礼しちゃうわ」

「A F 保険？ では柏木氏は誘拐保険に入っていたってわけですか」

江崎は半分驚き、半分納得していた。テレビに登場する柏木は舌鋒鋭くゲリラとの対決も辞さないと豪語していたが、江崎はどこかうさん臭いと感じていたからだ。あのパフォーマンスはテレビ向けで、実はちゃっかり誘拐保険に加入していたというのは、ある意味しっくりくる。

しかしA F 保険というのが気になった。A F 保険は安い掛金のわりに補償額が高いため、多くの顧客を獲得している外資系企業である。しかしコンサルタント仲間の間ではあまりよくない噂が流れているのだ。A F 保険が誘拐コンサルタントを派遣する目的は、人質の救出ではなく、身代金の支払い金額を下げるためだけだというものである。

保険会社は利益を上げるため、支払い金額を可能な限り抑えたい。それは利益を追求する民間企業なら当然のことである。しかしA F 保険の場合、利益にのみ重点を置いている傾向があった。彼らは誘拐コンサルタントを派遣し、値引き交渉によって、誘拐の再発や長期化を防ぐとクライアントに説明する。それは誘拐交渉の定石だが、A F 保険の場合、人質の生命が危険だとわかって、ぎりぎりまで値引き交渉に固執する。その点が問題なのだ。人命が危険にさらされたら、金も犯人逮捕も諦めろというのが交渉の鉄則である。江崎に言わせれば、A F 保険のやり方は一歩間違えばすべてを失う綱渡りでしかない。

しかしここでA F 保険をわざわざ批判する必要はないだろう。江崎は言った。

「犯人か人質の方からの連絡はありましたか」

「紅からはないけど、犯人からならあったわよ。紅が誘拐された日の夕方ね。『娘を預かった。金を用意しろ。また連絡する』。それだけ言われて、切られちゃったわ」

「金額は提示されましたか」

「いいえ、なかったわ」

「越川さんのほうから何か言いましたか」

「言ったわよ。『あら、おかしいわね、うちの娘はここにいるけどね』って。あたしはてっきり振り込め詐欺だと思って、言い返したのよ。だって、うちの娘が誘拐されるなんて考えられなかったから」

そこで犯人側から何も言ってこなかったということは、台本を読み上げていただけという可能性が高い。和江のフェイントに機転を利かせるほどの交渉能力はなかったということか。江崎は静子に向かって言った。

「辻さんは解放後、犯人かご主人からの連絡を受けましたか」

静子は肩を落とし、消え入りそうな声で言った。

「犯人からも主人からも何も。バスで別れたきりです」

静子はそう言うと、自分のセーターの袖口をつまんで引っ張り始めた。どうやら手持ち無沙汰が苦手と見える。江崎は静子が心配になった。高齢である上、性格もおとなしいようだ。誘拐事件を乗りきるための体力や、逆境で自分を維持できる精神力が必要なのは、人質だけでなく被害者家族も同じである。警察やマスコミと対応し、犯人と交渉するということは、自己責任で決断し、行動していくということだ。この老婦人にそれだけの気骨が備わっていればいいが、そうでなかった場合のことを考えて尋ねた。

「他にご家族の方はいらっしゃいますか。一緒に交渉に当たってくれそうなご友人とか」

静子は涙ぐみながら首を振った。

「いいえ、どなたも。わたしは主人と二人暮らしです。嫁いだ娘が横浜におりまして、力になると言ってくれたんですけど、子供が幼くて……五歳の男の子と二歳の女の子がいますから、なかなか……あの娘も大変なんです。再婚相手の連れ子なものですから、なつかなくて。それでも身代金を支払うときには、できるだけ協力するとは言ってくれています……それと友人はみな高齢ですので、入院か老人ホームか他界しております。毎年届く年賀状も年々少なくなっております」

「わかりました」

実質的な協力者はいないということだ。この老婦人がもちこたえられなかったときのことを考えて、この二組と一緒に交渉するという方向で考えたほうがいだろう。

「人質にされたご家族のお人柄について伺います。まずは紅さんから……テレビでは二十代女性と言いましたが」

「二十五歳で、都内でOLをやってます。性格は明るくて、元気がよくて、気立てがいいのよ。あたしに似てるってよく言われるわ」

「なるほど」

紅の性格が和江似なら、それが凶と出る可能性は高いと考えた。和江は思ったことを口に出し、不快な感情であっても素直に表現する。しかし人質にされた場合、感情を上手にコントロール

できる性格のほうが、無事に解放される可能性は高くなる。感情を爆発させてゲリラを挑発するようなことを言えば、暴行を受けやすくなり、お互いにマイナスの感情を増幅させていくことになるからだ。さらに、たとえどれほど強靱な性格の持ち主でも、人質になれば内にこもって悲観的になり、エスカレートすれば自殺を考える。そんなとき感情のコントロールができないと、這い上がれなくなる。

「健康面はどうですか。特別な持病はありますか」

「ないわ。あの子は小さい頃から体だけは丈夫で、医者要らずだったのよ。親孝行って言ったら、そのくらいのもんね」

「健康なのはかなりプラスになりますよ。結局は体力勝負ですからね。辻明さんはどうですか。体力的、性格的に忍耐強いほうでしょうか」

「主人は我慢強い性格です。愚痴をこぼすことも嫌いますし、苦勞を苦勞とも思わないようなところがありますので。ただ、糖尿病を患っておりまして、それを心配しております」

「心臓は？」

「丈夫です。先日の検診でも、百歳まで生きると言われました」

過度のストレスがかかる状況で、心臓に問題なかったのは不幸中の幸いだが、糖尿病と高齢者ゆえ体力不足が心配である。

「次に、拉致時の状況について詳しくお伺いしたい。テレビで見ましたが、辻さんは現場にいらしたんですね？」

「はい」

静子はやや緊張するような面持ちになり、目を伏せた。拉致時のことを思い出したくないのかもしれない。

「おつらいでしょうが、どうしても必要なことです。ゆっくりでかまいませんので、お話しください。なぜご主人と紅さんが連れ去られたんですか」

静子はうなずいて、口を開いた。

「犯人は二人いて、柏木さんと女の人を捕まえて乗りこんできて、バスをのっとったんです。検問があったんですけど、警察の人は気づいてくれなくて」

「検問時に騒ぎたてる乗客はいなかったんですか」

「はい。静かにしていれば、乗客は解放すると言われてましたから。それに、犯人の目的は柏木さんだけで、他の人たちを拉致する気はないだろうと、みんな心の中では思っていたのです。

でも……」

「でも？」

「でも、紅さんは前のほうの席に座っていらして、どうやら犯人の顔を見てしまったらしいんです。それで人質にするとされてしまいました。そしたら主人が」

ここで静子は話すことをやめてしまった。江崎は静かに先を促した。静子は俯いたままで先を続けた。

「ご主人がどうされたんですか」

「主人が……紅さんのかわりに人質になると言って」

正志ががばっと頭を下げた。

「すみませんでした！」

その大きな声に、その場の全員がびっくりした。正志は言った。

「警察から伺いました。うちの娘を助けようとして、辻さんは人質になったなんて、何とお詫びしたらいいか」

「静子さんにご主人には本当に申し訳ないわ」

和江も静子に詫びると、静子は視線をそらした。

「いいえ、結局主人は紅さんを助けられなかったんですから、別にお詫びしていただかなくてもいいんです」

江崎は静子の様子が引かかった。ぎこちない動作や視線をそらす仕草に、何かやましいことでもあるような、隠しごとを抱えているような印象を感じる。おそらくつらいから拉致時のことを思い出したくないというような、単純なことではない。これは江崎の直感だった。冷静に考えると、人質にされそうになった娘を助けようと申し出た正義感の老人に、何の下心があるかということになるが、江崎は自分の直感を重視していた。依頼人すべてが真実を話すとは限らない。しかしそれは交渉時にこちらの不利に働く。依頼人とコンサルタントとの足並みがずれるからだ。

正志がテーブルの上に置かれている江崎の名刺を見つめ続けていたが、顔を上げた。思いつめたような目で江崎を見る。

「江崎さん、引き受けてくれますよね」

それからすぐに頭を下げ、必死な声で続ける。

「わたしは紅のことを考えるとたまらんです。娘と二度と会えなかったらと思うと、いろいろ後悔の気持ちがよぎって、昨夜もよく眠れませんでした。何とか娘をとり返してやってください」

「あんだ」

和江がそっと声をかけると、正志は横を向いて言った。

「なあ和江、静子さん、この人をお願いしよう。やっぱり協力してくれる人は必要だ。警察だってマスコミだってどこまで信用できるかわからないって話だろう。俺たちだけで何ができるんだ。あんなプリントもらっただけじゃ、素人には荷が重すぎる。江崎さんなら信用できそうじゃないか。俺は紅と辻さんをとり返さないことには、一晩だってぐっすり眠れない」

静子もうなずいたが、和江は無言だった。

江崎は言った。

「もとよりお引き受けするつもりでしたよ」

それは本心からだった。江崎は依頼されて、断ったことはない。

「ありがとうございます」

正志と静子が礼を述べたところで、和江がかたい声で口を挟んだ。

「ちょっと待って」

三人は和江を見た。和江は腕組みをし、深いため息をついた。

「あたしもお願いしたいわよ。だけどね、あたしの希望どおりに引き受けられるかどうかを初め

に訊いときたいの」

「希望？」

和江は大きく息を吸いこんだ。

「あたしの希望はね、身代金を払わずに、紅をとり返せないかっていうことよ」

「身代金を払わずに……なるほどね」

江崎は不謹慎だと思いつつも、笑い出しそうになった。さすがいきなり自分をぼったくり扱いしただけのことはある。しかし和江は真剣な顔で両手の拳を握りしめて、テーブルの上に置いた。

「この際だからはっきり言うわ。うちは家計が苦しいの。この人はタクシーの運転手、あたしはスーパーの惣菜売り場でパートをしていて、一ヶ月の収入は二人合わせても二十五万ちょっとよ。貯蓄は五十万円しかない。これはもしものときの備えにと、紅が独立してからこつこつ貯めたお金だけど、紅のためならもちろん全額はたくつもり。だけどそれ以上はどうしたって出せないの。アパート暮らしで、処分できる財産もない。身代金が五十万円以上かかるなら、借金するしかないけど、貸してくれるところがあるかどうか。もし借りられたとしても、あんなテレビで言っているような、何千万だの何億だのなんていうお金じゃ、紅が帰ってきたとき、親子三人で首吊りするしかないわ。だから身代金を払わずに紅をとり返したいの。あなたにそれができる？ できないなら、依頼はしない。依頼したって無駄だから」

江崎はあっさりと言った。

「方法はありますよ」

三人は身を乗り出した。和江が言った。

「どんな方法なの？」

「武力救出です」

「武力救出？」

「そうです。人質の居場所を突き止めて、警察に救出に行ってもらうのです。家族は犯人からの電話を引き延ばしたり、場所を特定できるような情報を引き出したりして、警察に協力する必要があります」

「それは警察で説明されたやり方じゃないの。いくら警察に協力したって、あの刑事が親身にやってくれるとは思えないけどね」

和江は不服そうに言った。

「いや、おそらくある程度は親身にやってくれますよ。初めに言ったとおりに、検挙率を上げられますから。問題はこちらがいくらがんばっても、犯人が尻尾を出さなければ、居場所を突き止めるのは難しいこと、さらに武力救出のときには人質も危険にさらされるということです」

「危険？」

「そうです。武力救出に気づいた犯人が立てこもりを決めれば、人質は必ず盾にされるし、銃撃戦が始まれば、流れ弾に当たることもあります。武力救出が安全に成功するのは、犯人が包囲されていることに気づかなかったときだけです。ですから残念ながら、成功率は高いとは言えません」

江崎は家族に選択を求めるとき、できる限り率直にリスクを提示するように心がけている。でないと、現実にはリスクが起きたとき、家族がパニックを起こし、迷走するからだ。

三人は無言だった。やがて正志が尋ねた。

「他に方法はないんですか」

「ないと思います。そしてもし武力救出を選ぶなら、わたしを雇うより警察と連携していったほうがいいでしょう。わたしは機動隊を抱えているわけではないし、警察は誘拐コンサルタントを煙たく思っていますからね。もちろんその場合、今日のご相談料金はいただきませんので、ご安心を……」

そこまで言いかけたとき、江崎の頭にひらめくものがあった。

「ちょっと整理させてください。柏木氏は誘拐保険に入っている。もう一人女性の人質がいましたね。あの方について、ご存知のことはありますか」

和江が怪訝そうに答えた。

「大塚杏子さんね。ご主人が離婚弁護士を連れて説明会に来たわよ。終わるが早いのか帰っちゃって。不倫した奥さんより仕事のほうが大事なんじゃないの」

「やはり不倫なんですか」

「不倫に決まってるでしょ。夫以外の男と温泉に行こうとしていたんだから。じゃなきゃ何で妻の一大事に離婚弁護士を雇うのよ」

「なるほどね」

江崎は少しの間考えた。唇の端に笑みが浮かんでくる。やがて口を開いた。

「越川さんと辻さんが身代金を支払わなくても、人質をとり返せるかもしれませんよ」

江崎はほくそ笑んだ。あこぎな商売をしているA F保険に、紅と辻の身代金を出させてやるのも悪くないだろう。

和江が目を輝かせた。

「そんなことできるの？」

「まだわかりませんがね。試してみる価値はあると思いますよ。武力救出は最終手段でいいでしょう」

「じゃあ、あなたに頼むわ。コンサルタント料はいくら？」

国際相場は必要経費別で一日二千ドルである。一ドル七十円としても、日当十四万円ということだ。この高額なコンサルタント料金を支払っても、人質の命と身代金の減額が引き換えであれば、依頼人はたいてい納得する。しかしこの家族から相場の料金はとれない。金がないのは越川夫妻だけでなく、辻も同様だろう。高速バスで旅行に出かける老夫婦なら、年金と貯金で細々と生活しているはずだ。それに江崎は常々コンサルタント料を一律同額で請求する必要はないと考えている。

「人質一人につき税込み三十万円。十五万円を前金でいただきます。期間は本日より三ヶ月間。必要経費は別で、契約終了後残金十五万円と一緒に請求します」

和江は鼻息を荒くした。

「ずいぶん高いわね！ ただ相談に乗るだけで、何かくれるわけでもないのに！」

「国際相場を円換算すると、こんなものです」

「外国はどうでもいいのよ、ここは日本なんだから。少しくらいまけなさいよ。二人いっぺんに頼むんだから、ちょっとはまけられるでしょ」

江崎は苦笑した。

「わかりましたよ。では一人二万円引いて、二十八万円はどうですか」

「二十八万でも高いわよ」

「これでぎりぎりです。これ以上まけろと言われたら、事務所の家賃が出ません。わたしは下りますよ」

和江は舌打ちした。

「まあいいわ。二十八万円で紅をとり返せるならね。絶対大丈夫なんでしょうね？」

「いいですか、人質救出に保証はありません。絶対確実な誘拐交渉なんてないんです。全力は尽くしますがね。そこはわかっていただきたい」

「わかってるわよ」

和江は不満そうにしながらも、その声からは緊張感が抜けていた。自分を雇ったことで、少し安心したのだろう。和江の性格なら、三ヶ月たっても紅をとり戻せなかった場合、相当ごねるだろうという程度の予想はつく。自分にとってはうま味のある事件ではないのだから、何も引き受ける必要もない。それでも被害者家族の依頼を受ければ、断ることなどできない性分なのだから仕方ない。

「それじゃ契約書を用意します。その前に」

三人の顔を順に見た。

「二つだけお願いがあります。一つは交渉内容を外部にもらさないこと。もう一つはチーム内の秘密はなしということです。この二つは絶対に守っていただきます。交渉に支障をきたしますからね」

「大丈夫、あたしは口がかたいんだから」

「うちには隠すほどの秘密ありませんやね」

和江と正志はすぐに請合ったが、静子は軽くうなずき、空のコーヒークップを集め始めた。江崎が「そんなことはしていただかなくても結構ですよ」と言うと、静子は「いえ、大したことじゃありませんから」と言って、布巾でテーブルを拭き始めた。

江崎は大切なことを思い出し、急いでつけ加えた。

「柏木さんに身代金の支払いを頼むとき、皆さんにも同席してもらいますが、話がすむまで決して口を挟まないでください。いいですね？」

紅は、ゲリラに、杏子に、聡史に、腹を立てる～十一月十八日（火）午後六時

「ねえ、あたし臭くないよね？」

紅は恥ずかしさをこらえて杏子に尋ねた。ベッドの上で足を伸ばし、雑誌に目を落としていた杏子は、顔を上げて頭を振る。

「べつに臭わないわよ」

「全身がかゆい気がする。特に髪がべたっとして気持ち悪いの。いちおう拭いているんだけど」

「紅ちゃんのお風呂、何とかしないといけないわね」

杏子が雑誌を閉じた。

「ああ、いらいらする。あたしがお風呂に入ったのっていつ？ もう四日も前じゃない」

紅は愚痴をこぼさずにはいられなかった。

六時になった。二人いる見張りのうち、オレンジマスクのほうがビニール袋を提げて近づいてきて、夕食の弁当を差し入れた。杏子は立ち上がって、袋を受けとりに行く。

紅は言った。

「お弁当よりお風呂がほしい」

杏子は苦笑して、ビニール袋の中から唐揚げ弁当二つとペットボトルの緑茶二本、ピーチゼリー二つを取り出した。それからまたメモが出てくる――『ゼリーは差し入れです。内緒で食べてください』。

紅は言った。

「またメモ。秘密の差し入れ」

「いったい誰なの？」

紅と杏子は顔を見合わせたあと、オレンジマスクとネイビーマスクの見張りを見ながら、ぼそぼそと話し始めた。

「二人のうちのどちらか？ それとも両方？」

「食事を用意する係の人かもしれないわね。直接喋れないけど、励ましたくて」

「本当にそんな人がいるのかな。目的がわからないと、差し入れをもらっても、素直に食べる気になれない」

「そうね」

二人は床に座って弁当の蓋を開け、ささやかな夕食を食べ始めた。杏子が割り箸で白飯をつついて呟いた。

「晴信さんと辻さんに会えないかしら」

紅はあきれて杏子の顔を見た。まだ柏木に未練があるのだろうか。夫を裏切る形で誘拐されたというのに、まだ柏木に会いたいと言うのか。紅は意地悪く言った。

「杏子さん、顔がむくんでる」

「嘘！」

杏子は叫んで、弁当を脇に置くと、ベッドサイドテーブルに手を伸ばして、手鏡をつかんだ。覗きこみながら、指先で頬やまぶたを叩いてぼやく。

「やだ、ほんと。まぶたもはれぼったいわ。お風呂は明日にならないと入れないし、何とかしないと……」

紅はますますあきれて言った。

「もういいじゃない。ここにいる男なんてゲリラだけなんだから、きれいにしたってしょうがないよ」

「何言ってるの。わたしはいつでも女よ。むくんだ顔を見たら、気持ちが沈むわ。紅ちゃんも見てみなさいよ、自分の顔」

杏子は紅にさっと手鏡を差し出した。髪はべったりして、頬には吹き出物が三つもできている。十歳は齢をとったような顔だ。杏子のむくみを指摘したのはやぶへびだったかもしれない。

「やばいけど、どうでもいい」

紅は投げやりに言った。もう美容に気を使う余裕はない。いつ助かるかわからないと思ったら、はげたネイルアートの爪を見ても何とも思わなくなっていた。しかし杏子は諦めていないようだった。

「それじゃとっても恐ろしいことを言うわ。紅ちゃん、太ったんじゃない？」

紅は少しどきりとして、腹の肉をつまんだ。三センチ、いや四センチ以上ありそうだ。

「……うん、たしかに太った気がする」

杏子が再び弁当を膝に置き、目を落として言った。

「考えてみたら、ここの生活って食べたら寝るだけのブロイラーライフじゃない。助け出されたとき、困るわよね」

「困るって？」

「記者会見があるでしょ」

紅はびっくりして、一瞬言葉が出てこなかった。

「……記者会見？」

「そうよ。記者会見でわたしたちの顔は全国放送されるのよ。ちょっと想像してみて。肌荒れとぼさぼさの髪、さらに太ってウエストのくびれはないのよ。ホラーより怖いわ」

紅は杏子を凝視した。この状況で記者会見のことを考えているということは、杏子は絶対に助かると信じているのだ。不倫旅行で拉致されたのに、夫が助けてくれないかもしれないとは思わないのか。よほど自分に自信があるのか、馬鹿と紙一重なほど楽観的なのか。どちらなのかわからないが、たくましい根性の持ち主であることだけは確かだ。

杏子は「夜はやめておくわ」と言って、ピーチゼリーに手をつけなかった。紅は食べたが、ゼリーは生ぬるく、いくら差し入れするにしたって、もう少しましなものを選べなかったのかと思った。

弁当を食べ終わると、二人はビニール袋にゴミを入れ、差し入れ口に戻した。今度はネイビーマスクの男がとりに来る。

杏子は言った。

「見張りのお兄さん」

ネイビーマスクはビニール袋を手にとりながら、びくついて言った。

「何だ？」

「買ってほしいものがあるの。頼めるかしら」

「言ってみろ」

「じゃあね、SKⅡのフェイスマスク」

紅と見張りが同時に驚いた声をあげる。

「SKⅡ！ 何で？」

「SKのフェイスマスク？ 新しいゲリラ組織の覆面か？」

杏子は首を振った。

「化粧品よ。即効性があるから、解放が決まったら集中美容する。あとは脚用のマッサージオイルね。癒し効果が高いから、アロマオイル入りがいいわ。お兄さん、こっちに来てくれない？

商品名を言うから、メモしてほしいの」

しかしネイビーマスクはビニール袋を提げて、テーブルのほうに戻ってしまった。

「ちょっと待ってよ」

「買い物は現金のみ。クレジットカードは使えない。その高い化粧品の代金を払えるのか」

「そんなに手持ちはないわ。でも身代金に上乗せして請求できない？」

図太さもここまでくれば天晴れである。しかしネイビーマスクは頭を振った。

「それはできない」

「でもどうしても必要なものなのよ。ねえ、こっちに来て。詳しく話すから」

「行けない」

「どうして」

「人質との必要以外の会話は禁止されているから」

紅と杏子は驚いた――だから今まで金網に近づいてこなかったのか。

杏子は尋ねた。

「どうして話しちゃだめなの？」

「話しかけるな。金がないなら、SKもだめ」

ネイビーマスクは椅子に座り、オレンジマスクと一緒にテレビを見始めてしまった。

紅と杏子は顔を見合わせる。

「どういうこと？」

「さあ」

杏子は気を取り直すように言った。

「とにかくマッサージオイルを買うお金くらいならあるから、それは注文したいわ。紅ちゃん、爪ヤスリ、持ってる？」

「それはいつも持ち歩いてるけど」

「よかった。じゃあネイルケアもできるわね」

紅は冷たい目で杏子を見て言った。

「あたしはセルフエステやネイルケアより、歯磨きとお風呂がいい」

「お風呂はきっと何とかなるわよ。ずっと入れないってことはないわ。でも昼間暇でしょ。セルフエステ、きっと楽しいわよ。ネイルエナメルも買って、ネイルアートするのもいいし」

紅ははりきる杏子にうんざりして、ベッドに寝転んだ。

「言いたいことはわかるけど、あたしは杏子さんとは違う。だって監禁されているんだよ。この状況をどうやって前向きにとらえろって言うの。現実をちゃんと見てよ。セルフエステだのネイルアートだのって言われても、そんな元気ない。きれいにしたってこの檻から一歩も出られないんじゃ意味がない。何もしなければ、解放まで待てると思うけど」

杏子は紅を心配そうに見た。

「ねえ紅ちゃん、やることは少しでも多いほうがいいと思うの。気晴らしになりそうなことなら、無理にでもやったほうがいいわ。監禁生活で何もしないでいたら、いずれパニックになる。何ももしなかったら、きっと解放まで待てないわ」

「あたしは平気。パニックになんかならない」

紅は金網をがたがたとゆすり、見張りの男たちに向かって叫んだ。

「ねえ、トイレに行きたいの！　ここから出して！」

オレンジマスクがゆっくりと立ち上がって、金網の前にやってきた。それから無言で金網のドアを開ける。紅は手を頭のうしろで組み、飛び出すように外に出た。紅をいらだたせるのはゲリラによる拉致だけではない。旅行当日聡史にキャンセルされたことも、杏子のような女と同じ部屋で何日も一緒に過ごさなければならないことも、自分だけ風呂に入れられないことも、何もかもが腹立たしい。人生は不公平だ。世界は自分にだけ意地悪だと思うと、泣きたい気持ちになってくる。

家族チーム結成～十一月十九日（水）午後二時

江崎がコーヒーを載せたトレイを手に応接室に行くと、人がひしめきあっていた。芋洗い状態とはよく言ったものだが、こんなに大人数で行なうミーティングは想定していなかったのだから、仕方ない。二本の折りたたみテーブルを突き合せて並べ、七人用のスペースは確保したが、椅子は四脚しかなく、残りの三脚は丸椅子を用意した。しかし一脚は脚がぐらついている。

集まったメンバーはまず越川夫妻と辻静子。こちらはやや晴れやかな顔で椅子に並んで座っている。三人はすっかりうちとけたらしく、このオフィスまでの電車の乗り継ぎについて、地下鉄がいいJRがいいと、真剣に語り合っている。

三人の向かいには柏木美登里とAF保険の青山が不満と不安を隠しもせず、むっつりとして座っていた。ぐらつく丸椅子に座っている青山が江崎に声をかけた。

「この椅子、壊れているようなんですが」

「すみませんね。転げ落ちるようなことはないと思いますんで」

青山は無言で鋭い視線を投げつけた。江崎はトレイをテーブルに置き、コーヒーを配ると、客たちがよく見えるよう向かい合わせのテーブルの間に腰を下ろす。

ベージュのサテンスーツに身を包んだ美登里が、カルティエの腕時計を見た。

「そろそろ二時よ。始めてくださらない？」

江崎は言った。

「大塚さんがまだですのよ」

「あの方はこの間もぎりぎりでしたのよ」

「ぎりぎりまで待ちましょう。なあに、ちょっと待たされただけで、損することでもありますか」

美登里は江崎を睨みつけた。

一時五十九分になり、オフィスに最後の一人が到着する。その男の様子は尋常ではなかった。髪は汗で額に張りつき、ネクタイは曲がっている。男は迎えに出た江崎を押しつけるようにして、応接室に入ってくると、突然怒鳴り出した。

「いいかげんにしてくれ！」

一同はその声に打たれたように沈黙して男を見つめ、男は続けた。

「わたしは結婚式の誓いの言葉を、あの瞬間胸に刻んだつもりだった！ どんなときでも妻を大切にすると決めて、実際に大切にしてきた！ わたしは浮気なんて一度もしたことがない！

ちょっとでも妻以外の女に目を向けただけで自分を責めたほどだ！ 完璧な妻がいるのに、自分は夫として失格だ、落第だ、妻を幸せにするのが夫の務めじゃないかって！ それなのに妻の浮気だ？ しかも完璧なはずだったわたしの妻が、柏木晴信と浮気して一緒に誘拐されたって？

何が学生時代のお友だちとの同窓会だ！ もうあんな女のことなんて一切関係ない！ こういう場所に、二度と、金輪際、絶対に、決して、わたしを呼び出さないでくれ！」

男は丸椅子を蹴飛ばした。

「わたしは今、外回りの途中なんだ！」

それからくるりと振り返ると、ドアを乱暴に開けて、ダダダッと走り去った。

男がドアを閉めていかなかったので、江崎がドアを閉めに行き、戻ってきた。それから尋ねた。

「念のため確認しますが、あの方が大塚杏子さんのご主人で間違いないですか」

全員がうなずいた。美登里が言った。

「待つて損すること、あったじゃないの」

江崎は美登里を無視して、丸椅子に腰を下ろす。椅子がぐらついた。壊れた椅子にすりかえられている。青山を見ると、涼しい顔でコーヒーを飲んでいた。江崎は思った――この程度のしたたかさがあるなら、期待を裏切られることはないだろう。

青山が顔を上げて、江崎を見た。

「それではお話を伺いましょうか。重大な情報って何ですか」

昨日江崎はA F 保険に電話をかけ、柏木氏について重大な情報があるからと言って、青山にとりついでもらい、電話では話せないの、明日柏木夫人とオフィスに来てほしいと約束をとりつけたのだ。江崎は言った。

「ここにいる全員でチームを組んで、人質救出に取り組んでいきたい」

青山はすっと立ち上がった。

「柏木さん、帰りましょう」

「来て大損したわね」

二人が立ち上がったところで、江崎が言った。

「まだ話は始まっていませんよ」

青山は江崎を見下ろした。

「終わるまで聞くまでもありませんから。合同チームで交渉なんて馬鹿げている。帰らせてもらいます」

「参加するかどうかは、聞いてから判断しても遅くないでしょう。特にそちらの柏木夫人は有名人の奥さまですし、いろいろなご事情があるのではないですか。情報収集はなされたほうがよろしいかと思いますが」

美登里は興味を引かれたように足を止めた。青山と視線を交わしてから言う。

「いいわ。聞きましょう」

二人は再び腰を下ろした。ここからはコンサルタント同士の一騎打ちだ。江崎は青山に向かって愛想よく言った。

「青山さんは犯人グループの目的は何だと思われますか」

「わたしのほうから申し上げることはできません。警察の公式発表はまだですから」

「情報収集が得意なA F 保険さんなら、警察の公式発表なんて待つ必要はないでしょう。それに誘拐当日の夕方に犯人からの声明文が入りましたね。ここに全文を書きとってあるので、読み上げます。『我々は自称誘拐評論家柏木晴信、大塚杏子、辻明、越川紅以上四名に、社会改革のための協力を要請した。四名は、日本政府の不当な政治から、日本国民を救い、命と自由、秩序と

道徳を回復させるために、尽力することを表明した。〈命と自由を守るネットワーク〉』」

「それが何か？　これが犯人グループからの声明文かどうかはわからないでしょう。模倣犯からかもしれない」

「模倣犯の可能性は低いと思いますよ。まず時間です。マスコミの第一報直後に、この声明文が入っている。時間的に真犯人以外がこの声明文を用意するのは不可能です。さらにこの声明文は人質の名前を明示しています。しかし最初のマスコミ発表では、人質の名前はなかった。これはいわゆる『犯人だけが知りえた事実』でしょう」

「いいでしょう。仮にこれが真犯人からの声明文だったとします。それでどうだと言うんですか。犯人の目的については『日本政府の不当な政治から、日本国民を救い、命と自由、秩序と道徳を回復させるため』ではないですか」

「たしかに目的については、おっしゃったような言及がありました。これはNLFが声明文としていつも発表する定型文ですから、儀礼的なものと見ても差し支えないでしょう。しかし今回の誘拐事件には、他の事件にはない際立った特徴があると思います。誘拐評論家の柏木晴信氏の車が襲われたのが、事件の発端でしょう。その後のバスジャックは、犯人が移動手段としてたまたま通りかかったバスを乗ったものと思うんですが」

「それはすべて江崎さんの推測でしょう。ニュース番組の見すぎじゃないですか。我々は発言するだけで終わりのコメンテーターじゃないんですよ。人質を救出しなければならないのだから、責任ある言動をとっていただきたいものですね」

青山は江崎が無責任であるというイメージを家族たちに植えつけようとした。ここで感情的に言い返しては、青山の思う壺だ。江崎は冷静に言った。

「声明文に犯人は『自称誘拐評論家』と書いています。この『自称』という言葉は、柏木氏を揶揄するものと見ていいのではありませんか」

「そうとは限らないでしょう。NLFは自分たちの誘拐を誘拐と認めず、社会改革のための協力行為としています。彼らの認識では、日本にゲリラによる誘拐犯罪は存在していないのですから、当然誘拐評論家も存在せず、『自称』という言葉をつけたのですよ。江崎さんのおっしゃることはすべて個人的な推測にすぎません」

青山は勝ち誇ったような微笑を浮かべて、主張を終えた。江崎は内心嗤った。とっさにこのくらいの反論ができるなら上等だ。ここからが交渉の本番なのだ。あまり能力のないコンサルタントでは、ここからの意思の疎通に問題が生じる。江崎は感心したように大げさに言った。

「さすがはAF保険のコンサルタントさんだ。御社については、いろいろとお噂を聞いてますよ」

青山は眉をひそめたが、江崎は続けた。

「ところでさっきの大塚さん、ものすごい剣幕でしたね」

青山は黙りこんだ。このネタを使われることくらい織りこみ済みだっただろうから、切り出すタイミングが大切だ。

「これもまた推測かもしれませんが、柏木夫人はマスコミなどの風評がいちばん気になるところではないですか」

美登里がいらいらと言った。

「あなた、さっきから何を言いたいのか？ マスコミの目的なの、大塚さんの様子なの、わたしにはそれが合同チームとどう関係するのかさっぱりわからないわ」

江崎は肩をすくめた。

「いいでしょう。もう少し率直にお話します。大塚氏の先ほどの話から、晴信氏と大塚杏子さんが不倫関係にあったのはまず間違いないと思います。これは、仮にN L Fの目的を晴信氏の名誉失墜とした場合、格好のスキャンダルネタとなります。クリーンなイメージで売ってきた晴信氏への同情票は減少するでしょうね。N L Fもそれはわかっているはずなのに、最初の声明文で発表しなかった。N L Fは今後の交渉で、二人の不倫関係を恐喝のカードに使うつもりだと、わたしは考えています。身代金を値切ろうとすれば、N L Fはこのカードを切って脅してくるでしょうから、公になる可能性が高いでしょう」

「N L Fには不倫の証拠がないわ。わたしが言いがかりだと突っぱねればすむことよ」

「証拠ですか。あるかもしれませんよ。彼らは誘拐前にターゲットの私生活を徹底的に調べ上げます。行きつけの店やメインバンクの担当営業者の名前まで知っているはずですから、不倫相手との密会の写真くらい抑えてある可能性は高いと、わたしは見ています」

「わかったわよ。それで？」

「まだあります。さらに晴信氏は誘拐保険に入っていた。晴信氏がこのことをゲリラにばらすようなことは絶対にないと思いますが、ここにいる越川さんと辻さんは誘拐保険のことをすでにご存知です」

越川夫妻と辻は大きくうなずいた。

「そこでわたしは柏木さんにお伺いしたい。今後も柏木さんは、A F 保険さんと交渉されるつもりなのでしょう。ご主人が帰ってこなくてもいいのですか」

江崎はわざとここでA F 保険という会社名をつけ、柏木解放の不安をほのめかした。先ほどのやりとりでわかったとおり、青山は馬鹿ではない。この言葉が美登里への問いではなく、青山に向けての問いだということに気づいたはずだ。自分はA F 保険のやり口を知っている、クライアントの美登里にばらされなくなかったら協力しろという意図だと察すれば、態度を変えざるを得ない。

美登里は腕組みをして言った。

「つまりこういうことね。主人の不倫関係や誘拐保険のことがマスコミに知れたら、世論の後押しがなくなる。それはゲリラに有利に働き、主人をとり返しにくくなる。また、ここにいる人たちは主人の秘密を知っている。だからわたしに協力しろと」

江崎は無言で微笑だけを返した。ここで迂闊に認めて、あとから恐喝で訴えられても困る。

美登里は動じることなく微笑んだ。

「ごめんなさいね、江崎さん。わたしは脅迫されるのって好きじゃないし、夫の愛人や見ず知らずの他人を助けるほど思いやりにあふれてもいないの。そういうことならご自由にどうぞ。秘密でも何でもばらしてちょうだい。わたしはかまわないわ」

「待ってください、柏木さん」

青山があわてて割って入った。江崎は先ほどの話がきちんと伝わったことを確信し、説得は青

山に任せることにした。

美登里が青山を睨んだ。

「何よ？」

「それではご主人さまをとり返しにくくなります。スキャンダルは交渉を困難にしますから」

「べつにかまわないと言っているでしょう。不倫のことはN L Fの脅迫ネタにも使われるんだから、どちらにしてもばれるのよ。もういいじゃない」

「しかし、誘拐保険のことがありますから。保険のことがN L Fに知られては困るのです。保険会社が身代金を払うのだとわかれば、N L Fはどんどん身代金をつり上げます。補償額内ではおさまらなくなる可能性が出てきますよ。柏木さんもお自分の財産に手をつけたくはないでしょう」

「それは困るわ」

財産に手をつけると聞いて、美登里は顔色を変えた。

江崎がすかさず口を挟む。

「ですから、越川さんと辻さんを盾にしませんかと提案したいのです」

全員が江崎を見た。

「今、マスコミは晴信氏に同情的です。しかし今後、二つのスキャンダルが発覚すれば、風当たりが強くなるのは間違いありません。それこそ掌を返したように冷たくなるでしょう。失礼ですが、晴信氏の今までの発言は信用されなくなるでしょうし、その上で罪のない人たちが巻き添えになっていると責められるでしょう。そこで、柏木さんが他の三人をとり返すためにも尽力してはいかがですと申し上げたいのです」

美登里はまだ納得できないという様子で、口を閉ざしている。

江崎は続けた。

「わたしの提案はこうです。N L Fの目的は晴信氏であり、他の三人は巻き添えです。それなのにもし晴信氏だけが解放され、不倫と誘拐保険というスキャンダルが発覚したら、晴信氏は解放後、マスコミでの生命線を断たれますよ。それを防ぐために、N L Fに四人同時解放を条件に交渉していただきたいのです」

「四人同時解放？」

青山が大声を上げ、美登里は気色ばんだ。

「主人の身代金一人分で四人解放しろと交渉するということ？ 馬鹿馬鹿しい。N L Fが承知するわけないでしょう」

「しますよ。一人分にしては高すぎる金額で取引成立するよう、もっていけばいいのです。もちろん実際に負担していただくのはA F保険さんであって、柏木さんの財布がいたむことはありませんが、世間の人はこう思うでしょうね。『誘拐に巻きこまれた気の毒な人々を、自分の私財を投げ打ってまで救った柏木晴信氏の妻』。不倫している夫にそこまでする妻はいないでしょうから、これで不倫疑惑は帳消しじゃないですか。さらに解放後の晴信氏は英雄になれ、さらなるマスコミでの活躍が期待できますよ。お互いW I N - W I Nの関係でいきませんか」

「そううまくいくかしら」

美登里はまだ不服そうだった。江崎は青山に目をやった。

「今後のことを考えると、ＡＦ保険さんにとっても、そう損するものでもないと思います。柏木さんもＡＦ保険さんも、これを投資だと考えてもらえませんか」

美登里は憎々しげに江崎を睨んだ。

「たかり屋のくせに、正当化がお上手ね。一つだけ聞いておきたいわ。大塚さんのあれも芝居だったってわけ？」

「いいえ、あれは偶然です。運命の女神はこちらに微笑んでくれているようだと思いますがね」

「何が運命の女神よ。あなたなんかに味方する女神なら、死んでしまえばいいんだわ」

美登里は吐き捨てた。これだけ言いたいことを言うということは、了承したと見ていいだろう。しかし青山はため息をついて、頭を振った。

「少し時間をください」

「何を言ってるのよ。わたしだって夫とその愛人なんかを助けたくないわよ。でもこうなったら、仕方ないでしょ」

「そういう問題じゃないんです。わたしは雇われている身ですからね。決定権はない。上司と相談しないと回答できません」

「待ちましょう。電話が必要ならどうぞおかけください」

青山は席を立ち、オフィスの外へ出た。携帯電話で会社と話しているようだ。江崎はコーヒーのおかわりを家族たちに勧めた。越川夫妻と静子は、まるで憧れの芸能人でも見るような目つきで自分を見ていた。まだ人質をとり返したわけでもないのに気が早い。問題は柏木美登里だ。コーヒーポットを奪いとって、江崎の頭に注いでくるのではないかと思われるほど怒っている。江崎は美登里を警戒して、近づかないことにした。

しばらくして、青山が戻ってきた。

「条件次第で、了承するとの回答です」

「条件とは？」

「まず補償額は契約どおり二億円です。それ以上は一円たりとも出しません。オーバーした場合、そちらで負担していただきたい」

「二億円で四人。いいでしょう。やってみる価値はあると思いますね。それにしても柏木氏の補償金額が高額で助かりましたよ。一人でも二億までは出す用意があったのですから、結局ＡＦ保険さんにも損は出ないということになる。お互いによかったですね」

青山が憤怒の形相で江崎を睨んだ。それから怒りを抑えるようにして続ける。

「それと、マスコミの取材に応じるのは柏木さんだけに限定していただきたい。もし誰かがマスコミの取材に応じたことが発覚したら、その内容が何であれ、この話は白紙に戻します。友人などの仲介者による取材も、本人の責任と見なして、同様の措置をとります」

「わかりました」

江崎は快諾した。和江が不満そうな顔をしたが、江崎は片手を上げて制する。ＡＦ保険側としては、越川夫妻と静子の口封じとして、実際的な手を打っておく必要があると判断したのだろう。江崎はこの件に関しては、交渉戦略上こちらから切り出してもいいと思っていた。それぞれが

マスコミの取材に応じて、もしばらばらなことを言い出したら、N L Fはこちらが一枚岩ではないことを見抜き、そこを突いてくる。美登里だけをスポークスマンに立てて、チームの公式見解だけを喋らせるようにしたほうが、交渉には有利だ。

江崎は尋ねた。

「他には？」

「以上です」

「じゃあ合同救出チーム結成ですね」

江崎が笑顔でパンッと両手を合わせ、掌をこすり合わせる。

美登里が言った。

「この瞬間からチーム解散の日が待ち遠しいわ」

「あたしも同じ気持ち。初めてあんたと気が合いそうだと思えたわよ」

今まで喋るのを我慢していたらしい和江が、さっそく厭味を返した。正志は肘で和江の腕をつつき、静子は安堵したようににこにこ微笑んでいる。

江崎は言った。

「それでは契約書を交わしてから休憩を挟んで、今後の交渉チーム運営について話し合いたいでしょう」

家族チームは、役割分担と警察への背信を決める～十一月十九日（水）午後三時

江崎と青山は休憩時間を使い、家族たちからやや離れた部屋の隅に丸椅子二脚を移動させ、膝をつき合わせながら、互いが持っている情報をすり合せた。情報はほぼ同じで大した収穫はなかったが、一つだけ注目点が見つかった。犯人からの脅迫電話で、越川家には金を用意しろと言っていたのに、柏木家にはその言葉がなかったのだ。越川家が大金の用意をすることは難しいと判断して、あらかじめ指示したのか、柏木家が誘拐保険を使うと知っており、金の用意を指示しなかったのか。これだけでは判断できない。

江崎が言った。

「N L F は電話口で台本を読んでいるはずだから、意味のないことは言わないし、言い忘れない。最初から別々の台本を用意してあったんだ。なぜ越川家にはわざわざ金の用意を指示したのか」

青山は i P a d に指をすべらせる。それから言った。

「これまでの被害者家族のうち九三．五パーセントは、一回目の電話で金の用意を指示されていません。越川家への金の指示は特例ですね」

江崎は感心した。

「それが有名な A F 保険のデータバンクか。役に立つもんだな。今度ダウンロードさせてくれ」
「社外秘です」

青山は i P a d を覗かれまいとするように、手で覆った。

江崎は言った。

「わかった、わかった。とにかくそれはこちらに有利な情報だな。おそらく N L F は誘拐保険には感づいておらず、越川家からは大金をとれないと考えている。二億で四人、何とかかなりそうじゃないか」

「きっちり二億払わなくたっていいんですからね。一億九千万だろうと、一億五千万だろうと、安ければ安いほうがいいんですよ」

「わかってるよ。値引き交渉は真剣にやるから安心しろ」

青山は信用できないという目つきで江崎を見た。はめられたことを恨んでいるらしい。心の狭い男だ。和江と美登里は火花を散らしているし、正志は現実的な考え方が苦手のようにだし、静子は何か隠しごとを持っている。さらに青山が警戒心をむき出しにしているのは、このメンバーのチームワークはないに等しく、先行きは不安だ。一度懇親会を開いてみてもいいが、出席者は自分一人になるかもしれない。こんなときには陽気で大らかな南米のラテン系民族が恋しくなる。江崎はやる気を見せて、青山を安心させてやろうと思いついた。

「身代金の相場は、柏木氏クラスで八千万から一億だろう。それに……」

「ちょっと待ってください」

青山は i P a d に目を落としてから言った。

「年収と社会的地位からはじき出すと、柏木氏は当社の分類でAランクに入り、身代金の相場金額は九千八百万円です」

いかにも得意そうにミスを訂正しようとする青山の態度に、江崎は不快になった。

「相場金額は幅を持たせて見積もるもんだ。毎回九千八百万きっかりに取引成立になるわけじゃないからな。それに九千八百万なら、八千から一億の中に含まれているんだから、当たりでいいじゃないか」

「たしかに含まれていますが、九千八百万は四捨五入すると一億です。幅を持たせるといっても、下限が八千万は低く見積もりすぎです。下限はせめて九千万にすべきです」

「俺は腕がいいもんでね。いつもうんと低い金額で取引成立してしまうもんだから、下限を安く見積もってしまうんだよ」

青山はうすら笑いを浮かべた。

「ごまかさないでください。自分の非を認めたらどうですか」

「非だって？」

こっちが下手に出ていれば、つけ上がりやがって――江崎の語気が鋭くなった。

「俺に非はない」

「あるじゃないですか。たった今明らかに間違ったじゃないですか」

「間違っていない。そんなセリフは九千八百万ジャストで決着が着いたときに言え。身代金の支払いがそうそうコンピュータの試算どおりにいくか」

「さっきはデータをダウンロードさせろと言ったのに、今度は馬鹿にするんですか」

「ちょっとコンサルタントさんたち！ 何熱くなってんのよ！」

気がつくのと和江が真横に立ち、ずん胴の腰に手を当てていた。

「打ち合わせするんでしょ！ 早くこっちに来て！」

和江に言われて、江崎は我に返った。二人は丸椅子を持って、テーブルに戻る。依頼人たちはすでに腰を下ろし、準備を整えていた。

江崎は移動しながら、すばやく考えをめぐらせた。自分は、相手が被害者家族、犯人、警察、マスコミなら、どんな状況でも冷静に対応できるよう訓練を積んできた。FBIと南米でのキャリアは伊達ではないし、それについては絶対の自信を持っている。

しかし相手が同業者となると、話は別だ。コンサルタントの仕事は基本的に一匹狼で、FBIを辞めてからはチームを組んで仕事をしたことはない。そしてチームのボスは一人でいいのだ。つまりどちらか一人はサブに回ることになる。

青山は子供じみて負けず嫌いの未熟者だが、馬鹿ではないから、ボスは一人ということにも気づいたはずだ。ここは力関係を明確にしておかないと、自分がサブに回されてしまう。青山の下で働くなんてごめんだ。会社のデータバンクなしには何もできない若造にチームを任せて、人質をとり返せるわけがない。要はなめられたら負けということだ。江崎は急いで口を開いた。

「ではミーティングを始めます」

先を越された青山がくやしそうに唇を噛みしめている――勝った。

「まずはチームメンバーの役割分担を行ないます」

青山があきれたように口を挟む。

「待ってください、チームの役割分担？ 今後の大まかな計画を決めるのが先でしょう」
「計画？」

江崎は鼻で嗤った。

「そんなものを考えて何になるんだ？ 犯人の出方がほとんどわかっていないのに、家族側が一方的に計画を決めたって意味ないだろう」

「犯人側の出方がわからないのは、そちらに判断材料がないからです。犯人がN L Fだとわかった時点で、僕は過去のデータに基づき、ある程度まで犯人の出方をシミュレーションできます」

「誘拐事件にシミュレーションが何の役に立つ？ 『誘拐事件は暗闇を走るジェットコースター』というのが、この業界の常識じゃないか。こちらにできることは、犯人の出してきた手を見て、こちらの手を考えることしかない。シミュレーションで先入観を持てば、打つ手が狂う。シミュレーション外のフェイントをかけられたとき、家族は動揺する。事前のシミュレーションなんて、百害あって一利なしだ」

「それでは何の計画も立てないということですか。行き当たりばったりで人質を救出できているんですか。江崎さんのやり方は古典ですよ。人質の命をむやみに危険にさらすことになるだけだ」

「A F 保険のやり方のほうが危険だ。俺は二十年この仕事をしているが、計画どおりに交渉が進み、人質が帰ってきた事件なんて一度もない」

「そこまでよ」

美登里がきっぱりと割って入り、責めるようなため息をついた。

「サル山のボスザル争いにしか聞こえないわね。いいかげんにしないと、二人ともクビにするわよ」

見ると、依頼人たちは冷ややかな視線を自分たちに向けていた。静子と正志も不安げで、江崎はせっかく得た依頼人の信頼を失ってしまったことに気づいた。

和江が言った。

「休憩時間の話し合いで、段取りくらい決めておいてほしいわよ。喧嘩する暇があったら、そのくらいできるでしょうに。いい、あたしは役割分担だろうと計画だろうと、何を先に話し合ってもかまわない。ただ紅と恩人の辻さんを取り返してほしいの。それだけよ。だけど、これじゃ先行きが不安ね」

美登里が腕組みをした。

「身代金を払うのはA F 保険で、そのクライアントはわたしよ。よって、決定権はわたしにあります。今後はわたしの指示に従って、ミーティングを進めてちょうだい。まずはチームの役割分担、次に青山さんのシミュレーション計画も伺うわ。その計画に従うかどうかは、あとから決めます」

今のふるまいについて、被害者家族たちに対しては、完全に自分に非がある（ただし、青山に対してはまったくない）。人質は必ずとり返す。そのためには冷静になるべきだ。江崎の誘拐コンサルタント魂に火がついた。青山の挑発に乗って感情的になっては、とり返せる人質もとり返せなくなる。

青山はまだ顔を紅潮させている。江崎は「ちょっと失礼します」と言って、席を立ち、水を入れた二つのグラスを持って戻ってきた。冷静になるには体ごと冷やしてしまうのがいちばんだ。一つを青山の前に置き、一つを江崎が飲んでから、口を開く。

「申し訳ありませんでした。それではチームの役割分担について話します」

青山は水を飲まなかった。グラスを見ようとさえしなかった。

江崎は言った。

「交渉は長期化する場合があります。家族が誘拐されたといっても皆さんには生活がありますし、その際、一人だけに交渉の負担がかかってしまわないよう、チームの全員で仕事を分担する必要があります。学校の係決めだと思っていただければ、わかりやすいかと思います」

全員神妙な面持ちで耳を傾けている。この流れを青山に邪魔されずにつないでいきたいものだと思いながら、江崎は続けた。

「役割のうち、マスコミ係は柏木さんに決定しています。あとは犯人との交渉係、ミーティングの記録係、内部の緊急連絡係ですが」

江崎はこの係の数をチームの参加人数を考慮して調整した。あまり必要でなく頭数合わせのための係もあるのだが、学校の係と同じに、全員が参加し責任を担うという点が公平感のために重要なのだ。

和江が口を開いた。

「犯人との交渉係ってというのは何？」

「電話で犯人と直接話して、交渉する係です」

「ああ、あれね。テレビドラマで観たわ。小さな子供が誘拐されて、母親が泣きながら、『息子を返してください』とか言う、あれでしょう」

「……まあ、そうです」

「あれなら、あたしにもできるわよね。母親だもの」

いやな雲行きになってきた。江崎は急いで言う。

「母親かどうかというのはあまり関係ないんです。犯人に伝えることは全員で決めて、メモを用意しますから。ただ……」

江崎は言葉を濁した。言ったとおり、交渉係は用意されたメモのとおりには喋るだけなので、誰にでもできるように思われる。しかし重要なのは、犯人に怒鳴られたり脅されたりしても、メモどおりにできるかどうかなのである。和江の場合、怒鳴られたくらいで泣き出すことはなさそうだが、怒鳴り返したり、怒りに任せて電話を切ってしまう可能性が高い。これは弱気になるよりまずい。しかし江崎が適性について説明しようと口を開く前に、和江が立候補した。

「じゃあ、あたしが交渉係。犯人に言ってやりたいことが山ほどあるから」

江崎はあわてた。

「いや和江さん、アドリブは困るんですよ。チームで質問や回答を考えて、それを犯人に伝えてもらう役目なんですから」

「伝えるだけ？ 交渉係をやるのに、好きなこと喋れないの？ それじゃやる意味ないじゃない」

好き勝手に喋らないことにこそ意味があるのだと和江に理解させるには、一億年くらいかかる

だろう。江崎が眉間に皺を寄せて、次の言葉を探していると、美登里が口を挟んできた。

「わたしが交渉係も兼任するっていうのはどうかしら。わたしのほうが適任だと思うけど」

その喧嘩を売っているとしか思えない発言で、和江の顔色が変わった。

「柏木さんにだけはこの役遠慮してほしいわね。あなたはマスコミに出るんだからいいでしょう。目立つ役ばかり狙っていやらしいわ」

美登里は心底驚いたように目と口を丸く開け、左手で胸元を押さえた。

「わたしは目立とうなんて全然考えていなかったわ。そんな発想なかったもの。目立ちたいと願っている人は、そういう発想しかないのでしょうけど。ここではっきりさせておきますけど、A F 保険のクライアントはわたし、つまり身代金を払うのはわたしなのよ。犯人に好き勝手なことを喋られたら困ります。お金を出さないあなたも、コンサルタント同様わたしに従う義務があるんじゃないかしら」

「なら言わせてもらうけどね、うちの娘が誘拐されたのは誰のせいだと思ってるの。あんたの旦那のせいでしょう。あんたが身代金を支払うからって、あたしがあんたに従う義務はないわ。それどころか、慰謝料を請求したっていいくらいよ」

江崎がため息をついて言った。

「ここで一つルールを決めましょう。柏木さんは身代金支払いのこと、他の皆さんはご家族が晴信氏の誘拐に巻きこまれてしまったことを、今後一切持ち出さないでください。そこに水を向けると、ミーティングでは何一つ決まらず、もの別れに終わってしまいますよ。とにかく力を合わせて、ご家族をとり返すという方向でいきましょう」

江崎は一同を見渡した。和江と美登里は不満げに口をつぐんでいる。正志と静子は安堵した表情だ。この正志がもう少し細君をうまく操縦してくれると助かるのだが、期待はできないだろうか。

青山はようやくグラスの水を飲んだ。和江と美登里の対立を見て、自分たちの対立の愚かさを反省したのか、とにかく自分の差し出した水を飲んだのだ。誘拐コンサルタントはあらゆる道具を心理戦略に使う。水を飲んだのは単にのどが渴いただけということではなく、和解を示したと見ていいだろう。

青山がおもむろに口を開いた。

「わたしは正志さんを交渉係に推薦しますね」

全員が青山に注目する。

江崎は内心にやにやと笑った――お手並み拝見といこうじゃないか。江崎は尋ねた。

「理由は？」

「まず柏木さんは交渉の窓口に立たないほうがいいと思います。なぜならN L Fは――率直に申し上げますが――身代金の支払い能力があるのは柏木さんだけだと見ているだろうからです。よって、柏木さん以外の方が交渉係につくだけで、逃げ道を用意しておくことができます。つまり、何を要求されても『柏木さんに相談してみないとわからないので、即答はできない』と言えば、こちらの出方を考える時間を稼げます」

全員が口を出さずに青山の説明に耳を傾けている。青山は続けた。

「次にわたしが正志さんを薦めたのは、男性が交渉係についたほうがこちらの有利に展開しやすいからです。心理学的にですが、男性は理性的、女性は感情的な傾向が強いと考えられています。交渉相手が女性だと、犯人はあっという間に感情をあおる交渉に出てくる可能性が高くなります。具体的に言うと、早い段階から過激な脅迫に出やすいということです」

青山はここで iPad に指をすべらせる。

「その可能性は、男性交渉係より女性交渉係のほうが約一五パーセント高い。またその結果、女性の交渉係が心理的ストレスを受け、役目を下りる確率は三八、五パーセント、約四割にも上ります。そして交渉係が交代しなければならなくなった場合、その後の交渉はこちらの不利に働きます」

「どうして不利になる？」

江崎が質問すると、青山は挑戦的な目で江崎を見た。誘拐コンサルタントの資格テストを受けるつもりはないと言いたげだった。しかし青山は続けた。

「犯人側と家族側の交渉係間の信頼関係を初めから作り直さなければいけなくなるからです。また、犯人が新しい交渉係とは交渉しないと言い張れば、相手に新しい取引カードを渡すことになります。つまり、交渉係を代えることを犯人に了承してもらうために、こちらは何らかの要求をのまなければならなくなるということです。その他にも前の交渉係には言った言わないの水掛け論をふっかけられ、わざと心理的ストレスを与えられたケースも五件確認されています」

いちいちデータを持ち出さないと説明できないのが気に障るが、教科書どおりの完璧な説明に、和江と美登里も異論を唱える様子にはなかった。

しかしあわてたのは正志だった。

「ちょっと待ってください。わたしにそんな大役は無理ですよ。わたしは喋るのは苦手だし、家内のほうがしっかり者ですし……」

「先ほどお話したとおり、万全のサポートを行ないますよ」

江崎は正志の顔をまっすぐ見て言った。べつにこの男に意地悪をしたいわけではないが、娘をとり返したいならこの逃げ腰をどうにかしてもらいたい。江崎は言った。

「わたしも青山君のアドバイスに賛成です。簡単に言えば、か弱い女性が交渉のテーブルに着くよりは、男性のほうが対等に喧嘩しやすいということですよ」

このチームの女性たちがか弱いと言えるかどうかはわからないが、一般論としてはそうになっている。

「正志さんがこの役をやり遂げられることは保証します。我々がサポートしますからね。そしてつけ加えるなら、わたしは和江さんにミーティングの記録係、辻さんに緊急連絡係をお薦めしますね」

和江が言う。

「記録係って何するのよ」

「ミーティングや犯人との電話内容をノートに記録してもらいます。あとでメンバー内で記憶違いが起きないようにするためです」

和江はこの強引な性格から言って、今後もトラブルメーカーになるだろう。何の係にもつかせないほうが平和を保てるだろうが、それでは本人が納得せず、むくれるに決まっている。それな

ら外部とは接触しないチーム内の仕事をさせたほうがいい。それに記録係はクラスの書記同様、重要な役目なのである。

しかし和江は不満そうに言った。

「あたしはいやよ。文章を書くのなんて、やったことないもの。辻さん、やってよ」

コーヒーシュガーの入っていた袋を結んでいた静子が顔を上げ、すぐに申し訳なさそうに言う。

「すみません、老眼で書き物はちょっと……あのう、緊急連絡係ってというのは何を……」

「緊急時にチームのメンバーを召集する係です」

これが頭数合わせのための閑職である。ミーティングは毎晩定期的に行なわれるし、仮に緊急時の召集が発生したときでも、越川家と柏木家に電話をかけるだけである。高齢で消極的な性格の静子の場合、負担をかけすぎて心身ともに持ちこたえられなくなっては困るから、閑職につかせておいたほうがいい。

静子は結び目のついた袋をテーブルに置き、強い口調で言った。

「あたしはそれがいいです。連絡係を引き受けます。とにかく老眼ですから」

ふだんの優柔不断な態度からは想像できないほどすばやい決断だった。できるだけ楽で責任のない係につきたいという確固たる意志がありありと見える。

和江が不満そうに訊いた。

「本当にだめなの？ 少しはできるんじゃない？」

「老眼ですから、書き物なんかすると、頭痛がしてくるんですよ。老眼鏡をかけても、目の奥がすぐに痛くなって……すみませんねえ」

静子は申し訳なさそうに言い、かつまさに今、頭痛に苦しんでいるかのようにこめかみを押さえた。老眼を盾にされては、和江も静子に強く文句を言えないようだった。

和江が江崎に向き直って言う。

「とにかくあたしは文章を書くのは苦手なのよ。青山さん、やってよ。いつもカチャカチャやってるんだから」

江崎は言った。

「ご家族の方にも記録してもらったほうがいいですよ。我々も記録をとりますが、コンサルタントのものだけより、ご家族の記録もあったほうがいいんです。それにこれは交渉の証拠になりますから、ワープロよりも手書きのほうがいいんです」

「でもあたしは字が下手なのよ」

「読めればいいんです。毎回皆さんにノートの記録を読んでもらって、サインをもらってください。大丈夫、適材適所ですよ。和江さんならできると見こんでお願いしているんです。お手伝いしますから」

ごねても無駄だと理解したのか、おだてられて少しはやる気になったのか、和江は納得していない様子ながらも、口を閉ざした。

江崎はまともに入った。

「それでは交渉係は正志さん、記録係は和江さん、マスコミ担当は柏木さん、連絡係は静子さん

。以上、反対のある方は申し出てください」

静子以外の三人は反対だろうが、仕方ないと諦めたようだった。誰も異論を唱える者はなかった。

江崎はいちばん重要な係を決めることをあえて持ち出さなかった。それはリーダーだ。チームの意見がまとまらなかったとき、自分の責任で決断し、メンバーを率いていく統率力と人望を持つ者がこの中にいればよかったのだが、その任務を果たせる者は誰もいない。通常ならこのような合同チームはないので、立場上人質の配偶者か父親がこの役を担うことが多いが、今回はそれもできない。リーダー不在はチームにとって大きなマイナスになるだろうが、無理にリーダーを決めて――立候補者は和江か美登里になるだろう――チームを分裂させたり暴走させたりするよりはまだ。それでも矛盾を承知で、これだけは言っておかねばならない――江崎はやや重々しく言った。

「もう一つあらかじめ申し上げておきたいことがあります。人質救出の主役はあくまでも皆さん方で、コンサルタントではありません。決定を下し、行動するのは皆さんです。青山君とわたしは皆さんが決定しやすいようにアドバイスをするだけで、結果の責任はとれません。そこは十分ご理解いただきたい。もちろん我々のアドバイスに従うかどうか、皆さんの自由です」

家族たちは理由を尋ねなかった。もし問われれば、コンサルタントが前面に出て、その存在を犯人に知られた場合、犯人との交渉に悪い影響を及ぼすからだという回答を用意してある。しかし本音は、もしコンサルタントが決定を下し、人質が帰ってこないという最悪の結果になってしまったとき、訴訟を起こされるのを回避するためである。しかしこれは依頼人の利益にもなる。コンサルタントが結果の責任をとらずにすむなら、安全保証のついたアドバイス以外も提示できる。これでときには思いきった作戦もとれるようになるのだ。

青山も異論を唱えなかった。結果を保証しないというのは、A F 保険がとりわけ強調したいところだろう。

江崎は青山を見た。

「わたしのほうは一とまず終わりにします。次は青山君のシミュレーションと計画を聞かせてもらいましょう」

江崎はすでに気持ちを切り替えていた。いつまでも自分がわだかまりを抱えていては、帰ってくる人質も帰ってこなくなる。

青山も落ち着いており、すぐに説明を始めた。

「わたしはN L Fの過去のデータを分析、犯人の出方をシミュレーションしました。その結果、計画はいくつか考えられますが、本日は現時点で最も可能性が高いと思われるAタイプのみをご紹介します。あれもこれもとお話すると、皆さんの指針がぶれてしまいますので」

家族たちはうなずいた。うまい言い方だと江崎は思った。もしAタイプがはずれ、別のタイプを紹介するとき、あらかじめ計算していたものとしやすくなる。もしここで全タイプを紹介しておき、すべてははずれてしまったら、家族の動揺は大きくなるだろう。

青山は続けた。

「Aタイプは次第に脅迫の過激度を上げていくもので、N L Fの最もオーソドックスな脅迫パターンになります。具体的に言うと、現在沈黙が行なわれていますが、続いて暴力的な脅迫が来

ます。荒っぽい脅迫電話、人質の悲鳴や泣き声の入った録音データ、監禁中の人質の写真などを送りつけて、次第に家族側の危機感や不安感をあおっていきます。皆さんの緊張感が十分に高まったところで、人質の手紙か肉声で『もう耐えられない。一刻も早く助けてほしい』などの助けを求める人質からのメッセージが届けられます。このあたりでほとんどの家族はN L Fの言うなりになってしまうのです。ここで身代金を支払わなかった場合、次に一段と過激度の高い脅迫メッセージが送られてきます。破壊力は高くないが本物の爆弾などが確認されています。これが最終通告となり、『人質に爆弾を使われたくなければ、〇〇日までに金を払え』という期限付きのメッセージも同時に送られてきます。ここに至るまでにこちらが、どこまで交渉の主導権を握れるかが鍵です」

和江が言った。

「N L Fの手口がわかっていれば安心ね。あたしは脅しには屈しないわよ」

「その心構えが大切なのです。この家族は一筋縄ではいかないぞと相手に思わせることが、今後の皆さんの身の安全につながりますから、気をしっかり持って、N L Fと闘ってください」

シミュレーションを聞いて今後の見通しが立ち、家族たちは一様にほっとした表情になった。江崎は今まで、立てた計画が必ず現実化するとは限らないと考えて、初期の段階ではあえて計画を立てないというやり方でアドバイスしてきたが、青山を見て、計画というものの効用を認めざるを得なかった。拉致直後の不安な中、手ぶらで冒険の旅に出発するより、大まかであっても地図を持っていたほうが安心感を得られるというわけだ。もし計画が間違っていたとしたら、そのときは修正を施してやればいい。そのときこそ自分の出番だ。アドリブの強さには自信がある。人質救出までの間、利用できるものは何でも利用したほうがいいということだ。

美登里が尋ねた。

「それでわたしたちはN L F相手にどういう対応をすればいいの？」

青山は言った。

「過去のデータから見ても、N L Fの目的は身代金と世論の支持を得ることだと見ていいでしょう。よって彼らは無意味な殺人はしません。言い換えれば、身代金を得てマスコミへのアピールがすめば、四人は帰してもらえるということです。そのためには『絶対に身代金を支払わない』『N L Fの主張を否定する』という姿勢をとらないことをお勧めします。脅しには屈しないという心構えは大切なのですが、それを前面に出しすぎでは交渉の余地なしと見なされ、即最終通告になってしまいます。『身代金の金額を下げてくれるなら、なりゆきによっては、マスコミに出てN L Fの主張を伝えます』という手をとるのも一つのやり方です。こちららも積極的に取引カードを作るのです」

青山は確認をとるように、江崎に視線を向けた。江崎のほうで異論はなかった。しかしつけ加えておきたいことがあったので、右手を軽く挙げた。

「わたしは警察の説明会に行っていないので伺いたいのですが、身代金の支払いとマスコミ対応について、皆さんはどのような姿勢をとるように言われましたか」

美登里が言った。

「マスコミに関しては、出るなということね。身代金に関しては、支払うなとは言われていない

けど、情報を引き出して犯人逮捕をしたいという印象が強かったわ」

正志が不安げに言った。

「それはどういうことになるんでしょう。マスコミに出てアピールしないと、紅は解放してもらえないのに、マスコミに出るなと言うのは……」

「ほらね、やっぱりあたしたちはだまされたのよ。だからあたしが言ったでしょう、あの刑事は信用できないって」

和江が勝ち誇ったように鼻を鳴らす。

江崎が言った。

「マスコミについては、こちらが絶対にアピールしなければならないというものではありません。ただ身代金に関しては微妙なものがありますね。十二月一日から身代金支払禁止法が施行ですから」

「身代金支払禁止法って何だっけ？」

和江がきょとんとした様子で首をかしげた。

江崎は青山を見て尋ねた。

「身代金支払禁止法——身禁法について警察からの説明はなかったのか」

「何も。質問されなければ、説明する気はなかったものと思います。家族のパニックを引き起こすようなものですから」

和江が再び尋ねた。

「だからその身代金支払禁止法っていうのは何なのよ？」

「身代金支払禁止法とは、文字どおり人質の家族は犯人に対して身代金を支払ってはいけないという法律です」

和江は大声を上げた。

「それということよ！ 家族が娘をとり返すのに身代金を払っちゃいけないなんて筋が通らないわよ！」

家族たちは一様に驚き、腹を立てた顔をしている。青山は家族たちののんきさにあきれたのか、彼らの様子を窺いながら言った。

「本当にご存知ないんですか。ニュースでもかなり報道されてましたが……」

「すみません、わたしはスポーツニュースしか見ないもんで」

正志が頭を掻きながら言うと、和江も言った。

「誘拐なんて金持ちか悪人だけが狙われると思ってたから、関係ないと思ってたのよ」

「わたしも和江さんと同じです」

静子が和江に同意した。

「わたしは当然知ってますけど。ええ、もちろん。自分に関係の深いことですから」

美登里は金持ちであることを見せつけるように言ったが、あの驚き具合から推測すると、詳細は知らなかったと見える。

青山は言った。

「身禁法はゲリラ対策のための法律です。ゲリラの主な資金源は身代金なので、被害者家族がゲリラに身代金を支払わなければ、ゲリラの資金源を断つことができ、組織を壊滅させられるとい

う考えに基づいています」

和江が尋ねた。

「でも身代金を支払わないと、娘は帰ってこないんでしょう」

「そうですね」

「もし払ったらどうなるの？」

「法律違反になります。身禁法施行以降に支払えば、二年以下の懲役もしくは三百万円以下の罰金が科せられます」

身禁法は明らかに悪法だ。身代金を払えば家族が逮捕され、払わなければ人質は殺され、誘拐コンサルタントもやり方次第では逮捕となるのだから、こんな悪法を歓迎するのは政府と警察だけだろう。

正志が希望をなくしたように言った。

「それじゃどうしようもないじゃないか。もう娘をとり返せない」

江崎が言った。

「身禁法の対策として、わたしは二とおりのやり方をご紹介します」

正志が安堵したように顔を上げた。

「二つもあるんですか。じゃあどうにかなりそうですね」

与えた希望をすぐにとり上げるのは気が進まないが仕方ない。青山は不審げに自分のほうを見ていた。江崎は話し始めた。

「まず一つめの方法は、身禁法施行前の十一日間で交渉を成立させ、身代金を支払ってしまうことです。この場合、犯人はこちらが焦っていることを見抜き、値引きには応じなくなる可能性が高い。相当の高額を覚悟したほうがいいでしょう」

家族たちはこの方法に乗る気はなさそうで、反応を返さなかった。

「もう一つは警察に隠れて、水面下で交渉していくことです」

青山が視線で江崎に合図を送ってきた。その目は、その話は待ってくれと訴えている。しかし江崎は青山の合図を無視した。保険会社の雇われコンサルタントでは危ない橋は渡れないだろうが、あいにく自分はフリーだ。可能性のある選択肢はすべて依頼人に提示する義務がある。

和江が尋ねた。

「警察に隠れてなんて、そんなことできるの？」

「皆さんの家の電話はすでに警察とオンラインでつながっていますね？」

「ええ」

「ですから警察に内緒で、犯人との別回線を設けるのです。ただし携帯電話は途中で切れる危険性がありますので、避けてください。よろしければ、わたしのほうでこのオフィスに固定電話を用意します。その電話を使って犯人と交渉し、警察に盗聴されている電話は使用しないことです」

「そんな……警察だって疑うでしょう。盗聴しているのに、交渉が行なわれなかったら」

正志が口ごもった。

江崎は軽く頭を振る。

「それはどうとでもなりますよ。例えばわたしが公衆電話から脅迫電話をかけてもいい。逆探知できない時間で切れば、問題ない。さらにわたしと皆さんがつながっていることを警察に知られないようにするため、一台ずつ新しい携帯電話を用意していただき、ここへ来るとき尾行に気をつけていただければ――尾行の撒き方はお教えします――ばれる可能性はほとんどない」

「でも」

「警察は事件発生現場周辺の聞きこみと被害者家族からの情報収集はするでしょう。しかし犯人からの接触がなければ、交渉の専門家であるS I Tも動きようがありませんし、刑事たちはそれぞれ別の事件を抱えています。犯人が動かなければ、特別捜査本部も縮小されるはずです」

青山が言った。

「待ってください、江崎さん。ご家族に法律違反を勧めるんですか」

江崎は肩をすくめた。

「勧めていませんよ。わたしの思いつくやり方をご紹介しているだけだ。これはあくまでもアドバイスで、決めるのは皆さんです」

「当社は合法的な会社です。法律に触れるようなら、協力できません」

「それではA F保険さんには交渉から手を引いていただき、金銭的な負担だけお願いしましょう。わたしが協力します」

自分が蚊帳の外に出されるかもしれないとわかって、青山は顔色を変えた。

「警察を裏切ったとして、それをばらすと脅されたらどうするんですか」

「彼らは警察を嫌っています。警察に密告するよりは身代金交渉を成立させて、金を得ることを選ぶでしょう。警察に密告すれば、得るものはない」

家族たちは何も言わなかった。威勢のいい和江ですら黙っている。

警察を完全に信用できない南米では、警察の顔を立てながら、水面下で犯人と取引をするやり方はめずらしくもない。しかしお上に逆らわないことをよしとする日本人がどこまで肚をくくれるかは、彼ら次第だろう。コンサルタントに説き伏せられた場合、その意志は長続きせず、のちのトラブルの原因になる。人質をとり返すためにどこまでやるかは、あくまでも彼ら自身の決断に任せたほうがいい。それが辛抱強く交渉を続けていくための基盤となるからだ。

正志がおもむろに口を開いた。

「.....最初のやり方のほうがいいんじゃないかな。二億も払うんだから、きっと大丈夫だろう.....」

法律の範囲内でやると言うなら、それはそれでかまわないし、その線のデメリットも説明する。江崎は言った。

「それではここで身代金の相場金額について説明します。以下、人質の命を率直に金銭に換算しますので、ご不快になられる方もいらっしゃると思いますが、必要な情報ですから、ご静聴ください。まずは柏木晴信氏の身代金の相場金額。資産などから見て、通常なら九千八百万、約一億円です」

青山は無言で江崎を見た。江崎は続けた。

「しかし晴信氏の失脚が目的なら、相場以上の身代金を払わせて、恥をかかせようという意図があるかもしれません。わたしはその上積金額を三千万円前後と見ています。すると、晴信氏の身

代金は約一億三千万円。上限二億として、残りの七千万円が人質三人の金額となりますから、この金額で犯人が納得するかどうか焦点となります。N L F 側の人質全員同時解放については前例がないため、はっきりした予想は申し上げられませんが、逆にこちらの説得次第ではどうになる可能性もあると言えます。ポイントは三人には罪がなく、これ以上の支払いが困難だと、どこまでN L F を納得させられるかだと思います」

美登里が言った。

「ということは、根気強く脅迫に耐えて、こちらの要求を納得させることができたときの最低ラインが二億円ということね」

「そうです」

「わたしたちのデッドラインが十二月一日なら、二億で決着はつかないわね」

「おそらく」

江崎は青山を見た。青山はお手上げだというように俯いた。江崎は、青山が反論しようがないのだろうとわかっていた。家族たちには考える時間を十分与えたほうがいい。江崎は言った。

「皆さんで話し合ってください。わたしたちは席をはずしますから」

江崎は青山を促し、席を立った。青山は i P a d を手に、怒りを抑えているような表情でついてくる。江崎の仕事場である隣室に入ってドアを閉めたとたん、待ち構えていたように青山は噛みついてきた。

「またやってくれたな。協力を匂わせておいて、これか」

「これって何だ？」

「僕は犯罪の片棒を担ぐ気はない。降ろさせてもらう」

「身禁法が施行されれば、誘拐保険自体が違法だろう」

「それは会社の問題だ。だが、これでは個人として法に触れる可能性がある」

「敵はゲリラだぞ。法律が怖くて、誘拐コンサルタントなんてやってられるか。そんな根性ならやめちまえ」

江崎は笑った。しかし青山は苦虫を噛み潰したような顔をして、i P a d を握りしめて言った。

「ここは日本だ。ペルーじゃない」

「俺のプロフィールを調べたのか。やる気はあるようだな」

「もっとやる気のあるところを見せてやろうか、アル中？」

不意をつかれて、江崎は口をつぐんだ。データ好きなA F 保険はすでに自分の身辺調査済みというわけか。

青山はi P a d をデスクの上に置き、腕組みして心底嬉しそうに嗤った。

「どうしてアルコールに走ったんです？ 離婚が原因ですか。リンダを忘れられなかったんですか」

青山が江崎の動揺を誘っていることは明らかだったが、江崎は冷静さを失わなかった。たしかにアルコール中毒になった経験はあるが、離婚が原因ではないし、今ではすでに過去のことなのだ。

それより青山だ。身代金の相場金額のいざこざといい、ちょっとしたことでプライドが揺らぎ、感情的になったらなかなか立て直せないところを見ると、誘拐コンサルタントとしての経験は浅いのかもしれない。江崎は言った。

「勉強不足だな。そういう切り札はここぞという時のためにとっておくものだ」

青山は顔をさっと紅潮させ、早口で言った。

「江崎さん相手に切っても、このカードはまだ有効ですよ。家族たちにあなたの過去をばらす。試してみましょうか」

「無意味なことをするな」

「意味はあります。家族たちはあなたへの信頼を失うでしょう。仕事を降ろされるかもしれない」

「だからそれが無意味だと言っているんだ。それで誰が得をする？ 俺がコンサルタントを降りたら、人質は帰ってこない」

「ご心配なく。僕が交渉する」

「君には無理だ。会社がある。だが、俺なら家族たちと危ない橋を渡ってやれる。ご存知のとおり、俺には守るべき会社も家族もない」

青山は怒りをみなぎらせた目で江崎をまっすぐ見つめて、怒鳴った。

「かっこつけるな！ 被害者家族から高額のコソコンサルタント料をとっているハイエナのくせに！」

江崎はその様子を見ながら思った――やはり青山は経験不足だ。彼一人には任せられない。

青山が今まで誘拐コンサルタントをやってこられたのは、それなりの頭のよさと、A F 保険のマニュアルとデータに支えられたからだだろう。しかし今回のような変則的なケースは過去になく、参考になりそうなデータを引っ張り出せない。

江崎の信条は経験と勘で交渉していくことだ。犯人はオーソドックスな誘拐事件だけを起こしてくれるとは限らないから、江崎はデータにばかりは頼らない。

「頭を冷やせ。俺が降りて得をするのは、君じゃない。A F 保険だ。罪のない三人の人質はすぐに見捨てられる。殺されるかもしれない。それでいいのか」

青山は沈黙していた。隣室から話し声が聞こえてくる。内容は聞きとれないが、家族たちの声がとぎれることはなかった。彼らも人質の救出に必死なのだ。

「一日までに二億で決着をつけるのは不可能だ。二億以上なら、家族に払わせるんだったな。越川夫妻と辻さんは、人質をとり返したあと借金地獄だ。俺は南米でその地獄を味わう家族をいくつも見てきた。人質をとり返したい一心で、言われるままに高額の身代金を払い、その後の生活に困って、家族が離散したり、心中したりした。いちばんつらいのは人質だった者だ。自分のせいで家族の人生がめちゃくちゃになったと、生きている限り自分を責め続ける。耐えきれずに自殺した者もいた。せつかく誘拐から救い出されたのに、自ら死を選ぶことだってあるんだ。それを防ぐためにも、彼らには俺たちが必要だ。何の罪もない彼らにそんな苦しみを背負わせたくない。もちろん彼らを身禁法の罪で刑務所に入れるつもりもない。俺は彼らを元の生活に戻してやりたいだけだ」

青山から回答はなかった。

江崎は言った。

「行くぞ」

ドアを開けて、応接室に戻った。家族たちは江崎と青山の姿を見ると、ふっと口をつぐんだ。

江崎は尋ねた。

「結論は出ましたか」

家族たちは緊張した面持ちで二人を見た。和江が言った。

「話し合ったけど、意見は一致しなかったわ」

「そうですか」

「でも結論を出さなきゃ前に進まないでしょう。だったら多数決で決めるしかないわよ」

和江は美登里を見た。美登里は「卑怯よ」と呟いた。和江が言った。

「警察を欺いてでも、交渉していきたい人、手を挙げて」

和江、正志、静子の三人が静かに手を挙げた。

「金額が高くて、一日までに話をつけたい人は？」

誰も挙手しなかった。代わりに美登里が吐き捨てた。

「わたしがどっちを選んだって同じじゃない。もう結果は決まっているんだから」

和江が言った。

「柏木さんには悪いけど、あたしはどんな犠牲を払ってでも、もう一度娘に会いたい。柏木さんに恨まれることくらい平気だから」

正志と静子は申し訳なさそうな顔でうなずいた。

江崎は言った。

「皆さんの意思はわかりました。がんばりましょう。わたしたちの手でご家族を必ずとり返すんです。そしてもちろん、警察に捕まらないようにするための手も尽くしますよ」

江崎は家族たちを励ました。しかしみんな浮かない顔をしている。誘拐交渉に晴れ晴れとした船出はない。それでもこの船は人質の救出という目的地に向かって出航するしかない。

江崎は青山を見た。青山はいつもの冷静な表情に戻っていて、丸椅子に腰を下ろした。

青山は江崎がアルコール中毒だったことを家族たちに言うつもりなのだろうか。これから具体的な計画に入るが、青山に期待できるのはA F 保険の資金力だけだろうか。誘拐コンサルタントとして、一緒に交渉する気はないのだろうか。

江崎は青山がこの船出に同乗することを強く願っていることに気づいた。青山は利益優先のA F 保険のコンサルタントだが、誘拐コンサルタントとしての職業倫理と筋のよさを備えている。もっと経験を積み、たくさんの被害者家族を助けられるようになるだろう。しかしそれも青山次第だ。誘拐交渉があくまでも家族たちの意思と決断で行うものであるように、青山も自分で決めなければならない。

江崎は青山に向き合った。

「青山君、これから警察対策に入るが、時間は大丈夫なのか。さっき会社に戻らなければならないと言っていたが」

青山は一瞬黙ったが、すぐに口を開いた。

「大丈夫です。もう少し時間がかかると会社に連絡しておきましたから」

「わかった。それじゃ始めよう」

江崎は苦笑した。自分が人を育ててみようという気になるなんて、年をとったものだ。何だかおかしかった。

柏木夫人の記者会見が報道される～十一月十九日（水）午後十時

拉致されて五日目である。ベッドの背面に寄りかかっている杏子があくびをした。

「なんだか時差ぼけみたいな感じがするわ。雑誌も読み飽きたし、早くマッサージオイルとネイルエナメルが届かないかしら」

紅はその一言で杏子への反感を募らせた。自分は風呂にも入れないのに、マッサージオイルだのネイルエナメルだのと気遣いが無い。

今日の見張りはグリーンマスクだった。午後の間ずっとテレビを見続けている。十時になると、ニュース番組が始まった。紅と杏子はテレビを見るために金網に近づく。二人は外界の情報に飢えていたから、ニュースはありがたかった。特に紅は今まではニュースなどに興味もなかったのに、日本国内で何が起きているのかが気になった。さらに今の自分たちにとって、ニュースは他人事ではない。自分たちが拉致されたことを世間は知っているのか。捜査は進んでいるのか。世間の人々は自分たちに関心を持ってくれているのか。

グリーンマスクが音量を上げた。番組では誰かの記者会見の様子が放映されている。画面中央には、一人の女性がテーブルの上のマイクに向かっていて。記者からの質問が飛んだ。

「柏木氏は誘拐の専門家と呼んでもいいのに、なぜ拉致されたとお考えですか。なぜ事前に見抜けなかったのでしょうか。日常生活で誘拐の徴候はなかったんですか」

自分たちの誘拐事件に関する記者会見らしい。紅と杏子は驚きながら、テレビの中の見知らぬ女性を見つめた。女性はつらそうに口元を押さえてから話し始めた。

「主人は誘拐専門家としてゲリラと闘い、日本を少しでもよくすることをいつも願っておりました。そのことで自分の身が危険になることは承知しておりましたが、いつか犠牲になることは覚悟していたと思いますし、わたしももしものときの覚悟はしておりました。しかし、具体的には申し上げられませんが、誘拐対策は十分行なっておりました。それでも防ぎきれず、このように世間の皆様をお騒がせしてしまったことについては、妻であるわたしからもお詫び申し上げます」

それではこの女性が柏木の妻か。ダークブラウンのジャケットを着て、ときどき悲しげにうつむく姿は、いかにも被害者家族に見える。

紅は隣にいる杏子の顔色を窺った。杏子は柏木の妻をまっすぐ見つめていた――杏子にとっては不倫相手の妻なのだ。

記者の質問が続いている。

「三人の方々は柏木氏の誘拐に巻きこまれたという見方が有力ですが、その点についてはどうお考えですか」

「三人の方々が誘拐されたことを遺憾に思っております。一日も早く解放されることを願っておりますし、わたしはご家族の方に直接お会いして、できることがあればどんなことでもお力になりますとお伝えしました。皆さんも力を合わせて大切な家族をとり返そうとおっしゃってください

いました。今後わたしたちは団結して交渉していくつもりです。そこで今回わたしが代表としてマスコミの取材をお受けすることにしたのです」

「それは他のご家族が都合の悪いことを話すのを防ぐためではないんですか」

意地悪な記者の質問に、柏木夫人は首を振った。

「そういうことではございません。ご家族の皆さんもご了承くださいました。全権委任と考えていただいてよろしいかと思います」

「それでは他のご家族との間でトラブルなどはまったくない？」

「ございません。四人をとり返そうという気持ちで一致団結しております」

「人質の安否確認はすみしましたか」

「まだですが、わたしたちは全員無事であると信じています」

「警察の動きについて、お話しできる範囲でお聞かせ願いたいのですが」

「先日警察の方からいろいろとご説明を受けました。人質四人全員の早期解放に向けて、全力で取り組んでくださるとのことでした。わたしたちもできるだけ協力し、一日も早く辻さん、越川さん、大塚さん、そして主人の元気な姿を見たいと思っております」

「犯人に対して奥さまからおっしゃりたいことはありますか。カメラに向かってどうぞ」

柏木夫人の顔がアップになる。夫人はカメラをまっすぐ見つめて言った。

「主人と三人の方々を一刻も早く、無事に帰してください。お願いします。本当に心配しています」

「ありがとうございました」

夫人はうなずきながら目を伏せた。一人の記者が手を挙げた。

「犯人が身代金を要求してきたら、どうされますか」

夫人の隣の男性が立ち上がって、柏木夫人の前のマイクをとった。

「記者会見はここで終了させていただきます。犯人との交渉について発言することは、人質の安全を考えて、控えさせていただきたいと思います。本日はありがとうございました」

記者たちは騒然となった。次々と質問が投げられる。

「犯人との交渉はするんですか」

「もう身代金の要求は受けたんですか」

「柏木氏はゲリラとの交渉を拒否するよう主張しておられましたが、この件についてはどう思われますか」

柏木夫人は男性に付き添われるようにして、退出した。空席が映し出されたあと、「ただいま記者会見が終了した模様です」というアナウンスが入った。画面はスタジオに切り替わり、女性キャスターが言った。

「ただいま生中継で、柏木晴信氏夫人である美登里さんの記者会見の模様をお送りしました。予定より早めに切り上げられたようですが」

解説の男性が言った。

「われわれの関心はもちろん人質四人の安否、いつ救出されるのかということですが、今回の誘拐事件が特に注目されるのは、やはり人質の一人が柏木晴信氏であることでしょう。誘拐評論家である彼が、世間に与えた衝撃は大きい。犯人側の力の大きさを見せつけられたと言っている

でしょうね」

「そうですね。そしてもう一つ、柏木氏を救出するために身代金を支払うのかといった疑問があります。次のV T Rをご覧ください」

画面が切り替わり、グレーのスーツ姿で、インタビューを受けている柏木が出てきた。

「このままいくと、日本はゲリラに支配される国になってしまいます。たしかに彼らは正義に基づいた主張をし、慈善活動も行なってきました。しかしその手段はテロリズムです。正義の主張や慈善活動を行ないたいなら、社会のルールを守るべきです。ルールに配慮せず承認されるほど、世の中は甘くありません。現に治安は悪化する一方です」

「最近の世論調査でも、ゲリラのせいで治安が悪化したと考えている人が全体の六割に上っていますね」

「そのとおりです。さらに外国人投資家が国外へ引き上げるようになり、日本は世界から見捨てられた市場となりつつあります。経済の悪化は必至です」

「それでは柏木さんはどうすればゲリラを一掃できるとお考えでしょうか」

「わたしは誘拐の専門家ですので、その線からお答えします。ここまで誘拐事件が頻発するようになった原因は何か。わたしはその一つに、ゲリラが誘拐を金を得るのに有効な方法と考えているからだと考えています。ですからゲリラを一掃する最も確実に有効な手段はと言えば、ゲリラと取引をしないことです」

「それは具体的にどういうことでしょうか。ご説明いただけますか」

「誘拐では彼らの目的は達せられないということを理解させるのです。それには政府や警察、マスコミだけでなく、一般の方々の協力も必要です。日本全体が一丸となり、毅然とした態度でゲリラに立ち向かうことを宣言していくべきです。そのためには交渉に応じる者が一人でもいては意味がない。戦略的にゲリラと戦っていくことが必要です」

「それは現在人質にされている方々やそのご家族にとっては、なかなか難しいことだと思うのですが」

「そういった立場の人にこそ理解していただきたいのは、ゲリラと取引することで、次の被害者を生む手助けをしているということです。身代金を支払えば、彼らは活動資金を手に入れます。現にゲリラは身代金を活動支援金と呼んでいるのです。もちろん人質やご家族の皆さんは、ゲリラと共謀しているつもりはないでしょうし、ご家族の命を救いたいという一心で、交渉に臨んでおられることと思います。しかしゲリラはそこを狙っているのだということも念頭におかないと、日本は変わりません。われわれが憎むべきはゲリラです。日本は今岐路に立たされています。わたしたちの手で治安悪化を食い止め、子供たちの世代によりよい日本を渡すことができるかどうかは、われわれの選択にかかっているのです。今までの日本は比較的安全で、平和に対して何の犠牲を払わなくてもよく、安全はただで与えてもらえるものだと考えていました。しかし社会は変化したのです。戦いなくして安全な社会はありえません。ゲリラに毅然とした態度で臨むことで、日本は新しい自立した社会へのきっかけになるでしょう。そのためには一人一人の責任ある行動が不可欠です」

ここでV T Rが終わり、またスタジオのキャスターと解説者に戻る。女性キャスターが言った

。

「柏木氏のこういった一連の発言が、自らの誘拐を誘発したと考えてもいいと思いますが」

「それは柏木夫人もおっしゃっていたように、間違いないと思います」

「それでは身代金を支払わないと？」

「柏木氏一人だけならそのとおりだと思います。ただ今回は三人の市民の方々が巻きこまれていますので、人質やご家族の方々がどの程度まで柏木氏の主張に賛同できるかどうかにかかっているのではないのでしょうか」

「その市民と呼ばれる方々、今回は社会的に資産家と呼ばれる人以外の方々の誘拐が行なわれたことも、世間に衝撃を与えていますね」

「これはゲリラ側の利益にならないと思います。今までの世論は、ゲリラの行動はともかく、主張については支持するという姿勢がありました。しかし今回の事件で、その大義すら信じられないというふうに変わっていくと思います」

「身代金支払禁止法、通称身禁法ですが、この法律の施行まで十一日です。誘拐からすでに五日がたっており、一日も早い人質の解放が待たれています。また当番組では、警察の捜査を考慮した上で、今後の動向を注意深く見守っていきたいと思います。ではCMです」

画面が切り替わって、コマーシャルになった。紅と杏子は金網から離れて床に座りこむ。紅が顔をしかめて言った。

「何だかむかつく感じの奥さん」

「どうして」

「だって嘘っぽくない？　うちのオカンがおとなしく協力しているとは思えないんだよね。だいたい旦那が愛人と一緒に誘拐されたのに、それを心から心配していますって顔しちゃって、本心はどうだかわからないよ」

「まあね」

杏子はあいまいに答えてから続けた。

「でも捜査されているって言ってたから、きっと大丈夫よね」

紅は返事をしなかった。うさんくさい柏木の妻の主張を聞いていると、不信感が募るばかりで、救出交渉が順調に進んでいるとは思えなかった。

N L F からの脅迫電話、警察への嘘の電話～十一月十九日（水）午後十時三〇分

江崎と青山は美登里の成城の自宅で待機しながら、テレビで記者会見の様子を見ていた。美登里の様子はいかにもうわべを繕っているという雰囲気、これだけでできれば上出来だった。

二人はこちらからN L Fに刺激を与えて、動かす作戦をとることにした。可能なら身禁法施行前に人質をとり返したいので、N L Fが動くまで悠長に待っているわけにはいかない。そこで美登里を記者会見に出して、身代金支払いについて問われたとたん会見会場を逃げ出させる。これでこちらがすでに窮地に立たされていると思いこませ、沈黙を切り上げさせて、接触をはかってくるよう仕向ける。N L Fも人質の監禁を長引かせずにすむなら、そのほうが都合がいいはずだ。監禁はコストがかかるし、警察に発見される確率も高くなるからだ。

江崎はニュース番組が終わっても、テレビをつけっぱなしにした。最新情報が入ったときのために、テレビは流しておいたほうがいい。

美登里が戻ってくる前に腹ごしらえしておこうと考えて、江崎と青山は買ってきたハンバーガーを袋から出し、無言で食べ始めた。江崎はふだんはファーストフードを食べないのだが、青山がどうしてもハンバーガーがいいと主張したのだ。江崎は今日だけで二度も青山をはめていたので、ファーストフードにつきあうことにした。

店で江崎がチキンバーガーとポテトとコーヒーを買うと、青山はハンバーガーを三つとコカコーラを注文した。それから江崎をちらりと見て、軽蔑するように呟いた――「チキンバーガーを食べるなんて」。

江崎はむっとした。

「チキンバーガーの何が悪いんだ。牛肉より低脂肪だ」

「僕はファーストフードでビーフ以外のものを食べる人間が信じられない。味へのこだわりがないんでしょうね」

江崎はあきれた。どの肉を食おうと個人の勝手だろう。やはり自分は隣のおにぎり屋に行けばよかったと後悔した。

二人は大理石のテーブルの上で包み紙をがさがさと言わせながら、一言も喋らず、食事をとった。青山は江崎のチキンバーガーを汚らわしいもののようにはみながら、一人で三つのハンバーガーを食べきった。江崎は同じ味のハンバーガーを三つも注文する人間のほうが味オンチだろうと思った。三つ買うなら、味を変えろと言いたい。結局青山はサイボーグかロボット人間なのだ。ハンバーガーは食品でなく燃料なのだ。きっとチキンよりビーフのほうが燃費がいいのだろう。

青山はハンバーガーを食べ終わると、アタッシュケースから小さなプラスチックケースを出し、赤や黄色や白の錠剤をざらざらと十個ほど掌にのせると、一気に口に放りこんだ。それからコカコーラをストローで吸って、飲み下す。

江崎は啞然とした。

「何だ、その薬の山は？ 君は病気持ちか」

「薬？ サプリメントですよ」

青山はうっとうしそうに答えて、プラスチックケースの蓋をぱちんと閉めた。

江崎は言った。

「ハンバーガーを食ってサプリを飲んでるなんて、本末転倒だと思わないか」

「はいはい、バランスのとれた食事にすれば、サプリなんていらないと言いたいんでしょう。江崎さんはいちいち考え方が古いんですよ。好きなものを食べて、不足分をサプリで補うほうが、効率よく栄養を摂取できる。これが僕のやり方です」

「コーラでサプリを流しこんで、本当に効率よく栄養を摂取できているのか、俺にはわからんな」

「余分な糖分を体外に排出するためのサプリも飲んでいきますから、効果はあるでしょう。僕の食生活を心配するより、自分のメタボ腹をどうにかしてくださいよ」

江崎は急所を一突きされて、黙った。

そんな自分たちを美登里の娘、香が怯えた様子で見っていた。あの柏木夫妻の娘とは思えない、不思議な服を着た娘だ。ハート型の胸当てが付き、裾のほつれたスカートををはいている。江崎が気遣って微笑むと、香は走って逃げた。南米でさんざん日焼けしたおかげで色黒のおじさんである自分は、若い女性にあまり受けがよいくない。

午後十一時すぎ、美登里が記者会見場から戻ってきた。娘の香が部屋から飛び出して、玄関に駆けて行く。廊下から話し声が聞こえてきた。

「青山さんと江崎さんって人がリビングに居座ってる。二人でうちの電話をいじったあと、テレビを見ながら無言でハンバーガー食べて、口喧嘩したの。あの江崎って人、あたしのほうを見て笑ったのよ！ どういうことなの、ママ？ なんであんな不気味な人を家に入れろって言ったの？」

江崎は少し傷ついた。

「あとで説明するわ」

美登里は香を見ながら言った。青山が警察対策のためだという説明はしたのだが、香は納得していないようだった。

江崎は美登里に言った。

「お疲れ様でした。記者会見は上出来でしたよ」

「電話は来た？」

「まだです。電話は処理済みです。あとは打ち合わせどおりに」

「わかったわよ」

「心得には目を通しましたか」

「読んだわよ、何度も。『交渉の心得。その一、約束をしてはならない。その二、イエスと言ってはならない。その三、ノーと言ってはならない。その四、犯人を見下してはならない』。すっかり覚えてしまったわ」

「ありがとうございます」

ぴりぴりした空気の中、リビングの電話の前には美登里、江崎、青山の三人がはりついてた

。香を巻きこむわけにはいけないので、美登里が勉強しなさいと言って、自室に入れた。家政婦の佐藤は六時には帰ることになっているらしく、美登里がキッチンに立ち、コーヒーを淹れる。しかしそのあいだも美登里は落ち着かなく、しきりにため息をついたり、肩や首筋をさすったりしていた。

江崎は言った。

「お食事をとられてもかまいませんよ」

「今はとても無理よ。電話が終わったら食べるわ」

「いつ来るかわかりませんから、リラックスされたほうがいい」

「リラックスなんてできないわよ！ 本当にこんなメモのとおりに行くの？ もし人質が殺されたとしても、わたしは責任を持てないんだから！」

美登里はヒステリックに言い返した。記者会見のあとでもあり、かなり興奮しているようだ。

江崎は言った。

「それじゃリハーサルをしましょうか。わたしが犯人役をやりますから、柏木さんはメモを見ながら、犯人と会話し、必要な項目をすべて質問するようにしてください」

「いいわ」

いくつかのパターンでリハーサルをすると、ようやく美登里の表情が和らいできた。リハーサルが終わると、美登里は「ちょっとクッキーでもつまもうかしら」と言い出した。

二人がリハーサルをやっている間、青山は無言で自分の iPad に向かっていて。今日のミーティングの報告書を作成して、会社に送信しなければならないという。

午前一時近くになっても、電話はかかってこなかった。青山の事務作業は終わっており、iPad を電話に接続してある。

美登里が江崎に尋ねた。

「本当にうちだけにかかってくるの？」

「記者会見で柏木さんは、被害者家族は団結しているとおっしゃいましたね。N L F は電話をかける回数を減らしたい。電話をかければかけるほど、逮捕の危険が増えるからです。だからまずは柏木さんに電話してくる。もしその通話で他の家族への電話が不要と判断したら、もうどこへもかけません」

「もう一時じゃない。来るかしら」

「N L F もメンバー内で相談して、メモを作っているんですよ。どういう出方にしようかとね。それだけ向こうもプレッシャーを感じているということです。一步間違えれば逮捕されるんですから、こちら以上のストレスを感じているはずですよ。だから柏木さんはリラックスしたほうがいい。深呼吸して」

江崎はソファでくつろいだ様子で言った。美登里はうなずいて、深呼吸をくり返した。

そのときついに電話が鳴った。着信音が室内に鳴り響く。江崎と青山、そして美登里の三人は視線を合わせた。美登里はスピーカーホンにして、息を吐き出すように最初の一声を上げる。

「柏木ですが」

「テレビ見たよ、奥さん。要求を言う。ご主人の命の値段は十億だ」

またもボイスチェンジャーで変えられた、人を馬鹿にするような声だった。美登里は早口で言った。

「お金はできる限り用意して支払うつもりです。それと、今後は五×××－××××に電話をしてください。毎晩午後八時に待って……」

「十億だよ、十億！　今すぐ払ってもらおうか！」

突然相手は恫喝した。美登里の体はびくっと震えたが、急いで言った。

「わたしは警察にマークされているの。警察は身代金の支払いを止めようとしているんです。だから越川さんを通じてお金を払えるようにしたいんです。そのためには自宅ではない電話にかけてもらわなければならない……」

「警察を裏切るなんて話を信用できるか！　嘘つくんじゃねえ！　おまえの夫を殺してやる！　おまえのせいで夫は死ぬんだ！」

「お、お願い信じて。本当なのよ。わたしはもう一度主人に会いたいんです。そのためのお金は用意します。生きていますか。他の三人も無事ですか」

「うるせえ、金だ！　十億用意しろ！　さもないとぶっ殺す！」

「四人が生きているという証拠をください。心配で夜も眠れません。午後八時に五×××－××××よ。お願い。警察には知られていない電話だから……」

ここで電話は一方的に切られた。逆探知予防の時間切れだろう。テーブルに置かれた美登里の手は震えていた。

江崎は言った。

「よくがんばりましたね」

美登里は口元を押さえながら、小声で言った。

「怖かったわ。突然怒鳴ってくるんだもの。それも死ぬとか殺すとか……わたしが喋っているのに、遮ってくるのよ。全部の用件を言い切れるか、気が気じゃなかったわ。もういや。二度と電話交渉はいやよ」

「あとは正志さんに任せましょう」

美登里はそっとうなずいた。多くの被害者家族が一日も早く身代金を支払いたくなるのは、人質をとり返したいからだけではなく、この脅迫電話のせいだ。深夜から夜明け前を見はからって電話がかかってきて、一方的に恫喝される。家族たちは電話の音に怯え、睡眠をとれなくなり、冷静な判断力を失う。あの電話から逃れるためなら、交渉などどうでもいいという気にさせられるのだ。

江崎は青山に尋ねた。

「録れたか」

「大丈夫です」

青山はiPadを叩いてうなずいた。江崎は美登里に言う。

「それじゃ柏木さん」

「わかっているわよ。警察ね」

美登里は震える指で電話のボタンを押した。取次ぎ後、相手が出てくる。

「前原です」

「で、どうだったんですか。逆探知はできました？」

「何のことですか」

前原は怪訝そうに言い、美登里は声を荒げた。

「何のことですか、ですって！ 今犯人から電話が来たのよ！ わたしは散々脅されたっていうのに、警察は何をしているのよ！」

美登里の言葉の最後のあたりは涙声になりかけていた。

前原は驚いたように尋ねる。

「申し訳ないが、こっちには入ってきてないようなんですが」

「じゃあこの機械は何なの？ あなたオンラインでつながるから心配ないって言ったじゃない！」

美登里はすすり泣きを始めた。記者会見、犯人からの脅迫電話、警察への嘘の電話と緊張が連続しているのだ。感情が高ぶっていても不思議はない。美登里にはかわいそうだが、これは作戦上都合がいいと江崎は思った。これで説得力が生まれるだろう。

前原は言った。

「落ち着いてください、奥さん。今、犯人から電話があったんですね？」

「そうよ！」

「いつ頃ですか」

「今よ、たった今。電話が切れたあと、警察からの電話が来るかもしれないと思って、少し待ったわ。でも何もないから、今こうして電話しているんじゃないの」

「犯人は何て言ってました？」

「主人の命は十億だと。生きている証拠をほしいと言ったけど、切られてしまって」

「それだけですか。他には？」

「夫を殺すと」

「声に何か特徴はありませんでしたか。他に訛り、口癖何でもいいんですが」

「知らないわよ。前と同じ。機械を使って声を変えているの。きいきいとした子供みたいな声。男か女かわからない。訛りはなかったと思うけど。とにかく暴力団関係者みたいな感じよ。やたらと怒鳴ってくるの」

「何か気になる音とかありませんでしたか。背後でたとえば車の音がしたとか」

「わからないわ。それどころじゃなかったもの」

わずかな間をおいて、前原は咳払いをした。

「それではですね、奥さん、機械の確認をしたいんですがね。大丈夫ですか」

「大丈夫よ」

「電源のプラグとかケーブルを見ていただきたいんですが……何か抜けていたり、差しこみが甘くて接触不良になっているところはないですかね？」

「ちょっと待って……あら、これかしら。コードがはずれてるわね」

美登里は江崎、青山と目を合わせた。事前に青山が電話に細工して、警察へのラインを切っておいたのだ。青山はこういうメカニック関係が得意らしく、ひと目でケーブルを見分け、作業を

すませた。

前原が言った。

「空いている差しこみ口があるはずなんで、そこに入れてみてください」

美登里は「ちょっと待って」と言いながら、指示どおりにした。

「その機械の側面の赤いランプが点灯しましたか」

「赤いランプね……ああ、ついてるわ」

美登里が言うと、前原がため息をついた。

「おそらくこのせいでしょう」

「わたしは抜いたりしないわよ。きっと佐藤さんだわ。掃除をするとき気をつけてって言ったのに」

「今後は電話の周りを掃除しないように言っておいてくださいよ」

「わかりました」

「通話の録音はしましたか」

「するわけないでしょう。警察で自動的に録音されますからって言ったじゃないの」

「そうですか……とにかく十億と言われたんですね？」

「ええ」

「わかりました」

逆探知と録音に失敗した以上、有力な情報は得られない。前原の声はくやしげだった。

「十億支払うおつもりですか」

「無理です、十億なんて。とにかく逆探知して、主人の居場所を突き止めていただきたいわ」

「それとですね、他のご家族と連絡をとり合っているんですかね？」

「ええ、先日の説明会でお会いしたとき、連絡先を交換したんです。家族を早くとり返したい気持ちは同じですから、協力しましょうということで」

「そうですか」

「何か連絡をとってはいけない理由でもあります？」

「いやいや、そうじゃないですがね。警察ってところは何でもかんでも情報を集めておきたいんですよ。それと記者会見ですがね、今後あのような公の場に出るときは、事前にわたしのほうへお電話いただきたいですな」

「記者会見に出るのに、いちいち警察の確認が必要だとは思わなかったわ」

美登里は腹立たしげに答えた。

前原は言った。

「マスコミへの取材は控えていただきたいと申し上げたはずですよ。情報もれの危険がありますからね」

「情報もれですって？　いったいいつどんな情報をもらすと言うのよ？　わたしはほとんど情報を知らされていないのよ！　捜査がどのくらい進んでいるのかどうかも知らない！　情報もれなんて、したくてもできないわ！」

美登里はいつもの強気を取り戻して、刑事を相手に怒鳴り始めていた。

「警察がちゃんとケーブルをつないでおかないから、今日のようなことになるんじゃない！　掃

除くらいで抜けるようじゃ困るのよ！ いいこと、うちはマスコミ関係の方と深いおつきあいがあるの！ せっかく協力しようと申し出てくださる方を、むげに断るわけにはいきません！」

「ちょっと待ってください、奥さん。落ち着いてくださいよ……」

「これが落ち着いていられますか！ とにかく今後はミスのないようにしてちょうだい！ 主人の命がかかっているんだから！ いいわね！」

美登里はヒステリックにボタンを叩いて通話を切った。それから江崎と青山を見て、恐る恐る言った。

「どうだった？」

「完璧です」

江崎は微笑んだ。これだけのヒステリーを起こせば、しばらく時間稼ぎはできるだろう。演技なのか本音が出たのか知らないが、今のところ作戦は順調だと言える。

美登里は言った。

「ゲリラの真似をしたのよ。こっちが怒鳴り出したら、相手は何も言えなくなるのね」

「のみこみの早い方だ。交渉役を続けてもらいたいくらいですね」

江崎が冗談まじりに誉めてやると、美登里はマスカラをにじませた目を細くして睨む。

「お断りよ」

江崎は言った。

「これで警察対策は終わりです。あとは適当な頃合を見て、わたしがこの電話に脅迫電話をかけます。もちろん本物の交渉内容とのズレを少なくしてね」

美登里はうなずいた。

江崎は続けた。

「次の電話はおそらく明日。こちらの指定したとおりにかけてくるでしょう。向こうは想定外の提案をされて、おそらくとまどっています。警察を裏切って、犯人に協力すると言われたんですからね。しかも記者会見では家族が団結していると話してある。きっとどういう状況になっているのか、確認したくてたまらないはずです」

美登里が自分の手で自分の肩を抱きながら尋ねた。

「だけど身代金はどうするの。十億円を要求されたのよ。こちらが払えるのは四人で二億まで。あなたたちから、たとえどんな高額を要求されてもできる限り用意すると言われているから、そうしたけど……十億なんてお金、うちにはない。絶対に払えない。きっと全員殺されるわ」

「大丈夫ですよ。まず柏木さんは身代金を払わないとは言っていない。そして、十億円用意するという約束もしていない。あの電話で十億円用意すると言ってしまって、あとからやっぱりできませんでしたと言え、N L Fを怒らせるだけですわね」

「でも……」

「あれでいいのです。N L Fは柏木さんが十億も払えないということも承知しているはずです。犯行前に財産の下調べをすませているはずですからね」

「それじゃどうして十億なんて言ってきたのよ」

「脅迫の一つの手段ですよ。例えば身代金に一億円払うとします。高額だとは思いませんか」
「思うわ。不動産や株券なんかを処分しないと、一億は用意できないもの」
「それじゃ十億払わないと夫を殺すと言われていたのが、一億で手を打ってやると言われたらどうです？ しかも一億なら、借金せずに支払える金額なんですよ。安いと思うでしょう」
「.....たしかにね」

「誘拐の脅迫というのはかなり戦略的なのです。意味のないことはしないし、使えるものなら何でも脅迫の手段にします」

美登里は深く息をついて、ぽつりと言った。

「わたし、いつまでこんなことに耐えられるかしら」

「わたしたちがついています。がんばりましょう」

人質たちは、深夜に散歩する～十一月二十日（木）午前二時

金網をがたがたと揺らされ、紅はベッドから跳ね起きた。

「何なの？」

真っ暗な室内で懐中電灯の光がこちらを照らしている。その明るさに紅は恐怖を覚えた。隣のベッドで起き上がった杏子も身動きせずにいる。

グリーンマスクは言った。

「支度しろ。外に行くんだ」

紅と杏子は息を呑んだ。紅が濁った唇から声をもらす。

「外？ あたしたち、解放されるの？」

「服を着て、靴を持て。荷物は持つな。五分後に出る」

「五分？ 五分じゃ無理よ。メイクとかいろいろ……」

「化粧はしなくていい。五分だ」

男は懐中電灯を消した。室内は真っ暗になり、紅と杏子は小声で会話を交わした。

「どういうことだと思う、杏子さん？」

「わからないわ。ここが危険になって移動させられるのか、それとも」

杏子は言いかけて口を閉ざした。

紅は尋ねた。

「それとも何なの？」

「……支度をするしかないわ。五分しかないのね」

杏子が震えていることは、暗闇の中でも気配でわかった。空気がざわざわと振動する感じがした。

紅は言った。

「あたしたち、殺されるの？ じゃなきゃレイプ？」

「大丈夫よ、きっと」

それから二人は話をしなかった。この沈黙は恐怖からだ。不安を紛らせるためのおしゃべりもできないほどの恐怖。他人に自分の命を握られていることを改めて思った。

それでも二人は手早く服を身につけた。五分たつとグリーンマスクが来て、金網のドアを開け、二人は外に出された。マスクをかぶった見張りたちの表情は見えず、人間というより物に見える。二人は頭のうしろで手を組んだ。紅の全身に冷たい汗が吹き出し、爪先がしびれて感覚がなくなった。

杏子がようやく声を上げた。

「これから何をするの？」

「歩け」

自動小銃を向けられ、杏子と紅は部屋を出た。階段を下りる。足ががくがくと震えている。一

階のリビングにぼんやりとした灯りが見えた。ライトスタンドが一つだけついており、ソファには柏木と辻が座っていた。柏木は不機嫌そうな顔をしていたが、辻は紅と杏子の姿を見ると、明るく声をかけてきた。

「やあ、お嬢さんたち」

その緊迫感のなさに、紅は辻がぼけたのかと思った。

辻はにこやかに言った。

「二人も参加できて、よかったねえ」

「参加って何？ あたしたち殺されるんじゃないの？」

「殺される？ 散歩だよ、散歩」

「散歩？」

紅と杏子は同時に声を上げる。

見張りコマンドが言った。

「声を出すな。外に行く」

紅は散歩と聞いて、全身の力が一気に抜け、その場に腰を抜かしてしまいそうになった。散歩というと、オリエンテーションで辻が訴えていた糖尿病の運動療法のことだろうか。自分たちもそれに参加させられるため、夜中に起こされたのか。辻は喜んでいるようだが、紅は腹が立つばかりだった。深夜に無理矢理歩かされて、喜べるわけがない。紅は怒りをこめて言った。

「あたしは散歩なんていいです。戻って寝ます」

杏子が囁いた。

「一緒に行ったほうがいいわ。できるだけ一人にならないほうが安全よ」

裏口のドアが開けられた。四人の人質と四人の見張りコマンドがぞろぞろと外に出る。

白い息を吐きながら、建物沿いに固い地面を歩いていると、いくらか目が闇に慣れてきて、周囲の様子がぼんやりと見えるようになってきた。ドアの前に急な下りの小道があり、その向こうに林の陰が見える。やはりここは山の中腹に建てられた山荘らしい。どこにも灯りはなかったが、たとえ人家があったとしても、夜明け前のこんな時間なら消されているに違いないし、もし別荘地なら十一月に訪れる人も少ないのかもしれない。

突き当たりに裏庭があった。庭を囲っているのは垣根や塀ではなく、やはり林である。樹木を植えられていない庭は、以前は手入れをされていたのかもしれないが、今は荒れてふくらはぎまでの高さの雑草が生えている。

見張り四人が原っぱの四隅に立った。ちょうど野球の塁のようだった。人質四人は歩いていいという許可を受け、柏木、辻、紅、杏子の順に並び、野球のごとく一塁から二塁、二塁から三塁と四角を描き、ぐるぐる歩き始めた。

紅は何か脱出の手がかりになるものはないかと周囲をきょろきょろと見回した。木立に囲まれた裏庭から見えるものは、自分たちが監禁されている建物が影のようにそびえているだけだ。せめて窓の形などを覚えておこうと首を向けると、杏子が小声で言った。

「紅ちゃん、あまり周りを見ないほうがいいと思うわ」

「でもこの建物を覚えておきたいの。いざというときに役立つかもしれないから」

「それはそうだけど、もし見張りたちがそのことに気づいたら、解放してもらえなくなるわ。よ

けいなことを知ったら、お金の問題だけではすまなくなるのよ」

せっかくいい思いつきだと思ったのに、杏子にあっさりと否定されて、紅は落胆した。やはり自分は杏子と相性が悪い。杏子は悪い人ではないが、だからこそ紅は杏子と一緒にいると、劣等感を刺激されて憂鬱になるのだ。

辻が小声でおしゃべりを始めた。

「実は見張りにもう一度散歩のことを頼んだんだよ。そうしたら、あのリーダーから、越川さんを助けようとして人質になったっていうのは本当なのかって訊かれてね。本当だって答えたら、散歩を許可してもらえた。深夜ならいいという条件付きで」

紅は言った。

「きっと辻さんのことを英雄だと思ったんだよ。あたしもそう思ってる。あたしのせいで人質にされて、ごめんね」

「越川さんのせいじゃないよ。悪いのはゲリラだ。気に病むことはない」

ゲリラのところで、辻は声をひそめた。見張りたちは聞きとがめる様子もなかったので、辻は続けた。

「越川さんと大塚さんも一緒に歩けるようにと見張りに頼んだのは、顔を合わせる時間があつたほうがいいと思ったからだ。お嬢さんたちは女性だからね。何かと心配で……じいさんを安心させるとして、散歩につき合ってくれ」

紅の胸にほろりと来るものがあつた。人質という最悪な環境の上、杏子と同室で落ちこみ気味だったので、人情が身にしみる。

柏木が冷ややかに言った。

「喜んでいる場合じゃないぞ。散歩の許可が下りたってことは、長期戦になるということだ。この刑務所からさっさと解放するつもりなら、健康管理に配慮なんてしない」

長期戦だの刑務所だのと聞いて、列は重く沈んだ。しばらく四人は無言で歩き続ける。やがて紅は今なら柏木に相談するいいチャンスだと思いついた。ちょっと口調に引っかかるところはあるが、有名人のミスター誘拐に話しかけるのだと思うと、緊張する。見張りに声が届かない中間地点を見計らって、思いきって口を開いた。

「あの柏木さん、いつもテレビで見ました。あたしは柏木さんの考えに賛成です」

柏木は無言だった。紅は聞こえないのかもしれないと思い、少しだけ声を大きくして言った。「ねえ柏木さん。この散歩はチャンスじゃないかと思うんです。あたし、協力します。もし脱出するなら……」

「脱出なんて言葉をむやみに口にするな。見張りに聞かれたらどうするんだ」

柏木は低い声で紅を叱りつけた。紅は驚き、その居丈高な態度に少し腹を立てながらも、懸命に続けた。

「だって柏木さんはいつまでもここにいるつもりじゃないでしょ。テレビで言っていたじゃないですか。毅然とした態度でゲリラに立ち向かうべきだって……」

背後の杏子が紅に囁いた。

「紅ちゃん、その話はよして」

「どうして」

紅は杏子に止められたことで、ますます不愉快になった。

「あたしは杏子さんじゃなくて、柏木さんに話してるんだけど」

「脱出なんてできるわけないだろう」

柏木は何のためらいもなく言い切った。

紅はその言葉をにわかには信じられなかった。

「どういうことですか」

「周りをよく見てみる。自動小銃を持った男が必ず張りついているんだぞ。こっちには武器もなく、女二人にじいさん一人。見張りに対抗できるのはわたしだけだ。どうやって内部蜂起や脱出をしろって言うんだ」

紅は驚いて口ごもった。

「……でも」

「今ここで叫んでみるか。すぐに発砲されるぞ。もし脱出に成功したとしても、その後の人生は潜伏生活だ。N L Fは何年かかっても、もう一度誘拐しに来る。N L Fがなくなる限り、怯えて暮らさなければならない」

それから柏木は舌打ちした。

「ここまで説明してやらなければ、状況判断もできないんだからな」

紅は返す言葉を見つけられなかった。たしかに言うとおりで、柏木の頭には内部蜂起も脱出もないことにショックを受けた。テレビでは勇気を持ってゲリラと戦おうと力説していたのに、最初からやる気のないところを見せられたら、裏切られたような気分になる。

紅は怒って言った。

「そんな言い方ってないでしょ。テレビで言ってたことは嘘？ あたしは柏木さんのせいで人質になったんだよ。さっきテレビのニュースでも言ってた。柏木さんの強気な発言がN L Fを刺激したんだろうって。N L Fの目的は柏木さんだけのはずだって。それなのに、あたしにその態度はないんじゃない？」

「勘違いするな、おまえがここにいるのはわたしのせいじゃない。拉致したのはゲリラだ」

柏木の言うことはもっともだった。しかし紅はたまらなくくやしくなった。誰も何も言わなかった。言えなかったのかもしれない。

やがて四人が草を踏む音と息遣いだけが響くようになった。紅にはそれが虚しい絶望の音に聞こえた。

しばらくして辻が言った。

「今は歩きなさいよ、越川さん」

すうっと冷たい風が吹いて、梢の葉を鳴らした。

「歩くことだけ考えてごらん。気持ちが穏やかになってくるよ。歩いていると、体の中からエネルギーが湧き出てくるよ。越川さんの体が助けを待つための力を貸してくれる。きっと家族も警察も必死で助けようとしてくれている。一緒に待とう」

紅は歩くだけで待てる力が湧いてくるなんて信じられなかった。能天気な老人。本当にぼけているのかもしれない。でも辻の言葉には何がしかの真実が含まれている気がした。柏木の言葉に

はない真実。真実は絶望の中にいる自分に魔法をかけてくれるだろうか。歩くことも待つことも嫌いだが、今はそれしかできないのも事実だ。

歩いていると、思いがめぐり出した。

草加にいる両親は自分を心配しているだろうか。気弱な父と自分勝手な母に嫌気がさして、独立を決め、二十二歳で家を出た。帰ろうという気持ちもあったが、つつい足が遠のいていて、三年間正月も帰郷していない。そんな娘でも捜してくれているだろうか。

聡史はどうしているだろうか。聡史は責任感の強い人だから、自分が誘拐されたことに責任を感じているかもしれない。

近くにいと、親や聡史に不満を持ってばかりだったのに、遠く離れてしまうと、いいところが見えてきて、恋しくなる。

十一月の深夜の冷たい空気を鼻から吸ってみた。体内に空気が流れこんでくる。深夜だからなのか、その空気は誰にも触れられたことがないかのように新鮮に感じられた。まるで真っ白な雪に最初の一步を踏み入れるような気分だった。

ようやく深夜の散歩は悪くないと思え、紅は空を見上げた。気がつくと、目に涙がにじんでいた。紅はなぜ自分が泣いているのか、わからなかった。体内の感情が渦巻いて、自分を押し流しているような気がする。泣きながら歩き続けた。

家族チームは、人質が自力で脱出するタイプかどうかを考える～十一月二十日 木曜日 午後六時

家族チームは、人質が自力で脱出するタイプかどうかを考える～十一月二十日（木）午後六時

江崎と青山は、江崎のオフィスで午後五時に待ち合わせた。依頼人が来るまではテーブルを広々と使えるので、二人は向かい合って座った。まずは午後五時のニュースで、N L Fからマスコミへの接触がないことを確認する。それからテレビはつけたままで、誘拐コンサルタント同士のミーティングに入った。

クリーム色のポロシャツにセーター姿の江崎が、青山に尋ねた。

「通話のノイズからわかることはないか」

ビジネススーツにネクタイで身をかためた青山は、i P a dで録音データの分析を見ながら言った。

「声が反響している。屋内からかけていますね。わかるのはそのくらいです。N L Fは誘拐のプロですから、手がかりになるノイズを入れるような真似はしないでしょう」

「それに時間が午前一時だからな。たとえば昼間騒がしい場所でも、夜になると静かになってしまうということはある。学校や公園の近く、ショッピングセンターだとか。いずれにしろ戸外からかけるということはありえない。深夜に戸外であれだけ怒鳴ったら、誰かが必ず聞きつける」

「警察は逆探知で犯人の居所を見つけて踏みこみたいようでしたが、あちこち中継しているから難しいですよ。とにかくN L Fはプロです。逆探知で犯人の居所を突き止めるという線は見込みが薄い。おめでたいとさえ思いますね」

「というより、警察は忙しくて手が回らないから、やる気がないってところだろう。これだけ犯罪が頻発していれば、経費、マンパワーともに不足だ。だから、俺たちのような稼業でも食っていけるわけだがな」

江崎が腕を組んだ。

青山が言った。

「電話の準備をします」

「ああ」

江崎は一度も使っていないクリーンな電話回線を常時用意してあった。有線のほうが確実であるため、子機を使わず、親機をテーブルの上に置いてある。青山がi P a dと電話を接続した。

江崎が尋ねた。

「青山君はパソコンとかいじるのが好きみたいだな」

「ええ、まあ」

「パソコンショーとか行くんだろう？」

青山は眉を上げた。

「だったら、どうだと言うんです？ 行ったら悪いんですか」

「いや、悪くはないがな。そうだよな。データも好きだしな」

青山は露骨に不快げな顔を見せ、いらだった声で言った。

「話しかけないでください。気が散りますから」

江崎はめずらしく誉めてやろうという気になったのにといいながら、肩をすくめて、青山の作業を眺めていた。

青山と協力してやっていくメリットはあると改めて思った。もちろんいちばんのメリットはA F 保険の情報収集能力と支払能力だが、加えて青山のコンピュータ好きは評価できた。なぜなら江崎はコンピュータが苦手だからだ。パソコンのキーボードを人差し指で打つほどではないが、オフィス機器にはあまりさわりたいくないと思っている。江崎の人生の三本柱は経験、直感、足で動くことで、我ながら動物的だと思う。電話の接続くらいはふだんならいいいや自分がやるが、今回は青山が一人で引き受けてくれたので大助かりだ。

インターホンが鳴り、一人目の依頼人の到着を告げた。江崎が出迎えると、そこには静子が立っていた。深いパープルのセーターにグレーのスカート、黒いジャケットを羽織り、足元はいつものウォーキングシューズだった。

江崎が挨拶すると、静子は心細げにあいまいな微笑みを返した。今日は和江と一緒にないせいだろう。江崎が静子と応接室に入ると、青山は作業の手を止めて顔を上げて挨拶をし、静子はまたぎこちない微笑を浮かべて、前回と同じ席に腰を下ろす。江崎が向かいに座った。

「昨夜は自宅待機ということでしたが、犯人からの連絡はなかったんですね」

「はい」

静子是一言だけで返事をする、周囲を見回しながら尋ねた。

「あの、越川さんはまだ……」

「ええ、まだです」

「あの……上着を脱いでもいいでしょうか」

「どうぞ。ハンガーを用意します」

江崎が腰を浮かせようとする、静子はあわてて止めた。

「いえ、いいんです、ハンガーなんて。そんなに大したものじゃありませんし。背もたれにかけておきますから、お気遣いなく」

「でも皺になるでしょう」

「いえ、本当にいいんです」

江崎の気遣いに対して、静子がかたくなに抵抗しているように見えた。自分の領域に入ってほしくないという気持ちが、このような態度をとらせているように感じられる。ここでハンガーを差し出せば、それが静子をさらに警戒させるかもしれないと思って、江崎はまた腰を下ろした。

静子は不可解な夫人である。夫が誘拐されて、心配しているのは間違いないが、どこかに違和感を覚える。正志同様何事にも腰が引けているのは性格のせいなのかかもしれないが、単にそれだけではないという気もする。何か隠しごとをしているせいではないか。江崎は穏やかに言った。

「何か困っていることでもあれば、ご相談に乗りますよ」

「困っていることって？」

静子は驚いたように問い返した。

「ご主人をとり返すには、多少時間がかかると思っていたきたい。その際に、何か気がかりなことでもあると、気力が続かなくなってしまうからね。失礼ですが、ご高齢ですし、お体のことも心配なんですよ」

「体は丈夫です。今まで大病したこともありませんので」

静子は小さく答えて、俯いた。家庭を守りはするが、人生の決断はすべて夫任せで生きてきただろう静子が、突然夫を誘拐され、人生の支えを失った。いくら和江に頼っていても不安でたまらないだろうし、秘密を打ち明けたいに決まっている。問題はどうやって口を割らせるかだ。脅して白状させるのは簡単だが、静子に脅しをかけるのは気が進まなかった。

「遅かれ早かれ話すことになるんですよ。それなら早めに言ってしまっ、肩の荷を下ろしたほうがいいんじゃないですか。他の人たちに秘密にしたければ、決して他言はしませんよ」

静子は沈黙した。話そうかどうしようかと迷っているのかもしれない。江崎は静子の決断を待った。青山も作業しながら、こちらの会話に聞き耳を立てているのがわかる。

ドアの外で声がした。江崎が内心舌打ちをしながら言った。

「どうやらどなたか来たようですね」

静子は全身の力を抜き、安堵の表情を見せる。

それでも念のため江崎は言った。

「わたしは静子さんの味方ですし、できる限り早くご主人をとり返したいと思っていますからね」

「はい。ご迷惑をおかけしております」

静子は深々と頭を下げた。

江崎が立ち上がって次の依頼人を出迎えに行くと、ドアの向こうには越川正志が肩を落として立っていた。

「こんにちは。どうしました、正志さん？」

「.....すみません、やっぱり交渉役は無理です.....」

「やる前から何言ってんのよ！」

背後の和江が夫の背中をどつき、正志がうめきながら地面に倒れた。

「あんたみたいに一晩中めそめそ泣いていて、紅が帰ってくる？」

「来ません.....」

正志は背中に手を伸ばしてさすりながら、コンクリートの床の上から妻を見上げる。和江は仁王立ちで正志を見下ろし、言った。

「じゃあ交渉してとり返すしかないでしょうが！」

「でも俺には向いてないよ.....なあ、おまえならわかるだろう.....」

「わかるけど、男はあんたしかいないんだから、やるしかないのよ！ 紅がかわいいんでしょ？」

「.....かわいい」

「じゃあ電話に出な！ 腹筋百回より脅迫電話に出るほうがラクよ！」

それから和江は夫婦の会話に呆然としている江崎を見て、ほがらかに言った。

「あらやだあ！　うちの亭主が弱音を吐いたら、どんどんどついてやってね！　そうでもしないと、この人動かないからね！」

「はあ」

江崎は呟いた。正志のパワーのなさ、それを補って余りある和江のパワー。吐く息は揃って酒臭く、昨夜は一緒にずいぶん飲んだらしい。やはり絶妙の夫婦だと思う。和江が先にオフィスに入ると、正志は急いで立ち上がって、細君のあとを追った。

応接室に入ると、iPadに集中していた青山が顔を上げた。

「辻さんはキッチンに行きました。お茶を淹れさせてほしいって」

「何だって？」

「責めないでくださいよ。僕だって止めたんですから。だけど、どうしてもやらせてほしいってきかないんですよ」

江崎がため息をつく、静子がトレイに湯気の立つ湯飲みと布巾を載せて戻ってきた。テーブルを布巾でていねいに拭き、湯飲みを置く姿は、日常の自分を取り戻したようで、生き生きして見えた。

静子は江崎に言った。

「すみません、お台所をお借りしました」

「そんなことなさらなくても」

「いいんです。あなたも上がってください」

静子にはにこにこ微笑んでいる。これではどちらがホストかわからない。もしエプロンがあれば、静子は身につけていただろう。

十分ほどすると、大きなサングラスをかけた美登里が到着した。サングラスをはずすと、瞼が腫れていた。

青山の電話接続が完了し、ミーティングを始めることにした。時間はすでに六時半を指しており、テレビではめぼしいニュースを終えていた。江崎はリモコンで音量を絞る。

「テレビはつけっぱなしにしておきます。ニュース番組の直後にNLFが動くとは思えないが、いつ速報が入るかわかりませんのでね。皆さん、ここへ来る途中、尾行対策はしていただきましたね」

「したわよ。何度か急に立ち止まったり、逆方向に歩いたりでしょ。でも誰もついていなかったと思うわ」

美登里が言うと、越川夫妻と静子もうなずいた。

「いいでしょう。それじゃまずは昨夜の経緯をお話します」

全員が江崎に注目した。和江はノートを開き、ボールペンを握りしめた。記録係としての務めを果たす気になったらしい。

「昨夜、柏木さんに記者会見に出ていただいたのはご存知のとおりです。皆さん、テレビはご覧いただきましたね」

江崎が尋ねると、和江が言った。

「録画して、何度も見たわ」

正志がうなずき、静子も言った。

「わたしも和江さんと同じです」

江崎は先を続けた。

「午前一時にN L Fから柏木家に電話が入りました。それを今から流します。青山君、よろしく」

江崎の言葉を受けて、青山はi P a dから昨夜の脅迫電話の録音音声を流した。必死に訴える美登里の声とボイスチェンジャーで変声した犯人の罵声。越川夫妻と静子は固唾を飲んで会話に聞き入り、やがて終わったが、誰も動かなかった。

正志がかすれた声をもらした。

「……やっぱり俺には無理だよ。こんなやくざみたいなのが相手じゃ……うっかりしたことを言ったら、とり返しがつかなくなるんだろう……」

「殺す殺すって何なのよ。紅は無事なの……どうなのよ、江崎さん？」

先ほど威勢よく夫の尻を叩いていた和江の顔からは血の気が引いており、声も弱々しかった。正志は妻の様子を見て、口を閉ざしてうつむく。静子もまた夫の安否を心配しているのか、しきりに手をこすり合わせている。美登里は疲れた様子だった。

江崎は言った。

「この電話で安否確認はできませんでした。しかし前にも言ったように、N L Fは無意味な殺人を犯すことはありませんし、内部は秩序立っている。だからこそ人質を殺されないように、交渉の中で生存の証拠を要求し続けるのです。柏木さんのように、怒鳴られてもとにかく電話に出て、こちらの要求を伝えていくことが大事なのです」

江崎が説明しても、家族たちの表情は晴れなかった。しかしこの意気消沈は深刻なものではなく、脅迫電話から受けた一時的なショックによるものだ。こういうときにはマイナスの感情に注目して気休めを言うより、課題や質問を与えて、マイナスの感情から注意をそらしたほうがいい。江崎は家族たちを見た。

「さて一つ確認したいのですが、昨夜越川さんと辻さんには脅迫電話はかかってきませんでしたね？」

三人は顔を上げて頭を振る。

「やはりN L Fは柏木家へ脅迫電話をかけたあと、他の家族への電話をやめたということになります。今のところはこちらの筋書きどおりに進んでいる。つまり主導権を握っているのはわれわれということですから、少し交渉が有利になっています。先ほど和江さんがおっしゃったとおりですよ。めそめそ泣いていても、ご家族は帰ってきません。生きていると信じて、交渉を続けることです。次に柏木さんと警察との会話を聞いてください」

青山が美登里と前原の会話の録音データを流した。美登里のすすり泣きが聞こえたときには、美登里は恥ずかしそうに掌で顔を押しえた。

和江は胸を大きく上下させながら聞いており、会話が終わると鼻息荒く言った。

「やっぱり信用できない刑事だわ！ 自分たちにやる気はないくせに、こっちにはやることを押しつけてくるんだから！」

「これで本当に警察は当てにできなくなったんだな……」

正志は最後の頼みの綱が切れたとばかりに呟き、静子は膝の上を落ち着きなくさすっていた。
江崎は言った。

「警察に対してはこれで時間を稼げます。柏木さんは昨夜ずいぶんがんばってくださいましたよ」

江崎は一言添えた。

青山がモニターを見ながら、口を開く。

「昨夜の犯人との電話で分析できたことをお話します。過去のN L Fからの脅迫電話の声と九パーセントの確率で一致。声の主がテレビを見て電話をしてきた模倣犯でないとすれば、犯人はN L Fで確定です」

美登里が尋ねた。

「模倣犯の可能性もあるの？ 本物か偽者かどうかはどうやって確かめるの？」

「これから人質の生存確認をします。これは人質が活着ていることを確認すると同時に、犯人でない人物が犯人のふりをして脅迫してきていないかどうか、確かめることができるのです。マスコミで報道されていますので、便乗して金をとろうとする者が出てこないとも限りませんが、そういった模倣犯なら人質生存の証拠を提示できませんからね」

「なるほどね」

家族たちは感心したような顔つきに変わった。恐怖や不安を忘れて、自分のやるべき仕事に集中してきたのだ。

青山は先を続けた。

「昨夜の電話の人物を仮にAとしましょう。Aは過去のデータと照合すると、N L Fの交渉係ですが、いつもひたすら脅してくるだけです。そんなに機転のきくタイプではないし、おそらく責任ある立場の者ではない。柏木さんの提案に対して、何の回答もせず、ただ恫喝してただけでしょう？」

家族たちはうなずいた。

「Aはその場で決断して、回答する権限を与えられていないからです。『上司と相談して、またご連絡します』と言えない代わりに、ただ怒鳴っていたんですよ。Aの役目は被害者家族を怖がらせることですからね」

「そうなの」

家族たちはからくりがわかってほっとした様子だった。

美登里が言った。

「警察は話を引き延ばせと言ったけど、無理だったわ。だって一方的に切られてしまうんですもの」

青山が答えた。

「Aは逆探知を恐れていますから、二分前に電話を切り上げたんです。ですが、これもよい徴候です。交渉慣れしている証拠ですからね。犯人が素人の場合、何か不測の事態が起きたり、逮捕を恐れて神経質になったりすれば、衝動的に人質を殺すことはありますが、プロは冷静です。綿密に計画を立て、不測の事態にも冷静に対応します。ですから、人質を殺すなんて言うのは、口

だけですよ」

青山の説明のとおりである。ただし、プロは必要となれば冷静に人質を殺害するが、そんなことまで言う必要はない。被害者家族を落胆から救い出し、落ち着かせ、状況に立ち向かわせてやるのが誘拐コンサルタントの仕事だ。

「それともう一つ、Aのそばにご家族はいないと思われます。N L Fは完全に分業体制をとっており、司令部の下に誘拐係、その下に下調べ班、物資調達班、拉致実行班、脅迫班、監禁班、身代金受け取り班に分かれていることがわかっています」

「それじゃ電話を逆探知しても、人質の居場所はわからないじゃないの」

美登里が言うと、青山は頭を振った。

「まったくわからないというわけではありません。Aを逮捕し、供述を得れば、人質の居場所を突き止められることだってありますから。ただし可能性は低いと言わざるを得ません」

家族たちは一様にうなずいた。

和江が感じ入ったように言った。

「こんな電話一本でこれだけのことがわかるなんて」

「仕事ですから」

青山は無表情で言い放った。なぜここでこういうそっけない態度をとるのか、江崎にはわからなかった。これではせっかくの家族の好意に対して、突き放しているかのように見える。軽く微笑むなどしてコミュニケーションをとれば、今後の仕事がやりやすくなるのにと江崎は思った。

江崎は美登里のほうを向いた。昨日の晴信氏のインタビューを見て、念のため確認しておきたいことがあった。

「柏木さんにお伺いしたいことがあります。ご主人は内部蜂起や脱出を企てたりするとお考えですか」

「いいえ」

美登里は即答した。

「間違いないですか。テレビのインタビューではそのようなことを匂わせていたが」

「ありえないわ。日本のためなんて言っていたけど、あれは嘘。あの人は自分の保身と出世以外のことは考えてないもの」

美登里の言葉に越川夫妻と静子は驚いた。

「まさか。だってミスター誘拐なのよ」

和江が言うと、美登里は鼻で嗤った。

「ミスター誘拐が愛人作って、誘拐されて、誘拐保険をかけていたって事実を思い出してよ。日本のために立ち上がる度胸なんてないことくらいわかるでしょう。むしろ考えられるのは、ゲリラに賄賂をつかませて、逃がしてもらうことね」

江崎が言った。

「それは直接取引する可能性はあるということですか」

「それはあるわね」

江崎は考えた。

「しかしもし晴信氏が性格的に直接取引をしかねないとしても、N L Fが受けつけない。彼ら

にとって晴信氏は大義を傷つける敵ですからね」

「そうだとすると、あの人はN L Fに擦り寄っているはずよ。危険が及ぶとわかっている相手には、絶対に逆らわない」

「晴信氏がN L Fに協力的な態度をとるのは、基本的にはよいことです。人質は安全に監禁生活をやり過ごし、とにかく生き延びることが大切なのです。ただ、直接取引とは言わないまでも、安全のために何らかの情報を流す可能性はあるということなら、それはどうにかしてブロックしないと……誘拐保険のことをばらすことは考えられないが、晴信氏サイドからの情報もれは避けたい。何をもらして何をもらしていないかがわからないと、こちらの読みが狂います」

江崎は越川夫妻と静子を見た。

「越川さんと辻さんはどうですか。お嬢さんご主人は自力で脱出するようなタイプだと思いますか」

江崎が尋ねると、和江と正志は顔を見合わせた。和江が言った。

「そういうタイプと言われればそういう気もするけど」

「何を言っているんだ。紅は女の子だぞ。そんな勇ましいことをするわけないだろう」

「それはあんたの願望でしょ。紅は社会正義だとかの信念はないけど、かっとなったら飛び出していっちゃう子なのよ。売り言葉に買い言葉っていうか……それで家を出たんじゃないの。計画なんてなくても、あと先考えずに脱出することはある」

「状況次第では、ということですか」

江崎が尋ねると、和江はうなずいた。

「そうね。そのとおりだと思う」

正志が文句を言った。

「どこがそのとおりなんだ。母親だからって娘を理解しているような態度をとるな」

「あんたも父親なんだから、もう少し紅を理解したらどうなの？ あんたがそんなだから……」

和江はいらだった声で言いかけたが、途中で口をつぐんだ。

江崎は静子に尋ねた。

「辻さんはどうですか」

「すると思います」

いつもあいまいに言葉を濁している静子にしてはめずらしく断言したので、一同は驚いた。

その様子を見て、静子も驚き、周囲の視線に怯えたように言った。

「いえ、しないかも……」

「どうして脱出すると考えたんです？」

「それはその、主人は何ごとも筋を通そうとする人ですから……」

「そうよね。だからうちの娘を助けようと申し出てくれたんだものね」

和江が感謝の気持ちのこもった声で言った。

静子は口の中で呟いた。

「それはちょっとどうだかわからないんですけど、とにかく用がすんだら、たぶん……」

「用がすんだらってどういう意味ですか」

江崎が尋ねると、静子は目を大きく見開いた。

「用って？」

「用ですよ。今ご自分でおっしゃったでしょう、用がすんだらって。人質になって、どんな用があるんです？」

「わかりません。言い間違えたんです。すみません」

静子は小声で謝った。

和江がおおらかに言った。

「静子さんはもうお年なんだから、言い間違えくらいあるわよ。揚げ足とりはやめて、多めに見てあげなさいよ。江崎さんだっていつか年をとるんだからね」

これは言い間違えではない。何かの用があって、辻はわざとNLFに捕らわれたのか。しかし何の用だろう。静子は再び和江の傘の下に隠れてしまったが、これは必ず突き止めないと、交渉の方向に影響を与える要因となる。

美登里が腕を組んで言った。

「大塚杏子も自分から脱出を企てるような女じゃないと思うわ。あの人がそんな女を選ぶとは思えない」

「そうですか」

和江が美登里をちらりと見て言った。

「あたしは紅がミスター誘拐に助けてもらって、どうにか逃げ出してこないかって期待しているんだけどね」

「あの人が何の得にもならない人間を助けることはないわよ。もしあなたの娘さんが脱出するという情報をつかんだら、NLFに密告くらいはするでしょうけど。それよりどうして脱出しそうかどうかなんて訊くの？ 脱出したらまずいわけ？ うまいこと帰ってきたら、一件落着じゃないの？」

美登里の問いに、江崎は答えた。

「交渉にはあらゆる情報が必要です。脱出についても、可能性の一つとして頭に入れておいたほうがいいですから」

脱出はできれば避けたほうがいいのだ。成功してもその足で日本国内から逃げ出さない限り、すぐにまた誘拐される。そして次は簡単に値引き解放はされない。さらに脱出に失敗すれば、最悪だ。罰を与えられ、気力と体力を奪われる。それによって監禁生活を持ちこたえられなくなれば、交渉に時間をかけられなくなる。

柏木晴信ならこのあたりのことは承知していると思うので、他の人質をうまく説得してくれるといいのだが、自分の得にならないと動かない人物であれば、どこまで期待できるか。

江崎は言った。

「とにかく人質の皆さんにこちらでの交渉が進んでいることを知らせる必要はありますね。生存確認のための質問は考えてきてくださいましたか。お一人ずつ確認します」

家族チームは、人質の生存確認の質問をする～十一月二十日（木）午後八時

時計が午後八時を示した。オフィス内にいる人間全員が息をつめて、テーブルの中央にある電話を見つめる。誰もが失敗の可能性を脳裏によぎらせるほどの長い間があったような気がした。しかしそれはわずか一分のことだった。

午後八時一分を過ぎたとき、電話が鳴った。家族の誰もが身をかたくする。江崎が電話を見て「番号非通知です」と言ったあと、正志に向かって言った。

「それじゃ正志さん、お願いします」

「……ああ」

「がんばって、あんた」

和江が励ました。

江崎がスピーカーにする。

正志はいったんごくりと唾を飲みこんだ。

「も、もしもし」

正志がのどの渴きを訴えるような声で言うと、スピーカーから犯人の声がした。

「てめえは誰だ」

「こ、越川です。べ……紅の父親の……」

正志が最後まで言い終わらないうちに、電話は一方的に切られた。正志は半泣き状態になる。「だ、だから俺じゃだめだって言ったんだよ！ おしまいだ！ 紅はどうなるんだ？ 俺のせいで！」

江崎はスピーカーを切ってから、落ち着いて口を開く。

「青山君、何秒だ？」

青山が i P a d を見ながら、答える。

「五秒ですね」

「二分までには余裕がありすぎる。つまり逆探知対策で切ったわけではないということです。相手は？」

「A です。昨夜柏木さんの自宅に電話をかけてきた男と同じですよ」

「A の仕事についてはお話ししましたね。彼の担当は脅迫です。家族を動揺させるのが狙いなのです。今、正志さんを動揺させているように」

江崎はそう言って、正志をまっすぐ見た。

「家族にとって待ちに待った電話がかかってきて、すぐに切られたら、家族はどう思いますか。もう二度とかかってこないかもしれない、自分のせいで交渉ができなくなったのかもしれないと不安になるでしょう。N L F はそれを見越しています。だからこれも脅迫手段の一つなのです」

「でも」

正志は怯えたように眼球を小刻みに動かしながら、江崎を見た。

江崎は力強く言った。

「記者会見と昨夜の電話で、こちらの意図どおりに事が進んでいるとNLFは感じて、少し焦ったのでしょう。彼らは交渉の主導権をとり戻したかっただけですよ。家族を不安に陥れておいて、もう一度電話をかければ、家族は電話を切られまいとして、相手の言うなりになる。それを狙っているんです。だからそれに乗ってはいけません。大丈夫、電話は必ずかかってきます。それまでに気持ちを落ち着けてください。次の電話では言うべきことは必ず言うのです」

正志は頭を振った。

「だめだ、俺はもうだめだ。自信がない。何か口をすべらせたりしたらと思うと……」

「何言ってるのよ！ 紅がどうなってもいいの？」

和江が正志の肩をつかんだ。正志は力なく揺れて、まだ動揺が収まらないようだった。

美登里はふがない男だと言わんばかりに、靴のかかとをこつこつと鳴らしている。

江崎はiPadを睨んでいる青山のほうを見た。もう過去データとの照合はすんでいるはずだ。

「青山君、かかってきた電話がすぐに切られたケースは？」

「ありますよ。特にこのAは常習です。通話を切られてから二十分から三十分以内にかかってくる確率が最も高く、六三．二パーセントです」

正志は青山のほうを見て尋ねた。

「ほ……本当か」

「本当ですよ」

「二十分から三十分か。まだ時間があるようですから、お茶でも飲みながら待ってもいいんじゃないですか」

江崎が軽い調子で言うと、静子がさっと立ち上がり、キッチンに向かった。江崎はもう静子を止める気はなかった。手慣れた家事をして気持ちを落ち着かせることができるなら、好きなだけやればいい。

江崎は身を乗り出し、もう一度正志を見据えた。

「よく聞いてください、正志さん。NLFはこちらがどういう状況になっているのか知りたくてたまらないはずです。情報が入らないと、次の出方を考えられないからです。今日は電話を切つてすでに脅しをかけているので、次の電話では脅すよりもむしろできるだけ多くの情報を聞き出そうとしたいと思います。こちらにしてみればチャンス到来というわけですよ。落ち着いて、すべての項目を伝えること。それが紅さんを取り戻す第一歩です。いいですね？」

正志はようやくうなずいた。和江がほっとした顔で正志の手を握り締め、美登里は靴で床を踏み鳴らすのをやめた。

静子が急須をのせたトレイを手に戻ってきて、まずは正志の湯飲みに茶を注いだ。正志は緑茶を飲み干すと、時計を見た。

「八時十五分か。あと五分で二十分だな」

また長い沈黙があった。八時二十分ちょうどで再び電話の着信音が鳴る。青山がゴーサインを出し、正志はうなずき、江崎がスピーカーにした。

「もしもし、越川ですが」

「おまえなんか知らねえ。金は用意できたのか」

「お、お金は準備しているところです。わ、わたしは越川紅の父親です。柏木さんは警察の目を引いてしまうため、電話には出られなくなったんです」

「警察を裏切るっていうのは本気なのか」

「わたしたちは家族をとり戻したいんです。これは信じてもらうしかありませんが、この電話は知人のもので、警察は知らないし、逆探知もされていません。金もできる限り用意します」

「十億だぞ」

「柏木さんの奥さんが金集めに駆け回ってくれています。四人分の身代金をまとめて払いますから、四人揃って無傷で帰してもらいたいんです」

「四人全員だって？　じゃあ四十億だ」

「できる限りのことはします」

「いつ払える？」

「大金を用意するには時間が必要です。その前に四人が活着ている証拠がほしいんですが……」

「活着ている証拠だって？　ふざけんじゃねえ！　金を用意してから言え！」

こちらが要求を出したとたん、Aは怒鳴り出した。正志は震える手でメモをつかみ、声を振り絞るようにして続けた。

「無事だとわかれば、お金を払います。家族への質問を言いますので、返事をください。うちの娘への質問は……」

「質問はだめだ！　金の用意ができれば、改めて聞く！」

「ぶ、無事だとわからなければ、心配で金集めもできません！　みんな神経が参ってきているんです！　活着ている証拠をください、お願いします！　越川紅へは『父親からのプレゼントのクマの名前は？』と訊いてください！　辻明さんへの質問は『リビングの掛け軸の絵柄は？』、柏木さんへは『赤富士の絵にかけた保険金額は？』、大塚杏子さんへは『今年の夏にバッグを買ったのはどこの店か？』、明日の午後八時に電話を待っています！　お願い……」

ここでまた電話は一方的に切られた。正志は電話にすがりついた。

「もしもし？　切るな、待ってくれ！　紅は無事なのか？　無事に帰してくれ！　頼む！　一人娘なんだ！　紅の声を聞かせろ！」

スピーカーからはツーツーという音だけが流れている。正志の目には涙がにじんでいた。和江は口元を押さえて嗚咽をもらした。静子と美登里は疲れきったようにソファにもたれた。青山は無言で正志を見つめている。

江崎は青山に向かって言った。

「通話時間は？」

「二分九秒」

「二分を越えている。どうやら信用されたようだ」

江崎は正志に向かって言った。

「お疲れさまでした、正志さん。犯人から新しい要求項目はありませんでしたから、やはりこちらの状況を知りたかったのだと見ていいと思います。正志さんのおかげでこちらの用件はすべて

伝え、N L Fの信頼も勝ちとることができました。とても大きな前進です。質問の答えは必ず返ってきます」

人質たちは、縁起のよい質問に答える～十一月二十一日（金）午前一時

昨夜は午前二時に起こされ、脱出するという希望を打ち碎かれ、泣きながら散歩をした。紅が再びベッドに入ったのは、午前三時すぎだったと思う。疲労感が手足を重くし、涙を拭きながらまもなく寝ついたのだが、午前七時に起こされて掃除と朝食をこなした。ゲリラは規則に厳しいようで、眠っているようだからそっとしておこうという配慮を持つにも、リーダーの許可が要るのかもしれない。結局昼寝をして一日がすぎた。

もう深夜一時だ。紅と杏子は散歩の支度にかかった。ベッドサイドのランプだけつけた薄暗闇の中、金網に背を向け、服を身に着ける。

杏子は元氣のない声で言った。

「時差ぼけみたいな感じだわ。とにかく生活リズムを保たなくちゃ体が持たないわね。夕食が六時、二時間後の八時に就寝として、二時起きなら六時間は眠れるわ。そのあとは寝ずに起きて、足りない分は昼寝で補いましょう」

「それより散歩を断ろうよ。あたし、毎日夜明け前に起こされるなんて我慢できない。散歩が時差ぼけの元だってわかりきっているじゃない」

紅は柏木と顔を合わせたくなかった。

しかし杏子は着がえの手を止めて言った。

「わたしは散歩に行ったほうがいいと思うわ。一人にならないほうが安全だし、二人に会えるから」

紅は驚いた。

「杏子さんってまだ未練があるの？ あんなサイテー男に！」

杏子はすねたように言い返した。

「晴信さんをサイテー男って言わないでよ」

「だってサイテーじゃない」

「サイテーじゃなかったもの。晴信さんって順風のときはすごくイイ男だったのよ。余裕があって、わたしをとことん甘やかしてくれるの。一緒にいると、わたしって大切にされてるって思えて、姫気分になれるんだから」

「何のろけてんのよ！」

恋愛では気を使ってばかり、甘やかされたり姫気分になんてしてもらえたりしたことのない紅は嫉妬した。

杏子はため息をついて続けた。

「それが、逆風になると人が変わるのね。二重人格みたい。今回の旅行で初めて気づいたんだけど、あんなに意気地のない人だとは思わなかった。人間の真実の姿って、順風のときじゃなく逆風のときに表れるものね。一つ人生経験したわ」

紅は言った。

「学んでいる場合？　今までつき合ってたのに、裏人格に気づかなかったなんておかしいよ。それで本当につき合ってたって言えるの？」

「だって恋は熱病だもの。気づかないわよ」

杏子はあっさりと言い、紅は言葉につまった。杏子はだまされたに決まっている。遊ばれて捨てられたのだ。それでも熱病のような恋をしたと言い、柏木の裏人格を見てもまだ彼をかばう杏子がさらに羨ましくなった。

「もう熱病は治ったんでしょ。なら会わなくてもいいじゃない。あたしはミスター誘拐なんて会いたくもない」

杏子は声をひそめた。

「晴信さんに会うためじゃないの。一日一回お互いの安否確認するために会うのよ」

「人質同士で安否確認したって意味ない」

「意味が出てくるのは誰か一人でも解放されたときよ。もし誰かが解放されて、誰かが残されたとき」

「え？」

紅は驚いた。誰かが解放されて誰かが残されるという状況を考えたことがなかった。それは例えば杏子が解放されて、自分一人が残されるということだ。さらに柏木や辻も解放されて、自分だけが残されることもありうる。そうしたらやがて自分は忘れられてしまう。たった一人、この檻にとり残されたまま――考えていると、手足の先がずっと冷たくなった。

杏子は言った。

「毎日顔を合わせていれば、先に解放された人は、残っている人の様子を家族や警察に話してあげられるでしょ。健康状態だとかどんな監禁状態にあるとか。家族はきっとわたしたちがひどい状況にあると思いこんでいるだろうけど、ここの生活はそうひどくもないわ。ベッドは一人一台与えられて、食事はコンビニのお弁当や菓子パンとはいえ一日三回もらえる。そして暴力は受けていない。そういうことを家族に話してあげたら、きっと少しは気が楽になるわ」

杏子はただの楽観的な女ではなかった。いろいろ考えており、考えていなかったのはむしろ自分のほうなのかもしれない。

紅は言った。

「……いろいろ考えてるんだ」

「だってわたしはミスター誘拐とつき合ってたのよ。いろいろ聞いたもの」

杏子は笑った。

まもなく二時になり、二人は金網の外に出され、一階に下りた。リビングの灯りはついており、二人は見張りからソファに座るよう命じられた。二人が腰を下ろすと、すぐ辻と柏木も来て、同様に座る。周囲を自動小銃を手にした見張りたちに囲まれ、オリエンテーションのときと同じ状況になった。

ブラックマスクの男が紙を手に見れ、言った。

「散歩の前に一人ずつ質問に答えてもらう」

紅は緊張した。質問とは何だろう。何か都合の悪いことを訊かれたらどうしよう。紅がそんなことを考えていると、ブラックマスクが紙に目を落として言った。

「一番目は越川紅。『父親からのプレゼントのクマの名前は？』」

「クマ？」

紅は拍子抜けして問い返した。

ブラックマスクは厳しい声で言った。

「質問するな。回答だけ言え」

ブラックマスクは自分を嫌っているから、ささいなことでもつらくあたる。しかし入浴させてもらえない自分だって相手を嫌っているのだ。紅は言った。

「あたしはお風呂に入りたいの。もう一週間も入ってない。お風呂に入らせてくれないなら、質問には答えない」

自動小銃の銃口が一斉に紅を向いた。杏子と辻が血相を変えて、紅をつついた。柏木は軽蔑しきった目で紅を見る。

ブラックマスクがくり返す。

「もう一度訊く。クマの名前だ。答えたくないなら、われわれのほうに問題はない」

「問題ないなら、答えない！ お風呂よ、お風呂！ お風呂に入らせて！」

杏子と辻が青ざめて言った。。

「紅ちゃん、答えて！ お願いだから！」

「そうだ、ここは答えておいたほうがいい！ 老い先短いわたしのためになると思って！」

辻にそこまで言われて、紅はしばらく唇を尖らせていたが、しぶしぶ答えた。

「……ラッキー」

今の状況を考えると、最悪の回答である。ブラックマスクが答えを紙に書きとった。

「次、辻明。『リビングの掛け軸の絵柄は？』」

辻も面食らったようで、少し考えこんでいた。

「どうした、辻？」

「ああ、最近ものの忘れが激しくて、何だったかな……そうだそうだ、鯉だった。鯉です」

「次、柏木晴信。『赤富士の絵にかけた保険金額は？』」

柏木もまた考えこんだ。

「ちょっと待ってくれ。赤富士の絵か。あれはたしか……二百万だな」

ブラックマスクは柏木を見下ろして睨んだ。

「絵なんかに二百万かけるなら、弱者救済をしようという気にはならないのか」

「わかっている。家内に伝えてくれ。赤富士を売って、身代金の支払いにあてろと」

ブラックマスクは鼻で嗤った。

「テレビでの発言は嘘だったんだな。ミスター誘拐にはプライドがないと見える」

柏木の肩を持ちたくはないが、贅沢品を持っていれば咎められ、それを売ると言えばプライドがないと言われる。どちらにしても何かしら言われるのだ。

「最後に大塚杏子。『今年の夏にバッグを買ったのはどこの店か？』」

「バッグ？」

杏子は驚いたようにくり返して、一瞬だけ柏木を見た。それから言った。

「銀座です」

「日本国民が苦しんでいるのに、おまえは銀座でバッグを買ったのか」

「すみません」

杏子は視線を落として謝った。

四人は質問への回答を終えると、命じられて深夜の散歩に出た。昨夜と同じく自動小銃を構えた見張りたちに囲まれながら、柏木、辻、紅、杏子の順で一列になり、裏庭をぐるぐると歩く。いくら歩いてもどこにもたどり着かない散歩は、やはり檻の中にいるのと同じく無意味に思えた。

紅はぶうぶう文句を言った。

「あの質問は何なの？ 答えたくなんかなかったのに！」

柏木が冷ややかに言った。

「何て馬鹿なんだ。あれは人質が活着ていることを家族に知らせるための質問だ。人質本人しか答えられない回答を伝えて、交渉してもらうんだ」

「え、そうなの」

紅は驚いた。

柏木は馬鹿にしきった様子で続ける。

「質問が来たということは交渉は進んでいるということ、四人同時に質問されたというのは四人同時に交渉されているということだ。なぜ四人同時なのかはわからないが」

柏木は最後の言葉を独り言のように言って口を閉ざした。

紅は足を引きずるようにして歩きながらぼやく。

「それでも何でよりによってラッキーのことを訊いてきたんだろ。誘拐されてどこがラッキーなんだか。しかもオトンを思い出しちゃった。やだやだ」

辻が重大な秘密を打ち明けるように言った。

「そこなんだがね、越川さん。わたしの質問の答えは、本当はただの『鯉』じゃなくて、『鯉の滝のぼり』なんだよ」

「へえ、そうなの」

紅は辻の言わんとする意図がわからず、適当に相槌を打った。

辻は続けた。

「答えを並べると意味がありそうなので、あえて『鯉』だけで止めておいたんだがね。『ラッキー』と『鯉の滝のぼり』、それに柏木さんの質問は『赤富士』だろう。何だか縁起のいい言葉ばかりじゃないか」

「.....そう言われてみれば、そうかも」

「きっと交渉は順調に進んでいると伝えたくて、この質問を出してきたんじゃないかね。柏木さんもそう思わないか」

柏木は冷淡に言った。

「『ラッキー』と『鯉の滝のぼり』についてはその可能性はある。しかしわたしの『赤富士』はまったく別の意味を指している」

「どんな意味だね？」

「教える気はない」

柏木は相変わらず居丈高で非協力的だった。まともに相手をしていると、腹が立って仕方ないので、紅は無視することにして、杏子に水を向ける。

「ねえ、杏子さんはどう？ 何か意味がありそう？ バッグにラッキーな意味がある？」

紅は杏子のほうを振り向いた。しかし杏子は浮かない顔をしている。

「わたしも質問の答えを全部は言ってないの。銀座だけにしたのは……本当のことを言うと犯人たちに怒られそうだったから」

「本当はどこで買ったの？」

「シャネル銀座よ。今年の夏買ったバッグはシャネルだけ。だけど、それは……」

杏子はいったん言葉を途切れさせる。

「それは晴信さんに買ってもらったものなの。ねえ、晴信さん、この質問はどういう意味だと思う？」

柏木は言った。

「おまえの夫が浮気を調査していたということだろう」

「そんなはずないわ。もし調査して、決定的な証拠を握っていたら、平然と黙っていられるほど器用な人じゃないのよ。この質問はおかしいわ。何か変なのよ」

杏子は弱々しく呟いた。

「わたしのことを見捨てるっていう意味かしら。バッグを買ってくれた相手とうまくやれとか……」

紅は無言で二人の会話を聞いていた。紅の本音は杏子への同情が半分、いい気味だという気持ちが半分だった。男からシャネルのバッグをプレゼントしてもらえることへの羨望、いくら高価なシャネルとはいえ、バッグ一つで夫から助けてもらえないなら、杏子は大損したことになるため胸がすっとしたというのもあった。

それから紅は思った。自分はいつからこんなにいやな人間になったのだろう。誘拐されてからは歯止めがきかなくなったようにいやな人間になっていく。気持ちが沈んできた。

杏子もまた不安に駆られているようで、いつものように声をかけてはこなかった。いつも助けてもらっているんだから、こんなときくらい自分のほうから杏子を慰めてもいいんじゃないかと紅は思った。わかっているのに、できなかった。

紅は唇をかたく結んで、深夜の山中の庭を歩き続けた。

家族チームは、身代金の相場金額を考える～十一月二十一日（金）午後八時

家族たちが集まる前に、江崎は、昨夜公衆電話から柏木家に脅迫電話をかけておいたことを青山に話した。青山は「そうですか」と一言返しただけだった。首尾はどうだったかと訊くつもりはないらしい。関わり合いになりたくないのか、自分の脅迫手腕を信頼しているのか。いずれにしろどうでもいいことだった。

午後八時になった。江崎のオフィスで四人の家族と二人の誘拐コンサルタントが息をつめて電話を待っている。正志はしきりにグラスの水を飲んでおり、和江がトイレが近くなると心配していた。

電話が鳴った。正志が武者震いのように体を震わせ、江崎がスピーカーボタンを押す。

「越川です」

Aの声が室内の空気を緊張させる。

「金は用意できたか」

「いくらかは……」

「いくら用意できたんだ？」

江崎は正志を見つめた――ここですぐに質問に答えてはいけない。取引に持ちこむべきだ――正志は唇をぐっと噛んでから、口を開いた。

「先に昨日の質問の答えを聞かせてください。四人は生きているんですか」

「生きているって言ってんだろうが！ 四十億払えば、無傷で帰してやるよ！ いくら用意できたのかさっさと答え！」

Aはまた怒鳴ってきた。しかし正志は思ったより冷静に怒鳴り声を受け止めていた。要求どおりに進まなければ、怒鳴って要求を通すのがAのやり方なのだと、正志も理解してきたのだ。

「し、質問の答えが先です。こ、答えを聞かせていただければ、現在お支払いできる金額をすぐにお答えします」

正志の声は震えていたが、踏んばろうとしている気持ちは伝わってくる。

「そんな態度でいいのか？ おまえのかわいい娘に二度と会えなくなるぞ！」

「生きている証拠をください。そうしたらすぐに金額を教えます。お願いします。わたしたちは疲れきっています。金を集めるためにも、生きている証拠が欲しいんです。頼みます。このとおりです。お願いします」

取引にこちらが勝ったとしても、Aの顔を潰してはならない。誘拐の交渉では、毅然として譲らず、しかし相手を立てて、敗北感を味わわせないことが大切なのだ。

Aは突然沈黙した。不安を掻き立てるいやな沈黙だ。家族たちは息をのんで、回答を待った。

Aは突然言った。

「ラッキー、鯉、二百万、銀座。それと柏木晴信から奥さんへの伝言だ。『赤富士の絵を売って、活動支援金の支払いにあてろ』」

正志は泣き出さんばかりの声を上げた。

「あ、ありがとうございます！　ありがとうございます！」

「金額だ」

「今用意できているのは一億二千万円です。この金額ならすぐにでもお支払いできます」

Aは声を荒げて吐き捨てた。

「一億二千万？　馬鹿か、てめえは？　そんな金額で解放できると本気で思ってんのか！」

「う、うちはワーキングプアなんです。辻さんは年金生活だし、大塚さんだって資産家じゃないし……このお金も全員が貯蓄を崩し、親戚と友人に借金してどうにか……」

「言い訳は聞きたくねえ！　金だ、金！　ちゃんとわかってんのか！　てめえのかみさんもさられて、ぶっ殺してやろうか！」

「わ、わかりました。も、もう一度みんなに借金できる当てはないかと訊いてみますので、ひと晩時間を……」

ここでプツツと音がして、通話が切られた。正志は額ににじんだ汗を手の甲で拭い、それから自分に言い聞かせるように呟いた。

「……いいんだ、いいんだ、これで。言うことは言ったんだし、質問の答えももらえたし、それにAが突然電話を切るのは作戦なんだから、俺のせいじゃないはずだ……」

次の瞬間、正志は突然頭をかきむしった。

「だめだ、電話を切られたんだ！　俺は何かあいつの気に障ることをやってしまったんだ！　俺のせいでみんな死ぬんだ！　紅い、オトンはおまえにどう詫びたらいいんだ！」

正志はがばっとテーブルに頭を伏せた。感情の起伏が激しすぎて、どう対処したらいいのかわからない。一同が呆然と正志を見つめていると、和江が記録用のノートを丸めて、正志の頭をパソコンと一発叩いた。正志は顔を上げ、正気に返ったように、目をぱちぱちとさせている。

和江が江崎に向かって尋ねた。

「で、うちの亭主の交渉はどうだったの？　あれでよかったわけ？」

江崎はようやく我に返り、口を開いた。

「ああ、ええ、交渉ですか。そうですね」

今日の電話には引っかかることがあった。しかし今はそれを家族たちの前で言わないほうがいい。江崎は笑顔をつくった。

「上出来でしたよ、正志さん」

「そうですか」

正志はほっとした顔になった。江崎は続けた。

「それじゃ分析に入りましょう。青山君、通話時間は？」

「二分二秒です」

「やはり逆探知を警戒してはいない。そして質問の答えを用意してきた。これは前向きにとらえていいと思います」

和江が尋ねた。

「こんなことが前向きな材料なの？」

「そうですよ。こちらが必死で質問したからって、N L F側がそれに答える義理はないんです。

それなのにちゃんと回答をよこしたということは、要求に答える用意はある、約束を守る気はあるということです。ですから、こちらも精一杯の誠意を見せて、N L F の信頼を勝ちとらなくななりません」

「娘を誘拐した犯人に、信頼されたかないけどね」

和江が言い、江崎は苦笑した。

「お気持ちはわかりますが、向こうも信頼できない相手と取引する気にはなれないでしょうから、ここは割り切ってください。では、生存証拠について検討しましょう。正志さん、『ラッキー』ですよ。よかったですね」

正志が言った。

「間違いなく紅です。ラッキーです。あの子が五歳のときに、わたしが買ってやったクマのぬいぐるみでしてね。紅はそりゃあ喜んで、寝ても起きてても片時も放しませんでしたよ。ラッキーを思い出して、わたしが心配しているって、気づいてくれたでしょうかね」

「きっと心強く思っていらっしゃると思いますよ。辻さんの回答は『鯉』だけですか。微妙なところですね」

静子は小首をかしげ、緊張気味に言った。

「でもあのう、主人はあの掛け軸を買ったとき、これで運が上がると喜んでおりましから……『滝のぼり』とつけなかったのは、わざとだと思います」

「縁起のいい言葉ばかりが並ぶことに気づいて、N L F に気づかれないよう、わざとわかりにくくしたのかもしれないですね。次に柏木さんの『赤富士』ですが、回答は『二百万』。質問にメッセージが隠されていることに気づかれたはずだ」

美登里があきれたように言った。

「あの人はそういうところで抜け目のない人よ。うちに赤富士の絵なんてないのに、ちゃんと『二』のつく回答を返せるのだから、あきれるわ。でも、すでに主人は殺されていて、N L F が適当な金額をあげたという可能性はないの？」

「まったくないとは言い切れませんがね。ですが一から九までの数字のうち、二を提示してきたわけですから、今のところは生存しているという方向で交渉していいと思います。それに伝言もありますしね」

「そうね」

美登里はため息をつく。まるで生存がわかって残念がっているようにも見えた。

江崎が説明した。

「『赤』が『AKA』で頭文字『A』、『富士』が『FUJI』で頭文字『F』、これに保険金で、こちらが伝えたいことは『AF 保険』だと察したはずです。そして『二億円』を示すために、金額に『二』をつけてよこした。さらに奥さまへのメッセージが、『赤富士の絵を売って、活動支援金の支払いにあてろ』ですから、これは『AF 保険を使って、身代金を払え』ですね。こちらがAF 保険さんと連絡をとっていると知れば、晴信氏も少しは安心されるでしょう。これで直接取引は防げると思います」

江崎は言葉を切ってから続けた。

「それから大塚さんの回答の『銀座』ですが、これも当たっていますね。ただ、大塚さんに限っては、あまり推測されないといいんですがね」

「あの夫が見捨てたんだもの、仕方ないでしょう。わたしは浮気調査で知っていることしか情報提供できないわ。二人が密会していたホテル名を質問しなかっただけ、ありがたいと思ってほしいわよ」

「大塚さんにだけ質問しないわけにはいきませんからね。彼女がこの質問をどう受け止めるかはわからないが、とりあえず生きていることはわかったのだから、いいでしょう」

「わたしが夫の愛人を助けるほどよくできた妻だったなんて、自分でもあきれられるわ」

美登里は不満げに言った。その様子を和江はせっせと記録ノートに書きとめていた。

青山が言った。

「もう一度皆さんに会話を聞いていただきたいのですが、録音を再生してもかまいませんか」

一同はうなずいた。青山が録音データを流し、全員が耳を立てるようにして聞き入る。終わると、青山が言った。

「Aは『いくら用意できたのか』『金額は?』と三回訊いてきています。つまり最初から四十億なんて金は期待していないということです。常識的に考えて、無理な話ですからね。通話時間は長めで、支払可能な金額を確認したがついています。四人同時解放についても、特にコメントがありませんでした。つまりNLFの肚づもりはこうです。『納得できる金額を支払うなら、四人同時解放の要求を呑む』」

家族たちは交渉の前進を知って、一様に安堵の表情を浮かべる。江崎は黙ってその様子を眺めていた。

青山が言った。

「ここからの問題は、いくらならNLFは納得するのか、その見極めをすることです。今回我々が提示したのは、一億二千万。残念ながら、今回のようなケースの過去データは弊社のデータベースにはありません。しかしNLFは晴信氏一人でも約一億はとるつもりだったはずですから、二千万をどう受け止めたかと考えてみましょう。Aは明らかに不満そうだった。晴信氏の顔に泥を塗りたいという意図と他三名の身代金を金に換算して二千万では、当然納得できないでしょう」

美登里が言った。

「でもいくらなら納得するって言うの? NLFが納得する金額なんて、わからないじゃない。それに人間はお金なんていくらでも欲しいものよ。際限なくつり上げられても、おかしくないわ」

「いいえ、納得する金額というのはたしかに存在するのです。例えば服を一着買うとしましょう。そのとき皆さんは、季節や品質やブランドバリューなどを考えて、この値段なら安い、高いという判断をされ、折り合いがつけば購入するでしょう。それと同じことです。交渉内容と過去のデータを分析して、NLFが本当に希望している身代金金額を探り当て、そこに落ち着くよう照準を合わせていきます。もちろん四十億はこれに当てはまりません。以前も言ったように、四十億なんてふっかけもいいところですからね」

江崎は青山の話に黙って耳を傾けていたが、片手を軽く挙げた。

「たしかにN L Fが希望する身代金金額は存在します。それは青山君の言うとおりです。しかしわれわれは二億で収めなければならない。N L Fの希望金額が二億以上だった場合、こちらに支払い能力はないのです。ですからこちらから働きかけて、二億以下で納得させるやり方を考えなければ」

青山は眉をひそめる。

美登里は腕組みして尋ねた。

「どうやって納得させるの？」

「簡単なことですよ。ない袖は振れないと、N L Fにわからせればいい」

「どういうこと？」

「家族は可能な限り金をかき集めた、その精一杯の結果が二億だと、N L Fにわからせればいいのです。これ以上はどれだけ脅しても金を搾りとれないとわからせ、二億で四人を解放させるしかないと思わせるのです。ですからわたしは、探りを入れる交渉よりも、こちらは精一杯やっている、でもこれが限界だとくり返し訴えていく交渉を薦めます」

江崎は青山を含めた一同を見渡した。江崎には、訴えるやり方のほうが交渉役の正志には向いているという考えもあった。電話で相手の肚を探るには、正志は機転が利かなさすぎる。しかし精一杯がんばっている、なかなか金が集まらない、それでも娘を帰してほしいという泣き落としをするには、適任だと言える。それに正志はN L Fが敵だとみなしている裕福な人間ではない。それも金がないとわからせるには有利に働く。

青山が言った。

「金額の折り合いがつかなければ、人質が危険にさらされるかもしれませんよ」

「四人で一億なら危険だろう。だが二億なら勝算はある。それにA F保険さんにとっても、支払金額は低いほど都合がいいはずだろう」

江崎はそう言ってから、家族たちの顔を見た。

「では、青山君とわたしは席をはずします。皆さんで話し合って、どちらにするか決めてください」

江崎は青山と視線を合わせる。案の定青山は不満そうな表情だった。しかし江崎はかまわず、先に立ち上がって隣室に向かった。青山はi P a dを持ってあとに続く。

青山の子供っぽい自意識につき合っている暇はない。江崎はドアを閉めるとすぐ、機先を制した。

「おかしいと思わないか」

江崎の質問に青山は不意打ちを食らい、目を大きく見開いた。

「何が？」

「質問への回答が早すぎる」

「どういう意味です？」

江崎はデスクの前の椅子を指さして、青山に座らせた。自分はデスクの椅子に腰かけ、口を開く。

「N L Fは身禁法施行後に身代金を支払わせて、晴信氏を犯罪者に仕立てたいはずだ。そのため

には時間を引き延ばす必要がある。それなのになぜ翌晩回答をよこしたのか引っかかる」

青山は緊張した顔になって、江崎を見た。江崎は続けた。

「データバンクで調べてくれ。生存証拠の質問回答は必ず翌日なのか。例外はないのか」

「今調べます」

青山は i P a d を取り出し、過去データを確認し、表情を緩めた。

「翌日の回答率は八〇．三パーセント。いつものパターンを踏襲しただけですよ。問題ないんじゃないですか」

「そうかな」

江崎は渋面を作り、首筋を掻いた。背もたれに体を預けて反らし、天井を見上げながら尋ねる。

「翌日回答でなかった二〇パーセントについては、どういう理由になっている？」

「待ってください……そうですね……家族側が金の準備に熱心でないと判断された場合が多いようです。やはり彼らの目的は金なんですよ。政治目的の誘拐より金銭目的の誘拐のほうが交渉しやすいですから、N L F の方向転換はこちらには助かりますけどね」

「そうだな」

江崎は上の空で答えた。

「だが、八〇という数字だけでは、どういう状況での翌日回答だったのかわからない。交渉の序盤なのか終盤なのかでも、N L F 側の心理は違っていたはずだし……」

江崎は背もたれの上部に頭を乗せて目を閉じた――早期に交渉を進めるとして、N L F 側のメリットは何だろう。

青山は言った。

「ですが、今のところ、過去データとの大きなズレはありません。今回のケースではN L F の出方はオーソドックスで、変化球を投げてきてはいない。むしろ警察の裏をかくというこちらの変化球にも冷静に対応しています。むしろ僕は身禁法があるから、翌晩の回答になったと解釈しますね。身禁法を盾に支払い拒否されたら困る、スピーディに金を回収したいから、スピーディに回答する。彼らの第一目的は金のはずですから、安全策をとったのでしょう」

「それも一理あるな」

江崎はそう言ってから、その考えを打ち消すように強く頭を振った。

「いや、だが俺はどうしても引っかかる。捕らえているのはただの人質じゃない。あのミスター誘拐なんだ。復讐したいという意図も強いはずだ。それなのに、どうしてこんなにオーソドックスに交渉が進む？」

「まだ交渉は始まったばかりですよ。これから恐喝のカードを切ってくるでしょう。不倫を公表してマスコミを扇動し、晴信氏を社会的に抹殺する。解放後、夫人が警察を裏切って交渉したことも公表するかもしれませんね。復讐にはそれで十分じゃないですか」

たしかにそれはクリーンなイメージで売っている柏木にとっては大きなダメージになるだろう。しかしN L F の復讐にしては手ぬるい気がする。

「単純に考えてみよう。晴信氏にとって最悪な状況は何だ？」

「身代金を払ったのに、解放されず、殺されることでしょうかね」

「そのためにN L Fは交渉を進めているとは考えられないか」

「その可能性がないとは言えませんが」

青山は言葉を切って、考えこんだ。

「でも過去のデータによれば、N L Fは希望する身代金を受けとれば、ほぼ確実に人質を解放しています。例外的に帰してもらえなかったケースは、金額の折り合いがつかなかった、身代金引渡し時に警察の介入に気づいた、あとは何らかの理由で突然N L Fが連絡を絶った――これについて我々は、監禁先で何らかのトラブルがあり、人質を帰せなくなったものと見ています。N L Fは誘拐するが、交渉に応じる。金さえ払えば、人質を帰す。矛盾した言い方になりますが、誠意ある誘拐犯だと思います。金さえ払えば解放されるという信用を得たほうが、ビジネスしやすいというだけですけれどね」

「だが、最近世論が逆風になり、N L Fは次第に追いつめられている。それをあおった一人が晴信氏だ。追いつめられた犯罪者は過激化に走る。それは古今東西まぎれもない事実だ。胸騒ぎがする」

「でもN L Fの真の目的を知る方法はないんですよ。交渉の中で根気よく情報収集を続けていくしかないでしょう」

「君の言うとおりで。だが、スムーズに交渉が進んでいると見せかけて、突然ぐっさりと背中からやられそうな気がする」

「悲観的ですね。僕には取り越し苦労にしか思えませんが」

「こう見えて俺は慎重派なんだ」

江崎は足を組み、爪先で健康サンダルをぶらつかせた。青山はiPadから頭を上げた。二人はしばらく無言で座っていたが、江崎がふと思いついたことを尋ねた。

「なあ、青山君。俺は直感を頼りにこの仕事をやってきたんだが、コンピュータは直感できるのか」

青山は江崎をまっすぐ見てから言った。

「コンピュータは直感できませんが、誘拐のような不安定な状況では、直感以上に役立ちます。根拠のある情報を依頼人に提示することは重要です。客観性が安心感を与えられますからね。いくら大丈夫大丈夫、直感を信じてくれと言われても、単なる思いつきだけでは限界があるんじゃないですか」

江崎は青山の回答に何もコメントしなかった。

ドアがノックされ、和江の声がした。

「決まったわよ」

江崎と青山は隣の応接室に戻る。椅子に腰を下ろすと、美登里が言った。

「江崎さんのやり方で行くわ。何としても二億で収めてもらわないと困りますからね」

「わかりました」

江崎は懸案を隠してうなずいた。青山はお面のような無表情を顔に張りつかせて、一度だけ首を縦に振った。

人質たちは、柏木の誘拐保険のことを聞く～十一月二十二日（土）午前二時

深夜二時の散歩の時間になった。紅と杏子は午後八時に就寝し、午前一時半に起こされて準備をし、外に出された。紅は黙って歩いていることに耐えられず、見張りたちに聞かれないよう体の向きを変えずに、前方の辻に尋ねた。

「辻さん、糖尿病の薬は手に入ったの？」

「まだだよ。でも注文はできた。そんなに特殊な薬じゃないから、どこかで手に入れてもらえるんじゃないかと思うよ」

「よかったね」

「ありがとうよ、越川さん。心配してくれて」

辻が礼を言ってくれたことが、紅の胸に嬉しく響いた。感謝されたということは認めてもらえた、ものすごくいやな自分でも人の役に立ったということだ。紅は人とのあたたかな交流に飢えていた。辻と話し続けたかった。

「ねえ、訊きたいことがあるんだけど……」

「何だね？」

「お弁当と一緒にゼリーが入っていたことなかった？」

「ゼリー？ いや」

紅はうしろを振り向かずに、背後の杏子に言う。

「やっぱり入ってなかったって」

「いったいどういうことかしら」

辻が尋ねた。

「どうしたんだね？」

「あたしたちのところにはときどき差し入れが入ってくるの。ゼリーが二つ。クッキーもあったんだけど。それにメモも添えてあったの」

「メモ？」

「『内緒で食べてください』って。どう思う？」

「さてなあ。クッキーとゼリーか……きっと二人が美人だから、ファンになった青年でもおるんじゃないかな。わたしのところに甘いものが来ないのは……糖尿病のせいだろうなあ」

辻は後半をせつなそうに言った。

先頭の柏木が話に入ってくる。

「これだから素人は」

柏木がたった一言言葉を発しただけで場の雰囲気が悪くなる。しかし紅は「素人は」の続きを聞いたかった。

「それじゃ柏木さんは、どうしてあたしたちだけに差し入れが届くんだと思うの？」

「ファンなわけないだろう。アイドル歌手にでもなった気でののか。わたしはゲリラのやり方

を知っている。食べさせておいて、あとから請求書が届くんだ。クッキー十万円、ゼリー二十万円くらいだな。わたしなら食べずに返品する」

柏木は習慣なのか人を見下すような口調で言った。

紅は反発した。

「請求書なんて来てないよ。自分のところに差し入れがないからってひがまないでくれる？ 見張りの人たちはあたしたちに積極的に話しかけちゃいけない規則だって言ってたんだよ。だから内緒で差し入れすることだってあると思う、きっと」

「何をうぬぼれているんだ。話しかけないのは見張りが素人で、プロじゃないってだけだ」

「それ、どういう意味？」

紅が尋ね、辻と杏子も興味深そうに話の続きを待っている。

柏木はもったいぶったため息をついた。

「見張りは正式な訓練を受けたプロのゲリラじゃないということだ。人質を金網の中に入れておき、遠巻きに見張っているだけの仕事に、専門的な訓練を受けた人材を使う必要はない。ゲリラだって優秀な人材は不足しているからだ。おそらくここでのプロはブラックマスクの男だけだろう」

まるで正社員が店長一人、以下全員アルバイトで成り立っているチェーン飲食店のようだと思紅は思った。しかしあのブラックマスクがプロだというなら、この組織の人材不足は深刻だろう。

柏木は続けた。

「見張りたちは何か問題が起きても、直接手を下すことはなく、リーダーに報告して処理してもらう。だが、リーダーの知らないところで見張り与人質が親しくなった場合、話は変わってくる。こういった、誘拐犯人与人質が親しくなることをストックホルム症候群と呼ぶ。スウェーデンのストックホルムの事件で最初に確認された現象だからだ。もしわれわれの間でストックホルム症候群が起きれば、人質に問題が起きても見張りは報告しなくなるだろうし、エスカレートすれば脱出の手引きをするかもしれない。だから見張りにマスクをかぶせて人質が親近感を抱かせないようにし、人質を個人名で呼ぶことを禁止し、話しかけさせないようにする」

柏木は紅に聞こえる大きさの声で独り言をもらす。

「こんなことをいちいち説明しなければならないなんて」

うんちく披露で優越感に浸れて満足しているくせに、と紅は思った。知識はありがたかったが、紅はさらに反発心を強める。

「柏木さんってどうしていちいち上から目線なの？ あたしたちは人質同士なんだから、協力しようとか思わないの？ ゲリラのオリエンテーションVTRを少しは学べば？ そんな言い方ばかりしていると、あたしが先に解放されても、家族に安否を伝えてあげないからね」

辻が「まあまあ」と言い、杏子が「紅ちゃん」と言って止めた。

しかし柏木は心底不思議そうに尋ねた。

「なぜおまえが先に解放されて、わたしがあとになると思うんだ？」

「だって奥さんが身代金を払うはずじゃないじゃない。テレビのVTRを見たよ。みんなが身代金を支払わなければ、日本はよくなるんでしょ。奥さんは柏木さんのために身代金を払いたくたって払えないじゃない」

柏木はあきれたように言った。

「何だ、そんなことか」

「そんなことって何よ」

「妻が払わなくても、保険会社が払う。わたしは誘拐保険に入っている」

それは爆弾発言だった。紅、杏子、辻は驚き、言葉を失った。テレビであれだけ身代金を払うなど言っておいて、自分はちゃんと誘拐保険に加入していたと言うのだ。

柏木は鼻を鳴らし、再び言葉と態度に優越感をにじませる。

「昨日の質問に隠された裏の意味を教えてやろう。『赤富士にかけた保険金』というのは、『A F 保険にかけた誘拐保険金』を示している。保険会社はプロだ。公にならないよう、妻や娘よりもうまく犯人と交渉するはずだ。だから必ず身代金は支払われる」

紅が言った。

「柏木さんって何考えてるの？　じゃあ日本の将来のために身代金を支払うなってテレビで言ってたのは、何なのよ！　どうして誘拐保険に入ったのか、ちゃんと説明してよ！」

「大きな声で誘拐保険と言うな！　見張りに聞かれたらどうするんだ！」

柏木は紅を叱りつけてから、すました態度で続ける。

「もちろんあれはあれで真実だ。だが、わたしは大衆を率いていくのに必要な人間だから、誘拐されて殺されるわけにはいかない。だから日本のために、誘拐保険をかけた」

「じゃあ柏木さんは、大衆は殺されてもかまわないけど、自分は特別だから助かるべきだと言うの？」

辻がぼそりと言った。

「単に生き延びたいだけじゃないかねえ」

柏木は二人の発言を相手にせずに言った。

「つまりわたしは見張りに逆らわず、ひたすら待っていれば解放されるということだ。だからわたしの心配はしなくてもいい。それより自分たちの心配をしたらどうなんだ。身代金を払えるあてはあるのか」

三人は沈黙した。杏子がすがりつくように尋ねた。

「晴信さん、その保険でわたしの分も払えるってことはないわよね……」

柏木は突然テレビで話しているような甘い声に変えて言った。

「それは無理だよ、杏子。こうなった以上、過去の関係もなかったことにしたほうがいいと思う。君とわたしに関係があったと知れば、世間は騒ぐだろうし、ゲリラも君に乱暴するかもしれない。わたしは君を守りたい。わかってくれ、杏子」

杏子は口をぽかんと開けて言葉を失ったので、辻と紅がコメントした。

「単に自分を守りたいだけじゃないかねえ」

「二人が不倫関係にあったことなんて、きっと世間は知ってるよ。言い逃れなんてできるわけじゃない。あたし、解放されたら柏木さんの正体をばらしてやる」

「正体って何だ？　中傷する気なら、証拠を出せ。さもなければ名誉毀損で訴える」

柏木は悠然と言い返した。悔しいが、世間のやり方については、柏木のほうが一枚も二枚もう

わてだ。

杏子はすっかり意気消沈した様子で呟いた。

「主人が身代金なんて支払ってくれるわけないわ。だって同窓会に行くって言って、家を出たんだもの。うちの人はまっすぐな人なのよ。どんな状況でも、不倫なんて絶対に許してくれない」

杏子の行為は突き放してしまえば自業自得なのだが、柏木の発言のあとでは同情したくなる。この男の言動は何もかも嘘なのだ。テレビで発言したことも、杏子に愛の言葉を囁いたことも。日本中が柏木の言葉を信じていたのだから、杏子がだまされたのも無理はない。しかし紅は杏子の心配ばかりはしていられなかった。

「うちも身代金を支払うなんて無理。うちのオトンはパチンコと競馬が好きですぐに借金作っちゃうの。オカンがスーパーのパートでせっせと働いても、生活するのがやっと。あたしの短大の学費も途中で払えなくなって、あたしは退学して、結局家を出たの。独立してからはようやく欲しいものが普通に買えるようになったのが何より嬉しかった。だからあたしはオトンが嫌いなの。オカンにいつもオトンと別れなよって言ってたんだけど、オカンは別れないんだよね。一緒にいても得することなんか何もないのに、自分で人生を棒に振ってるとしか思えない。馬鹿みたい」

「そんな過去があったのかね。だから越川さんは若いのにしっかりしているんだね」

辻が感心したように言った。

紅は驚いた。

「あたし、しっかりしてる？ そんなふうにしたことないし、言われたのも初めて……」

「十分しっかりしていると思うがねえ。自分の意見や考えをちゃんと持っているし、発言もできる」

紅はいつも自分が意見を持っているほうだとは思っていなかったし、むしろ人の目線が気になってばかりだと思っていた。こんなふうに誉められたことがあまりなく、紅は少し照れくさくなった。

「辻さんはどうなの？ 身代金を払えそう？」

「いや、わたしはばあさんに身代金を払うなと言ってきたんだよ」

紅はびっくりした。

「どうして？ それじゃ出られないでしょ！」

「うちは年金生活だからねえ。ばあさんはもちろん精一杯金を集めてくれるだろうが、それじゃ老後の蓄えがなくなってしまって、ばあさんにも迷惑をかけるからね。こうなったのは、わたしのわがままだから」

紅は責任を感じた。

「ごめんなさい。あたしを助けようとしてくれたばかりに……」

「ああ、いやいや、越川さんのせいじゃない。そうじゃないんだ。本当だよ」

辻はあわてて否定し、さらにつけ加えた。

「越川さんはこのことで責任を感じてはいけないよ。だって越川さんのせいじゃないんだからね。わたしは望んでここに来たんだから」

辻の声は真剣だった。紅は辻が本当に優しい人なのだと改めて思った。

辻は何か考えている様子で口を開いた。

「越川さん、あのゼリーのことなんだけどね」

「何？ 辻さんもゼリーを食べたいの？」

「いやいや、わたしは糖尿だからね。ただもし、差し入れをしてくれてくれている人物がわかったら……その人をわたしにも教えてくれないかね」

「いいけど、何で？」

辻は一瞬だけ黙ってから、茶目っ気ある声音で言った。

「悪い男に騙されないように、わたしが見定めてあげよう」

「え、やだあ！ どうしてあたしに男運がないってわかったの？」

「え？」

見張りが自動小銃を向けながら、近づいてきた。散歩の時間は終わりだ。紅は辻に「また明日の夜ね」と言って、別れた。

家族チームは、早めに今後の方向を決める～十一月二十二日（土）午後九時

午後九時を回ったところで、江崎が言った。

「今夜N L Fは連絡してくる気はなさそうです。解散しましょう」

江崎のオフィスで電話を囲んでいた一同は、それぞれ肩を落としたり、諦めきれない様子で電話を見つめたりした。

正志が言う。

「やっぱり俺のせいだ。俺が悪いんだ、俺のせいで紅は……」

和江が舌打ちした。

「あんた、今夜は電話してないでしょ。それよりもどういうことなの、江崎さん？ 今夜はどうして電話がかかってこなかったの？ また沈黙ってわけ？」

「もちろん沈黙の効果を狙っているというのはあると思います。ですが、こちらに時間を与えているという気がしますね」

江崎が言うと、美登里が首をかしげた。

「時間って何の時間？」

「金集めのための時間ですよ。昨夜の電話で正志さんは一億二千万円払うと伝えた。犯人はもっと金を集めろと言ってきて、正志さんは借金して金を作ると答えました。一日で彼らの希望する金額を用意できるわけがないでしょう。だから、もし今夜電話がかかってきたら、金を集めていると言い張って、やり過ごすつもりだったわけです。すぐに追加金額を出せば、あらかじめ用意してあった金を出し惜しみしていると疑われますからね。しかし電話は来なかった。時間をやるから、自分たちが納得できるだけの金を用意しろということだと思います」

「……疲れたわ」

美登里はこめかみを押さえて、ため息をつく。

青山が言った。

「N L Fは金を用意する時間を与えてやっているつもりだとして、もしも明日電話が来たら、いくら提示しますか」

家族たちはしんと静まった。

青山が続けた。

「時間を与えられたのに、集まった金が数十万円と言うのは危険です。N L Fを怒らせてしまいます」

静子は自分ではどうしたらいいかわからないとばかりに、コーヒーカップを黙々と片づけ始める。

和江が言った。

「沈黙の日数にもよるんじゃない？ 明後日なら五百万で納得してくれるかもしれないけど、一週間後なら難しい。そういうことなんでしょう？」

青山はうなずいた。

「そうです。例えば最初一千万積んで、その後八百万、五百万と、金額を減らしながら、小出しに積み上げていく方法もあります。一方で最初に五千万をどんと出して、インパクトを持たせ、その後一切出さない方法もある。ただそのインパクトが『五千万積んだのなら、勘弁してやろう』ととられるか、『ちょっと脅して五千万出すなら、もう少し脅してやろう』ととられるかの保証はできません。リスクは高いと言えます」

江崎は眉をひそめた。青山は誘拐コンサルタントとしてのポイントを稼ぎたいのだろうが、今、今後の方向を決定するには早すぎると思った。昨夜青山に話したとおり、N L Fの真意に確証を持ってない状況なのだ。方向を決定するには、もう少し交渉を続けて、情報を集めてからにするべきだ。

美登里が冴えない表情で言った。

「小出しにすると、交渉の日数がかかるわ。そうでしょう？」

「そうですね」

青山がうなずく。

「わたしは早めにけりをつけたいわ」

「どうかしたんですか」

青山が尋ねると、美登里は逡巡しているような表情を浮かべ、おもむろに口を開く。

「実は娘が……娘の香がね……」

「お嬢さまがどうかしたのですか」

「香は高校生なんだけど、木曜の午後の授業を早退して帰ってきたの。今にして思えば、わたしが記者会見をした翌日ね。真っ青な顔して、具合が悪いから翌日も学校を休むって言って、引きこもってしまって。そして今朝具合を尋ねたら、しばらく学校を休みたいと言うの。で、話を聞いたら、学校でいじめにあっているって言うのよ」

全員が驚いた。

江崎が尋ねた。

「誘拐事件が原因ですか」

美登里は額に手を当てる。

「ええ。あんたの父親のせいで、罪のない人が巻き添えになっている、もし彼らが死んだら、あんたの父親のせいだ、人殺し、責任をとって、あんたが死ねとか……かなりひどいことを言われたらしいの。インターネットの掲示板にもその手の中傷を書かれて。ネットの場合、相手が誰なのかもわからないし、親が乗り出して、よけいにいじめがひどくなったとかいう話も聞いたことがあるし、いったいどうしたらいいのか……」

和江が憤然として言った。

「あたしがそのろくでもない子たちに言ってやりたいわ！ 柏木さんのせいじゃないでしょって！ 第一、何で無関係の子たちが無関係の娘さんをいじめるのよ！」

美登里は小さく首を振った。

「そういうのが楽しいのか、流行っているのか……わたしには今どきの高校生の考えは理解できないわ」

江崎が言った。

「事件が解決するまでの間、ご親戚の家にでも香さんを預けられてはどうですか。そのほうが安心だと思いますよ」

「そうね。だけどあの子は高校二年生で、来年は受験だし、今は将来のためにも大切な時期なのよ。わたしは早くあの子が学校に行けるようにしてあげたい。娘はわたしよりもずっとしっかりしていると今までは思っていた。それがあんなふうに泣かれて、部屋に引きこまれると、もし自殺でもしたらとか……いろいろ考えてしまうわ。今日も家政婦の佐藤さんに話して、休日出勤してもらって、香を頼んでから出てきたの」

和江が青山に尋ねた。

「一気に高額を積んで、あとは払えないと押し切るのはリスクが高いのよね」

「そうですね。それに押し切れなかった場合、こちらが譲歩することになるわけですが、支払える金額は少なくなっている。手持ちが減っているわけですから」

「でも例えば、あと五千万払っても、残り三千万はあるわけでしょう。それに身禁法前に決着がつくかもしれない。だったらあたしはそのほうがいいわ」

江崎があわてて口を開いた。

「待ってください。それがN L Fの狙いなんです。こちらが長引く交渉に耐え切れなくなって、さっさと交渉を切り上げようとするのを待っているんですよ」

「だけど、どんなやり方をとったって、相手は犯罪者なんだから、信用なんかできないわ。だったら早く決着がついたほうがいい。柏木さんとこのお嬢さんは高校生なのよ。このまま放っておけないわよ。それに紅たちだって、あたしたち家族だって、全員が一日も早くこの事件が終わってほしいと願っているんだし。来るのか来ないのかわからない電話を待ったり、電話で怒鳴られたりするのはいくらも。十二月一日前に終われば、あたしたちも犯罪者にならずにすむしね。あたしは小出しにするより、最初に大きく出したほうがいいと思う」

しかし身代金を支払ったからと言って、人質を帰してもらえる保証はないのだ。解放を確信できるなら、賭けに出てもいいが、まったく未知のものに大金を賭けるのは無謀でしかない。身代金を支払っても帰ってこない可能性がある、今家族たちに説明すべきか。説明したら、彼らは希望を失い、交渉そのものを馬鹿馬鹿しいとして、投げ出したりはしないか。江崎は迷った末、彼らの希望を奪うことを避けた。絶望した家族は犯人に対峙する勇気を持ってない。

江崎は言った。

「わたしはもう少し情報を集めてから、方向性を決めるべきだと思います」

和江が言った。

「N L Fの情報なら、もう十分集まったわよ。青山さんの会社のデータだってあるんだしね。ねえ、青山さんはどう思う？」

「変な言い方ですが、N L Fは誘拐犯としては誠意を持っています。過去のデータを調べてみても、それなりの身代金を払えば、人質を解放しています」

正志が胸を張る。

「大きく賭けよう。俺はギャンブラーだ。大きく賭けなきゃ、大きく儲けられないからな。任

せる。電話でこれ以上出せないと粘ってやるから」

「あたしは和江さんの意見に賛成ですから」

静子はそう言って、トレーにカップやスプーンをていねいに重ねた。

美登里が顔を上げて言った。

「そうしてもらえると助かるわ」

青山が確認する。

「最初に大きく出して、そのあとは出せないと逃げる。これが皆さんの結論と考えてよろしいですね」

家族たちはうなずいた。江崎は何も言わなかった。青山は会社のデータバンクを信じており、江崎の直感を単なる思いつきにすぎないと考えているのだから、これ以上説得のしようがない。過去に誠意ある誘拐犯だったからといって、今回からNLFが方向転換しないとは限らない。それが誘拐という犯罪の怖さであり、「暗闇を走るジェットコースター」と呼ばれる所以だ。

そしてコンサルタントが時間をかけることが大切だとどんなに説いても、家族たちは交渉の短期化を望む。これが交渉を難航させる。状況が変わらない限り、チームの流れを変えることはできそうもないと江崎は判断した。今はこの方向でやってみるしかない。美登里に言った。

「柏木さん、別荘は持っていますか」

「あるわよ、軽井沢に」

「いくらくらいの物件ですか」

「一億円だったわ。買ったのはおとしだけど」

「一億か……まあ、いいでしょう。それを売って、五千万作ったと言いましょ」

「あの別荘が五千万なの。でも一億が五千万じゃ安すぎるんじゃない？」

「そうでもありませんよ。柏木さんが身代金の工面をしているのは周知の事実です。至急現金が必要なんだと不動産屋に言ったら、五千万なら即金で買いとると言われた、足元を見られたが、いつまでも売れるのを待っているわけにはいかないからと説明します。とことん切羽詰っているのだという様子でね。演技のほうはよろしくお願いします、正志さん」

江崎が正志を見ると、正志は大きくうなずいた。

「任せとけ！ 俺だってやるときゃやるんだ！」

「これで合計一億七千万円支払うと伝えることになります。よろしいですね」

江崎が言うと、家族たちは揃ってうなずいた。

紅は、協力者が誰なのかを知る～十一月二十三日（日）午前三時

深夜の散歩が終わり、人質四人はいつもどおりに裏口から家の中に戻った。今日紅が聞いた新しいニュースと言え、辻に糖尿病の薬が届いたことくらいだった。監禁生活は退屈で不便で、淡々としている。お風呂のことさえ除けば、我慢できないほどの苦痛ではなかったが、それはかえって厄介だった。ものすごく居心地が悪いとか、いつも身の危険を感じているとかいう監禁状況なら、一か八か逃げようという気も起きたかもしれないが、なまじ我慢できるだけに、日々が夢の中のように過ぎていく。

この日、紅は四人のいちばん最後について、廊下を歩いていた。すると、背後にいるオレンジマスクがそっと声をかけてきた。

「お腹が痛いから、トイレに行きたいと言って。階段を上る前に」

「え？」

「早く」

紅はあわてて言った。

「お、お腹が痛い！」

列が止まった。紅は急いで自分の腹を押さえる。

「お腹が痛いの。トイレに行きたい」

目の前の杏子が振り向こうとすると、オレンジマスクが「動くな！」と言って止めた。それから言った。

「先に行ってくれ。自分がこの女を一階のトイレに連れて行く」

他の見張りたちはうなずき、人質たちを率いて、階段に向かっていく。

オレンジマスクと紅の二人が残された。オレンジマスクは紅に銃口を向けて命じた。

「廊下をまっすぐ進んで」

紅は驚いたが、言われたとおりにする。どうしてこんなことが起きたのかわからない。聞きなれた声。紅は混乱して尋ねた。

「どうして」

「喋るな。その左側のドアに入って」

紅は指示どおりにドアを開ける。そこはトイレではなく、バスルームだった。オレンジマスクは早口で言った。

「静かに、でも急いで。十五分くらいならごまかせる。シャワーを浴びるくらいなら大丈夫だ」

紅はかすれた声で言った。

「ねえ、あなたは聡史でしょ？ どうして聡史がここにいるの？」

美登里は、犯人からのプレゼントを受け取る～十一月二十三日 日曜日 午前六時五分

美登里は、犯人からのプレゼントを受け取る～十一月二十三日（日）午前六時五分

江崎の朝は遅い。誘拐犯が動き出すのはたいてい日が暮れてからなので、午前中は睡眠をとることにしており、枕元の携帯が鳴ったときはまだベッドの中だった。見ると、表示には『柏木美登里』と出ている。江崎は掌で額から頭頂部を撫で上げ、頭を軽く振ってから、電話に出た。

「江崎です。どうしました？」

美登里の声は怯えていた。

「犯人から電話が来たの。香の携帯に」

江崎の頭が一気に覚醒した。

「用件は？」

「小包をとりに行けと言っていたらしいわ。場所はうちの近くのレストランの駐車場の植えこみの中、午前六時半までに」

江崎は時計を見た。現在午前六時十分。応援は間に合わない。

「それでは今すぐ柏木さんがとりに行ってください」

美登里は金切り声を上げた。

「何ですって！ 冗談じゃないわ！ あなたが行ってよ！」

「無理ですよ。間に合わない」

「だったら警察に通報するわ！」

「警察は絶対にだめです。わたしたちは警察に内緒でN L Fと取引すると言ったんです。ここで通報すれば、二度と電話がかかってこなくなるかもしれません。警察にも、これまでの事情を説明しなければならなくなる」

「でも小包の中身が爆弾か何かだったらどうするの？ 駐車場が見張られていて、殺されでもしたら？ わたしは死にたくないわ！」

江崎は冷静に諭した。

「いいですか、よく聞いてください。N L Fが柏木さんを殺すことはありません。彼らは人質四家族のうち、金策能力があるのは柏木さんだけだと知っています。つまり柏木さんだけが頼みの綱で、柏木さんを殺したら、身代金を得られなくなるのです。彼らにとって誘拐は資金集めのビジネスです。自分たちの不利益になるようなことは決してしない。ですから、柏木さんが殺されるわけがないのです」

「でも、怖いわ。行きたくないのよ。急いでうちに来てちょうだい。一緒についてきて」

美登里は涙声になった。

「わたしの自宅の赤羽からそちらの成城まで、あと二十五分で行くのは不可能です。荻窪の青山君にもすぐに連絡しますが、彼だって無理でしょう」

「荻窪なの？ ならいいわ、青山さんを待つわ。荻窪からなら七時すぎには着くでしょ。ちょっとくらい遅れたって大丈夫よ。向こうだってわたしに小包を届けたいんだから、六時半を過ぎた

からって小包を持ち去ることはないわよ」

「いいえ、N L Fの指示どおりにしてください。時間指定したということは、誰が引きとりに来るか、時間どおりに来るか、見張っている人間がいるかもしれないということです」

美登里は叫んだ。

「N L Fの見張りがいるなら、なおさら行きたくないわ！　これが罠だったら？　わたしまで誘拐されたら、香はどうなるの？」

「それは心配いりません。殺されないのと同じ理由で、柏木さんが誘拐されることはない。夫婦揃って拉致されたら、誰が金の工面をするのです？　いいですか、もう一度言います。あなたは安全です。香さんには、あなたが戻るまで決して家から出ないように言い含めてください。それから一人で小包をとりに行ってください。駐車場ではN L Fの姿を探したりしないこと。もしあなたが見張りの顔を見てしまったら、状況が変わります。小包をとってきたら、開かずにおいてください。わたしが確認します。いいですね？」

「そんな簡単に言わないでよ……できないわ。怖い……」

誘拐事件に絶対安全という保証はありえない。どんなときでも万一ということはあるのだ。しかし時には揺るがない自己をもって、家族に安全だと言いきらなければならないときがある。このときに重要なのは、誘拐コンサルタント自身が自分を信じ、自信を持って説得すること。それができなければ、家族はコンサルタントの迷いを見抜き、動かない。そして動くべきときに動かなければ、人質をとり返すことはできない。江崎は声に力をこめた。

「指示どおりにしてください。彼らはあなたが信頼できる相手かどうか試しています。あなたは安全で、彼らがあなたを殺すことは決してない。わたしが保証します。柏木さんは小包をとって、帰ってくるだけです。他には何もしなくていいし、何の心配もいりません」

やがて美登里は小声で言った。

「……わかったわ」

「必ず六時半までにとりに行ってください。わたしもすぐに向かいますから」

「わかったわよ！　とって来ればいいんでしょ！」

美登里は怒鳴って、乱暴に電話を切った。江崎はすぐに青山に電話をかけて、事情を説明し、急行してもらうことにした。江崎は急いで服を着がえて自宅を出ると、自分の車を使わずタクシーを捕まえた。柏木家にもN L Fの見張りがついていることを考えて、乗り捨てられる足のほうがいい。

信号で車が停まるたびにいらいらしていると、携帯に電話が入った。七時十分。青山からだった。

「車で来ましたが、高井戸で引っかかって今着きました。小包は六時二十五分に回収したそうです。二人ともかなり怯えていますね」

「だろうな。中身の確認は？」

「まだです」

「一人で開ける気はあるか」

「もちろん」

江崎の顔に笑みが浮かんだ。

「じゃあ頼む。一刻も早く中身がわかったほうが、二人を安心させられる」

「そうですね」

通話を切った。江崎はまたにやりと笑った――「一人で開ける気があるか」と尋ねたら、「もちろん」と来た。コンビを組んだのは正解だったかもしれない。

柏木のマンションに着いた。日曜日の朝ということもあり、周囲に人影はなかった。急いで中に入り、七階の自宅に向かう。インターホンを鳴らすと、青山が顔を出した。

江崎が簡潔かつ単刀直入に尋ねた。

「で？」

「おもちゃの手榴弾でした。デパートの手提げ袋にスーパーで売っている菓子の箱が入っていたので、別の袋に移してから、近くの公園の噴水のそばで開けました」

「ありがとう。さすがだな」

江崎が言うと、青山は無表情のまま肩をすくめた。

「N L Fからの最初のプレゼントで実害のあるものが入っていたことはありません。精神的に弱っている家族たちには、おもちゃの手榴弾でも十分な動揺を与えられるからです。過去データを分析すれば、わかることです」

青山のサポーターはやはりデータカー――江崎は苦笑した。

「二人はどうだ？ 落ち着いたか」

青山は頭を振った。

「いづらか落ち着きましたが、まだ興奮状態です。しばらく一步も外に出たくないと言っています」

「俺が話す」

青山は踵を返して、リビングに向かった。江崎は靴を脱いで上がり、そのあとに続く。二人掛けのソファで、美登里と香は寄り添うように並んで座っていた。江崎がリビングに入ると、こちらが口を開く前に、美登里が江崎をまっすぐ見つめて、恨みがましい声で言った。

「もういや。どうしてうちばかり。交渉しているのは越川さんなのよ。それなのにどうして香が狙われるの？」

「N L Fの狙いは柏木さんですからね」

「だとしても、どうして香の携帯にかけてくるの？ わたしの携帯にすればいいじゃない！」

「母親を攻撃するには、母親本人に接触するより、その子供に接触したほうが効果的だからですよ」

そして子供をいつでも拉致できると匂わせることもできるわけだが、今ここで説明する必要はない。

江崎は香を見た。香はピンクのスウェットの上下を着て、自分の腕で自分自身を抱き、俯いていた。

「香さん」

江崎が静かに声をかけると、香はびくっと身を震わせ、初めはそのまま動かなかった。やがてゆっくりと顔を上げると、泣き腫れて赤黒くなった瞼とひびわれて白くなった唇が見えた。先

日見た香とは別人のように生気がない。

江崎は言った。

「怖かったね。君もママももう安全だからね。小包の中身はおもちゃだった。君のママは勇敢だった。もう心配いらないよ」

香は安全だと言われても表情を明るくすることなく、また視線を落としてしまった。学校ではいじめに遭い、不登校になっていると聞いた。さらに今朝は犯人からの電話を直接受けたのだ。この少女はどれほど心細い思いをしたことか。電話の情報を得たいのは山々だが、今、話を聞き出すのは難しいかもしれない。

美登里が言った。

「ママはおじさんたちと話をするから、香ちゃんはもうお部屋に行きなさい」

青山が軽く顎を上げ、江崎に視線を送ってきた。情報を聞き出さなくていいのかと言っている。江崎は口を結んで、そっと頭を振った。

香は立ち上がるのをためらうように座っていたが、青山のほうを見て、ぽつりと言った。

「……パパの携帯からだった。だから出たの」

江崎は青山に目配せをする。青山があとを引き継いで言った。

「晴信氏の携帯をとり上げて、使ったんだと思います。犯人が何て言っていたか、正確に思い出せますか」

香はうなずいた。

「六時半までに紙袋をとりに行けって言った。コニーズの駐車場の植えこみの陰に紙袋がある。一回言ったあと、同じことをもう一度くり返したの」

「香さんは何て答えました？」

「はい、とだけ……」

「他には何も言わなかったんですね？」

「あの……あたしが覚えたかどうかくり返せって言われて、くり返した」

「それだけですか」

「うん」

美登里が言った。

「もういいでしょ。娘を休ませてあげたいの。さ、香ちゃん、お部屋に行って」

しかし香は立ち上がろうとしなかった。

江崎は言った。

「もし気になることがあるなら、言ってしまったほうがいいよ。気が楽になるからね」

香は唇を噛んでいたが、やがて口を開いた。

「電話で言われたのはあたしなのに、とりに行ったのはママ。もし皆が死んだら、あたしのせい？」

江崎は言った。

「犯人は香さんにとりに行くよう指示したのかい？」

「……ううん」

「香さんは自分でとりに行くと約束した？」

「ううん」

「じゃあ香さんがとりに行く必要はない。落ち度はないよ」

しかし香はぼろぼろと涙をこぼし始めた。

美登里は驚いて、香の顔を覗きこむ。

「もうすんだことよ」

「……ごめんね、ママ」

「ママに謝ることないわ。香ちゃんは何も悪いことをしていないんだから」

香は頭を振った。

「でもあたし……とりに行きたくなかったの。だからママに押しつけたの。ママに行ってもらおうと思って、ママに言ったの。ごめんなさい」

美登里は驚いた顔になって、香の肩を抱いた。

「馬鹿ね。そういうのはママがやることなの。香ちゃんがとりに行くと言ったって、ママが行ったわ」

香は頬を濡らしながら言った。

「死ななくてよかった、ママ」

香は母親が江崎に「怖い」「できない」「爆弾かもしれない」と訴えている電話を聞いていたのだ。そして母親が小包をとって戻ってくるまでの間、香は不安に苛まれていたのだろう。香は泣きじゃくっていたが、ようやく立ち上がった。美登里は香を抱えるようにして、部屋に連れて行った。

江崎は頭のうしろで手を組み、ソファの背もたれに寄りかかって、胸をそらせる。それからため息をついた。

「N L Fにしてみれば、予想以上の効果があったな。娘があんな状態になったら、母親は戦えない」

青山は江崎の隣で前かがみになりながら言う。

「交渉役が正志さんで助かりましたね」

「そうだな。だが、この調子だと、越川夫妻だって簡単に崩される可能性があるから、油断はできないぞ」

「ご主人はともかく、あの奥さんは大丈夫でしょう」

「そうかな。俺は和江さんは意外ともろそうな気がするけどな。チームの中で最強なのは静子さんだろう」

「辻さん？　そうですかね……あの人は気弱で、和江さんにくっついてようやく参加できているという気がしますけど」

「俺も最初はそう思っていたが、あれは辻さんの処世術かもしれないと思えてきた。意識的にやっているかどうかはわからんけどな。それとあのおばあさんの秘密だ。どうやって聞き出したもんかな」

「和江さんに頼んで、聞き出してもらうのも手だと思いますけどね」

「まあな。その秘密が和江さんに知られてもいいものなら話すだろうが、その程度の秘密ならも

っと早く口を割っているんじゃないか。まあ、その秘密に時限爆弾がセットされていなければいいかと心配している」

「時限爆弾？」

「爆発直前になって手に負えなくなったときに、あわてて相談に来るとのことさ。しかしすぐにタイムリミットが来てしまい、必要な手を打てないうちにドカンだ」

青山はあきれたように言った。

「いちいち悲観的ですね」

「こう見えて、慎重派なんだ」

美登里が戻ってきた。二人の向かいに腰を下ろすと、口元を押さえながら言う。

「学校でのいじめが原因で、神経が過敏になっているんだと思うわ。何でも自分のせいだと思いきこんでしまうのね」

江崎は真剣に言った。

「お嬢さんをご親戚に預けたほうがいいと思いますよ」

「それが……」

美登里は言葉をにごらせる。

「あの子、昨夜は福島の子の親戚のところに行くって言っていたのに、今になって行きたくないって言い出したの。家に残るって」

「小包の件で責任を感じているのでしょうかね」

江崎はそう言いながら、まずいことになったと思った。できれば情緒不安定な娘と距離をとって、美登里には気持ちを立て直してもらいたかった。チームの一人でも士気が下がれば、チーム全体に伝染する。そうすれば、全員が恐喝に立ち向かえなくなる。

「柏木さんの身が心配で、離れられないのかもしれない。大丈夫だと言ってあげてみてはどうですか」

「そうね……」

美登里は上の空で答えた。

青山が言った。

「今日の小包の件でわかったことを考えてみましょうか。電話が来たのは午前六時。N L Fは通常の交渉なら夜に接触してきます。なぜ朝の六時なのか」

江崎は言った。

「香さんが鍵ですね。香さんを狙った理由は先ほど述べたとおりです。平日なら学校がある。さらに日曜の朝は人气が少なく、紙袋を見つけやすい。状況から見て、やはり誰かが見張っていたと考えていいでしょう」

青山はうなずいた。

「そして中身がおもちゃの手榴弾というのは、彼らがよく使う恐喝手段なんですよ。万一無関係の人間がみつけても、単なるいたずらで終わってしまい、警察に通報されることはない。しかし被害者家族に対しては、絶大な効果があります。次の電話はおそらく今夜、必ずやってきますよ。『次は本物を送る』。大丈夫、ただの脅しです。柏木さんに本物の手榴弾を送っても、彼らは

得るものがありません」

「そう」

美登里は力なく言った。分析に参加する気力はないようだった。

江崎は言った。

「あとは目的です。なぜおもちゃの手榴弾を送ってきたか」

「こちらは一億二千万を提示し、N L Fはそれに不服だと言いました。そして昨夜は沈黙、そして今日はプレゼント。怖がらせて、金を作らせようと考えているのでしょうね」

「沈黙の翌日にプレゼントというのが引っかかるな。性急すぎる。これでは沈黙の効果が半減だ。家族に金を工面させるための時間を与えたのではなかったのか」

「目的は金を工面させることではなく、恐喝だけだったのかもしれませんがね。とりあえずもう一つははっきりしたことがあります。N L Fは急いでいるようです。やはり身禁法前に決着をつけたいでしょう」

「それもおかしいと思わないか。家族は裏取引を申し出ているのだから、N L Fが急ぐ必要がどこにある？」

「しかしこれはN L Fのオーソドックスなやり方です。はずしてはいない。身禁法じゃなければ、何らかの理由で緊急に金が必要なのかもしれませんね」

そうだ、そこも引っかかるのだと江崎は思った。わざとオーソドックスなやり方で進めようとしているように見えてならない。オーソドックスなやり方をして、誘拐コンサルタントが警察に知恵をつけられれば、家族たちを恐怖に陥れるのは難しくなるのだから、ときおりはずしたほうがいいはずだ。やはりこちらが主導権を握っているように見せかけて、N L Fのレールに乗せられているような気がしてならない。

しかし江崎は美登里を慮って、このことについて口にはしなかった。美登里は話し合いに相槌を打つだけで、ほとんど反応を返さない。少し休ませたほうがいいだろう。

江崎は言った。

「青山君とわたしはそろそろ失礼します。おもちゃの手榴弾はわたしのほうで預かり、事件解決後に処分します。よろしいですか」

美登里はようやく安堵の表情を見せた。

「ええ」

「それじゃまた今夜八時に。おそらく小包の件で連絡があると思いますので」

「ごめんなさい。今夜は行けそうもないわ」

断られることは予想していた。だからわざと今夜の出席を確認したのだ。しかし江崎は驚いて見せた。

「ミーティングに来られないのですか」

「そうよ。香を一人で家に置いておけないもの。わかるでしょ？」

「家政婦さんを頼めませんか」

「昨日休日出勤してもらったから、今日は用があるのでって言われたの。仕方ないわ」

ふだんの美登里なら、家政婦の都合などかまわず呼びつけているだろう。むしろ美登里自身が娘のそばを離れたくないのだ。

美登里が言った。

「香が学校をお休みするのは、かえって都合よかったかもしれないと思っているわ、今ではね。とにかくN L Fは香に電話してきたのよ。いつ娘まで誘拐されるかわからない。わたしは絶対に目を離さないつもりだから。それと、もし」

美登里は思いきるように息を吐いてから続けた。

「事件を早く切り上げられるなら、うちの財産を身代金に当ててもいいわ。別荘の処分が必要なら、言ってちょうだい」

N L Fの狙いは一つ確実に命中した。

人質たちは、人質の演技をする～十一月二十三日（日）午後三時

紅は久しぶりに晴れやかな気分で一日を過ごした一バスルームの熱いシャワー！ とらわれの美しい恋人のため、わが身の危険を顧みず助けに来てくれた聡史！ ドラマチックな再会！ 恋はまだ終わっていなかった！ 今夜の夢は、白馬に乗った聡史が自分をさらうように馬に乗せて、二人でこの山荘をあとにするというものに違いない（辻さんは馬を引く従者にして、一緒に脱出させてあげよう）。

しかし白馬の王子であるはずの聡史は、あれきり姿を見せなかった。朝、見張り当番が交代になるから、聡史は山荘から出て行ったのかもしれない。それに明日は月曜日だから、会社に出勤するため帰ったのかもしれない。冷静に考えれば沈んでもいい状況だが、浮かれている紅は、たとえ沈みたかったとしても沈めなかった。

それにしても聡史はどうやって見張りにまぎれこめたのだろう。警察に頼まれて恋人のための潜入捜査に来たのかもしれない。若年寄風は世間を欺く仮の姿で、実は運動神経抜群で、屋根に上って窓を破って、オレンジマスクで変装して、見張りになりすましたのかもしれない――紅の妄想は暴走した。うっとりして、つい顔がにやけてしまう。ときおりネイビーマスクが不安そうに自分を見ていることに気づき、顔の筋肉を元に戻すのに一苦労だった。

杏子はそんな自分に何も言わなかった。シャワーのあと、いきさつを話したら、疑わしい目つきをして、「本当につきあっている彼なの？」と尋ねた。

「そうだよ。あれは絶対に聡史だった」

「でもマスクをとった顔を見たわけじゃないんでしょう？」

「何、それ？ 杏子さん、信じてないの？ あたしがシャワーを浴びて帰ってきたことが何よりの証拠じゃない。疑うなら、髪が濡れているの、さわって確かめてよ」

「シャワーは信じるわよ。でもオレンジ君が聡史君っていうのはどうかしら。知らない見張りの人じゃない？」

「聡史だってば。だって、あたしの彼だよ。いくら何でも見ず知らずの男と自分の男の区別くらいつく。聡史が差し入れもしてくれていたんだ、きっと！」

「まあ、差し入れしてくれていたのはオレンジ君だろうとは思うけど……」

杏子はどうしてもオレンジマスク＝聡史説を受け入れる気はないようだった（だから脱出の妄想の中で、一緒に連れて行ってあげるのをやめたのだ）。

金網の向こうのドアが開いた。紅と杏子はその姿を見るなりびっくりして、会話をぴたりとやめた。

一人の（胸がないのでたぶん）男が入ってきた。光るレインボーカラーのマスクに、ぴったりしたゴールドラメのセーター、レザーの細身パンツ、ピンヒールのパンプスを身につけ、紙袋とメイクボックス、そして大きなスタイリストバッグを提げている。腰をくねらせながら歩くたび、マスクに縫いつけられたラインストーンとセーターのラメがきらきらと輝いた。

紅と杏子はレインボーマスクが近づいてくるにつれ、檻の中であとずさった。

レインボーはハスキーな声で言った。

「ハイ、お嬢さんたち！ ご注文のマッサージオイルよ！」

紅と杏子は目の前でいったい何が起きているのか理解できていなかった。一瞬ののち杏子は座っていたベッドからあわてて立ち上がり、金網に恐る恐る近づいた。

「あ、ありがとう……」

「二一〇〇円、払ってちょうだい」

杏子が財布をとってきて金を払うと、レインボーは金額を確認し、「お釣りはいらないわね」と言ってから、グッチの財布に収めた。それからレインボーは差し入れ口にマッサージオイルを入れてから言った。

「それじゃ次ね。このお嬢さんたちをメイクしてあげればいいのね」

紅は明るく身を乗り出した。

「メイクしてくれるの？ テレビの美人変身コーナーみたい！ 嬉しい！」

「おバカね、このコは！ 人質を美人にしても意味ないでしょ！ 二人ともすごおいおブスにしてあげちゃうんだから！」

「え？」

紅と杏子はぽかんと口を開ける。

「さあ、一人ずつ出てきて！ 最初はおバカちゃんからよ！」

「おバカちゃんってあたし……？」

紅は自分を人差し指で指しながら呟いた。ネイビーマスクがやってきて、金網の鍵を開け、紅が出される。椅子が用意され、座らされた。

レインボーが紅の顔に手入れの行き届いた指を滑らせながら言った。

「ベースは青白く、頬を盛り上がらせて、青黒く塗って……」

紅は不安になってきた。

「あ、あの……いったいどういう……」

「喋らないで！ もうカメラさんが来ているから、急いでるの！ 目にコンタクトレンズは入ってないわね？」

「は、入っていません……」

「じゃあ、まぶたもふくらませるわ」

そう言って、レインボーは紅のまぶたや頬に何かを貼った。紅は鏡と説明がほしいと切実に思ったが、よけいなことを言える状況ではなかった。金網の向こうにいる杏子をちらりと見ると、眉根を寄せ、口もとに手を当て、悲惨なものでも見るかのように自分のほうを見ている。紅の不安は募っていく。

「さあ、お次はヘアよ！」

レインボーはハイテンションな声で言って、紅の頭をかき回してぐちゃぐちゃにすると、そのままヘアスプレーで固めた。

「ハイ、おしまーい！」

「あの、鏡を見せてください！」

「やめときなさい。あんたはホントにおバカちゃんね。次はそっちのお姉さん、いらっしゃーい！」

ネイビーが紅を檻に戻し、すでに顔色の悪い杏子を外に出した。紅は急いで自分の化粧ポーチの中から鏡を出して、覗きこむ。直後、悲鳴を上げた。

「何これ？ あたしのデコから血が流れてる！ それに青あざだらけじゃない！」

レインボーは杏子の顔にメイクしながら言った。

「そうよ、うちは人道的なゲリラなの。実際に殴られるよりいいでしょ。あ、ネイビーちゃん、おバカちゃんにバッグの中の服を渡してあげてちょうだい」

ネイビーがスタイリストバッグから服を取り出し、差し入れ口に押しこんできた。紅が拾って広げると、それは薄汚れてすり切れたグレーのセーターだった。

「キャー、何これ？ 汚い！ 洗濯してないでしょ！」

「洗濯済みの服じゃ意味がないでしょ」

「あたしいや！ こんな服着ない！」

「いやなら、おバカちゃんの服をずたずたに切り裂いて、それを着てもらうことになるのよ。それでいいの？」

「……………」

紅はベッドの陰にかがんで、しぶしぶ服を着がえた。杏子は黙ってメイクされている。

レインボーは杏子に言った。

「おとなしく従っているところを見ると、お姉さんは状況をのみこめているようね」

「何となくね。あなたのすばらしいメイクテクに心から感謝しているわ」

「お姉さんは美人なだけじゃなくて、頭もいいのね。男を見る目はないようだけど……これからは柏木みたいな男とつき合っちゃダメよ。オンナを下げるわ」

杏子は唇の端から血をしたたらせながら、顔をひきつらせた。その点だけはレインボーに大賛成だと、紅も思った。

紅の着がえが終わると、すぐにネイビーが檻から出ると命じてくる。紅の浮かれ気分はすっかり消し飛んでいた。紅はすれ違いざま、杏子にすがりつくような気持ちで尋ねる。

「ねえ、杏子さん、どういうことなの？」

杏子が答える前に、ネイビーが紅の腕を引いた。杏子は口元だけ動かして言った。

「逆らわないで。そのほうが安全だから」

「安全ってどういうこと？」

紅はわけがわからないまま、部屋の外に出された。廊下に出ると、右の突き当たりに三脚とカメラが用意され、イエローマスクの男が腕組みしながら待っていた。

「男二人はすんだ。柏木だけは本当に腕にタバコを押しつけてやったよ。猿轡をかまして、悲鳴は上げさせなかったが、涙を流していた」

「あ、いいすねえ。俺も見たかったっす。今度やるときは呼んでくださいよ」

「根性焼きは楽しいからな。今度はおまえにもやらせてやるよ」

二人は楽しそうにヒヒヒと笑い合い、紅は青ざめた。杏子は逆らうなと言ったが、紅は周囲を

見回して、何とか階段のほうへ逃げられないかと思った。

イエローは言った。

「次はこの女か」

「反抗的っす。朝礼のたびに、ヘフェが要注意人物だと言ってるっす。キャロラインさんにもいちいち逆らってたっす。自分の立場を全ッ然理解してないっす」

紅はぎょっとしてネイビーを見た。このタイミングで告げ口をするあたりに悪意を感じる。それからあわてて言った。

「あたし、言うことをききますから、何でも言ってください！」

逃げと言われたらどうしよう。

「じゃ、独房に入れ」

イエローに命じられ、紅は廊下の端のドアを開けた。そこは小さな物置程度の窓のない小部屋だった。目の前に鉄格子があり、裸電球が下がっていて、おまるとベッドが置かれている。いかにもうら寂しげだった。反抗した罰として、ここに閉じこめられるのだろうか。鉄格子が開けられたが、紅が入るのをためらっていると、イエローは言った。

「さっさとしろ！」

紅は飛び上がって、独房の中に入った。

イエローはカメラを覗きこみながら言った。

「新聞紙を広げて持て」

紅は床に落ちていた古新聞を見つけて拾った。それから両手でつかんで広げる。

「そうだ、顔の下で一面がよく見えるようにしろ。それから悲惨な目にあったという顔をして、目線はカメラだ」

「え……」

紅がとまどっていると、イエローはカメラから目を離し、メガホンを使って怒鳴る。

「だめだ！ 全然なってない！」

この至近距離でメガホンを使って怒鳴られると、耳に強く響く。紅はおろおろして言った。

「だめって言われても……」

「わたしは人質！ 言ってみろ！」

「わたしは人質……」

いくら自分がバカでも、そのくらいは理解している。

「そうだ、人質になりきれ！ どんなに大根でも降板はないんだからな！」

イエローはメガホンを下ろし、再びカメラを覗く。しかしすぐに顔を上げ、メガホンで鉄格子を叩いた。

「何だ、その顔は！ やる気がないなら、本気で暴行するぞ！」

紅は叫んだ。

「待ってください！ だってどういうことなのか全然わからないんです！ どうしてあたしがこんなところで写真を撮られるの？」

イエローはネイビーを睨んだ。

「おまえ、説明してないのか」

ネイビーはイエローを恐れるように、強く頭を振った。

「自分、説明したっす。でもおバカちゃんなんす」

「嘘よ、あたし何も聞いてない！　だいたいあんたにおバカちゃんって言われる筋合いはない！」

「やっぱり反抗的っす。嘘つきっす。もう一人の女は理解したっす」

ネイビーが言いつけるように言い、イエローは大仰なため息をついた。

「おまえが生きているという証拠写真を撮って、おまえの親に送るんだ」

「え？」

「できるだけ悲惨な状況に置かれていると思わせられる写真のほうがいいんだ。家族は急いで活動支援金を払おうとするからな。おまえも家に帰りたかったら、つらそうな顔をしろ。わかったな」

紅はようやく状況がのみこめた。この独房は撮影用のセットで、メイクと衣装は悲惨に見せるためのものということか。しかし一つだけまだ理解できないことがあった。

「でもこの新聞、去年のなんだけど……」

「いつのものでもかまわない。あとから家族に送る日付の新聞を合成する」

「ええ？　それじゃ生存の証拠にならないと思うんですけど……」

「キャロラインと俺のスケジュールが合う日が今日しかなかったんだ。つべこべ言わずに、さっさとやれ。俺はこれから飲み会なんだ」

とにかく実際の暴行を受けずにすむ上、早く家に帰れると言うのなら、言うことを聞いたほうがいい。紅のモチベーションが上がり、悲愴な顔をつくれた。

「よーし、さっきよりぐっとよくなったぞ！　おまるのうしろに目薬があるから、それを使い！

目をもっと虚ろにしろ！　せりふはいらない、目で語れ！　それが演技の基本だ！」

イエローはメガホン越しに言い、紅は期待に添えるよう努力した。頬を目薬で濡らし、床に座ったり、ベッドに座ったりして、いくつかのポーズを撮られると、部屋に戻される。

檻の中で待機している杏子に、紅は言った。

「演技指導はけっこう厳しいよ」

家族チームは、調子に乗る～十一月二十三日（日）午後八時

午後八時きっかりに、N L FのAから電話がかかってきた。正志がいつもどおりにメモを見ながら応答する。

「越川です」

「プレゼントは気に入ってもらえたか」

正志は沈黙した。

「次は本物を送る。金は用意できたか」

「はい。あと二百万円どうにか……」

Aは怒鳴り出した。

「ざけんじゃねえ！ たった二百万？ おまえらは家族を見殺しにする気か？」

正志は急いで言う。

「それで今、柏木さんが別荘の売却を不動産屋さんに相談しています。その話が決まったら、もう少し払えると思いますので……」

「もう少しっていくらだ？」

「まだはっきりしたことはわからないみたいですが、四、五千万くらいかと……」

「いつ頃決まる？」

「来週中には……」

「そんなに待てるか！」

「できるだけ早くします。それであの、わたしたちの家族は生きていますか。生きているなら証拠を……」

ここで電話が切られた。今夜は短い通話だった。

正志は怖い顔をつくり、低い声で言った。

「プレゼントは気に入ってもらえたか。次は本物を送る」

和江と静子は吹き出した。和江は大きな腹を揺すりながら言った。

「青山さんの言ったとおりだわ！ 今日の電話では『次は本物を送る』と言われるって聞いていたけど、まったく同じせりふなんだもの、笑っちゃうわよ！」

「どうだ、俺の交渉もだんだん上手くなってきただろう？ 怒鳴られてもそんなに怖くなくなったぞ。手口は読みきったな」

「これで次に電話がかかってきたら、別荘が売れたから、五千万円払うって言えばいいのね。これできつと紅は帰ってくるわ。待ってなさい、紅！ オカンはゲリラなんかに負けないからね！」

「和江さんの言うとおりです」

最後に静子がにこにこしながら締めくくった。

江崎は不安な思いで三人を眺めていた。調子に乗りすぎることは、恐怖でがんじがらめになる

のと同じに、自滅を誘発する。三人には今朝のおもちゃの手榴弾についてあまり深刻に受け止めないよう説明し、今夜の脅迫電話の対応策を話しておいた。美登里が今夜欠席する理由については、娘の具合が悪くて付き添いをするとして、詳細は伏せておいたが、三人はそれをすっかり信じた。美登里の不安を知り、緊張感が高まりすぎることを恐れての配慮だったが、江崎は現在の三人には緊張感が必要かもしれないと思った。油断しすぎて相手を見くびると、手痛い反撃を食らうことになる。

江崎はかねてからの懸案を話すことに決めた。

「ちょっとよろしいですか。わたしには気になることがあるんですが」

全員の注目が集まった。

「今夜の電話で……いえ、以前からですが、引っかかる点があるのです。Aが言った、『いつ頃決まる?』『そんなに待てるか!』という言葉です」

和江が不思議そうに尋ねた。

「そのどこが気になるの?」

「N L Fは明らかに急いでいる。しかしその理由がわからないからです」

「急いでお金をほしいからじゃないの」

和江はわかりきったことを訊くなというように言う。

江崎は頭を振った。

「しかし交渉では急いだほうが損をする。できるだけ長く脅迫したほうが、N L Fの利益にはなるはずです」

家族たちは顔を見合わせた。

正志が言う。

「それはそら、あれじゃないか。新しい法律の……」

「身禁法ですか」

「そうそう、それだよ。その法律が始まる前にお金を受けとりたいんだよ」

それは青山の主張と同じだ。

江崎は再び頭を振る。

「われわれは警察から隠れて交渉しているんです。法律は関係ありません」

家族たちはまた沈黙する。

和江が言った。

「でもね、もしN L Fが急いでいるとしても、理由なんかどうだっていいんじゃない? だってあたしたちにとっても都合がいいんだもの。柏木さんのところはお嬢さんが大変みたいだし、うちだって早く紅をとり返したいし。辻さんだって、早くご主人に会いたいでしょ? 早いに越したことないわよね」

「はい」

静子はうなずく。

「だから、早く帰してくれるっていうものを心配する理由がわからないわ」

江崎は腕を組み、青山をちらりと見た。青山は知らん顔で、i P a dを睨んで、指をすべらせている。「我関せず、お一人でどうぞ」と言わんばかりだ。

そのとき携帯電話の着信音が聞こえた。和江が言った。

「あたしだわ。ちょっとごめんなさい」

和江は携帯電話をつかむと、話し始めた。

「あら、幸子さん？ うん、紅はまだ。ごめんね、心配かけて……今？ ミーティング中。主人は交渉係でいちばん重要な役なのよ。あたしも書記長でね……そんな、紅のためだもの、親の務めよ。コンサルタントの人がいろいろ説明してくれてね、FBIで働いていた優秀な人とAF保険の人がつききりでアドバイスしてくれているんだけどね。ちょうど今も犯人から脅迫電話が来てね……」

江崎は驚いて、胸の前で腕を交差させ、バツ印をつくった。

和江は笑いながら、江崎に手を振る。

「ありがとう、大丈夫よ……紅が帰ってきたら、すぐに知らせるから」

和江は電話を切った。ミーティングルームにいた全員が水を打ったように静まり、和江を見つめている。和江は笑顔で言った。

「ごめんなさい、中断させちゃって。友だちが心配して電話してくれたのよ。さあ、続きをどうぞ……何だっけ？」

江崎は厳しい声で尋ねた。

「今、電話でミーティングのことを話していたように聞こえたんですが」

「そうよ」

「最初に他言は無用、秘密厳守でお願いしますと申し上げたはずですが」

和江は笑い出した。

「いやだ、ちょっとだけじゃない。それに幸子さんは大丈夫よ。口がかたいから、よけいなことをぺらぺら喋ったりしないわ」

和江がよけいなことをぺらぺら喋っているのに、その友人は絶対に口をつぐんでいると、どうして断言できるのだろう。和江のような人種は間違いなく巷に存在する。彼らにとって緊張感の薄れたトラブルは、病気を告白して注目を集めるのが楽しいのと同じ発想があり、吹聴しても悪いことをしているという自覚はない。

江崎は辛抱強く説明するしかないと思った。

「ですが、和江さん、たとえ悪気がなくても、どこから情報がもれるかわからないのが今の日本なんです。そのときには人質全員が危険にさらされます。今後絶対に他言は控えてください。いいですね？」

「あなたは幸子さんに会ったことないから、わからないのよ。本当にいい人よ、大丈夫」

「ですから、大丈夫かどうかを個人で勝手に判断されては困るんですよ」

「でもね」

青山がiPadからすっと顔を上げ、キレたように怒鳴った。

「でもも、しかしもない！ 母親なら、おしゃべりが娘を危険にさらすことくらい理解しろ！ 喋るなと言ったら、喋るな！」

全員が青山の迫力に圧倒され、沈黙した。

しかし和江だけがすねたように呟く。

「はいはい、わかりましたよ。二人してそこまで言うなら仕方ないわ。黙ってればいいんですよ、黙ってれば」

それから唇をとがらせ、ぼそっとつけ加える。

「まったく幸子さんも変なときに電話をかけてくるんだから。おかげであたしが怒られちゃったじゃないの」

江崎はため息をつき、両手を広げた。

「今日は解散します」

紅は、辻に聡史のことを伝える～十一月二十四日（月）午前二時

恒例となった深夜の散歩が今夜も始まった。日を追うごとに、吐く息が白くなっていく気がする。十五分間同じ場所をぐるぐると歩く馬鹿馬鹿しさにも慣れてくると、初めに辻が言ったように、外の空気を吸えるのは、単調な監禁生活の中での楽しみだという気にもなってきた。

列は先頭から柏木、辻、紅、杏子の列になっており、ちょうど中央の辻と紅はひそひそと話し合った。

「大塚さんは元気ないようだが、何かあったのかね」

「さあ。昼間の撮影でおブスにされて、傷ついたのかも。柏木さんも元気ないみたいだね」

「柏木さんは昼間火のついたタバコを腕に押しつけられて、やけどが痛むらしい。撮影から戻って以来、ほとんど話さないんだよ」

「ああ、根性焼き。聞いた」

「根性焼き……あれにはそういう立派な名前があるのかね」

辻は感心したように言った。

紅は伝えなければならないことを思い出した。

「そうだ、辻さん、差し入れをしてくれていた人がわかったの」

辻も明るい声を上げる。

「本当かね。どの人物かね？」

「この見張りの中にはいないみたい。だけど、とにかくあたしの彼だったの！」

辻は驚いた。

「もうつきあい始めたのかね。いくら何でもちょっと早いんじゃないかい。それに親切でも、相手はゲリラだからねえ。もう少しお互いを知ってからの方が……」

「そうじゃないの。もともとあたしの彼だった聡史なの」

辻はさらに驚いた声を上げる。

「それじゃ越川さんはゲリラと男女交際していたのかね？」

「うーん、聡史はゲリラじゃないと思う。きっとあたしを心配して、助けに来てくれたのよ」

「そうなのかい。立派な若者だねえ」

辻は杏子と違い、人質となった自分を助けに来た恋人という設定を、あっさり信じたようだった。

「越川さんとおつき合いしている若者なら、信用できるだろうね」

「もちろんよ」

「今度ぜひ紹介してくれないかね」

「いいよ。でもどうしてそんなに会いたがるの」

「ちょっと相談したいことがあってね」

「糖尿が悪いの？」

紅が辻を気の毒に思って尋ねると、前方をよろよろ歩いていた柏木が、紅たちに聞こえる大きさの声で言った。

「そんな馬鹿話を信用する人間がこの世にいるとは。この女は少々足りないようだから、仕方ないとしても……」

紅はむっとして言った。

「はあ、何ですか、柏木さん？ その独り言、しっかり聞こえてるんだけど！」

柏木は今度は紅に向かって言った。

「おまえが足りないのは仕方ないが、軽率な行為で他の人間を危険にさらすのはやめろ」

「どういうこと？」

「そいつはスパイだ」

紅は絶句したのちに言った。

「柏木さんって信じられない！ 聡史はあたしの彼なんだよ！ スパイのわけないじゃない！」

「スパイじゃなかったら、何でおまえに接触するんだ？」

「あたしを好きだから、助けに来たって言ってるでしょ！ 自分が女を弄んでいるからって、聡史まで同類と思わないでよ！」

「あきれた女だ！ どこまで馬鹿なんだ！」

「そのせりふ、そっくりお返しするよ、バカ男！」

間に挟まれている辻が言った。

「まあまあ二人とも。大声出して、見張りに聞きつけられないようにしないと……」

そのとき突然、紅の背後から抑えた泣き声が聞こえてくる。紅は歩きながら、頭だけで振り返った。

「杏子さん、どうしたの？」

杏子はすすり泣くばかりで、返事をしない。

柏木が言った。

「同室の女があんまり馬鹿だから、ふびんに思って泣き出したんだ。そうだろう、杏子？」

「そんなことで泣くかっつうの！ 柏木さんが最低最悪の男だからだよ、杏子さん？」

辻が再び仲裁に入った。

「二人ともやめなさい。大塚さんをそっとしといてあげなさい」

「何を騒いでいるんだ！ 静かに歩け！」

見張りの一人が自動小銃を持ち上げて威嚇してきたので、三人は口をつぐんだ。それから十五分の散歩の時間が終わると、柏木が言った。

「さあ、何をもたもたしているんだ、みんな。急いで檻に戻ろう。見張りコマンドの皆さんに面倒をかけてはいけない」

紅と辻は言葉を失って、柏木を見た。根性焼きのせいかわからないが、見張りにすり寄って身を守ろうとでもいうのか。

杏子だけがしくしくと泣き続けていた。

紅と杏子のあいだに、女の友情が生まれる～十一月二十四日（月）午前二時二〇分

散歩が終わって檻に戻されると、杏子は力なく自分のベッドに腰を下ろした。

紅は向かいに座り、声をかける。

「杏子さん、本当にどうしたの。大丈夫？」

杏子は思いつめたように呟いた。

「わたしはきっとここで死ぬのね……浮気した罰を受けて、ダーリンに見捨てられるんだわ……」

「そんなことないって！　きっとダーリンが身代金を払ってくれるって！」

紅は今まで心にもなかったことを口にした。

杏子は真剣な目で紅を見つめて尋ねた。

「ねえ、紅ちゃんが男だったら、浮気した妻を許せる？　遠慮せず正直に言って。大丈夫、わたしは傷つかないから」

紅は少し考えた。

「えーと、一回なら許す」

杏子はわっと泣き出した。

「もう三回目よ！　あの人とはきともう終わりだわ！」

紅は半分驚き、半分あきれた。

「三回も浮気してるの？　何でそんなに浮気するの？　それより何で結婚したのよ？」

杏子は目頭を押さえた。

「わたしに男関係聞かないでよ！　べつに不倫するつもりじゃなかったのよ！　でも誘われるとついふらふらしちゃうの！　わたしって男にだらしないの！　あのオカマさんにまでオンナを下げるって言われたわ！　ダメダメのサイテー女よ！」

紅は呆然として、何を言っているのかわからなかった。

杏子は顔を上げ、手を伸ばして言った。

「ペーパーちょうだい」

紅は備え付けのティッシュペーパーを箱ごと渡した。杏子は鼻をかんでから、紅を見た。目と鼻の頭が赤い。紅は杏子が可哀相になり、嫉妬を忘れ、励ますことにした。

「あたしがダーリンだったとして、三回目でも許すかも。いちばん好きなのがダーリンなら」

「好き」

「じゃあ何で三回も浮気したの！」

「わからない。声かけられるのよ」

杏子は鼻をすすり上げた。紅の心の中で、モテる杏子への嫉妬が復活し、励ますのはやめることにした。

「声かけられたとしても、相手の男のせいじゃないと思うんだよねー。結婚していますって言え

ばいいんだから、二股かけたほうが悪いんじゃない？」

「そうね、すべてわたしが悪いのよ……誘拐されたのも、年金制度が崩壊しかかっているのも、原発問題が収まらないのも……」

杏子はまた泣き出した。

これは杏子が恐れていたうつ病かもしれない。紅はやっぱり励まそうと思った。

「でもダーリンはいい人なんですよ。きっと杏子さんを見捨てないよ」

杏子は頭を振った。

「あの人はね、いい人すぎるの。わたしをととても愛してくれてる。絶対浮気なんかしないと思う。間違ったことは大嫌いだし、妻を守ることが夫の務めだと思っているような人だから。古風なところがあるのよね」

最後のほうはちょっと声がのろけていた。

紅はあきれた。

「そんないい人がいるのに、何で不倫したの？」

「彼が尽くした分と同じ分だけ、わたしもお返ししなきゃいけない気になるの。だからわたしは彼といると何をやってもだめな妻なんだという気になるの。彼の愛で自信を持てたり、失ったりのくり返し」

「それでおだててくれる柏木晴信に走ったってわけ？」

「そういうことかもね。気づかなかったけど」

それから杏子は言った。

「きっと離婚ね。不倫相手の男と一緒に誘拐されたんだもの。きっとダーリンは会社でも立場がないわ。やっぱりだめな妻よ、わたし」

紅は杏子を見ながら、見た目とずいぶんイメージが違う人だと思った。杏子は華やかだが、彼女なりの悩みやコンプレックスを抱えているのだとわかったら、等身大の杏子が見えてきた気がした。自分は勝手に杏子のイメージを作り上げて、嫉妬したり、いじけたりしていたのかもしれない。

「あたしね、ずっと杏子さんに嫉妬してた」

「どうして」

杏子は濡れた目をしばたたかせた。紅は続けた。

「あたし、いつもふられてばかりだったから。杏子さんが銀行員と結婚していて、柏木晴信とつき合っていて、羨ましかったの」

「だからわたしに当たったの？」

「そう」

紅が素直に認めると、杏子は言った。

「でもわたしたち、一つのパイをとり合った仲じゃないでしょ」

「一つのパイって何？」

「同じものをとり合ったわけじゃないってことよ。たとえば、もし同じ男を好きになって、その人を取り合って負けたなら、勝った相手に嫉妬するのは絶対ありよ。でもわたしは紅ちゃんのほ

しい男をとったわけじゃないわ。わたしたちのほしいパイは違うんだから、それぞれがほしいパイをとりに行くのよ。それでもしとれたら、自分をたくさん誉めてあげて、とれなかったら、少しだけ泣くの。友だちがほしいパイをとれたら、おめでとうって言ってあげて、とれなかったときには慰めてあげるの。シンプルでいいでしょ」

杏子の言いたいことはわかる。

しかし紅は俯いた。

「だってあたし、自分のほしいパイがわからないんだもの。だから結婚したり、いい男と恋愛したり、仕事で成功している友だちを見たりすると、自分のパイをとられたような気になっちゃう」

「自分のほしいパイが何なのかわかっている人って意外と少ないと思う。わたしなんて、自分のほしいパイがダーリンだって気づいたのは、誘拐されてからよ」

杏子はうめいた。

「手遅れかもしれないけど、やっぱり愛に浮気はいらないんだわ！　晴信さんがひどい男で、わたしが傷つけられたことはもういいの。でもいい人を傷つけてしまったことのほうが後悔するし、なかなか忘れられない」

それはそうかもしれない。紅は言った。

「間に合うよ、きっと。解放されたら、ちゃんと話し合えば？」

杏子はうなずいた。

「そうするしかないわね……ダーリンに会いたい」

「あたしは自分のほしいパイを探さなきゃ」

「それにはまずここから出ることよね。わたしたちのスタートラインはそこから」

「一緒にここから出よう。いつか出してもらえるって信じて、解放されるまでがんばろう」

二人はうなずき合った。それから紅は金網を見つめ、ぼやいた。

「嫉妬は醜いけど、普通に日常生活を送れている人に、あたしは嫉妬する。この金網の外に出られたら、何でもできる気がするもん」

杏子は少し笑った。

誘拐コンサルタントは、贅沢な買い物をした美登里を注意する～十一月二十四日 月曜日 午後七時

誘拐コンサルタントは、贅沢な買い物をした美登里を注意する～十一月二十四日（月）午後七時

今朝、江崎は美登里に電話をして、今夜のミーティングには必ず出席するよう話した。予想どおり、美登里は娘の具合を理由に断った。さらに、身代金を直接払うのはA F 保険だし、犯人と交渉しているのは正志なのだから、今後自分が出席する必要はないと言い出した。江崎は根気よく説得した。交渉がいやだから抜きたいという気持ちは誰もが同じだ。それを許しては士気が下がり、全員による不平不満の大合唱になって、交渉チームは崩壊する。三十分の通話ののち、美登里はようやく今夜の出席を承諾した。

午後七時になると、越川夫妻、静子が順に到着した。

正志に今日の交渉のポイントをまとめたメモを渡す。もし電話がかかってきた場合、今日の時点で伝えるべきことは二点だけだ――柏木夫人は別荘売却の手を打っているから、もう少し待つてほしい。人質たちの生存の証拠がほしい。これから数日はひたすらこの二点だけを訴え続け、生存の証拠をもらえれば、支払い金額を提示すると伝えるのだ。

午後七時四〇分、ようやく美登里が到着した。ピンクのリボンつきブラウスに黒いミンクのショートコート、光沢ある黒のスカートで、女優のごとき堂々とした登場である。手にはゴールドのショルダーバッグの他に、ブランドの紙袋を提げていた。

江崎はその颯爽とした姿に驚き、紙袋に目を留めて尋ねた。

「お買い物ですか」

「そうよ。すっかり疲れちゃって。秋物のバッグを買ったら、元気が出たわ」

美登里は微笑を浮かべて、椅子に座る。

江崎は尋ねた。

「失礼ですが、おいくらですか」

「本当に失礼ね。まあ、今日のは二十五万円ってところかしら」

美登里は失礼だと江崎をとがめつつ、自慢げにバッグの価格を白状した。越川夫妻の顔が羨望と反感を表に出すまいとして引きつる。

美登里のような人間にとって、高価な持ち物はステータスシンボルであり、アイデンティティと直結している。自分がいかに成功しているか、それを身につけるにふさわしい人間であるかを誇示したいのだから、価格を聞かれて得意な気分になっても、悪い気分にはならないはずだ。

江崎は尋ねた。

「それは今どうしても必要なものですか」

「そうよ。だって一人であの紙袋をとりに行ったのだから、自分へのごほうび。これでわたしの気持ちが上がるのだから、安いものでしょ。あなただって、わたしの気持ちが前向きになって、ミーティングに出席したほうがいいんじゃない？」

美登里が娘のことや昨日のプレゼントで精神的に追いつめられていることはわかっている。だ

からこそあえて言わなければならないと江崎は思った。

「柏木さんにお願ひがあります。人質全員が解放されるまでは、派手な買い物は控えてください」

「何ですって？」

美登里はさっと顔色を変えた。

江崎はかまわず続けた。

「日用品はかまいませんが、宝石やブランド品など贅沢品の買い物、一流レストランでの食事、エステもやめていただきたい。交渉に支障をきたします。気分転換はお金を使う以外のことでなさってください」

「ちょっとそれ、どういうこと……」

江崎は美登里の文句を遮った。

「N L F があなたを尾行して、買い物している姿を見ていないとは限らない。彼らは二十五万円のバッグをぼんと買う金があるなら、その金を恵まれない人々に援助してやれという考えの持ち主たちです。金持ちが自主的にボランティアをやらないから、N L F が強制的にやらせていると主張しています。それなのに派手な買い物をしては、彼らの反感を買うだけです」

「いいこと、わたしにはわたしの生活と人生観があるの。貧乏人を気遣っていたら、金持ちはやってられないわ。わたしは自分の生き方をN L F に合わせる気はありません」

越川夫妻と静子は顔をしかめて美登里を見た。

江崎は笑顔で軽く頭を振った。

「いいでしょう。それじゃ、言い方を変えます。われわれの交渉計画では、晴信氏は誘拐保険に加入しておらず、奥さんが資産をかき集めて、四人分の身代金を作るという筋書きなのです。それなのに派手な買い物をしては信憑性に欠ける。マスコミにかぎつけられたら世論に叩かれるでしょうし、そうなれば値引きどころか値上げされかねません」

「だから値上げされたら、わたしが別荘を売って払うって言ったでしょう。それでも文句あるの？」

ほとんど売り言葉に買い言葉である。

江崎が反論しようと口を開きかけたとき、青山が鋭い口調で口を挟んだ。

「わたしは初めてお会いしたときに、申し上げたはずです。高額の手代金を支払わないことこそ、ご家族を守るのだと。別荘の売却は必要ありません。二億でカタをつけます。ですから柏木さんには生活態度を改めていただきます。人命がかかっていることをお忘れにならないでください」

美登里は顔を真っ赤にして、青山と江崎を睨みつけた。

「あなたたちのやり方がよくわかったわ。脅せば自分の思いどおりに人を動かせると思っているのね。あなたたちはゲリラと同じよ」

「脅しではありません。事実です。これは遊びじゃない。人命がかかっているんですよ。罪のない人たちの命がね」

江崎が最後にもう一度釘を刺すと、美登里はむっつりと黙りこんだ。要約すると、馬鹿な真似

はするなの一言ですむところを、こんなにわかりやすく説明したのだから、恨まれる筋合いはない。江崎は美登里のご機嫌とりをする気もなく、放っておくことにした。

越川夫妻と静子は黙って成り行きを見守っていたが、憂鬱な沈黙が室内に満ちると、そわそわし始めた。越川夫妻は交渉メモのおさらいをし、静子はキッチンに立った。

その夜、N L Fからの電話はなかった。沈黙は想定内の戦略なので、驚くべきことではない。しかし美登里はN L Fからの連絡がなかったことを、コンサルタントが悪いかのように言って、オフィスから帰って行った。

紅は、聡史に失望する～十一月二十五日（火）午前八時

カーテン越しの朝日のおかげで、檻の中は明るい。朝食の入ったビニール袋を提げた見張りが入ってきて、夜番の見張りとは交代する。二人の見張りはほとんど会話を交わさず、引継ぎを終えた。

新しい見張りは一人で、オレンジマスクをかぶっている。オレンジは紅たちが監禁されている檻に来て、差し入れ口に朝食を入れた。紅はオレンジが何か言ってくれるのではないかと期待したが、自分たちにまったく目を向けず、すぐに見張り用のテーブルに向かって行ってしまった。

紅は朝食をとってきた。ビニール袋の中から、サンドイッチとアップルジュースを出して、一人分を杏子に渡す。そのとき小声で言った。

「杏子さん、あれが聡史」

杏子は金網の向こうに目を向ける。

「彼？」

「そう」

二人はオレンジをじっと見つめた。オレンジは自分たちに興味がない様子で、ポットの湯でインスタントコーヒーを淹れると、リモコンでチャンネルを替えながら、番組を探している。

紅は考えた――オレンジの背丈と肩幅は聡史と同じくらい。服はありふれた黒のセーターとジーパンなので、聡史のものかどうかわからない。でもこの間バスルームに案内してくれた男と似ているという気はする。

杏子は言った。

「遠いし、マスクをしていて、みんな同じに見えるけど……本当に聡史君なの？」

「たぶんね。少なくとも、この間あたしをお風呂に入れてくれた人であることは間違いないと思う。こっちに呼んで、確かめてみる」

「ちょっと待って。気軽に呼ぶのはまずいと思うわ」

「どうして」

「だって見張りはわたしたちと話してはいけないことになっているんでしょう。この間の入浴のあとも、他の見張りが来て、話せなかったわけだし」

「うん」

杏子はさらに声をひそめた。

「たぶんこの部屋には監視カメラがついているのよ。だからもし彼が協力者であっても、親しげにしないほうがいいと思うの。うまく立ち回らないと、彼の立場もまずくなるわ」

「そうだね。慎重に動いたほうがいいよね。せっかくの逃げるチャンスだもの」

紅は少し考えた。

「じゃあ、この間化粧品を頼んだみたいに、何か用を頼んでみようかな。そうすれば話すきっかけは作れるよね。そのとき、メモを書いて渡すの」

「そうね……そうだね、トイレに行きたいって言うてみれば？」

「トイレ？」

「そうよ。トイレに行くときは見張りとは接近するから、小声でも直接話せるわ。それに本当に聡史君なら、二人きりになりたいでしょ」

「だけどトイレ？ 二人きりになるなら、トイレ以外のところがいいんだけど……」

「贅沢言わない。わたしたちの命と自由がかかっているんだから」

杏子はそう言って、顎を軽く上げて促す。

紅はサンドイッチを置くと、金網に近づき、覚悟を決めて言う。

「見張りさん、トイレに行きたいんだけど！」

オレンジはテレビから檻に視線を移す。それから無言で立ち上がると、近づいてきて、鍵を開ける。紅が頭のうしろで手を組むと、外に出された。

杏子を見ると、エールを送るように眉をひょいと上げてから、ジュースを飲んだ。

オレンジは一言も口をきかず、紅に自動小銃を向けて、部屋の外へと続くドアに連れて行く。紅はそのそっけなさで不安になった。廊下の右斜め向かいのドアがトイレである。距離は五歩程度だから、時間はない。ドアの外に出ると、すぐに紅は言った。

「あなた、聡史でしょ？」

「しっ！」

「やっぱり聡史だ！」

聡史はうなずきながら、口元に人差し指を立てる。

紅は聡史に抱きつきたい気分になった。

「あたしを助けに来てくれたんだ！ 警察に頼まれたの？ いつ出してくれるの？」

マスクに遮られた声が聞こえる。

「大きな声を出さないで。隣の部屋に柏木さんと辻さんが監禁されているから、そっちの見張りに聞こえたら困る。それと警察に頼まれたわけじゃない。僕はN L Fだから」

「は？」

紅は目を見開いた。

「聡史ってゲリラだったの？」

「だから大声を出すなって！」

聡史は紅の口元を押さえた。しばらくしてから手を放す。

「どういうことか説明してよ！ じゃあ旅行に行くって誘っておいて、あたしをゲリラに誘拐させたわけ？」

「それは違う。紅が誘拐されるなんて予想もしていなかった。だいたい旅行しようって言い出したのは、紅じゃないか」

「そうだけど……」

「誰を誘拐するかは幹部が決めていて、僕はただの見張り。バイトでN L Fを手伝っているだけだから、決定権はない」

「バイトでN L F？」

紅はまた驚いて、声が大きくなる。

聡史があわてた。

「だから大声を出さないでくれって！」

「ごめん。だけど、ちゃんと説明してよ。バイトでゲリラってどういうこと？」

聡史は言いにくそうに口を開く。

「実は学生のとき、見張りのバイトをしていたんだ。最初からやりたかったわけじゃなくて、友だちにいいバイトがあるって聞いて、連れてこられて……たしかに割がよかったんだけど。一回見張りのバイトをしたら、やめられなくなって」

「どうしてやめられなかったの？ やめようと思えばやめられるでしょ」

紅は聡史の言い分に腹が立ってきて、声がきつくなる。

聡史は頭を振った。

「そう簡単にはいかないんだよ。一度NLFのことを知ったら、なかなか足抜けはできない。僕が抜ければ、報復として家族が誘拐される。お金を受けとった以上、警察に駆けこんだって、僕も逮捕されるかもしれないし」

「だけど……それにしたって、バイトで人質の見張りなんて……」

紅は状況がのみこめてくるにつれ、聡史を理解できなくなっていた。

「見張りが学生アルバイトっていうのは、そうめずらしいことじゃないんだよ。ゲリラの多い外国では、けっこう多いらしい。社会人は長期の休みをとりにくいけど、学生は夏休みなんかがあるし、リゾート地でアルバイトをすとか、仲間とキャンプに行くとか言えば、家族は疑わないし……」

「そういう問題じゃないと思う」

紅はきっぱりと言った。聡史は誠実な人だと思っていた。男性としてセクシーだとか出世を期待できるタイプとかではないが、悪いことをできる人ではないと信じていた。それがバイトのゲリラだったと聞き、紅は一気に聡史を信頼できなくなった。社会改革のために信念を持ってゲリラ活動をしていると言ってくれたほうが、まだ信頼できたかもしれない。

聡史は視線を落とした。

「ごめん……だけど、バイトの見張りは監禁こそされていないけど、状況的には人質と同じだよ。逮捕を恐れている分、人質よりびくびくしているかもしれない」

「同じじゃないよ。自由に出入りできるんだから、絶対に同じじゃない。それよりどうしてここに来たの？ あたしを助けるために来てくれたんなら、早く出してよ」

「そう簡単にはいかないよ。僕が紅を逃がしたら、疑われる」

「疑われないようにやってよ」

「無理だよ。窓はふさがっているし、玄関のドアの前には別の見張りがいるんだから。二人で逃げたとしても、ばれたら、今度は紅や僕の家族が誘拐される」

「逃げたあとなら、どうとでもなるよ。誘拐されないよう注意してって、家族に言う。ここの場所を警察に通報すればNLFを逮捕できるし、警察に頼めばボディガードをつけてもらえるし。ここにいたら殺されるかもしれないんだよ。まずは逃がしてよ」

「だからそう簡単にはいかないんだって。この山荘にいるのは、NLFというよりはバイトばか

りで、幹部や拉致の実行犯の顔や名前も知らなければ、どこにいるかもわからない。だから、警察に通報したって無駄なんだよ。それに、僕は同じ立場の仲間を裏切ることはいできない。さらに、うまく逃げられたとしても、N L Fは誘拐すると決めたら、成功するまであきらめない。N L Fの再襲撃が三年後ってこともあるんだから、ボディガードを頼むっていうのも無理。一度ターゲットにされたら、逃げる術はないと思ったほうがいい。身代金を払って、出るしかないんだ」

「じゃあ、やっぱりあたしは出られないってことじゃない。だって、うちにお金はないもの。じゃあ、せめてこの場所を警察に教えて」

「僕にも場所はわからないんだよ。目隠しされてから、車に乗せられるんだから」

聡史の説明を聞いていると、失望と憤りが募っていく。紅は不満を隠せなかった。

「聡史は何のためにここに来たの？」

「それはやっぱり紅のことが心配だったから。せめて無事だけでも確認したいと思って」

紅はその一言に胸をつかれて、一瞬黙った。それから尋ねる。

「会社は？」

「有給使って休んだ。N L Fには、お金が必要になったから、もう一度バイトをやらせてもらえないかって連絡して、ここに来た」

「何日休んだの？」

「三日。四日来ているけど、一日は土曜日を利用したから」

「そんなにしょっちゅう休んだら、クビになるんじゃない。クビになったら、次に正社員で働くのは難しいんだから」

「うん」

どうして自分はこんなに意地悪なのだろう。素直にありがとうと言いたいのにな、どうしても聡史を責めたり、厭味を言ったりしてしまう。言いたかったのはこんなことじゃなかった。

「.....あたし、戻る」

「そうだね。廊下は監視カメラがついていないけど、部屋の出入りはセンサーで記録されているから、そろそろ戻ってもらったほうがいい。また隙を見て、風呂には入れさせてあげられると思う。あと実家の電話番号教えて」

「何で？」

「紅が元気だってこと、伝えてみる。あと何とかお金を払うようにって。匿名電話になるから、信じてもらえないかもしれないけど」

「わかった」

紅は寂しい思いで電話番号を言った。聡史は聡史なりに優しく、思いやりもある。でももし今ここで聡史と寝ても、この寂しさは埋められないと思った。だから聡史にこの寂しさを知られてはいけないと思った。

聡史は言った。

「あと何か欲しいものがあれば言って。次に来るとき、持ってくるから」

「いいの、もういい.....あ、辻さん」

「辻さん？」

「一緒に捕まったおじいちゃん。あの人、聡史に会いたがっているの。相談したいことがあるって」

「相談？ ってか、紅、僕のこと他の人に言ったのか」

「見張りには言ってない。でも他の人質には言った」

「大丈夫かな」

「辻さんと杏子さんは大丈夫。柏木晴信は聡史のことをスパイとか言って、信じていなかったけど……でも柏木には気をつけて。見張りの人に気に入られようとして、ゴマをすり始めたみたいだから」

「わかった」

聡史はドアを開けた。その瞬間、紅はもう一つ、忘れていた質問を思い出した――どうして聡史はあの朝旅行をキャンセルしたのか。しかし自分たちはすでに見張り与人質に戻っており、尋ねることはできなかった。

誘拐コンサルタントは、逃げる静子を捕まえる～十一月二十五日（火）午後二時

江崎は静子に電話して、いつもより早くオフィスに来てもらうことにした。昨夜のミーティング後、青山にいいかげん静子の秘密を聞き出すべきではないかと相談すると、青山はすぐに大賛成した。「ご家族の皆さんは完全にたるんでいると思います。N L Fに勝ちたければ、秘密を持たせ続けてはいけません。もう少し厳しく指導しましょう」――青山は和江を怒鳴りつけて以降、スパルタ教育系誘拐コンサルタントに転向したようだった。

今夜も美登里は来れないと連絡があった。越川夫妻が到着するのは、午後七時以降なので、午後いっぱいかければ、多少ねばられたとしても話はつくだろう。

しかし約束の午後二時になっても、静子は現れなかった。午後二時三分、青山は文句を言った。

「やはりたるみきっています！ 人質の命を何だと思っているんだ！」

「でもなあ、時間にルーズだといいいこともあるんだぞ。行動を予測されず、誘拐されにくくなるからなあ」

江崎がのんびり言うと、青山は江崎をじろりと睨んだ。江崎は肩をすくめる。青山は仕事熱心だが、マイナスの感情に翻弄されやすいことは間違いなかった。

午後二時十五分になり、江崎は窓に目をやった。遠くに黒雲が垂れこめ、今にも雨になりそうだ。江崎は窓に近づいた。

「雨が降る前に着いてくれるといいがな」

江崎は三階の窓からふと地上を見下ろし、視線を止めた。

「おい、青山君。辻さんがいる」

「え？」

青山が椅子から立ち上がって、窓に駆け寄ってきた。二人は並んで嵌め殺しの窓越しに外を見下ろす。静子は前の路上を行ったり来たりしては、ときおり立ち止まっていた。

青山が言った。

「何をしていますんでしょうか」

「さあな。入るのをためらっているんじゃないかな。ここまで来たはいいが、詰問されることを予想して、入る決心がつかないとか」

「ここに到着する前に、決心をつけていただきたいものです」

青山の口調は厳しかった。

「まあまあ、辻さんは何事にも優柔不断な性格だから」

江崎は窓を離れ、ハンガーにかけてあったジャンパーを羽織る。

「迎えに行ってくる」

「僕も行きます」

青山も自分の上着をつかんだ。べつに二人で行かなくてもいいのだが、と江崎は思ったが、仕

事に燃えている青山を止めても無駄だろう。家族たちには緊張感が必要だが、青山には少し頭を冷やしてもらいたい。いったいどうしたものか。

二人はオフィスを出て、エレベーターに乗った。

青山は江崎の足元を見て、不快そうに言った。

「外に出るときくらい、健康サンダルをやめて、普通の靴に履き替えたらどうですか」

いらだちの矛先がついに自分のほうに向いてきたか――江崎は言った。

「外と言っても、ビルの前だろう。俺にとっては角のコンビニまでが、健康サンダル圏内なんだ」

エレベーターが一階に下り、ドアが開くと、眼前に静子が立っていた。自分たちの姿を見て、目を丸くする。

「辻……」

江崎が声をかけようとする、静子は踵を返して逃げ出した。二人は一瞬硬直したが、エレベーターのドアが閉まる前に外に飛び出す。しかし江崎の健康サンダルは床につかかって、右足が脱げた。

青山が振り向いて怒鳴る。

「だから健康サンダルで外に出るなって言ったんですよ！」

「それはあとだ、追え！ 捕まえろ！」

江崎も健康サンダルを拾いながら怒鳴った。

青山は静子のあとを追って、ビルの外に駆け出す。江崎は健康サンダルをつっかけ、あとを追う。

静子は体が丈夫と言っていただけのことはあった。江崎が外に出たときは、通行人をたくみによけて、すでに二十メートルほど先を走っており、青山が懸命にあとを追いかけていた。しかし高齢だ。心臓に負担をかけすぎたり、ころんで骨折でもされたら、一大事である。

江崎は静子を追っている青山の背中に向かって、大声で言った。

「青山君、靴を交換してくれないか！」

「いやです！」

「じゃあ俺はこのまま辻さんを追うから、君は隣の路地に入って、平行に走ってくれ！ この先の信号で合流すれば、挟み撃ちできる！」

「いちいち策を弄するのはやめてください！ 僕がこのまま走れば、追いつく！」

青山はそのまま静子に向かってストレートに突進していく。

江崎は健康サンダルに足をとられながら、次第にスピードを落とし、ついに歩きながら思った。健康サンダルで走ると、足裏の刺激が強すぎて痛い。やはり適材適所がいちばんだ。ここは一つ、若くて、走れる靴を履いている青山に任せよう。

江崎は交差点で二人に追いついた。雨がぱらつき始めている。ちょうど赤信号で止まったらしく、青山は静子の腕を捕らえていた。通行人が不審そうに自分たちを見ている――まずい――江崎は静子にやさしく声をかけた。

「警察沙汰は困るんですよ、辻さん。おわかりですよ。行きましょうか」

「はあ、はあ、はあ……」

静子は胸を押さえ、あえぎながら返事をした（返事をしているつもりはないのかもしれないが）。

青山は片手でネクタイをゆるめながら大声で言った。

「さあ、オフィスに行きますよ！ 今日こそすべて話してもらいます！」

静子はふるえ上がった様子で、青山を見た。

江崎は首筋を搔きながら、思った――青山の頭から水をぶっかけたら、平常心に戻ってくれるだろうか。

聡史は、のぞき趣味の男になる～十一月二十五日（火）午後二時

聡史はまったく集中できずに、テレビを眺めていた。主婦向けのワイドショー番組が高級レストランのお得ランチを放映していることは理解できたが、目の前を次々と流れていく料理には関心が持てなかった。

聡史はさりげなく檻に目を移す。金網の向こうでは、紅と杏子が、それぞれ自分のベッドに座りながら、昼寝もせずに今日届いたファッション雑誌をめくっていた。女同士だから、もっとひっきりなしにおしゃべりをするものかと思っていたが、どうやらそうでもないらしい。

ドアが開いて、グレイマスクをかぶった男が入ってきた。初めて会う見張りコマンドである。「おいオレンジ、今日は一日早いけど、風呂日にするって。見張りの人数が揃っているからって」

「ああ、わかった」

聡史は突然現実に戻された気分ですべて答えた。風呂日か――紅をまた風呂に入れさせてやれないものだろうか。

「あの若い女のほう、内緒で風呂に入れてやれないものかな」

「若い女？」

グレイは紅のほうをちらりと見た。

「ああ、おバカちゃんか」

聡史はむっとした。

「おバカちゃんって何だ？」

「キャロラインさんがあの女をそう呼んだらしい。言いふらしている奴が『いたっす』」

「キャロラインさんって誰だ？」

「ヘアメイクのオカマ」

話が全然見えてこない。聡史が沈黙していると、グレイが言った。

「何でおバカちゃんを風呂に入れたいんだ？ やりたいのか」

「馬鹿言え」

「だよな。人質とやったら、殺されるぞ」

「わかってるって。ストックホルムには警戒してるよ」

「死にたくなければ、情をかけるのはやめとけよ」

聡史は紅を風呂に入れさせることを諦め、うなずいた。見張りが人質に情をかければ、逃亡を手伝う可能性が出てくるため、名前を呼ぶことさえ厳禁とされる。紅とつき合っていたことがばれたら、自分はただではすまないだろう。しかしそれでは、せっかくもぐりこんでも、菓子類を届けることくらいしかできない。

そのとき聡史の頭にひらめくものがあった。これで紅を風呂に入れ、辻にも接触できるかもしれない。自分の評判は下がるが、どうせゲリラ内でのことだ。

グレーが檻を親指でさして言った。

「愛人のほう、連れて行くぞ」

「待ってくれ。のぞきたいんだ」

「あ？」

グレースクの向こうの目が驚いている。

聡史は己を捨てる覚悟で続けた。

「若いほう、けっこう好みなんだよ。親しくなるのはまずくても、のぞくくらいならいいだろう。風呂に入れてやって、風呂の見張り番、代わってくれれば……。見るだけで、絶対に手は出さない。男二人の風呂の見張りもやるからさ。頼むよ」

グレーは目を丸くして言った。

「……のぞき趣味だったのか」

聡史は言葉につまった。

「ああ……そういうことになるかな……」

「実際にやるより見るほうがいいのか？」

「……まあ、そうかな」

毒を食らわば皿までという言葉を出す。

グレーは腕組みをして、納得したようにしみじみとうなずいた。

「真面目そうな奴ほど、そっちに行くんだよな」

もう肯定も否定もできない。聡史があいまいな笑みを浮かべ、無言で返事を待っていると、グレーは言った。

「じゃあヘフェに訊いてきてやるよ」

ヘフェとは、スペイン語で隊長を意味する。誘拐の盛んなコロンビアなどのゲリラ組織で、小グループのリーダーがそう呼ばれているらしく、NLF内でもそのまま使われている。

グレーが出て行くと、紅と杏子が不安そうに自分のほうを見ていた。二人を安心させようと、聡史は一度だけ首を縦に振って見せる。

しばらくすると、グレーが戻ってきた。

「オーケーだってさ」

聡史がほっとしていると、グレーが小声で言った。

「ヘフェはおバカちゃんを嫌っているから、のぞかれりゃいいと思ったんじゃないの。それにどうやらすでに柏木の愛人の風呂をのぞいたらしいんだよ。あいつ、年増好みだからさ。俺らには厳しいこと言っておいて、自分だけきったねえよな」

「そうだな」

聡史は答えながら、これは聞かなかったことにしようと思った。

「俺もおバカちゃんの風呂、のぞこうかな。途中で交替しろよ」

「だめだ」

聡史はそれだけははっきり断って立ち上がると、檻に行き、紅を指さした。

「風呂だ。おまえから」

紅はびっくりした顔をしたが、すぐに着替えや洗濯物などを引っ張り出し、大荷物で準備を終

えた。聡史は檻の鍵を開け、紅を外に出す。ドアの外に出るとき、グレーの様子を窺うと、わけ知り顔でにやついているのが見え、むかついた。

外に出たとたん、紅が言った。

「お風呂の許可をとってくれたの、聡史？　ありがとう、嬉しい！」

ストレートに喜ばれ、事情を説明しにくくなった。

「静かに。時間は三十分しかないんだから、急いでくれよ。それと一階にはヘフェ……隊長がいるから、僕に話しかけないで」

「わかった。ありがとう、聡史」

二人は見張り与人質になって、階段を下り、バスルームに行った。紅がバスルームに入ると、聡史はドアの脇の椅子に腰を下ろした。しばらくすると、シャワーの水音が聞こえてくる。これで自分はこのぞき趣味になったのかと思ったら、紅の裸と匂いを思い出した。女という生き物はどうしてあんなにやわらかくて、いい匂いを漂わせて生きていられるのだろうと不思議になる。

聡史は紅との最初のセックスを思い出した。あのあとで自分は、自分たちの間にある距離を認めたのだ。それは最初から彼女の中にあっただけのものだった。それなのに自分は どうして そんな女のために、仕事を休んでまでここに来ているのだろう。

そんなことを考えながら、紅を待った。時計を見る。紅に「あと五分」と声をかけると、紅は「わかった」と返事をした。そして十分後に出てきた。濡れた髪をタオルで拭きながら、ぺろりとピンクの舌を出した。

「ごめーん」

「ほら、行かないと」

紅を二階に連れて行くと、にやついているグレーが近づいてきて言った。

「おバカちゃんはどうだった、ノゾーキー？」

「何だ、そのえせロシア人みたいな呼び名は？」

「おまえのことだよ。のぞき趣味だから、ノゾーキー。ぴったしじゃん」

ゲリラ内では本名を明かしてはいけない決まりで、基本的にマスクの色で呼ぶことになっている。しかし今後はこの不名誉な名前が自分の通り名になるだろう。聡史はため息だけついて、コメントを控えた。

次に杏子を連れてバスルームに向かう。ドアを出ると、杏子は小声で言った。

「紅ちゃんの彼なんですってね。聞いたわ」

「でも、できることはあんまりないですよ」

「これ、わたしの夫の携帯の電話番号」

杏子は懇願するように、小さなメモを押しつけてきた。

「愛してるって伝えてもらえないかしら。今回のことはわたしが悪かったの。今さらだけど、いちばん大切なのは、和己なんだってわかったの。もう一度会って、話し合いたい。お願い」

愛人と一緒に誘拐された妻から愛していると言われても、それがまっすぐ夫に伝わるものだろうか。聡史には杏子の言葉は助かりたいための方便にしか聞こえなかった。こういうずる賢い女は苦手だ。しかし、断ることはできずに、メモを受けとり、冷たく言った。

「匿名で伝えるだけですよ」

「ありがとう」

階段を下りた。杏子はそれきり何も言わず、バスルームに入った。風呂を終えると、無言で二階の檻に戻った。

次に男二人を閉じこめている隣の部屋に入る。先に柏木を連れ出した。

二人きりになると、柏木はやたらと話しかけてきた。

「君、いくら欲しい？ それとも就職先の紹介がいいかな。わたしはマスコミに顔が利くんだ。もし逃がしてくれたら、テレビ局だろうと広告代理店だろうと、希望のところをどこでも紹介するつもりだ。なあ、どうして黙っているんだ。仕事じゃ気に入らないのか。それなら車でも女でも……モデルクラブにもツテがあるから、好みの女を紹介できる。もちろん警察に君のことは言わない。なあ、お互いにとっていい話だと思うんだよ。とにかく君の希望を言ってくれ」

ここまで馬鹿にされたのは、生まれて初めてだ。ゲリラのやり方を支持する気はないが、柏木を誘拐したのは正解だったと思う。聡史は無言で柏木をバスルームに連れて行き、また無言で檻に戻した。柏木は「ゲリラのくせに、お高くとまりやがって」と吐き捨てて、金網の中に入った。

最後に辻を連れ出した。ドアを出ると、聡史は言った。

「紅とつき合っているのは僕なんですが」

「君だったのかね。たしか聡史君だったね」

「そうです」

「君はゲリラなのかね？」

聡史は一瞬ためらったが、答えた。

「はい」

辻は憎しみを押し殺すような目で聡史を睨んだ。しばらく考えこむように黙っていたが、やがて静かに口を開く。

「帰されなかった人質はどうなるんだね？」

辻は自分の行く末を案じて、自分に接触したかったのか――聡史は言った。

「帰れますよ。金さえ払えば」

「そうじゃないんだ。わたしのことじゃないんだよ」

辻は頭を振ってから続ける。

「わたしは三年前に誘拐されたきり戻ってこなかった孫の潤を探すために、わざと誘拐されたんだ」

誘拐コンサルタントは、静子から人質にされた孫の話を聞く～十一月二十五日 火曜日 午後三時

誘拐コンサルタントは、静子から人質にされた孫の話を聞く～十一月二十五日（火）午後三時

「孫を探すために誘拐された？ 何て馬鹿なことをしたんですか！」

青山が静子を怒鳴りつけた。青山に秘密を打ち明けるには最悪のタイミングだったと思う。企業のサラリーマンが客を馬鹿呼ばわりするなんて、通常ならありえないだろう。

江崎は急いで言った。

「落ち着いてくれ、青山君。辻さんがやったことじゃない。ご主人が勝手に乗りこんでいったんだ。そうでしょう？」

静子は膝の上でハンカチを揉みしぼりながら言った。

「……はい。わたしは止めたんですけど、主人はずっと潤のことを心配していて、止めてもきかなくて……」

静子は俯いて黙りこんでしまった。

江崎は椅子に深く沈みこんだ。

「しかし……孫探しか」

江崎に言わせれば、辻の行動は無謀の一言に尽きる。いくら心配で乗りこんでも、ミイラとりがミイラになるに決まっているからだ。まず、ゲリラ組織は複数あり、孫を誘拐した組織とバスジャックをした組織が同じかどうかはわからない。さらに、もし同じだったとしても、人質は人質として監禁されるだけで、組織内を調査はできない。刑務所のように独房が並び、人質同士の共同作業があって、顔を合わせる機会があるとでも考えたのか。行けば何とかなるとでも思っていたのか。

青山は唇を噛みしめていた。不要な犠牲者をつくり出してしまったやりきれなさ、もどかしさを感じているように見えた。いくら自分たちのせいではないと言っても、同じ誘拐コンサルタントの江崎には、青山のやり場のないくやしさがわかった。

静子は顔を上げ、不安げに青山と江崎を見た。

「あの……潤は見つかるでしょうか」

「わかりませんね」

「そうですか……主人と一緒に助け出せばいいんですが」

江崎と青山は希望はないと言えずに、沈黙した。それから江崎が尋ねた。

「潤君は誘拐当時いくつでしたか」

「十三歳です。中学一年生でした。本当に素直ないい子で、成績もよかったですし、わたしたちにとっては自慢の孫でした」

十三歳というのは微妙な年齢だと江崎は思った。子供の誘拐の場合、幼すぎて面倒を見きれなくなると、身代金を待たずに殺されることがある。しかし十三歳なら分別もあり、ゲリラに従っていれば、生かしてもらえているかもしれない。だが三年は長すぎる。

「潤君のご両親……娘さん夫婦に当たりますか。そちらは今回のご主人の行動について、何とおっしゃっているんですか」

「何も……娘の美枝子と潤の父親は別れましたから」

「潤君の誘拐が原因ですか」

「それもありますが、誘拐されたときに、すでに夫婦仲は冷えていたんです。娘は別れたがって、うちに相談に来ていたんですから……ただ誘拐には主人が関わっていて……」

「どういうことです？」

静子は苦しげに眉根を寄せた。

「主人と一緒にのときに、潤はさらわれたんです。車でショッピングセンターに買い物に連れて行って……主人は潤の誕生日プレゼントにと、新しいスニーカーを買ってやるつもりでした。買い物が終わって、潤がトイレに行ってくると言ったので、主人は車で待っていました。潤とはそれきりです。潤の父親は主人と娘を責めまして、翌年離婚することになりました。娘は主人のせいじゃないと言ってくれたんですけど、主人はそれから人が変わったようにふさぎこんでしまって……あの日バスで温泉に出かけたのも、何年ぶりかの旅行でした」

辻が無謀な行動に出た理由がわかってきた。できることがないという状況がどれだけつらいことであるかは、被害者家族と接している自分にはよくわかる。しかしこの誘拐事件を耳にしたことがなかったのが引かかった。十三歳の少年の誘拐が報道されていれば、必ず自分の記憶に残っているはずだ。

「潤君の父親のご職業は？」

「八王子で開業医をしております」

「……医者ですか」

江崎はため息をついた。

「身代金として要求されたのは金銭ではありませんでしたね？」

静子は驚いたように言った。

「はい。病人や怪我人を診ると……」

ゲリラは病院に連れて行けない傷を負った仲間を治したり、人質の健康状態を管理してくれる医者を常に必要としている。そこで医者家族を拉致し、身代金代わりに医療行為を強要したり、不正に医薬品を流させたりする。しかしそれは犯罪行為に当たるため、一度でも手を貸せば、医師免許剥奪の危険が出てくる。だから協力したあとでそのことを脅され、家族を帰してもらった頃には、その医者は完全にゲリラの一員にとりこまれているというわけだ。

江崎は尋ねた。

「警察には届けなかったんですか」

「通報したら、潤を殺すと言われて、できませんでした」

「犯人の要求に対して、ご家族はどうなさったんですか」

「わたしたちは信用できないと言って、潤の父親が一人で対応しました。結局医者としての協力はできないと断ったようです。かわりに、お金なら払うと持ちかけたらしいのですが……結局だめでした」

江崎と青山は無言で視線を合わせた。犯人からの要求にノーと言ってしまうことは、息子を殺していいと言ったも同然である。たとえ医師が職業倫理を貫いただけであってもだ。

静子は静かに話を続けた。

「美枝子は今年の春再婚しまして、その頃から潤のことを……あまり口にしないようになりました。忘れたわけではないのだと思います。ただ思い出すのもつらくて、口にできないのだと思うんです。それに潤のことを言えば、主人が苦しむのを知っていますから。主人は娘や潤が不憫で、何もしてやれない自分をずっと歯がゆく思っていました。それであの日、たまたまバスの中にゲリラが入ってきたものですから……」

「誘拐してくれと申し出たと？」

「はい。どうせ老い先短いんだから、自分はどうなってもいいと。自分より潤と美枝子のほうが大切だと。ここに潤がいるかどうかはわからないが、賭けてみると……」

静子は涙ぐんで、ハンカチで目元を押さえた。

青山が尋ねた。

「それをどうして今まで隠していたんですか」

「それは……和江さんにはご親切にさせていただきましたから。越川さんは主人が紅さんを助けたと思っていらっしやいますし、柏木さんもご主人の誘拐の巻き添えで拉致されたのだと思っていらっしやるから、うちの主人のために身代金を払ってくださるわけですし……誠に勝手なお願いではございますが、どうかこの件は内密にしておいてください」

静子は拝むように頭を下げた。それから顔を上げて、続けた。

「できれば、潤も助け出してやっていただけないでしょうか。お二人のお力で、何とかできませんでしょうか」

江崎と青山は沈黙するしかなかった。三年前に誘拐された十三歳の少年。犯人の要求が医療行為の提供だったことは、N L F が組織の整備をしていた時期に一致し、拉致したのはN L F の可能性が高い。しかし交渉は打ち切られている。N L F にとって誘拐はビジネスだ。商売にならない商品を三年間もストックしておくことは考えられない。すでに殺されたと考えるほうが自然だ。

この酷な結論を今静子に伝えるべきだろうか。それとも希望を捨てないようにと励ましておいて、辻を助け出したあと、伝えるべきか。

江崎が逡巡していると、青山が言った。

「うちのデータで検索してみましょう」

すぐに i P a d を出し、操作する。

「救出された人質の方からも、できる限りの情報をいただいています。もしかすると、潤君に関する情報があるかもしれません。苗字は何とおっしゃるんですか」

「小田です。小田潤と申します」

「小田潤君、男性。誘拐された日付は？」

「三年前の七月二十六日でした。潤が夏休みに入ってすぐのことで……」

「すると、今年十六歳ということになりますね。拉致された場所は八王子ですか」

「はい」

「当時の服装はわかりますか。その他の持ち物はありませんか」

「青のTシャツにジーパン、靴は黒いスニーカーでした。荷物は何も持っていません」

「何か身体的な特徴はありませんか。眼鏡をかけているとか、体に傷があるとか」

「特徴と言っているのかわかりませんが……潤の眉の中央には大きなほくろがあります。インド人みたいな……」

「ほくろはいい特徴ですよ。消えることはありませんから」

青山がデータを入力する。江崎もiPadをのぞきこんだ――検索結果は「該当なし」。青山は言った。

「入力データを名前と年齢、性別だけにしぼって、もう一度検索してみます」

――検索結果は「該当なし」――しかし青山は諦めなかった。

「ゲリラは監禁中、人質の名前を直接呼ばないことがあります。名前を不明にして、検索してみましょう」

――「該当あり。一件」――青山は詳細データを開いた。

「NLFの人質の中に少年がいたという目撃情報が一件だけありますね。時期は同じ年の十月、服装は黒いセーターとジーパン、中学生くらいとあります。交渉が打ち切られたのはいつでしたか」

「潤の父親はわたしたちには何も教えてくれなかったものですから……たぶん交渉したのは二ヶ月間くらいだったと思います」

「すると、交渉は八月から九月。もしこの少年が潤君だったとすればの話ですが、目撃されたのは交渉終了後ということになります」

「それじゃ、潤は生きているんですね！」

静子は顔を明るくした。江崎と青山は無言で視線を合わせる。交渉終了後、一ヶ月間も人質を生かしておく理由がわからない。ということは、目撃された少年が潤君でない可能性は高い。さらに言えば、もしこの少年が潤君だったとしても、目撃されたのは三年前である。現在生きているという証拠にはならない。

江崎は穏やかに言った。

「この少年が間違いなく潤君だと特定できたわけではありませんよ。それだけは覚えておいてください」

静子は強く頭を振った。

「いいえ、きっと潤だと思います。だって、誘拐された年の十月でしょう。中学生でジーパンをはいているんでしょう。セーターはきっとNLFからもらったんですね。十月にTシャツ一枚じゃ寒いから。よかった……せめて潤が寒い思いをしていなければいいんです……」

静子は大粒の涙をあふれさせ、嗚咽を上げた。青山が困ったような顔になって、静子に声をかけようとしたが、江崎は青山を見て頭を振り、止めた。この目撃情報は三年ぶりに灯してしまった希望の光だ。消そうとしても、簡単に消せるものではない。

人質たちは、無力な雨の夜を過ごす～十一月二十五日（火）午後十時

夕食後、目が冴えて、仮眠をとることはできなかった。深夜の散歩をこれほど待ち遠しく思ったことはなかったのに、夕方から降り始めた雨はやまない。屋根や地面を叩く雨音が激しく耳を打つ。

紅と杏子は届けてもらったオイルで手足を入念にマッサージすることにした。杏子の言ったとおり、アロマオイルの香りは気持ちを落ち着かせ、指先を動かしていると、自分を大切に扱うことの心地よさを思い出させてくれた。午後十時になっても雨は降りやまず、杏子はオイルのボトルの蓋を閉めた。

「この雨がやんだら、冷えこみが増しそうね」

「あまり寒くならないうちに、家に帰りたいな」

紅が呟くと、二人はその言葉をかみ締めるように黙りこんだ。いつ家に帰れるというのだろうか。寒さが厳しい中か、水がぬるく感じられる頃までいなければならないのか。そんな頃まで、会社に自分のデスクは残っているだろうか。紅は不安になり、ベッドの上でわざと明るい声を上げる。

「今夜はきっと散歩はなしだね」

「雨が上がっても、地面がぬかるんでいて、歩けそうもないものね」

「ツイてない。ああ、ツイてない。しょっちゅうグレーが上がってくるから、目の前にいる聡史から話を聞くわけにはいかないし、辻さんにも会えないし」

紅は金網の向こうでトランプをしている聡史とグレーを見た。テーブルの上にはカードと十円玉や百円玉の硬貨が置かれている。紅は恨めしくなっていた。

「聡史ってば、トランプで遊んでいる場合？」

「ここに来てしまった時点で、わたしたちにツキはないのよ。またトイレに行ったら？」

杏子はベッドにもぐりこんで言った。

紅はうなずいた。

「そうだよね。聡史はたぶん明日の朝、交代で家に帰っちゃうもの」

「そうしたら、次にいつ会えるかわからないものね」

「やっぱりトイレに行く。見張りさん、トイレお願いします！」

紅は後半の声を張り上げた。グレーと話をしていた聡史が、グレーを制して立ち上がり、鍵を手近づいてくる。廊下に出ると、紅はすぐに尋ねた。

「ねえ、辻さんの話って何だったの？」

廊下は薄暗いライトが一つついているだけで薄暗かった。聡史はドアと階段の下を窺いながら言った。

「雨音で声が隠れて、ちょうどいいなあ」

「聡史ってば！ あたしの話、聞してる？」

「聞いてるよ。ただ、グレーがそばにいるから」

「何であいつここにいるの？」

「ヘフェが苦手で、理由をつけて上に来るんだよ。ゲリラの手伝いなんてしたくないって、しきりにこぼしてる。それにしてもあいつ、ババ抜き強いんだよなあ」

「聡史！」

「わかったよ、辻さんの話ね。辻さんは三年前に誘拐された孫の潤君を探すために、わざと誘拐されたんだって」

「孫探し？ そうだったの」

紅は驚いた。しかし紅は辻の人柄を思い出し、すぐに納得できた。あの辻なら、危険を顧みず、孫のために乗りこんでくることくらいやってのけるような気がする。

聡史は困ったように言った。

「だけどね、僕に相談されてもできることはないんだよ。潤君なんて子、見たことがない。第一、三年前のことじゃ……」

聡史の言い方に紅はかちんときた。

「聡史ってそればかりだよな。できることはない、できることはないって。ゲリラなんだから、もう少し何かできることがあるでしょ。力になってあげようって思わないの？ ゲリラ仲間に訊いて回ればいいじゃない」

聡史は怒ったように言った。

「紅は簡単に言うけど、こうやって見張りに来るのだって、命がけなんだよ。見張り自身も人質のようなものだって、昼間説明しただろう。もしばれたら、突然、何の前触れもなく殺されるんだから」

紅は不満をのみこむように口をつぐんだ。聡史にスーパーヒーローのような活躍を期待しているわけではない。でもやる前からできることは何もないと諦められると、がっかりする。辻は老人なのに、孫や自分を助けようと申し出てくれたではないか。紅は辻にはずいぶん助けられた。それだけに、辻の孫の件をもうすんでしまった仕事のように言う聡史に、割りきれないものを感じた。紅は言った。

「帰れなかった人質ってどうなるの？」

紅は辻の孫のために質問したつもりだった。しかしその質問はすぐ、自分の身の上をも暗示していると気づく。答えを聞くのが怖くなった。

聡史は短く答えた。

「わからない」

それは本当にわからなかったのか、それとも紅への思いやりから、知らないほうがいいと思ってそう答えたのか。紅にはどちらとも判断がつかなかった。

「何か記録はないの？」

「記録って？」

「例えば、人質リストとか」

聡史はあきれたように答えた。

「そんなもの、僕が見せてもらえるわけないだろう。ヘフェの使っているノートパソコンになら

、何か記録が入っているかもしれないけど」

「じゃあそれを調べられない？」

「無理だよ。ヘフェはパソコンから目を離さないから」

また「無理」か。紅の胸には聡史への不満がどっしりと横たわっていた。聡史はやさしいところも誠実なところもある。それは十分わかっている。しかし聡史と話していると、期待はずれが多すぎて、不満がふくらみ、抱えきれなくなるほど大きくなっていくのだ。

「そろそろ戻ったほうがいいかも」

「そうだね。グレーに怪しまれるとまずい」

二人はそれきり何も言わず、部屋に戻った。冷たい雨の音がやけに大きく聞こえる。紅はふくらんだ不満が爆発したら、聡史に直接ぶつけてしまいそうで怖かった。自分を心配して、ゲリラ組織に乗りこんできてくれた聡史に、本当はもっとやさしく接したかった。このままでは杏子に意地悪したときの後悔と同じことになる。

――早くここから出たい。紅はベッドに入ると、目を閉じて、心から解放を願った。

誘拐コンサルタントは、潤のその後について悲観的な検討をする～十一月二十六日
水曜日 午後一時

誘拐コンサルタントは、潤のその後について悲観的な検討をする～十一月二十六日（水）
午後一時

潤の生存については、もはや神頼みしかないという江崎は思った。手遅れかもしれないという気持ちを振りきるようにして、神棚に向かって柏手を打とうとしたとき、来客を告げるインターホンが鳴った。ドアを開けに行くと、客ではなかった。ファーストフードの袋をぶら提げた青山が立っている。

「どうした、こんなに早く？」

「話しておきたいことがあって」

青山はすりとオフィス内に入ると、まっすぐ応接室に向かい、椅子に腰を下ろす。袋を開き、ハンバーガーやドリンクなどをテーブルの上に並べ出した。どうやら断りもなく、ここで昼食をとるつもりらしい。青山は失念しているのかもしれないが、ここは青山の職場ではなく、自分のオフィスである。何だか青山はＡＦ保険よりもここに入り浸っているような気がする。

江崎は改めて神棚に戻って、手を合わせ、柏手を打った。神に四人の人質と潤の無事をお願いしてから、椅子に戻ると、青山が口にストローをくわえたまま、目を大きく見開いていた。ストローを口からはなして尋ねる。

「……何をしていたんですか」

「人質四人と潤君が無事に帰ってくるよう、神に頼んだ」

「本気じゃないでしょうね？」

「本気だよ。俺は毎日神頼みしている」

青山はあきれ半分あわれみ半分という目つきで江崎を見て言った。

「僕が被害者家族だったとしても、江崎さんには絶対に依頼しませんね」

江崎もまたあきれ半分あわれみ半分という目つきで青山を見返してから言った。

「大変お気の毒な人質だ」

江崎は青山の前に腰を下ろす。ファーストフード特有の油のにおいが充満していた。

「それで話っていうのは何だ？ 柏木さんのことか」

「ああ、彼女は昨夜のミーティングにまた欠席しましたからね」

「ＮＬＦからの連絡は一昨日、昨日と途絶えている。もしこちらの読みどおりにＮＬＦが交渉を急いでいるとすれば、沈黙を使うとしても、そう長くはないはずだ。今日が二十六日で、身禁法のスタートは一日。支払猶予はあと四日。今夜あたり接触してくる可能性が高い。呼び出さない」と

「でも女王様気どりが完全にへそを曲げましたからね。よほどうまく言いくるめないと出てきませんよ」

二人は沈黙して見つめ合った。やがて江崎のほうから口を開く。

「青山君、電話してくれないか」

「いやです」

「君のクライアントだろう」

「江崎さんが僕らを巻きこんだんじゃないですか」

青山はすました顔でハンバーガーにかじりつき、フライドポテトをつまみ始める。

江崎は舌打ちをした。

「それで？ もう話は終わりか」

「ああ、いいえ……実は辻さんの件で来たんです。午前中に例の少年の目撃者に電話をしたので」

江崎は身を乗り出した。

「解放された人質という人物か」

「はい。守秘義務がありますから、その人物について詳しいことはお話しできませんが」

「それはいいよ。で、朗報か。潤君だと特定できそうか」

「特定はできましたよ。決定打はやはりほくろです」

「あったのか」

江崎はポテトをとって言った。青山は見咎めたが、何も言わずに、自分もポテトを口に入れる。食べ終わってから言った。

「あったそうです。眉間のほくろは目立ちますから、印象に残っていたと」

「やったじゃないか。一步前進だな」

ポテトを食べたら、口の中が油っぽくなった。江崎がドリンクに手を伸ばそうとすると、青山はドリンクの紙コップをかつさらってから呟いた。

「……前進したと言うべきかどうか」

青山はそう前置きしてからドリンクを飲んで、話し始めた。

「その人物が入れられた監禁部屋に、すでに潤君はいたそうです。怯えた様子はなく、表情も態度も落ち着いていたらしい」

「潤君なら、七月の終わりに誘拐されているわけだから、十月の終わりには監禁生活に適応していたと考えられる。特に問題はない」

「そうですが、その目撃者の話によれば、潤君とはほとんど会話をしなかったと言うんです。少年はよく眠っていたと言っていて」

「眠っていた？」

「ええ。朝食をとってしばらくすると横になって眠ってしまう。昼食後は昼寝。風呂から上がるとまもなく寝ついてしまい、朝まで起きてこない。そんな感じだったそうです」

「睡眠薬かな。子供が泣いたり騒いだりする場合、大人しくさせるには睡眠薬をのませるのが手っとり早い」

「たしかに。ただ食事はパックされた弁当を二人分一緒に届けられたそうです。ですから、食事に睡眠薬が混ぜられていたということは考えられません」

「あらかじめゲリラから睡眠薬を渡されていた可能性もあるだろう。精神的に不安定になった人質が、自ら睡眠薬や精神安定剤を要求することだってある」

「僕も自主的に摂取していたという可能性を考えました。で、目撃者に訊いてみたのですが、その人物は潤君が薬をのんでいるのを見たことはなかったし、薬で眠らされているとか、体調が悪くて眠っているような感じではなかったと言っていました。それから過去データを洗ってみましたが、N L F が監禁中積極的に人質に睡眠薬を投与したという情報はありませんでした。拉致するときに使用することはありますけどね」

「とりあえず睡眠薬の確証はなし、か」

青山はうなずいて、ドリンクを一口飲むと、話を続けた。

「もう一つ、あまりよくない情報があります。目撃者が少年と一緒にいたのは二日間だけで、潤君は連れて行かれたと」

「監禁部屋から連れて行かれた？」

「はい。見張りでない男が来て、潤君を連れて行ったそうです。少年とはそれきり会うことはなかったと言っていました」

江崎は息をのんだ。

「人質が監禁を解かれる場合、大方二とおりに分けられる——天国か地獄かだ」

「解放か殺害ですね」

「ああ。そして潤君は解放されていない」

二人は沈黙した。やがて青山が口を開く。

「解放か殺害以外の理由で出されたという可能性はないでしょうか」

「人質の移動にはリスクが伴う。誘拐犯は極力移動を避けたいはずだ。だから他に移動する理由があるとすれば、一つには人質に疾病が生じて、監禁場所では治療できない、周囲の人間に感染させてしまうなどの場合。もう一つは誘拐犯が警察の武力救出の情報をつかみ、その監禁場所を捨てて逃亡しなければならない場合。こんなところだろうな」

「そしてこのケースでは、そのどちらにも当てはまりませんね」

江崎は無言でうなずいた。

青山は言った。

「辻さんにはどう伝えますか」

江崎は椅子の背に深く寄りかかって、天井を仰いだ。

「わからんよ。いずれ真実を知らなければならないと思うが、今すぐ伝えることには賛成できない」

「僕もです。伝えるのは、ご主人を救出してからのほうがいいのではないかと思います」

青山はそう言ってから、ぽつりと呟いた。

「……僕はよけいなことをしてしまったかもしれませんね」

青山はいつの間にか食事の手を止めていた。

江崎は言った。

「君はよくやったさ。二人はいずれ知らなければならないんだから、現実を受け止められるかどうかは二人の問題だよ」

美登里は、娘と自分のために踏ん張ることを決心する～十一月二十六日 水曜日 午後五時

美登里は、娘と自分のために踏ん張ることを決心する～十一月二十六日（水）午後五時

一晩中降り続いた雨は午前中で上がり、外は澄みきった青空が広がったあとの、燃えるような夕日が街を染めていた。美登里はリビングのソファで紅茶を飲みながら、窓越しにぼんやりと夕焼けを見つめていた。

香は今日も学校に行かなかった。学校には父親の誘拐で体調を崩してしまい、しばらく休めせると連絡してある。香は部屋にこもってしまい、美登里を避けるように生活している。トイレ以外では部屋から出てこず、食事は美登里がトレーを持って部屋まで届け、風呂は夜中にこっそり入っている。同じ家にいるというのに、おもちゃの手榴弾が送られてきて以来、娘の顔を見ていないのだ。香の生活態度を改めさせなければという気持ちはあるが、いじめや手榴弾騒ぎで傷ついているのだろうと考えると、どう扱えばいいのかわからない。このまま不登校、引きこもりにでもなったらどうしようと考え、と、どんどん不安になっていく。香は自分よりしっかり者で、親として未熟な晴信や自分を支えているようなところがあったから、娘が引きこもりになるなんて心配は、したことがなかった。

そのとき香の部屋からカタカタという音がした。聞きなれた音、晴信が耳にすれば目くじらを立てて怒り出す音――ミシンをかける音である。美登里の全身から少し緊張が抜けた。部屋にこもっていても、好きなことをする気になってくれているなら、親として安心できる。

美登里は立ち上がった。キッチンで香の好きな緑茶を淹れ、おはぎを用意した。トレーを持って二階に上がり、香の部屋をノックする。

「香ちゃん、お茶にしない？ 香ちゃんの好きな和菓子にしたわ」

ミシンの音が止まり、香の声が聞こえた。

「そこに置いていて」

顔を見せてくれることを期待していた美登里は肩を落とし、つかのま立ちすくんだが、明るく声を上げる。

「ねえ香ちゃん、大丈夫なの？ ママ、心配なのよ……」

「放っといて！」

香は声を荒げた。美登里はその声にびくついてしまった。

「わかったわ。食べ終わったら、トレーを下げておいてね」

美登里がトレーを置き、しばらくドアの前に佇んでいた。ミシンの音は止まったままで、ドアの向こうからは物音一つ聞こえてこない。目に涙がにじんできた。階段に向かって歩き始めようとしたとき、香の部屋のドアが開く。美登里は驚きと喜びで立ち止まった。

「……香ちゃん」

細く開けたドアの隙間から娘が顔を覗かせる。その目は母親の様子を窺っているように見えた。美登里はこのチャンスを逃してはいけないと思った。

「何を縫ってるの？」

「.....縫いかけのスカート」

「そう。できあがったら、ママにも見せてね」

「.....うん」

香の聲がわずかにやわらいだような気がして、美登里はほっとした。香がドアをさらに開き、顔全体が見えるようになった。

「ねえ、ママ」

「なあに」

「交渉、もうやめて」

美登里は驚いた。

「何を言ってるの？」

「だってパパが言ってたでしょ。犯人に毅然とした態度をとれって.....」

美登里は娘を見つめた。香は考え抜いた結論を、決意を持って発しているように見えた。

「言ってたわよ。それが？」

「だからあたしたちもパパの信念を支持するために身代金は支払いませんって言うの。そうしたら、ママは交渉に行かずにすむでしょ。ママは最初そのつもりだったじゃない？」

美登里はさらに驚いた。

「だって.....でも香ちゃん、それでいいの？」

「いいのって何が？」

「何がって.....あなたのパパなのよ」

「パパはいらない。あたしにはママが大切なの」

美登里は次の言葉を見つけられず、沈黙して娘を凝視するしかなかった。香は晴信を慕っていないが、それでも父親なのだ。今までも義理で交渉するべきだとは言っていたが、切り捨てるようなことを言い出すなんて思わなかった。

美登里は香を見つめた。今まで美登里は娘が自分に似ていないと思っていたが、そこにいる娘は自分によく似ているような気がした。くっきりした二重まぶたの大きな目、ややえらの張った輪郭、広がって開いている耳、そしてなす術もなく立ち尽くしている姿。美登里は血のつながりをはっきりと意識した。自分とシンクロする分身が香だった。

美登里はようやく気づいた。香が父親を切り捨てることを思いついたのは、香が変わってしまったせいではない。自分がしっかりしていないせいだ。おもちゃの手榴弾や不安定な娘を見て、おろおろするばかりの自分。自分の不安や緊張を香はキャッチして、不安になってしまったのだ。今まで香は精一杯母親をフォローしてきたが、自分自身が不安で倒れそうになって、母親の面倒まで見きれなくなっているのではないか。

美登里は背筋を伸ばし、胸を張った。足に力をこめて立った。それから言った。

「ママは大丈夫。交渉は続けるわ」

香は首を振った。

「やめて、ママ。家から出ないで。ママまで誘拐されたら、あたしどうしたらいいの.....」

「ママは誘拐されないの。江崎さんと青山さんが絶対大丈夫って言ったわ。それにママには人質

四人の命がかかっているのよ。怖いからって逃げるわけにはいかない。今夜からまたミーティングに出るから」

香は目を見開いて自分を見つめた。その目に映っているのは怒りだった。しかし美登里は、勇気を出している自分の姿を見て、香が何か感じとってくれることを願った。

「ママは出かけるから、誰もあなたの夕食を運べないわよ。下りてきて、食べなさい」

「ママのバカ！ あたしがどうして交渉をやめてって言ったか、全然わかってないんだね！」

香は怒鳴り、大きな音を立ててドアを閉めてしまった。美登里はすぐに娘のご機嫌とりをした。い衝動に駆られたが、振りきって階段を下りた。自分が成熟した人間になれば、香は安心して部屋から出てきてくれる。それにはお互いもう少し時間がかかる。香を信じて待つしかない。そして美登里は思った――子供が親を成長させてくれるというのは、こういうことなのかもしれない。

美登里は時計を見た。もう五時五十分だ。池袋にある江崎のオフィスに七時半だから、急いで支度をしなければ間に合わない。美登里は寝室に入り、クローゼットを開いた。

そのとき電話が鳴った。美登里は一瞬身を震わせたが、思いきって受話器をとる。

受話器の向こうで、男の声がした。

「柏木さんのお宅でしょうか。大塚と申します」

美登里は驚いた。

「大塚って、あなた……杏子さんのご主人ね」

「はい」

江崎のオフィスで一人喚き散らして帰っていった男の姿が脳裏に浮かぶ。美登里は警戒した。

「どういったご用？」

「実は……」

大塚が言いかけたとき、美登里は大切なことを思い出した。この電話は警察に盗聴されている。大塚によけいなことを喋られるとまずい。美登里はそっけなく言った。

「悪いけど、あなたとお話ししている時間はないわ。わたしはこれから池袋に出かけるの。人と会う約束があるのよ」

池袋で気づいてくれただろうか。大塚は一度江崎のオフィスに来たことがあるのだから、美登里がわざわざ池袋と言え、行き先がどこであるか察するはずだ。

「あの……」

「それじゃ、急ぎますから」

美登里は電話を切った。心臓が高鳴っている。今の話し方は不自然ではなかっただろうか。夫の愛人の夫に対する態度なのだから、愛想が悪くてもおかしくないだろう。

今度は携帯電話が鳴る。表示を見ると、「江崎オフィス」と出ていた。

「江崎です。単刀直入にお話しします。今夜のミーティングなんですけどね……」

「何よ？ 中止になったの？」

「いいえ。今夜は来られるのかと思ひましてね……」

「行くわよ」

「ええっ！」

電話の向こうの声が大仰に驚いている。美登里は不愉快になった。

「大声出さないで。耳が痛くなるじゃないの」

「すみません……いらっしゃるとは思わなかったものですから……」

美登里はますます不愉快になった。

「来てもらっては困るという意味かしら」

「いいえっ！　では七時半にお待ちしていますので……」

いちいち大声を出す江崎が美登里の気に障った。

「もしかすると、お客さんが一人増えるかもしれないから、椅子を一脚多く用意しておいたほうがいいわよ」

「は？」

美登里はわざと詳細を教えずに、電話を切った。

家族チームに、謎のメッセンジャーからの伝言と憔悴した大塚が加わる～十一月二十六日 水曜日 午後七時

家族チームに、謎のメッセンジャーからの伝言と憔悴した大塚が加わる～十一月二十六日（水）午後七時

どういう風の吹き回しか知らないが、今日一日江崎のオフィスは人を引き寄せているようだった。青山は小田潤についての話をしたあと、そのままオフィスに残って、会社に提出する報告書を作成し始めた。江崎も一緒にNLFの動きを整理し、今回の事件について、青山は楽観的な、自分は悲観的な観点から、かわりばえのない議論を戦わせた。

午後六時、青山とのじゃんけんに負けた江崎が、討ち死覚悟で美登里に電話をかけると、美登里のほうからミーティングに出席すると言い出した。女は気まぐれだが、女王様の気まぐれはメガトン級だ。その後美登里はもう一人の客がどうか言って、一方的に電話を切ったが、江崎としてはありがたかった。また気まぐれを起こして、行く気が失せたと言われては困るからだ。電話のあと、江崎は青山に「俺の説得が功を奏したみたいで、柏木夫人はすぐに承諾してくれたよ。今夜は来るそうだと得意げに話してやった。青山は疑わしいという目つきで江崎を見たきり、何も言わなかった。現実には本人が来るまで信用しないつもりらしい。

午後七時近くになると、越川夫妻がオフィスに到着した。入ってくるなり、和江が鼻息荒く言った。

「変な電話が来たのよ！ 犯人からの電話！」

和江は十一月だというのに汗をかき、手を団扇がわりにしてあおいでいる。あとに続く正志も相当興奮していた。

「おい和江、変ってことはないだろう！ とにかくうちの話を聞いてくださいよ！」

江崎はひとまず椅子を勧め、青山が書類やiPadを片づける。越川夫妻は腰を下ろすと待ちきれないというように話し始めた。

「うちに電話がかかってきたのよ！ 男の声でね、『紅さんは元気です。お金を払ってください』って言ったの！ そのあと警察が盗聴の結果を電話してきて、公衆電話からだと言ったけど、犯人の話し方から言って、Aじゃなかったわ！」

これはいたずら電話の可能性もありうる。江崎は両手を胸の前で広げた。

「落ち着いてください。わたしが質問しますから、それに答えてください。いいですね」

和江は大きくうなずき、正志はそんな妻を明るい表情で見ている。江崎は質問を始めた。

「電話があったのは何時ですか」

「夕方の五時三十八分。着信記録を見たから、間違いないわ」

「電話に出たのはどちらですか」

「あたしよ。主人は仕事に出ていて、あたしが一人で家にいたの。ここへは池袋駅で待ち合わせてから来たんだけどね」

「電話の相手は男性だと言いましたね。どうしてそれがわかったのですか」

「だってあの妙な機械を使ってなかったもの。普通の話し声。男よ」

「電話に出たとき、和江さんは何と言いましたか。正確に思い出してください」

「『越川です』って言ったら、その男はこう言ったの。『紅さんからの伝言です。元気です。早くお金を払ってください。待ってます』。それで電話は切られたけど」

「他には何も？」

「何も」

江崎と青山は沈黙した。ボイスチェンジャーを使わず、人質の個人情報を示さず、金を払えとだけ言ってきたなら、N L Fでない可能性が高い。江崎は言った。

「落ち着いて聞いてください。誘拐事件ではよくあることなんですが――わたしはこの電話がN L Fからのものではなく、いたずら電話ではないかと思います」

「いたずら電話ですって？ そんなわけじゃない！」

和江はいきり立った。

「電話の男は怒鳴ったり脅したりせず、真面目そうに話してくれたのよ。紅を心から心配してくれているみたいだった。あなたは電話の声を聞いてないから、わからないのよ。あの電話がいたずらだなんてありえない」

「N L Fだとすれば、どうして和江さんのご自宅に電話をかけてきたのです？」

「決まっているでしょ。うちの主人が交渉役だって知っているからよ」

「だとしても、いつもの専用回線にかけてくればいい。専用回線のことはN L Fとわたしたちしか知らないんです。ですから、ここに電話をかけてくることが、犯人からの電話であるという証明になる。もし他の電話にかけてくる場合、電話の主は模倣犯ではなく本物のN L Fだという証明をしなければなりません。そうしないなら、どんな内容であっても意味を成さず、電話するという無意味なリスクを冒したことになります。警察は何と言っていましたか」

「……公衆電話からだったとだけ」

「警察もおそらく同じ結論を出したのだと思います。ボイスチェンジャーを使っていないし、金を払えと言うものの、具体的な金額や受け渡しの指示はない。アラが多すぎて、プロのやり方とは思えません。ですが、気を落とさないでください。悪質ないたずらなら、本物のN L Fのふりをして、金を騙しとろうとしましたからね」

江崎は慰めるように言ってみたが、和江は江崎を非難がましく睨んでいる。正志は青山を見て言った。

「青山さんも同じご意見ですかね？」

「同じです。残念ながら」

青山が答えると、和江は膝の上で拳を握り締めて言い張った。

「そんなはずないわ。あたしにはわかるの。あれは紅のことを心配してくれている人よ。絶対にいたずらなんかじゃない」

最終的な結論を出すのはあくまでも被害者家族である。コンサルタントは助言しても、最終的な決断は家族に任せるべきだ。江崎はそれ以上何も言わないことにした。

興奮した空気は一変して陰鬱になっていた。そのときインターホンが鳴る。時計を見ると、七時になるところだった。江崎は静子だろうと思いながら、ドアに向かう。モニターで静子を確認

認し、ドアを開けた。静子のうしろに一人の骸骨のような男が背を丸めて立っている。

静子が言った。

「こちら、覚えていらっしゃるかしら。大塚さんですよ。通りでうろうろしていたから、連れてきたんですけど……」

「大塚さん、ですか……」

江崎は呆然として、大塚和己の姿を見つめた。大塚と顔を合わせたのは先週の水曜日で、あれからわずか一週間しかたっていない。しかし眼前に立つ男は見違えるほどにやつれていた。目の下には黒々とした隈、頬はこけて頬骨が浮き上がり、無精ひげが顎を覆っている。

大塚はしわがれた声で言った。

「柏木さんに電話したら、池袋で人に会うって言ったもんですから、ここかと思って……」

江崎は驚いた。それでは美登里が言ったもう一人の客というのは、大塚のことだったのか。江崎はドアを大きく開き、二人を中に促した。

「柏木さんはまもなく来られますよ。どうぞお入りください」

先に静子、次に身を縮めるようにして大塚が入ってきた。二人が応接室に入ると、青山と越川夫妻もまた、すっかり風体の変わった大塚を凝視した。

和江が素朴な疑問をぶつけた。

「大塚さんよね？」

「……はい……ご無沙汰しています……」

「ずいぶん痩せたわねえ」

「十キロ落ちました……」

「何だって急に来る気になったの？」

「急ってわけじゃなくて……妻を見捨てることを決意してから、ずっと後悔していて……」

どれほど深く後悔したかは、大塚の姿を見れば一目瞭然である。

「そしたら今日電話がありまして……」

「電話？」

和江が声を張り上げる。

「その電話って男からの電話でしょ？ 五時半過ぎ頃じゃない？」

大塚は落ち窪んだ目を見開く。

「そうですけど、どうしてそれを……」

「やっぱりそうよ、誰か親切な人がいるのよ！ 大塚さん、早く座んなさいよ！」

和江は顔を輝かせた。大塚は言われるままに腰を下ろす。静子と江崎もいつもの椅子に座った。和江が勢いよく尋ねた。

「その男は機械で声を変えていなかったでしょ？ 親切そうな男の声だったでしょ？」

「声は変えていませんでした。肉声で……親切そうかどうかはわからなかったですけど」

「わざわざ電話をかけてきてくれたんだから、親切な人に決まっているじゃないの！」

「落ち着いてください、和江さん。まずは大塚さんの話を聞きましょう」

江崎が仕切りに入り、大塚は不安げに江崎を見た。

「電話が来たのはいつですか」

「一時間半ほど前です。携帯にかかってきたので、着信記録があります」

大塚は携帯電話を出して、着歴を確認する。

「五時四十一分、公衆電話からです」

越川家に電話がかかってきたのが五時三十八分だったというなら、その三分後の電話は同一人物によるものと見て、まず間違いないだろう。

「相手の男は何と言ったんですか」

「『杏子さんからの伝言がある』と。『悪かった。一番大切なのは和己だ。もう一度会って話したい』と……聞いていたら、泣けてきてしまって」

江崎は質した。

「それだけですか」

「いいえ……最後に……」

「最後に？」

「『愛してる』と……」

大塚は照れたように言って、俯いてしまった。「愛してる」は大塚にとっては重大な言葉かもしれないが、分析上は前述の内容と大差ない。

江崎は尋ねた。

「金銭の要求は？」

「ありませんでした」

江崎は額に手を当てて考えこむ。青山が言った。

「共通点を考えてみましょう。時間、男性の肉声、公衆電話。この三点から言って、越川さんにかけてきた人物と同じと考えられます。さらに最初の言葉が同じですね。人質からの『伝言』がある。まるで人質本人から伝言を預かってきたかのように聞こえますが」

「そうだな……辻さんには電話はかかってきませんでしたか」

静子は頭を振る。江崎は頭を掻いた。

「柏木さんを待つて確認してみないことには何とも言えないが、単なるいたずら電話じゃないかもしれませんね」

青山も腕組みをしてうなづく。

和江が不満を露わにした。

「あたしが言ったときは信じなかったくせに、どうして大塚さんの話は信じるのよ！」

江崎は言った。

「べつに和江さんの話を信じなかったわけではありませんよ。ただ、同一人物が電話をかけてきたとすれば、話の内容が違いすぎる。ただのいたずらなら、似たような内容でもいいはずですし、大塚さんの名前を挙げている。青山君の言うように、これは本当に紅さんと杏子さんから伝言を受けて、そのまま伝えているのかもしれない。もちろん手のこんだいたずらという可能性が完全に消えたわけではありませんが」

青山が言った。

「もし人質に合わせた伝言を創作するなら、ただのいたずらではなく、金の要求もしてくるんじ

やないですか」

「そうだな。だから目的がわからない」

江崎は息を吐いてうなった。

「ただのメッセンジャーとしても、何のために電話をかけてきたのか」

和江が言った。

「だからあたしが最初から言っているじゃないの。この人は親切なのよ。世の中ってそう捨てたもんじゃないんだから」

世の中を広く見渡せば、親切な人間はたしかに生息しているだろう。しかし誘拐事件という地域に限定するなら、親切な人間は絶滅種と見ていい。江崎はとりあえず言った。

「柏木さんを待ちましょう。結論はそれからです」

その一言で、静子はさっそく立ち上がり、「お茶を淹れてきますので」と言って、キッチンへ向かった。自分の家に電話がかかってこなかったことで、動揺しているのかもしれない。

全員が静子の淹れたお茶を飲んでいると、午後七時三十五分、美登里は到着した。二日も来なかったのに、まったく悪びれたふうもなかった。江崎はすぐに謎の電話について経緯を話し、柏木からの伝言はなかったかと尋ねた。美登里は簡潔に「ないわ」とだけ返事をして、静子の向かいに腰を下ろす。

江崎は言った。

「この人物をメッセンジャーと呼ぶとしましょう。彼はなぜ紅さんと杏子さんの伝言だけ伝えてきて、辻さんと柏木さんのはなかったのか。この二つに分かれた理由は何なのか」

和江が言った。

「男女別でしょ。女性の伝言だけ伝えてくれたのよ」

「.....ずいぶん大雑把な分類ですね」

江崎が言うと、無言で考えこんでいた青山がおもむろに口を開く。

「たしかに大雑把ですが、あながちはずしてはいないかもしれませんよ」

全員が青山を見た。

「解放された人質から、監禁は男女別に分かれていたと聞いています。ひょっとすると、メッセンジャーは女性二人の見張りゲリラなのかもしれません」

江崎は尋ねた。

「そうだとすると、目的は？」

「金をもらって、二人から電話番号と伝言を預かったとか。人質はどの程度交渉が進んでいるのか、まったく聞かされません。自分が生きていることだけでも伝えたいと思って、見張りに金を払い、電話を頼んだのかもしれない」

江崎はあきれた。

「ずいぶん親切なゲリラだ」

「江崎さんはいちいち悲観的すぎるんですよ。とりあえず辻棲は合うでしょう」

「NLFの交渉チームによるフェイントということだってあるだろう」

「ありえませんが、せっかくAを休ませ、沈黙を使って家族の不安を掻き立てているのに、なぜわざわざ安心させるような伝言を送るんですか。沈黙の効果が台無しだ」

青山の言うとおりで。しかし江崎はしっくりといかず、黙りこむ。

和江が勢いづいた。

「青山さんの言うとおりでよ！ やっぱりメッセンジャーは親切的なゲリラなのよ！ だとしたら、紅はきっと無事でいるわね！」

いつもならすぐに和江に同意する静子は、無言でお茶のおかわりを注いでいる。孫と夫を誘拐された身では、「親切的なゲリラ」に賛成はできないだろう。

大塚が言った。

「明日以降、辻さんと柏木さんにも電話が来るかもしれませんね」

江崎はうなずいた。

「その可能性はありますね。もうちょっと待ってから結論を出したほうがいいでしょう」

江崎はそれから大塚に尋ねた。

「それではここで大塚さんの意志を確認させていただきたい。ここへいらしたのは、メッセンジャーからの電話のためだけですか」

全員の視線が大塚に集中する。大塚は言った。

「いいえ。家内をとり返すために、皆さんのご協力をお願いしたいと思って参りました」

美登里が腕組みをして、不思議そうに尋ねた。

「あなた、本気でとり返したいの？ 浮気した奥さんを許せるの？」

「わかりません。でも、離婚弁護士への依頼はやめました。杏子をとり返したいという気持ちはたしかです。それだけははっきりしているから、ここに来たんです」

「あらそう」

「柏木さんはどうなんですか。ご主人を許せるんですか」

「わたしは許さないわよ。でもあの人は娘の父親なの。父親を見捨てて、娘が将来後悔することのないように、とり返しておくだけのこと。無事に帰ってきたら、即離婚ね。帰ってこなければ、籍も抜けないしね」

美登里はあっさりと言い切った。

大塚はぼつりと呟いた。

「……やはり女性は強いな。わたしはそんなに簡単には気持ちを切り替えられない」

和江が江崎に尋ねた。

「大塚さんの途中参加はありなの？」

「決めるのは皆さんですよ。大塚さんからコンサルタント料をいただけるのなら、わたしは反対しませんわね」

江崎が笑いながら言うと、和江がすかさず突っこんできた。

「じゃあ大塚さんを仲間に入れてあげるから、コンサルタント料をまけてよ」

江崎は思わず声を張り上げた。

「あれでもかなりまけてますよ！」

「どこがよ！ 経費別で、三ヶ月二十八万円なんて高すぎるわ！」

三ヶ月二十八万円という破格のコンサルタント料を聞いて、青山が目を丸くした。

江崎は言った。

「それでも赤字なんですよ！」

「一人二十五万にしてよ。三人なら合計七十五万でしょ。これで赤字じゃないわよ」

「勘弁してくださいよ……」

「だって三ヶ月かからずに解決したって、差額の値引きはしないでしょ。してくれるの？」

江崎は頭を抱えた。

「……わかりました。それじゃお一人二十五万円で」

「よかったわね、大塚さん！」

他のメンバーは意見も求められないまま、和江のコンサルタント料契約成立と同時に大塚の参加は決まっらしい。しかし、江崎をのぞけば、不満に思っている者はいなさそうだった。

家族チームから、青山が戦線離脱する～十一月二十六日（水）午後八時

青山が和江の記録用ノートと併せて、今までの交渉状況を簡潔に大塚に説明した。

大塚は頭を下げた。

「わたしは杏子を見捨てたのに、皆さんがかわりに交渉をしてくださっていたなんて、何とお礼を申し上げたらいいか……」

「お礼は不要よ。単なるなりゆきだから」

美登里がお茶を飲みながらついでのように言い、正志は胸を張った。

「なあに、三人助けるのも四人助けるのも一緒ですよ。わたしはずいぶん交渉慣れしましたからね。安心して聞いててくださいよ」

「油断は禁物ですよ、正志さん」

江崎は釘を刺した。午後八時になった。一分もたたないうちに、電話が鳴る。全員が緊張で息をのんだ。三日ぶりの電話だ。三回のコール音が響き、正志がメモを握りしめ、うなずいた。スピーカーにすると、Aの声がした。

「金は用意できたか」

「はい、柏木さんがですね、急ぎで現金が必要と不動産屋に話してどうにか……先に人質生存の証拠をもらえませんか」

「金は、用意、できたのか」

Aはいらだったように、強い口調で問いかけてくる。正志は突然弱々しい声になって言った。

「あの、娘たちの声を聞かせるとか、してもらいたいんですけども……」

Aは返事をしなかった。暗闇のように重い沈黙が続く。その五秒は一時間にも感じられた。正志はついに口を開いた。

「あの、切らないでください。切らないで……」

それから急いでつけ加える。

「五千万円だそうです。これが限界です」

正志は簡単に根負けしてしまった。人質の生存証拠を要求しておきながら、Aが応じないうちに金額を提示してしまったのだ。これでAは心理的に正志より優位に立ったことになる。Aはくっくつと笑い出す。全員が息をのんだ。Aは今まで怒鳴ることはあっても、笑ったことはなかった。不気味な笑い声が室内に響く。

「ねえ越川さん。あんた、騙されたね。柏木の別荘について調べたよ。軽井沢の静かなところだ。ありゃ一億はくだらねえ家だよ」

正志はかすれた声で言った。

「それは聞いています。ただ、不動産屋はこちらが至急現金が必要だと知っていて……柏木さんの誘拐については……テレビでも報道されましたから……それであの……」

「柏木美登里って女は最低だよ。ブランドだエステだって、そんなもんには湯水のように金を使

うくせに、かわいそうな人質のためには、金を値切ろうって言うんだからな。あんただってそう思うだろう、越川さん？」

「でも、柏木さんは……」

「なあ越川さん。あんたが説得してみてくんないか。別荘売った金、全額払いなって。越川さんほどの人物なら説得できるよ」

「いえあの、柏木さんはこの金額で限界だと……」

「説得できないなら、おまえの娘をいちばん初めに殺す」

正志の声が震え出した。

「そ、そんな……」

「そんな次は辻だ。辻の家族に柏木の女房を説得してもらう。できなきゃ辻明を殺す。大塚杏子が殺される前には、柏木の女房も気が変わるだろう」

「そんな、でも……」

「なあ越川さん。俺の忠告を聞いたほうがいいよ。金払うなら、人質が活着ているうちにしておきな。あんたのかわいい娘が死んじまってから大金払ったって、意味ねえだろう、な？ こっちだって、金もらっても帰す人質がこの世にいないってんじゃ、寝覚めが悪いよ。越川さんが責任もって柏木の女房を説得すりゃ、こっちだって娘を帰したくなるってもんだ。これはお互いにとっていい話だと思うんだがね」

正志は何を言っているのかわからないというように、黙りこんでしまった。

「越川さんの決心がつくように、いいものを送ってやるよ。明日電話する」

ここで通話は切られた。家族たちは口を開かなかった。

江崎が冷静に青山に尋ねた。

「青山君、通話時間は？」

「二分三十四秒。Aに間違いありません」

「どう思う？」

「最終通告」

「だろうな」

江崎はそう言って、椅子の上で足を組み直した。

正志が立ち上がって怒鳴った。

「最終通告って何です？ どうしてそんなに落ち着いてられるんだ！ 紅が殺されるって言われたんだぞ！ しょせん自分の家族じゃないから、平気なんだろう！」

和江が正志の腕をつかんで言った。

「あんた、座って」

そのとき突然携帯電話の着信音が響き渡る。全員がびくっと身を震わせた。

正志が言った。

「俺の携帯だ」

正志は尻ポケットから携帯をとり出した。

「メールが入っている……メッセージはないが、画像が……」

正志は恐る恐る携帯のボタンを押した。正志の表情が凍りついた。

「紅」

携帯をのぞきこんだ和江は口元を押さえて、泣き出した。正志は江崎と青山に向かって、無言で携帯を差し出す。青山が受けとったが、見る前に左隣の大塚に回す。自分たちコンサルタントが見るのはあくまでも最後だ。決定権は家族にあるというルールを青山が忘れていないということは、青山はまだ冷静であるということだ。大塚、静子、美登里と携帯が順に回覧され、三人は顔を曇らせたが、何も言わなかった。最後に携帯は江崎と青山のもとへ戻ってきた。

写真だった。鉄格子の向こうで若い女が一人うずくまり、頬を涙で光らせながら、今朝の朝刊を広げている。長い髪はブラシを入れたことがないかのように乱れ、瞼ははれて、その下からうつろな目をこちらに向けている。頬には殴られたような青あざがあり、額からは血が流れている。着ているセーターは汚れていた。

和江がつぶれたような声をもらす。

「紅がこんな目に遭っているなんて……」

静子が和江にハンカチを差し出した。和江はそれを受けとって、嗚咽を上げる。

正志が青山と美登里に向かって訴えた。

「まだ余裕はあるんだ。こちらが払うと約束したのは一億七千二百万円。上限は二億なんだから、あと二千八百万円ある。ここから八百万でも一千万でも、出してもらいたい。お願いします。紅の命がかかっているんです。お願いします」

美登里が腕を組み、背もたれに深く寄りかかって、正志を眺める。それからはっきりと言った。

「うちの主人のせいで紅さんたちが誘拐に巻きこまれたのは、本当に申し訳ないと思っているわ。でもわたしは、ここでさらに追加金を出すことには賛成できない」

越川夫妻、そして静子と大塚も顔色を変える。正志が激昂した。

「何だって？ あんたは……あんたはそれでも人間か。自分のためならあんな高いバッグは買っても、紅の命を救うための金を出せないって言うのか」

美登里は正志をひと睨みしたが、何も言わず、青山のほうを向いて訊いた。

「青山さん、これはせびりになるかもしれないわね」

「その可能性はあります」

青山がうなずいた。美登里が家族全員の顔を順番に見ながら言った。

「わたしたちが五千万円出すと決めたとき、その後一切出さないって方針だったでしょ。大きく積むのはインパクトを持たせて、N L Fを満足させるためよ。ねえ、ちょっと考えてみて。紅さんの写真が送られてきたのは、電話を切ってすぐあとよ。ということは、たとえ追加金が百万円だろうと一億円だろうと、初めから不満を申し立て、脅迫する準備をしていたということになるんじゃない？」

大塚が驚いたように呟く。

「そうかもしれませんね……」

「わたし、何となくわかってきたわ。誘拐事件って、お金を払えば帰してもらえらるってものでもないのよ。うまくやらないと、たとえ十億円払っても、人質は帰ってこない。だからわたしたち

は誘拐コンサルタントを雇ったんじゃないの。わたしは結論を出す前に、お二人の意見を聞きたいわね」

江崎は肩をすくめた。

「わたしから申し上げることはほとんどありませんね。ほぼ柏木さんのおっしゃったとおりです」

青山は言った。

「僕が言いたいのは、支払うかどうかを決めるには、もう少し現状分析を進めてからにすべきだということです。そこで、この携帯電話の画像と送信元のメールアドレスをお借りしたい。調べれば、何かわかることがあるかもしれません。よろしいですか、正志さん？」

正志はうなずいた。青山は i P a d と正志の携帯を使って、さっそく作業に入る。

大塚が尋ねた。

「さっき柏木さんが言っていたせびりって何ですか」

江崎は言った。

「金を払っても払っても、人質を帰してもらえない状態に陥ることですよ。今回のケースを例にして、ご説明しましょう。正志さんが柏木さんの説得に成功したものとして、あと一千万円払うと言ったとします。すると、これで味をしめた A はこう答えるわけです。『やっぱりまだ金を隠していたんだな。次は辻さんに説得を頼もうか』。そしてまた一千万円払ったとします。次の回答は予想がつきますね。『次は大塚さんに頼もうか』。金を払わなければ、人質は帰ってきませんが、払ったとしても帰ってくる保証はないんです。もしこのせびりという泥沼にはまってしまったら、抜けるのは困難になります。気力と金が底を尽きて、お手上げとなる」

「今回の場合、その可能性はあるということですね。犯人は、『越川さんがだめなら、辻さんに頼む』と言っていたから……」

「そうです。金を払っても払わなくても、辻さん、大塚さんは説得を頼まれるはずですよ」

和江が泣きながら喚いた。

「じゃあどうしろって言うの？ 払わなかったら、紅は殺されるのよ！」

「見きわめなければならないのはそこですよ。N L F が本気で人質を殺す気があるのかどうか。もし人質が本当に危険だとわかれば、人命優先です。追加金の支払いを含めて、広い視野で策を検討すべきです」

青山が i P a d から顔を上げて言った。

「メールアドレスから追跡しましたが、こちらはだめですね。これだけ転送されていると、最新の追跡ソフトでも追えない。画像は分析と照合にかけているところです」

「待ちましょう」

江崎が言った。和江がすすり泣いている。正志はゆっくりと腰を下ろし、両拳を足の上で握りしめ、美登里を見据える。その目には思いつめたような暗い光が灯っていた。しばらくすると、かわいた声で言う。

「柏木さん、もし……もしもですが……」

正志はためらうように唇をなめた。

「もしも五千万円であいつらが納得しなかった場合ですが……本当に別荘を売っていただくこと

はできないんですか」

美登里は言った。

「あなたのお嬢さんを助けられるなら、売るわよ。さっきも言ったように、こうなったのはうちの主人のせいだから」

正志の目から暗い光が消えた。和江と静子の表情が緩んだ。

青山が言った。

「画像の分析と照合結果が出ました」

全員が青山に注目する。青山は i P a d を見ながら言った。

「まずは紅さんの写真はやらせの可能性があります。過去に解放された人質の証言の中で、メイクで青あざや血糊をつけられて、写真撮影されたというものが十二件あり、似たような写真が確認されました」

「本当なの？」

和江が濡れた目で青山を見た。

「はい。ただし実際に暴行を受けたケースも五件報告されていますので、今回のケースはどちらなのか、ということになりますが.....ただし、どちらの場合も新聞は古新聞を持たされ、当日の新聞を合成しているようです。解放後写真を見てもらいましたが、自分が持ったものと違うとおっしゃいますので.....残念ながら、これは生存の証拠にはなりません」

家族たちは安堵と不安の入り混じった、複雑な顔になる。

青山は続けた。

「それと一つ気になる点があるんです。紅さんの顔についている青あざと新聞を持っている指先についている汚れが同じ色のようです」

「どこだ？」

江崎が i P a d をのぞきこむと、青山が言った。

「拡大します」

画面の中の指の部分が拡大される。紅の指先はたしかに青黒くなっている。

「ここです。もしこれほどの青あざがついたら、指ははれているはずですよ。しかしついているのは色だけで、指の変形はありません」

「ということは.....」

「これはやらせ写真じゃないかと思います。顔の顔料が何かのほずみで指にも付着してしまったのではないかと思いますね」

緊張がゆるんだように、和江がまた泣き出した。

正志が青山に言った。

「本当ですね。紅は怪我をしていないんですね」

「断言はできませんが、おそらく.....」

「ありがとうございます」

正志は頭を下げたまま、肩を震わせていた。

江崎は言った。

「N L Fはおそらく紅さんに危害を加えてはいない。彼女個人に恨みがないのだから、危害を加える理由がないんです。とすれば、こちらはどう出るべきか」

江崎は目を閉じ、健康サンダルをぶらつかせながら、懸命に頭を回転させる。越川紅、辻明、大塚杏子の順番で、命が俎上に載せられるが、N L Fに殺す気はない。彼らは金をとるだけとって、解放することを望んでいる。結局原点に戻るというわけだ。

身代金がいくらなら、N L Fは納得するか。どうやったら二億で納得させられるか。すでに提示した一億七千二百万円、他の三人の説得で一人一千万円として三千万円。合計で二億二百万円。これでN L Fは手を打つだろうか。解放したがつている以上、この金額で折れるはずだ。あとは支払方法だ――江崎は思案の末、口を開いた。

「順番に柏木さんを説得しろというN L F側の脅迫を利用して、こちらも最終通告に持ちこみましょう」

全員が江崎を見た。

「正志さんは柏木さんの説得に成功したとして――ただし、別荘を売った金を隠していたと言うのはまずいですから、銀行からの借り入れが決まったとでもしましょう――あと一千万円支払うと申し出ます。ここでこちらから金の受け渡し方法を尋ね、人質の生存確認をしてから、実際に金を払います。ただし金額は一億七千二百万円の半額である八千六百万円プラス越川さんの説得料の一千万円、合計九千六百万円です」

全員が驚いた顔をした。

江崎は続けた。

「ここでN L Fは約束が違うと申し立てるでしょう。そこで言うのです。『そちらが人質を帰してくれるという保証はないので、約束の身代金は前金として半額にし、残りは全員が帰ってきてから支払うことに決めた。わたしは約束どおり柏木さんを説得し、一千万円は追加した。しかし減額した分、四人解放は譲歩する。まずは一人だけ、紅さんを帰してほしい。紅さんが帰ってくれば、おそらく辻さんや大塚さんも柏木さんの説得に協力する気になると思う』。ここで重要なのは、解放しなければ残りの金は手に入らないと思わせ、こちらが交渉の主導権を握ることです」

青山は眉をひそめて言った。

「ずいぶん危険な綱渡りじゃないですか」

「教科書には載っていないだろうな。だが、N L Fは巻きこまれた三人は帰したがっているはずだ。だから九千六百万円でまずは紅さんを解放してもらおう。紅さん一人、手付金としてこの金額なら、N L Fにとっても悪い話じゃないはずだ。次に辻さんが説得に成功したとして、一千万円。大塚さんも同じことをくり返す。そして最後に最初に約束した金の残金八千六百万円を払い、晴信氏を解放してもらおう。N L F側からすれば、晴信氏を最も長く拘束するはずだ。精神的なダメージを与えられるし、金づるは最後まで手元に置いておきたいだろうからだ。それにこの方法なら、彼らは四人で合計二億二百万円とれると簡単に計算できる」

和江はハンカチで目元を押さえた。

「四人一緒じゃないのね。全員の顔を同時に見られると思っていたのに」

江崎が言った。

「四人同時解放を取り下げ、一人ずつでもいいから解放してくれと言えば、こちらなりに譲歩を示すことができます。そしてこちらが譲歩を示すのだから、そちらも譲歩してもらい、お互いに最善の結末を迎えようじゃないかと持ちかけるんです」

美登里が不安げに言った。

「シナリオどおりにうまく行くかしら」

「保証はできません」

江崎はそう言ってから、声に力をこめた。

「しかしわたしは試してみる価値はあると思います。二百万円の足は出てしまいましたが」

大塚が言った。

「その二百万円はわたしが払います。わたしが見捨てた家内の命を、皆さんがつないでいてくださったんですから」

涙で声を上げられない越川夫妻をも代弁するように、静子が頭を下げた。

「ありがとうございます」

青山が江崎に尋ねた。

「N L F が急いでいるのではないかという疑惑はいいんですか。このやり方だと一人ずつの解放なので、時間がかかる」

「見落としているピースはたしかにあるかもしれない。だが、向こうは最終通告を出してきた。こちら乗るか反るかをはっきりさせないと、交渉は膠着状態になる。ここは動いて、相手の出方を見るべきだ。それじゃ聞かせてくれ——青山君ならどう出る？」

青山は少し間を置いてから、口を開く。

「僕は約束した一億七千二百万円を、こちらで勝手に前金と残金に分けてしまうというやり方が引っかけります。N L F を怒らせてしまうかもしれません」

「たしかに一億七千二百万円を提示したが、全額いっぺんに払うとは一度も言っていない。最終的には全額払うと約束すれば問題ない」

「それは詭弁ですよ。家族側が身代金の分割払いを一方的に決めるなんて話は、聞いたことがない」

「約束していなければ、嘘はついていないと押し切れる。お互いの信頼関係にひびは入れさせない。向こうだって取引したがつているんだから、何とかなる。それよりも、君の言うとおりに最初に全額払ったらどうなる？ 一千万円ごとに三人は帰ってきても、晴信氏が殺される可能性は高くなるだろう」

「結局は同じことじゃないですか。三人が帰ってきたあと、晴信氏を帰してもらう前に残金を払うわけですから」

「君の言うとおりで。だが、分割払いをすることで、全額前払いよりも、一筋縄ではいかない相手だと思わせることができる。今はこれ以上N L F の言いなりにならないと示すことが重要だと思う」

青山は押し黙った。

江崎は全員を見渡した。

「決めるのは皆さんです。わたしたちは席をはずします」

江崎が立ち上がり、青山も促されるように立った。二人揃って隣室に入り、ドアを閉める。江崎はデスクの椅子に腰を下ろしたが、青山は立ったまま言った。

「もしあんなやり方で失敗したらどうするんですか」

青山は江崎案が採用されると決めこんでいるかのような口ぶりだった。

江崎は言った。

「失敗しても、君は気に病まずにすむということだ」

青山は顔をかっとな紅潮させた。

「簡単に言うな！　僕が言いたいのは責任の所在じゃない！　あんたのやり方で人質が死んだらどうするんだってことだ！　わかってるのか？」

「俺のやり方にけちをつけるなら、自分なりの策を提示してからにしろ。あんなものは策じゃない」

江崎が冷静に言い返すと、青山は江崎のデスクの上で勢いよく手をすべらせる。書類やペン立てが大きな音を立てて床に落ちた。

江崎は腕を組んだ。

「気がすんだか」

青山は江崎を睨みつける。

「あんたのやり方にはうんざりだ。危険すぎてついていけない」

「俺のやり方が気に入らなくてもかまわない。俺は被害者家族のためにコンサルタントをやっているんであって、君に気に入られるためにやっているんじゃない」

「人質を危険にさらしてもか」

「よく聞け。教科書どおりにことを進めれば、絶対に安全なのか。そうじゃないだろう。ここで君の言う安全策をとることが、かえって人質を危険にさらすことになるかもしれないんだ」

青山はその場で立ちすくみ、拳をかたく握り締めた。やがてドアを開けて出て行った。家族たちは驚いたように、様子の違う青山を見る。江崎は書斎から出ず、開け放たれたドアから青山を眺めていた。青山は荷物をまとめ、壁ぎわに掛けてあった上着をつかむ。俯き、小さな声で家族たちに言った。

「申し訳ありませんが、僕は失礼します」

正志が尋ねた。

「どうしたんだ、青山さん。さっき大きな物音がしたけど……」

「すみません」

青山は一礼すると、オフィスを出て行った。家族たちは困惑したように江崎を見る。

江崎は応接室に入って言った。

「申し訳ありません」

和江が言った。

「どうしたのよ、江崎さん。喧嘩？」

「ちょっとした行き違いです。交渉には支障がないようにしますので、ご安心ください」

江崎が落ち着いて答える。静子は青山が戻ってくることを期待するかのよう、閉じられたド

アを見ていた。

大塚が責めるように言った。

「交渉に支障がないと言われても……職場放棄じゃないですか。無責任な」

美登里が胸の前で手を組んだ。

「青山さんが出て行きたい気持ちもわかるけど」

「そうですか」

「そうよ。あなたってとってもいやな男だもの。特に同業者にとっては最悪でしょうね」

江崎は軽く肩をすくめた。

「話を戻しましょう。結論は出ましたか」

正志が答えた。

「いいえ、まだ……」

「わたしは席をはずします。結論が出たら、ドアをロックしてください」

江崎は一人隣室に戻り、ドアを閉めた。突然別の空間に迷いこんだように、空気がひっそりとした孤独を醸し出す。江崎はかがんで、青山が落としていった書類やペン立てを拾い、机の上に戻していった。

過去の感情が突然時空を超えて、亡霊のように目の前に現れる。仕事へのプレッシャーと身を刺すような孤独感。しかしあのときは自分が孤独感や仕事へのプレッシャーに打ちのめされているのだと気づかないまま、目の前にある酒瓶にただ手を伸ばしていた。

江崎は片づけ終えて、椅子に腰を下ろした。

現在の自分は違う。自分が孤独感や仕事へのプレッシャーを抱えていることに気づいている。自分にかかっているプレッシャーを認めることは、負けることではないと知っている。過去の自分はプレッシャーを認めず、逃げ道だけを求め、職場どころか人生も放棄して、アルコールに走った。わずかな判断ミスで人命が失われる危険性がある仕事なのだから、プレッシャーがかかっても当然なのだと自分自身に認めさせるまでに、どれだけ時間がかかったことだろう。

しかし今はこう言える――自分は怖気づいている。でも引き受けた仕事はやり遂げる。プレッシャーを抱えながらもやる。これが自分の出した一つの結論だった。アルコール中毒になったからこそ、断酒プログラムに参加でき、自分自身と向き合うことができた。自分は人生経験と呼ぶには高すぎる授業料を払った。だからこそ今は二度と酒に逃げないと信じられる。

そして青山には同じ轍を踏んで欲しくない。

ドアを叩く音がして、正志に呼ばれた。江崎は応接室に戻り、椅子に座った。

「伺いましょう」

正志が江崎をまっすぐ見て言った。

「さっき江崎さんが言った案で行きます。もう沈黙だのプレゼントだのでもいいように脅されたり、じらされたりするのはごめんだ。金を払って、こっちが主導権を握って、一人でも二人でも人質をとり返したい。わたしたちはとにかく事態を動かしたい。その考えで一致しました」

「わかりました」

「身代金の支払いは大丈夫なんでしょうね？」

和江が訊いた。

「ご心配なく。わたしから青山君に連絡しますし、彼も二、三日もすれば出てくるでしょうから」

美登里が言った。

「それとね、江崎さん。そろそろうちに脅迫電話をかけてちょうだい。警察に疑われないようにすべきだわ」

「そうですね。それじゃ今夜電話しますよ」

わがままな女王様だった美登里はやる気になったようだ。正志は自信を取り戻し、交渉に臨もうと決意している。今まで和江に面倒を見てもらっていた静子は、ショックを受けた和江を支えようとしている。大塚は飛び入りながら、自分なりに発言し、家族たちはそれを受け入れている。人質はきっと帰ってくるという予感がした。

あとは青山の問題だけだ。

ミスター誘拐の衝撃映像が放映される～十一月二十七日（木）午後五時

紅の頭からは深夜の散歩のときの辻の姿が離れなかった。話しかけると懸命に笑顔を浮かべて自分に答えようとしてくれているのがわかり、かえって申し訳ない気持ちになった。次第に会話はにぶくなり、散歩の終わりには四人揃って無言で歩いた。

見張りのグレーがテレビに夢中になっているのを確認してから、紅は小声でぼやいた。

「何か辻さんにしてあげられないかな」

「だけど、聡史君は無理だって言ったんでしょ」

杏子が両手を広げ、塗り上げたネイルエナメルに息を吹きかけながら言った。

「言ったけど、聡史は何でも無理って言うから。たぶん辻さんは聡史にすごく期待してたんだと思う。それなのに何もしてあげられないなんて、あたし、責任感じちゃう」

「べつに紅ちゃんのせいじゃないわよ」

「とにかくあのヘフェがノートパソコンから目を離してくれればいいんだよね。次に聡史が来たとき、あたしたちがここで騒いだらどうかな。杏子さん、協力してくれない？」

「協力はかまわないけど、騒いだからって聡史君がノートパソコンに近づけるわけじゃないでしょう。たぶんわたしたちと聡史君が怒られて終わりよ」

「言われてみればそうだ。ああ、どうしたらいいの。あのグレーさえいなかったら、もう少し聡史と相談できたのに」

紅が深いため息をついて、テレビに夢中になっているグレーを睨んだ。

ドアが開き、最低最悪のいやな奴、ヘフェが入ってくる。グレーは椅子に座ったまま振り向いた。ヘフェはグレーに近づき、一度だけ紅たちのいる檻を見てから、グレーに何か囁いた。グレーは「了解」とだけ言って、テレビに向き直り、チャンネルを替える。ヘフェは出て行った。

紅は言った。

「いやな感じ」

杏子がベッドの上で金網の向こうを見た。

「グレーはヘフェに言われて、チャンネルを替えたのよ。テレビで何かあるんだわ。きっとわたしたちに関係あるニュースが流されるのよ」

グレーが見始めたのはニュース番組だった。キャスターが連続殺人犯の裁判判決が死刑だったと報じている。二人は立ち上がって、金網に近づき、緊張した面持ちでニュースを見る。グレーもまた腕を組み、テレビを見つめている。コマーシャルのあと、騒然としたニュースルームを背景に、女性アナウンサーが口を開く。

「速報です。たった今、誘拐された柏木晴信氏と思われる人物の映像が、太陽テレビニュースルームに送られてきました」

画面が切り替わり、柏木の姿が映し出される。紅と杏子は息をのんだ。背後にはベッドやおま

るが見え、紅たちが写真を撮られた独房だとわかる。柏木はよれよれのシャツを着て、目に涙をにじませている。テレビで見慣れていた爽やかで頼もしい姿とはまるで別人だった。柏木はまっすぐ前を見て言った。

「わたしは柏木晴信です。今までのわたしの発言を不快に思われた人質だった方々及び人質のご家族の皆様、わたしはここでお詫びします。わたしは間違っていました。ここへ来て、人命ほど尊いものはないと確信しました。人命のためにはあらゆる手段を講ずるべきです。今すぐわたしたちのために活動支援金を支払ってください。わたしたちをこのまま監禁させておくことは人道にもとることです。どうか世間の皆様、わたしたちがN L Fに活動支援金を払うことを認めてください。N L Fは金さえ払えば、わたしたちを解放すると約束してくれています。人の命が救われるのです。お願いします」

言い終えると、柏木は頭を下げた。画面は切り替わり、ニュースルームの女性アナウンサーが映った。

「この衝撃映像は五時十五分ニュースルーム宛てに電子メールで送られてきたものです」

女性キャスターの音声だけが入る。

「送信元は判明したんですか」

「警察に通報しましたので、現在調査中とのことです。しかし太陽テレビでは、人質となった柏木晴信氏の必死の訴えである可能性が高いものとして、放映に踏み切りました」

「わかりました」

画面が再び切り替わり、女性キャスターと男性解説員が映し出される。女性キャスターが言った。

「柏木晴信氏が拉致されたのが十一月十五日ですから、すでに十二日たっていますね。この時点でこういった映像が送られてくることについてはどう思われますか」

「警察は捜査状況を一切公表しておりませんので、捜査や交渉との関連は判断しかねます。ただ犯人と目されているN L Fは、これまで監禁中の人質の映像をマスコミ各社に送ってくるということはありませんでした。今回の柏木氏のコメントは、彼が反ゲリラの急先鋒であることから、世論に衝撃を与えることが目的だと思います」

「柏木氏は身代金の支払いについて断固拒否すべきだという姿勢でいらっしゃいましたが、主張が百八十度変わったことについてはどうでしょうか」

「このコメントが彼の本心なのか、それとも脅迫を受けてのものなのかは、この映像だけではわかりませんね」

「しかし警察はこの映像を手がかりに、捜査を進めています。一日も早い救出を期待します。それではもう一度柏木氏のコメントをご覧くださいます」

画面が切り替わり、再び柏木の姿が映る。紅と杏子は顔を見合わせた。

紅が言った。

「根性焼きのあと、柏木さんが黙っていたのはこの映像を撮られたせいだったんだ。見張りにゴマすりを始めたのは、何とか放映をやめさせようとしていたんじゃない？」

「N L Fは晴信さんの名誉を徹底的につぶす気なんだわ」

「あれ、名誉をつぶすって言う？ 本音を撮られただけじゃない？」

紅があきれて言うと、杏子は視線をそらす。

「そうだけど……」

「いい気味だよ。杏子さんだって聞いたでしょ。自分だけ誘拐保険に入って助かろうとして、わたしたちのことは虫けら同然にしか思っていない人なんだよ。そんな奴の名誉が汚されたからって、同情することない」

紅が恨みをこめて言うと、杏子は呟いた。

「わたしたちはこれからどうなるのかしら」

正志は江崎に感謝し、江崎は不安を隠す～十一月二十七日（木）午後八時

夕方のニュース番組で一斉に報道された柏木のコメント映像は、家族チームに衝撃を与えた。江崎は急いで美登里、静子、大塚に連絡する――「警察の動きがあるはずなので、今夜はミーティングに出席しないでください。こちらはうまくやるので、警察に水面下での交渉を知られないようにしてください」。

越川家については、警察の対応を和江に頼み、正志は仕事で遅くなるとして、オフィスに来てもらうよう手配した。Aは昨夜、明日電話すると言ったのだ。交渉が大詰めの今夜、交渉係が電話に出なかったら、次の電話がいつ来るかわからなくなってしまう。

江崎は録画した柏木の映像を何度も見返した。紅の暴行疑惑写真と、背景がまったく同じであることに気づく。ベッドに置かれた枕の位置などが完全に同一だ。これで二人は実際にこの独房で生活しているのではなく、撮影のときにだけ交代で入れられたこと、さらに二人は同じ敷地内に監禁されていることがわかった。

柏木の映像についてはどう解釈すべきか。N L Fは最終通告を出してきて、その回答待ちをしている中、金を払って助けて欲しいと訴える柏木の映像をマスコミに送りつけた。涙目で命乞いをする柏木の姿は衝撃的だ。しかし、現在進行中の、美登里から金を引き出せなければ、紅を殺すという脅迫とはつながらない。

あの映像を見た美登里が心を動かせば、正志の説得を受け入れやすくなるとでも考えたのだろうか。紅の命を盾に正志を脅している段階で、ずいぶんな念の入れようである。それとも単に柏木の面子をつぶしたかっただけか。しかしこのあと交渉が成立し、紅を帰したら、柏木の命乞いは紅のためということになり、面子つぶしの効果は半減する。

しばらく考えてみたが、やはり江崎の中で納得いく答えは見つからなかった。とりあえず今夜のAからの電話に出て、その上で状況を見極めるしかない。

午後七時、いつもならどんなに遅くても青山が顔を出す時刻である。しかしオフィスのドアは開かなかった。江崎は電話と自分のパソコンを接続し、通話を録音できるように準備した。

午後七時四十五分、正志がようやく到着した。

「携帯を切っていてすみません。警察に呼び出されないようにと思って……尾行がついていないかと冷や冷やしましたよ」

正志が電話の前の椅子に座ると、江崎はウーロン茶と交渉の要点を書いたメモを差し出した。「今夜はわたしたち二人だけです。他の皆さんには警察をごまかすために、自宅待機をお願いしました。状況は変わりましたが、Aは昨夜の回答を待っています。昨日の打ち合わせどおりに行くしかありません」

正志はウーロン茶を飲み干すと、不安になる様子もなく力強く言った。

「俺はこの手で娘をとり返してみせる。柏木さんの映像で動揺させようとしたって無駄だ」

それから正志はメモに目を落とし、今夜伝えることを確認した。午後八時ジャストに電話が鳴

った。

「越川です」

「柏木の女房を説得できたか」

「柏木さんは別荘を売った金はあれで全部だとのこと。ただ銀行から借り入れができることになりました」

「金額は？」

「一千万円です。わたしは頼まれたことを果たしました。約束です。娘を帰してください」

「支払い方法を柏木の女房に連絡する」

正志は急いで言った。

「待ってください。支払う前に、娘たちが生きている証拠が欲しいんです。まだ生きているとわからないのに、お金を払うことはできません」

「用意する」

「四人全員の生存の証拠を……」

電話は切れた。正志は大きく息を吐く。

「これで紅は助かるのでしょうか」

江崎は言った。

「大丈夫です。Aは支払い方法を連絡すると言い、生存の証拠を出すと約束しました。紅さんの殺害は撤回されたものと思います」

「よかった」

正志は全身の力を抜き、声をもらす。それからすぐに腰を浮かせる。

「早く家に帰りたい。和江に紅は大丈夫だと伝えてやりたいんです。あと少しの辛抱だと。もうすぐ紅に会えるのだと」

「警察に疑われても困りますし、今夜は早めに帰宅されたほうがいいでしょう。柏木さんにはわたしから電話しておきます」

「お願いします」

正志はそう言って立ち上がると、右手を差し出し、江崎に握手を求めてきた。江崎は頭を振った。

「喜ぶのはまだ早いですよ」

「いいえ」

正志は江崎の右手をとって、握りしめる。

「江崎さんがいなかったら、紅をとり返せなかったと思います。本当にお礼の言葉もない。紅が帰ってきたあとでも、わたしは交渉役を続けます。全員が帰ってくるまで、絶対に負けません」

江崎は左手で正志の手の甲を叩いた。

「人質をとり返せるかどうかは、わたしの力ではありませんよ。ご家族がどれだけ踏んばれるかにかかっているんですから、皆さんのお力です。それにお礼の言葉をいただくのはまだ早い。人質全員が解放されたときに、改めて伺います。いいですか、正志さん、最後の瞬間まで油断は禁物ですよ」

「わかりました」

正志はうなずき、オフィスを出て行った。

江崎は無人となったオフィスで、すぐにたった今録音した通話を再生した。Aは自ら支払い方法を連絡すると言い、正志からの生存証拠の要求にもあっさりと承諾した。N L Fは人質の解放にずいぶんと意欲的だ。ニュースで流された柏木のコメント映像は、美登里から金を引き出しやすくするためのものだったと見ていいのだろうか。しかしすでに家族たちは一億七千二百万円を支払うと言っているのだから、金を引き出すためにここまでする必要があるだろうか。それに金を払わせたいなら、美登里にだけ映像を送ればいいのであって、マスコミを通じて公表する必要はない。やはり単に柏木の面子をつぶしたいだけだろうか。それならマスコミ公表はいちおう辻褄は合っているように見えるが、そうすると、なぜこのタイミングなのかがわからなくなってくる。

やはり江崎の直感は何かがおかしいと告げていた。N L Fは今夜支払い方法を連絡すると言ってきた。今日が二十七日木曜日なので、十二月一日より前に身代金を受け取る意図があることは間違いない。江崎はこの点が引っかかってならなかった。部分に焦点を当てると、それほどおかしいことはない。しかし全体で見ると、明らかに辻褄が合わないのだ。江崎は健康サンダルをぶらつかせながら、懸命に考えた。しかし胸糞悪いことに、納得いく結論は出てこなかった。

江崎は美登里、静子、大塚に順に電話をして、今夜のAとのやりとりについて報告した。三人とも警察の事情聴取は簡単なもので、うまくやり過ごすことができた、交渉が進展してよかったと、喜んでいた。江崎は疑惑については伝えなかった。

人質たちは、新聞音読を録音する～十一月二十八日（金）午前二時

銃で威嚇されながらの深夜の散歩に、柏木は来なかった。

辻はやりきれないという様子で言った。

「ニュースで柏木さんのコメントが流れるのを見たんだよ。見張りのテレビを盗み見してね。柏木さんはかなりのショックを受けて、金網を揺らして、出せとかふざけるなとか叫んでしまっただよ。あのリーダーが来て、銃を向けて、あとは注射を打たれてしまった。それきり起きてこないんだよ」

杏子が尋ねた。

「晴信さんは殺されたわけではないのよね？」

「大丈夫だよ。わたしも不安で何度も脈を確かめているが、ちゃんと生きている。おそらく眠らされただけだろうと思う。ただ柏木さんは有名人だからねえ。あんな映像を流されたら、そりゃあショックだろうよ。二人はテレビを見たのかい？」

「見たわ。わたしたちも見張りのテレビを盗み見したの」

杏子はそれだけ言って、口をつぐんでしまった。柏木が銃で脅され、注射で眠らされたと聞いて、紅は少し柏木がかわいそうになった。いい気味だと言ってしまったことを反省する気になって、紅もまた話す気になれなかった。三人は肩を落としてとぼとぼと裏庭を歩き、体が温まる前に建物内に戻らされた。

戻ると、ヘフェがリビングのソファの前に立っていた。

「全員リビングに行け」

リビングでは、グレーがソファに座っていた。紅、杏子、辻の三人は怯えながら指示に従った。テーブルの上にはノートパソコンとマイク、昨日の日付の夕刊が置かれている。三人は命じられて、ソファに腰かけた。レッドが三人の前方に立ち、銃口を向ける。

ヘフェが言った。

「順番にその夕刊を読んでもらう。まず、名前、新聞名、日付、記事の赤いマジックで印がついている部分を読め」

三人はヘフェの短い説明に聞き入った。これは生存を示す証拠だ。ということは、交渉は進んでいるのだ。そう思うと、希望が持てた。

ヘフェは辻に老眼鏡を渡した。

「辻から始めろ」

辻は眼鏡をかけて、マイクを引き寄せると、新聞を手にして読み始めた。

「辻明と申します。ええと、十一月二十七日付の毎朝新聞夕刊です。『太平洋低層の水温二度上昇』」

しかし録音係のグレーは動かなかった。ヘフェがグレーを見て言った。

「どうした？ 録音しないと……」

グレーが我に返ったように言った。

「すみません。ぼうっとして……もう一度お願いします」

グレーはそう言って、パソコンを向き、マウスでクリックした。辻は少し間を置いてから同じことをくり返す。ヘフェが次を促すようにうなずくと、今度は杏子がマイクと新聞を渡されて言った。

「大塚杏子。十一月二十七日付けの毎朝新聞夕刊です。『温暖化加速 水の流れ弱まる』」

最後に紅の番となった。

「越川紅。十一月二十七日付けの毎朝新聞夕刊です。『人類の課題は、二酸化炭素の増加抑止だけではとどまらず、酸素減少にも大きな……』何て読むの、これ？」

ヘフェが左手を上げ、グレーがクリックして、録音を止める。

「行ってよし」

三人は立ち上がり、レッドの誘導で二階の部屋に戻る。ヘフェとグレーは残って、パソコンに向かい、作業していた。きっと録音した自分たちの声をどこかに送信しているのだろう。早く家族と警察に届いてほしい。そして助け出してほしい。それから紅は二人の様子を見ながら、名案を思いついた。

江崎は、冷ややかな青山に、音声データの分析を依頼する～十一月二十八日 金曜日
午前六時

江崎は、冷ややかな青山に、音声データの分析を依頼する～十一月二十八日（金）午前六時

江崎は自宅に帰らず、オフィスでまんじりともせず朝を迎えた。インスタントコーヒーを淹れていると、美登里から電話がかかってきた。

「主人の声がメールで届いたわ。ちょっと呂律が回っていない感じなんだけど、どうやら新聞記事を読んでいるみたい。それと、支払い方法なんだけど、外国の口座みたいなの」

「すべてオフィスに転送してください」

電話を切ると、次々と家族たちからの電話がかかってきた。それぞれの家にメールで届けられたのは、人質が昨日の夕刊を読み上げている肉声だと言う。江崎は同様に人質本人であることを確認し、その音声を江崎のパソコンに転送してもらった。江崎は主な新聞五紙を購読しており、その中には毎朝新聞もある。人質が読んでいる記事は、実際の新聞で確認でき、声の流れにも不自然な感じはなく、肉声に間違いのないと思われた。これが本物だと確認できれば、生存の証拠となりうる。

午前七時になり、江崎は青山の携帯に電話した。

「江崎だ。話せるか」

寝起きではなさそうな、はっきりした声が聞こえた。

「どうぞ」

「人質の生存証拠となる音声データが送られてきた。これを転送するので、合成でないか分析してもらいたい」

「わかりました」

「身代金の支払いは外国送金を指定された。ケイマン諸島の銀行口座だ。金額は九千六百万円。そっちも送るので、今日中に頼む」

「わかりました」

青山は冷ややかに必要最低限の回答だけを述べた。江崎もまた用件のみで電話を切った。

江崎はコンビニに出かけ、朝食と昼食の食料を買いこみ、またオフィスに戻った。せっかくコーヒーを淹れたので、サンドイッチのパックを開いていると、電話が鳴った。

「江崎だ」

「青山です。人質の音声データですが、合成ではなく本物です。それと身代金の支払いは今日中に手続きします」

「わかった。ありがとう」

電話は切れた。江崎は味気ないコーヒーとサンドイッチを胃の中に流しこんだ。

紅は、聡史にゲリラのパソコンを調べるよう頼む～十一月二十八日 金曜日 午前八時

紅は、聡史にゲリラのパソコンを調べるよう頼む～十一月二十八日（金）午前八時

朝食の入ったビニール袋を提げて入ってきたのは、オレンジマスクの男だった。グレーはオレンジと拳をぶつけ合って親しげな挨拶を交わしたあと、交代で出て行った。ドアが閉じられると、部屋の中には、紅、杏子、オレンジ、つまり聡史の三人だけとなる。紅は小躍りしたいほど嬉しくなった。

聡史はビニール袋を持ったまま、檻のほうに近づいてくる。紅は差し入れ口に駆け寄った。しかし聡史は紅と視線を合わせず、差し入れ口に朝食を押しこむと、平然とテレビの前に行き、腰を下ろして、おにぎりを食べ始めた。紅は聡史のそっけなさにややがっかりしたが、ビニール袋をつかむと、ベッドに座っている杏子に差し出して小声で言った。

「チャンスよ！ ツイてる！」

杏子は首をかしげた。

「何が？」

「聡史が来たから、グレーに頼んでもらうの！」

紅は杏子の隣に座り、楽しい秘密をばらすようなはしゃいだ声を上げる。

杏子はビニール袋から出したおにぎりを二人分に分け、メモを見つけた。

「あら、聡史君からの手紙よ」

紅が四つ折のメモ用紙を受けとって開くと、手書きの文章が綴られていた――家族には電話済み。今日は入浴日なので、また見張りを申し出てみる。そのときなら、ゆっくり話せると思う。トイレにたびたび出るのは危険だから、必要最低限にすること。このメモは細かくちぎって、トイレに流すこと。

紅はメモをつかんで言った。

「聡史ったら！ ゆっくり話せる、だなんてえ！」

杏子は尋ねた。

「で、何を頼むの？ いいことって何？」

紅は口元に手を添えて囁いた。

「あのね、グレーにパソコンで潤君の行方を調べてもらうの」

杏子は目を丸くした。

「どういうこと？」

「録音のとき、グレーはパソコンを使ってたでしょ」

「ええ」

「グレーはパソコンをさわらせてもらえるんだよ。そしてグレーは本当はゲリラがいやで、ヘフェにも不満を持っているんだって、聡史にさんざん愚痴をこぼしてた。だから聡史が説得すれば、グレーだって協力してくれるはず」

杏子はペットボトルのお茶の蓋をひねりながら尋ねた。

「だけど、話せるのはお風呂タイムのときだから、午後になるわね」

紅はツナおにぎりを放り出して立ち上がる。

「午後まで待ってられない！ グレーが帰っちゃったら困る！ さと……見張りさん、トイレッ！」

紅は金網にしがみついた。杏子が明太子おにぎりに海苔を巻きながら、ため息をつく。

「せめて朝食が終わってから、トイレに行ってよ……」

紅は杏子の抗議を無視して、聡史に金網のドアを開けてもらい、外に出る。部屋を出て、廊下に行くと、紅が口を開く前に聡史が怒った声で言った。

「メモを読まなかったのか？ 風呂のときには話せるって書いておいただろう？ 廊下はカメラがないって言ったって、しょっちゅう出てきたら危険なんだよ！」

「だって急ぎの用なんだもん！」

紅は聡史の抗議も無視して、自分のすばらしいアイデアを披露した。

聡史はさらに怒り出した。

「それがどういう意味かわかってるのか？ もしばれたら、グレーは殺されるんだぞ！」

「ばれないよ。昨夜の録音音声を確認したいとか何とか言って、ついでに他のファイルをちょこっと見ればいいんだもの」

聡史はむっつりと黙りこんだ。

紅は言った。

「ねえ、今がチャンスなんだよ。聡史はグレーと仲良しなんだし、グレーはまだ帰らずに、そのへんにいるでしょ。急いで頼んでよ」

聡史は無言で頭を振った。

紅は腹を立てた。

「辻さんは聡史に断わられてから、ずっとへこんでるんだよ。かわいそうだと思わない？ 孫が心配で、こんなところにまで乗りこんできたっていうのに」

聡史はしばらく口を結んでいたが、やがて言った。

「僕がファイルを見してみる」

「ほんと？」

紅は顔を輝かせた。

「今日の入浴時がチャンスだと思う。ただそれには……ちょっとした協力が必要なんだけど……」

聡史は次第に言葉を濁し始め、紅から視線をそらした。

紅は言った。

「協力って何をすればいいの？ あたし、何でもするから言って」

「紅じゃなくて、杏子さんなんだけど……」

「杏子さんなら大丈夫だよ。絶対に何でも協力してくれる。あたしから伝えておくから、早く言って！」

聡史は咳払いをした。

「あのね、ヘフェは杏子さんに気があるらしいんだ。だから杏子さんの風呂をのぞかせて、その隙に……」

紅は聡史の頬をひっぱたいた。

「何考えてんの！ そんなこと頼めるわけないでしょ！」

「何でも協力するって言ったじゃないか！」

「何でもって言ったって限度があるよ！ それであいつがその気になって、杏子さんがレイプされたらどうすんの！」

「他に方法がないんだよ！」

「考えればあるよ！ もっとちゃんと考えてよ！ あたし、檻に帰る！」

紅は怒って聡史にくるりと背を向け、ドアのほうに向かって歩き出した。

聡史は捕まる～十一月二十八日（金）午後二時

「本当に他に方法はないの？ 本当に？」

バスルームに向かう途中、杏子は眉間に皺を寄せ、聡史にしつこく尋ねた。

「.....すみません」

聡史は頭を下げた。

「もしわたしが悲鳴を上げたら、ちゃんと助けに来てね。大丈夫ね？」

「大丈夫です。司令部に報告するって言えば、どうにかなると思います」

「どうにかじゃ困るのよ」

「じゃあ必ず助けに行きます」

杏子は階段を下りながら振り返り、信用できないという目つきで睨んだ。

「こんなところで体を売るような真似をすることになるなんて」

「すみません。本当にすみません」

美人に睨まれると迫力が違う。聡史は思わず首を縮め、ぺこぺこと頭を下げた。

二人は一階に下りた。昨日男性人質の見張りだったレッドと、女性人質の見張りだったグレーは、すでに帰ってしまっている。今日見張りについたのは、変な話し方をするネイビーと自分だけで、ヘフェに振り分けられ、それぞれ男性と女性の見張りについている。ふだんならさらに一人いて、ヘフェと一緒に一階の見張りにつくのだが、今日は人手不足のようだった。見張りの人数が不足する日は今までにもあったが、それに入浴日が重なることはめったにない。ヘフェのパソコンを調べるなら、今日しかない。

バスルームに着くと、杏子は別れ際に聡史をすぎるような目で見つめた。

「何かあったら、絶対に助けに来てね。聡史君だけが頼りよ。お願い」

さすが柏木晴信と不倫していただけのことはある。自分までその気にさせられそうだと思いながら、聡史はバスルームを離れ、一階のリビングに向かう。ヘフェは窓際に立ち、カーテンの間隙から外を窺っていた。

聡史は言った。

「ヘフェ、女が風呂に入りました。ここは自分が」

今朝、話はつけておいた。ヘフェは自動小銃を持ったまま、無言でカーテンを離れる。リビングを出て行くと、聡史は急いでドアを閉めた。テーブルの中央にはノートパソコンが置きっぱなしになっていた。聡史はパソコンを開き、電源を入れ、立ち上がるのをじりじりと待つ。ばれたときのことを考え、動悸が激しくなった。ばれたら、自分は殺される。それにしてもこういうときのパソコンは、どうして立ち上がるのが遅いのだろう。

聡史は不安になって、先ほど閉めたドアに向かった。ドアを開けて、誰もいないことを確かめてみたかったが、開けることすら恐ろしい。結局ドアの前で逡巡しただけで、開けることはできず、パソコンの前に戻った。デスクトップが現れ、ファイル名が並んでいる。もうすぐだ。聡

史はソファに腰を下ろした。すぐ調べられるようにとマウスに手を添えると、指先が震えていることに気づいた。手を握ったり開いたりしてみたが、震えは止まらない。冷や汗がにじんできると、

どうしようと思ったとき、突然ドアが開く。頭が真っ白になった。しかし現れたのは、グレーだった。ヘフェじゃなかった――そう思った瞬間、緊張が緩んだ。しかしグレーは自動小銃をこちらに向けて構えていた。

聡史は渴いた声で尋ねた。

「まだ帰ってなかったのか」

「何をするつもりだった？」

グレーは銃口を聡史に向けた。聡史は説明しなければならないと覚悟した。

「違う、グレー。僕はみんなを危険にさらしたりはしない。ただ……」

「マスクをとれ、ノゾーキー」

グレーは聡史にぴたりと狙いをつけたまま、ゆっくりと近づいてくる。聡史は言われるままにマスクをとった。冷たい空気が顔を冷やす。何日か一緒にいて親しくしていたのに、顔を見られると、居心地悪くなった。

グレーは訊いた。

「警察に頼まれて、もぐりこんだのか」

聡史は頭を振った。

「違う、警察じゃない。頼む、ヘフェには言わないでくれ。グレーが危険になると困るから、くわしくは話せないけど、ちょっと調べたいことがあっただけなんだ。外部には絶対にもらさないから、見逃してくれ。頼む」

聡史は必死に説明しながら、グレーの様子がいつもと違うことに気づいた。ふだんのグレーは無理矢理引っ張りこまれた学生のように、座り心地の悪い椅子やテレビゲーム禁止への文句を言い、退屈しのぎのテレビや漫画に没頭し、逮捕の恐怖を口にしていた。しかし今眼前にいるグレーは、揺るぎない目的を持つ戦士のように迷いがない。

グレーはかすかに笑った。

「なあ、ノゾーキー、おバカちゃんの風呂はどうだった？」

「え……」

「いいや、おまえはのぞかなかった。そうだな？」

聡史の全身から血の気が引いた。

グレーが命じた。

「頭のうしろで手を組め、ノゾーキー。入って来い、ヘフェ」

聡史が手を挙げると同時に、ドアからヘフェがのそりと入ってきた。

「やっぱりこいつですか」

「ああ」

グレーはヘフェに返事してから、聡史に向かって言った。

「ヘフェはゴミをチェックすることになっているんだよ。女たちのゴミから、ゼリーとクッキーのゴミが出た。それで、自分が司令部から派遣された」

「.....グレーはクリーナーだったのか」

マスクの穴からのぞくグレーの目は笑っていた。クリーナーとは、N L F内に入りこんだ裏切り者を見つける内部調査コマンドのことだ。その存在について噂で聞いていたが、聡史は自分には関係ないものと思い、気にもしなかった。状況が変わった時点で、思い出すべきだった。

ヘフェは尋ねた。

「殺しますか」

「いや、司令部に連れて行って、尋問してもらおう。スパイかただのストックホルミングかをここで突き止めるのは難しい。とりあえず独房にぶちこんでおこう。柏木の準備もある」

「了解しました」

柏木の準備とは何を指すのだろう。水面下で状況は動いているようだった。いつのまにか聡史の指先の震えは止まっており、代わりにまるで錘をつけられたように全身が重くなっていた。聡史の頭の中にあるのは、自分は拷問されて殺されるということだけだった。紅や辻、杏子を巻き添えにしたくなかったが、自分がN L Fの拷問にどこまで耐えられるかわからなかった。

家族チームは、身代金の送金をN L Fに伝える～十一月二十八日（金）午後七時

午後七時には、青山をのぞくメンバー全員が、江崎のオフィスに到着した。和江と静子が勝手に食べ物と飲み物を持ちこみ、テーブルに広げ、雑談を始める。

正志が面々を見渡して、しみじみと言った。

「やっぱり人数が揃うと心強いなあ」

美登里が江崎に尋ねた。

「身代金の支払い手配はどうなったの？」

「青山君に頼みましたが、会社の承認手続きの都合で、月曜日にならないと送金できないとの電話がありました。今回は特殊なケースなのでと」

正志が缶コーヒーを飲みながら言った。

「じゃあ、俺は何て言ったらいいんだ？」

「銀行の都合で、月曜日の午前中に必ず送金すると言うしかありません。難癖はつけられるでしょうがね」

A F 保険は晴信以外の人質のために金を払うことについて渋っているのだろうが、ここで時間をかけてどうなるのだと江崎は思う。どのみち払うことになるのだから、さっさと払ってしまえと言いたい。

大塚がせんべいをつまむ。

「送金後、警察に連絡して、銀行口座から犯人を突き止めることはできないんですか」

「警察に通報することだけは、絶対にだめです。我々は身禁法に引っかかって、逮捕される。さらに通報しないという約束を破ったことで、人質は殺されてしまいます。それに通報したとしても、金の流れを追うのは難しいんですよ」

「どうしてですか」

「N L F が外国送金で身代金を受けとる場合、いくつかの外国銀行に振り替えられたあと、ドバイあたりに行き、地下の金融流通路であるブラック・ハワラにもぐります。そうなったら、C I A でも追跡不可能です。かと言って、ハワラにもぐる前に金の流れを止めてしまえば、その時点で人質は殺されるでしょう」

「.....そうですか」

大塚は肩を落として呟いた。和江が美登里に言った。

「大変だったわね、ご主人のあんな映像を流されて」

「マスコミには昨日コメントしたから、大丈夫よ。生きていることがわかっただけでも嬉しいとだけ言って、内容についてのコメントはしなかった。これでいいんでしょ？」

「現段階では、よけいなことは言わないほうがいいでしょう。被害者の妻になりきっておくべきです」

江崎が言うと、和江が大福をつかんで、憤慨したように言った。

「だけど、ひどいわね。ミスター誘拐にあんな嘘を言わせて、世間に流すなんて。ご主人もお気の毒。N L F って本当にやり方が汚いわ！」

美登里がすまして言った。

「あれは嘘じゃないわよ。あれがあの人の本音」

家族たちは驚いて美登里を見た。美登里も驚いたように彼らを見返す。

「何よ、今さら。あの人は誘拐保険に入っていたのよ。今までのテレビの姿は嘘だってことくらい、わかるでしょ」

静子が小声で言った。

「でも、あんな立派な人が……」

「だから立派じゃないのよ。立派な人が愛人と不倫旅行する？ しかも相手は人妻なのよ。ねえ、大塚さん？」

「はあ……」

大塚は返事につまったように、言葉を濁した。

美登里はチョコレートをつまんで言った。

「わたしはあの映像を見て、よくぞやってくれたわN L F って思ったわ。誘拐犯でなければ、拍手喝采を送りたかったわよ」

美登里はチョコレートを口に入れる。家族たちは言葉もなくその姿を眺めていた。

大塚が話題を変えたがっているように言った。

「あの、青山さんは……」

江崎は時計を見て言った。

「まだ七時半ですからね。仕事で遅れているのかもしれない」

美登里が鼻で笑った。

「来るわけないでしょ。江崎さんだってわかっているくせに」

江崎は苦笑した。

正志が両手を温めるように缶コーヒーを包みながら言った。

「柏木さんから青山さんに電話してみてはどうですかね？」

「わたしに喧嘩の仲裁に入れって言うの？ いやよ。これ以上煩わしいことが増えるのはごめんだわ」

「……べつに喧嘩してませんけどね」

江崎がため息混じりに否定した。

和江がお茶を飲み干して言った。

「だけど、青山さんのiPadをいじる姿がないと、何だか寂しいわねえ。今まではちょこちょこやられて、目障りだと思っていたんだけど」

「和江さんに賛成です」

静子はそう言って、空になった和江の湯のみに茶を注いだ。

和江は江崎に人差し指を向ける。

「江崎さんが悪いのよ。もう少し青山さんの面倒を見てあげればよかったのに」

「何でわたしが青山君の面倒を見なければならないんですか」

「江崎さんのほうが年上なんだし、キャリアも上なんだから、そのくらいしてあげたっていいじゃないの」

「おい和江、よせよ」

正志が和江を肘でつつく。江崎は腹を立てた。いくら和江が世話好きな性格だからって、自分にまで同じことを要求されても困る。しかも誘拐交渉の最中、家族の面倒を見るだけで精一杯だというのに、部下でもない人間の面倒なんて見てもらえない。だいたい自分は青山からアル中だ、やり方についていけないと、陰では一方的に非難されているのだ。

大塚が頭を振った。

「しかし仕事ですからね。気に入らないからと言って来ないのは、無責任ですよ」

「あら、わたしは和江さんに賛成だわ」

美登里がハンカチで手を拭いながら言った。

「江崎さんはフォローが足りないのよ、フォローが」

「.....かなりフォローしているつもりですが」

江崎は憤りをこらえて言った。

美登里は哀れむような目を向けてきた。

「わかってないわね」

静子がめずらしく鋭い目で江崎を見た。

「わたしは和江さんと柏木さんに賛成です」

江崎は半眼になって、女性三人を睨みつけた。

正志が場の空気を変えなくてはというように、意を決した顔で割りこんでくる。

「もうじき八時なんですけど、メモは.....」

「これです。もしもこれでご了承いただけるのなら、お使いください」

江崎はむっつきりとして、用意しておいたメモを差し出した。

女性三人が騒ぎ出す。

「いやあねえ、すねちゃって。大人気ないわ」

「お使いくださいなんて言わなくたっていいじゃないの。厭味よね」

「わたしは和江さんと柏木さんに賛成です」

たった一言で、なぜ自分がここまで責められなければならないのか。江崎は今後はよけいなことを言うまいと固く心に誓った。大塚と正志は関わり合いたくないと言わんばかりに視線をそらして、テーブルの上のせんべいを黙々と口に運んでいる。やはり自分はいつでもどこでもどんなときでも孤独になってしまう運命なのかと思うと、卑屈な気持ちが増した。

午後八時になり、三十秒後、電話が鳴った。江崎がスピーカーにする。

「越川です」

「人質が活着しているってことはわかったな？ 金は？」

「送ります。ただあの、銀行の都合で、月曜日になりますけど.....」

「月曜日？ どういうことだ？」

Aは声を荒げた。しかし正志は予測しており、冷静に言い訳をした。

「今日、全員の金を一つの口座にまとめる手続きをして、月曜日に送金ということになったんです。必ず払います。金は準備してあるんです。ただ月曜日まで……」

「月曜日に電話する」

通話は切れた。通話時間を見ると、二十五秒だった。正志はほっとした様子で、メモをテーブルに置いた。

「よかった、あっさり引き下がってくれて」

「お疲れ様でした、正志さん」

江崎は礼を述べながら、不安に胸を掻き立てられていた。なぜあっさり引き下がったのだろう。

和江が江崎に尋ねた。

「それで今後はどうなるの？」

江崎は不安を隠して言った。

「通常、入金確認ができれば、人質が帰ってきます。N L Fの場合、解放したと事前に言ってくれることもありますし、予告なく突然人質が自宅に現れることもあります」

「どっちにしてももうじき紅に会えるのね。もうじき……」

和江がしみじみと言った。

美登里が背もたれに体を預ける。

「あとは待つしかないってことね」

「そうです」

大塚が壁のカレンダーを見て、独り言のように呟く。

「月曜日か……身禁法スタートの日ですね」

江崎は押し黙った。交渉は順調に行っていると考えていい。まずは一人だが、帰ってくる目処はついたのだ。しかし江崎は、背中から突然刺されるかもしれないという不安を、どうしても拭い去れなかった。

人質たちは、聡史を心配する～十一月二十九日（土）午前二時

裏庭を歩き始めるなり、紅は辻に尋ねた。

「辻さん、聡史を見なかった？」

「聡史君？ いや」

辻はきょとんとして頭を振る。

紅は目に涙をためて言った。

「どうしよう」

「大丈夫よ、紅ちゃん。きっと聡史君は何か別の仕事に就いたのよ」

そう言って慰める杏子の顔も、風呂から帰ってきて以来ずっと冴えなかった。

辻が尋ねた。

「いったいどうしたんだね？」

紅は胸がつまって説明などできそうもなかった。

そんな紅を見て、杏子が口を開く。

「実は聡史君が行方不明になったの。入浴のとき、わたしの見張りとして一緒に一階に下りたんだけど、それきり姿を見てないの」

「そうか……わたしのときの見張りは紺色のマスクをかぶった青年だったから、聡史君ではなかったなあ。でも、さっき大塚さんが言ったように、別の仕事に回されたんじゃないかね。越川さんもそんなに泣かなくても」

杏子は困ったような顔をして、紅を見た。

「辻さんにも言っておいたほうがいいわ。いざというとき、正確な情報があったほうがいいから」

紅は頬を涙で濡らし、しゃくり上げた。

杏子は続けた。

「今日、わたしが入浴しているとき、ヘフェをわたしの見張りにつかせて、聡史君がヘフェのパソコンを調べることにしたの」

辻は驚いて立ち止まる。

「そりゃまさか……」

「辻さん、歩いて」

杏子は小声で言った。再び辻が歩き出し、杏子は話を続ける。

「聡史君は辻さんのお孫さんの情報を得たいからって、自分から言い出してくれたのよ。わたしが最後に彼を見たのはお風呂に入るときで、出てきたら、迎えに来たのはグレーだったわ」

「あの灰色マスクか」

「ええ。今日のわたしたちの見張りは聡史君だったはずなのに、入浴後もずっとグレーがわたしたちの部屋にいるの。それで散歩のときになれば、全員が見張りに立つから、そのときに確認で

できれば思っていたんだけど」

「……聡史君の姿はないね」

紅は泣きじゃくりながら言った。

「グレーは聡史と仲がいいから、さっきオレンジはどうしたのって訊いてみたの。だけど、知らないって……自分は見張りにつくようヘフェに命令されただけだからって……」

辻が沈んだ声で言った。

「わたしが聡史君に潤のことを話したばかりにこんなことに……」

「違う、辻さんのせいじゃないよ。あたしが聡史に無理矢理やらせたの。どうしよう。聡史はばれたら殺されるって何度も言っていたのに……」

杏子が言った。

「二人とも落ち着いて。見張りが不審げにこっちを見てるわ。辻さん、晴信さんの具合はどう？」

「柏木さんは大丈夫だよ。ヘフェは注射をやめて、食事をとらせている。明日にはまた散歩に出てこられるんじゃないかね」

「そう、よかったわ」

杏子は緊張した声のまま言った。

「ねえ辻さん、晴信さんの頭がはっきりしたら、聡史君のことを話してみて。晴信さんはN L Fについてくわしいから、何かわかることがあるかもしれないわ」

「わかった、訊いてみよう」

辻もまた緊張した声で答えた。

紅が涙声だが、きっぱりと言った。

「もし聡史に何かあったら、あたしN L Fを一生許さない」

杏子が言う。

「きっと大丈夫。無事を祈りましょう」

見張りが時間を告げてきた。三人は不安と心配に押しつぶされそうになりながら、建物の中に連れ戻された。

家族チームは、終わりを予感する～十一月二十九日 土曜日 午後八時

家族チームは、終わりを予感する～十一月二十九日（土）午後八時

今夜Aからの電話はなかった。江崎は、月曜日の入金が進むまで、N L Fに動きはないだろうと家族たちに伝え、早々に解散した。家族たちは、終わりが近づいていることを予感して、電話がなくても気落ちする者はなかったが、江崎だけが得体の知れない不安に苛まれていた。

辻は、孫と悲しい再会をする～十一月三十日（日）午前十時

聡史は真っ暗でかび臭い独房の中で話し声を聞いた。

「柏木を車に乗せろ。自分は裏切り者を檻に移動させておく。独房じゃ見張りの人数が足りない」

突然ドアが開き、室内は射しこんできた光で一変し、聡史は反射的に目をつぶった。グレーの声がした。

「立て、移動だ。おかしい真似をしたら、殺す」

鉄格子を開ける音がする。聡史は光を遮るためにまぶたに掌を当てて、頭を振った。グレーに裏切られたという恨みがあつた。しかしグレーは聡史の腕をつかんで立ち上がらせる。グレーの腕は少年のように意外と細く、これなら逃げられるだろうか聡史は考えた。しかしグレーは小柄でも正式の訓練を受けたゲリラだ。自分が逃げようとすれば、迷わず殺すだろう。

グレーに銃口を向けられ、頭のうしろで手を組まされて、歩かされる。ようやく目が慣れ、周囲が見えるようになってきた。自分はまだあの山荘にいた。廊下を進んで、男性人質の監禁部屋に入る。金網の向こうで、辻が驚いたように立ち上がった。なじみある顔を目の前にして、わずかに聡史の恐怖が緩む。

グレーは床に鍵を落とした。

「自分で鍵を開けて、入れ」

グレーの声は、自分と一緒にテレビを見ていたときの声とは別人のように冷たかった。聡史はかがんで鍵を拾って、鍵を鍵穴に差しこんだ。

辻がグレーに向かって言った。

「あんたたちはこの青年をどうするつもりなんだね？ あんたはこの青年と仲がいいんだろう？ 助けてやってはくれないかね？」

聡史は驚き、やめさせようと小さく頭を振った。辻はグレーと自分が親しいと思っており、司令部から派遣されたクリーナーだとは知らない。もし不用意なことを言って、辻まで拷問されるようなことになっては困る。聡史は急いで金網のドアを開け、グレーに鍵を渡してから中に入った。

辻が聡史の肩に手を置く。

「聡史君、大丈夫かね？ 怪我はないかね？」

「大丈夫です。何も言わないほうが……」

聡史は小声で止めたが、辻は構わずグレーに顔を向ける。

「あんた、ヘフェに言ってくれないかね？ この人はわたしのために動いたんだ。わたしが人質になったまま帰ってこなかった孫を探しているから、その情報を探そうとしたんだ。わたしに頼まれただけで、この青年に悪気はなかったんだよ」

グレーは一瞬手を止めたが、すぐにドアに鍵をかける。

辻は金網にしがみついて叫んだ。

「この人を助けるようヘフェに頼んでくれ！ 何ならわたしから話すから、ヘフェにここに来るよう伝えてくれるだけでもいい！ まずは話を……」

「もうやめてください、辻さん。あなたまでまずいことに……」

聡史は辻の肩をつかんで、金網からひきはがそうとした。すると、金網の向こうに立っていたグレーが、銃を捨て、辻から離れまいとするように近づいてくる。金網に拳を打ちつけて怒鳴った。

「どうして来たんだよ、おじいちゃん！」

聡史と辻は言葉を失った。グレーは拳を金網にぶつけたまま、うつむいた。聡史の手が辻の肩から離れると、辻は手を伸ばし、金網の隙間からグレーの拳にふれた。それからかすれた声で言った。

「……潤か」

グレーは顔を上げずに小さく頷いた。

辻は言った。

「潤か、潤なのか。潤……」

辻は声をつまらせた。

「背が高くなったなあ、潤。おじいちゃんはわからなかったよ。そのマスクをとって、顔を見せてくれ……」

潤は頭を振った。

辻の声は震えている。

「何があったんだ、潤？ どうしてゲリラの手伝いなんかしているんだ？ おまえのお父さんやお母さん、おばあちゃんがどれだけ心配したと……」

「うるさい、うるさい！ 僕はゆっくり眠りたかったんだよ！」

潤は顔を上げ、拳で金網を何度も叩いた。

辻は一瞬体を震わせて、一步あとずさったが、すぐに尋ねた。

「眠りたかったってどういうことだね？」

「だって家じゃ眠れない！ 家では学校と塾の宿題で夜遅くまで勉強しなきゃならないんだから！ 僕はいつも睡眠不足で疲れていたんだ！ だから僕はNLFに頼んだんだ！ 家に帰さないで、ゲリラの仲間に入れて欲しいって！」

辻は呆然と立ち尽くした。

「……何でそんな……みんな心配して……」

潤は金網の向こうから、憎悪に暗く光る目で辻を睨みつけた。

「心配？ それがどうした？」

潤の声は冷えきっており、聞いている聡史まで寒気がした。辻はすっかり変わってしまった孫にどう話しかけていいかわからないように、黙ってしまった。潤は言った。

「NLFは親切だよ。拉致されて、監禁されたとき、たしかに最初は怖かった。でもこの見張りはあれこれ話しかけてこなかったから、居心地がよかった。だからゆっくり眠れた。何日かたったとき、ふと思ったんだ。もう勉強しなくていいんだって。ここにいれば、成績が下がっても

お父さんに叱られることはないし、医学部にも行かなくていいんだって。そう思ったら、夜だけじゃなく昼もぐっすり眠れるようになった。成績のことを考えずに眠れるのは、生まれて初めてのような気がした」

話しているうちに、次第に潤の声から冷たさは消えたが、無機質で感情のこもらない声に変わっていった。潤は遠い過去を一つずつ引っ張り出して紐解くように、まるでそこにいない誰かに語りかけるように、ゆっくりと話していた。

「僕は小学校のときからクラス委員をやったけど、本当はやりたくなかった。だって目立つのが好きじゃないんだ。成績だってそう。僕は勉強なんか嫌いだ。だけど、小学生のときからずっと、ちょっとでも成績が下がるとお父さんは僕に訊くんだ。『将来のことをどう考えているんだ？』って。でもお父さんは本当は僕の考えを訊きたがっているんじゃないって……僕は医者にならなきゃいけないから。お父さんの兄弟は医者一族だから。そのために僕は有名中学に入ったけど、皆すごくてできる奴ばかりで、一学期の成績はあんまりよくなかった。そうしたらお父さんはすごくがっかりした顔で言った。『お父さんの子なら、もっとがんばれたはずだ。一度つまずいたら、人生のやり直しはきかないんだぞ』って」

辻は深い衝撃を受けたように呟いた。

「おじいちゃんは……知らなかった……」

「知るわけがない。僕は自分の気持ちを誰かに知られることのないように、いつも気をつけていたんだから。誰かに知られたら、そいつを殺すか、自殺するつもりだったんだから」

「自殺？ どうしてなんだ、潤？ お母さんにも話せなかったのか。お母さんに相談……」

また潤の声が陰しくなった。

「僕はお母さんも嫌いだ。お母さんなんかお父さんの言うなりのくせに、僕を気遣っているふりするんだ。いかにも息子を支えていますって感じで、そっと夜食を置きに来られると、すごくむかついた。体は大丈夫なのって心配そうに訊かれるたびに、僕はお母さんを殴りたくなった。体の心配をするなら、僕の顔色が悪いときに塾を休んでいいって言ってくれてもいいじゃないか。言わないなら、結局お父さんと一緒になって勉強しなさいって言うのと同じことだ。僕はお母さんに、一度でいいから僕の味方になってもらいたかった。僕がお父さんに叱られているとき、一度でいいからかばってもらいたかった。でもお母さんは僕をかばってくれたことはなかった。お母さんにとっていちばん大切なのはお母さん自身だから、僕のことはどうでもいいんだ。僕がゲリラになったって、お母さんはべつに心配していないはずだ」

「……潤、そんなことは……潤……」

辻は金網の向こうの孫に向かって、名前を呼ぶことしかできないようだった。やがて言った。

「なあ、おじいちゃんとおばあちゃんはどうだ？ おじいちゃんがおまえを八王子の家には帰らずにすむようにする。おじいちゃんと一緒に暮らすのはだめか」

「できもしないことを言うなよ」

「できるよ、約束する。おじいちゃんがお父さんを説得する。実はお父さんとお母さんは離婚したんだ。もう一緒に暮らしていない。だからきっと大丈夫だ。これからはおじいちゃんが潤の味方になるよ」

潤は金網から離れて、辻を睨んだ。

「僕は帰らない。ここから一步でも出たら、僕はお父さんに連れ戻されて、またお父さんの望みどおりの生活をさせられるんだ。僕は絶対にN L Fから出ない。ずっとここにいる。警察に逮捕されたって、お父さんのところに戻るよりはましだ」

潤は銃を拾って言った。

「解放されても、絶対に僕のことをお父さんに告げ口するなよ。もし言ったら、今度はおばあちゃんを誘拐する。僕はN L Fでは下っ端じゃないんだ。いろんな訓練を受けたから、監禁班のヘフェより偉いんだ。僕が言え、誰でも誘拐できるんだ。よく覚えといて」

潤は踵を返して、ドアに向かった。辻は叫んだ。

「潤、待ちなさい！ 潤！」

しかし潤は振り返ることもなく、ドアの外に出て行ってしまった。辻はしばらく閉じられたドアを見つめていたが、やがて目を伏せて沈黙した。混乱しているようだったが、とり乱すことはなかった。

聡史は何か辻に声をかけてやりたいと思ったが、潤が生きていてよかったなどという安易な慰めは言えなかった。自分はいつだって不器用で、どうしてこんなときに気のきいた言葉の一つも思いつかないのだろうと思うと、情けなくなる。辻は微動だにせず立ちすくんでいた。聡史はその沈黙につき合い、黙ってそばにいることしかできなかった。

美登里は、夫からの電話を受ける～十一月三十日（日）午後十二時三十分

今日は佐藤が休みなので、美登里がランチを用意した。ペンネアラビアータ、レタスとクレソンのグリーンサラダ、香にはアップルジュース、自分にはヘルス&ビューティ野菜ジュース。美登里は階段の下へ行き、香に声をかける。

「香ちゃん、ランチができたわよ。下りてらっしゃい」

美登里は香のために食事を部屋まで運んでやることを一切やめた。最初はしぶしぶ食卓についていた香だったが、最近ではまた美登里と会話を交わすようになった。しかし外に出ようとはしないし、学校にも行かないので、完全に以前のおりというわけにはいかない。美登里は娘と話し合うべきなのか、本人が自発的に動くまで放っておくべきなのか決心がつかず、今は自然に接すること、香にできることはやらせることだけを心がけている。

香が下りてきた。ちょうどそのとき電話が鳴る。美登里はキッチンでグラスをのせたトレーを手にしており、香に言った。

「香ちゃん、電話に出て」

「え……」

「ママは手がふさがっているの。早く」

美登里は香が電話を恐れていることを知っていた。しかし一生電話を避けて生きていくわけにはいかないし、自分が留守のときは出てもらわないと困るのだ。自分と一緒にいるときに電話に出て、リハビリさせれば、一人のときでも出られるようになるはずだ――たかが電話なのだとわからせればいいのだから。

香は電話の前に行った。美登里は内心そばで寄り添ってやりたかったが、そ知らぬ顔でグラスをテーブルに運び、並べた。香はカウンターに載っている電話の前でコール音を聞いていたが、やがて受話器を持ち上げた。

「柏木ですけど」

沈黙のあと、香が叫んだ。

「パパ？」

美登里は驚いて、手にしていたトレーを落とし、香のほうを振り向く。香は美登里を見ながら話している。

「本当にパパなの？ 今どこ？ 待って、ママに代わるから！」

香が近づいてきて、美登里に電話を差し出し、美登里は受けとって言った。

「あなたなの？」

「ああ、わたしだ。解放された」

「ああ……」

美登里は腰を抜かしたようにその場に座りこんでしまった。

「皆さんも無事なの？ 今どこ？ すぐに帰れるの？」

「解放されたのはわたし一人だ」

「え……」

美登里は驚いて、電話を握りしめた。

「どういうことなの？」

「他の人質は生きているが、解放されなかった。とにかくわたしは無事だ。今はG県の民家にいる。携帯がないから、念のためこの電話番号を言う。メモするんだ」

美登里は香に向かって、「メモ！」と叫び、香はメモ用紙とボールペンをとってきて手渡した。

「いいわ」

「佐々木さんというお宅だ。xxxxの……」

美登里は言われた番号を書きとめた。手が震えており、ミミズののたくったような数字になってしまった。

「よくやってくれたな、美登里。今から警察に電話する」

電話は切れた。美登里は電話を握りしめたまま呆然と床に座っていた。

香が叫んだ。

「ママ、しっかりして！ パパは解放されたの？」

「そうみたい。だけど、ああ、どうしよう……」

美登里は額に手を当て、頭を振る。おかしいことになっているということだけはわかる。しかし何がおかしいのかまでは頭が回らない。美登里はようやく言った。

「江崎さん専用の携帯をとってきてもらえる？ テレビの近くに置いてあるわ」

香は急いで携帯をとって、戻ってくる。しかしそのとき固定電話が鳴った。

「柏木さんですね。G県警の前原です」

「主人が……主人から電話がかかってきました……」

美登里は放心したような声で言った。

江崎は、青山に本心を伝える～十一月三十日（日）午後十二時四十五分

美登里からの電話を受けたとき、江崎はオフィスに着き、神棚の前で手を合わせ終えたところだった。美登里の用件は江崎にも大きな衝撃を与えた。美登里によれば、晴信は脱走したのではなく解放されたのだと言う。

江崎は美登里との電話を切ると、すぐに電話をかけた。八回のコール。応答があった。

「青山です」

「俺だ。晴信氏一人だけが、今解放されたいらしい」

「まさか」

青山は今までの冷ややかな反応を翻し、当惑したような声を上げる。

「そんなはずはない！ まだ身代金を払っていないんですよ！」

「本人から自宅に電話が入ったそうだ。柏木さんと娘が話している」

「どういうことだ……」

青山は信じられないというように声をもらす。

江崎は続けた。

「俺にもわからないし、詳細は不明。柏木さんは今からG県へ向かうそうだ」

江崎は言葉を切ってから言った。

「出て来い、青山君」

ここで江崎は、一人前のコンサルタントとして扱ってほしいなら、途中で仕事を投げ出すなど怒鳴りつけてやるつもりだった。しかし口から出てきたのは、自分でも思いもしなかった言葉だった。

「俺は君のデータ分析能力にはずいぶん助けられた。俺一人じゃ四家族をここまで引っ張ってくるのは無理だっただろうと思っている。だが、人質を助けたいなら、マニュアルやデータに頼ってばかりじゃだめだ。自分を信じろ。自分の頭で考えろ。直感を鍛えろ。君にそれができるようになれば、簡単に俺を越せるぞ。俺よりももっと腕のいい誘拐コンサルタントになれる」

青山は何も言わなかった。

「オフィスで待っている」

江崎は電話を切った。今の言葉は青山を現場復帰させる方便ではなく、自分でも気づかなかった本心から出たものだった。これで青山は戻ってくるだろうか。結果はどうあれ、自分は伝えるべきことは伝えた。江崎は他の家族たちに電話をかけ始めた。

紅と杏子は逃げようとして、失敗する～十一月三十日（日）午後一時

一昨日の午後聡史が失踪して、まもなく丸二日がたつ。紅と杏子の不安はますます募っていた。

午前十一時頃、外で車のエンジン音と話し声を聞いた。午前七時半頃の車なら新しい見張りの到着、八時過ぎの車なら今まで見張りについていた者の引き上げだということはわかっている。しかし通常午前十一時に車が来ることはなく、二人はぞっとした。聡史を連れ去るための車だとしたら、どうすればいいのだろう。

自分たちを避けている見張りの都合などにかまっている余裕はなかったが、問い詰めることもできなかった。何しろ見張りが部屋にいないのだ。ネイビーは車が着いた頃からそわそわとし始め、部屋を出たり入ったりして、テレビの前に座ることもない。一階に人が集まっている気配はするが、何をしているかはわからない。そして午後一時になってようやく、菓子パンとジュースの入ったビニール袋が差し入れ口に押しこまれた。紅と杏子は不安に打ちのめされており、いつもより一時間遅い昼食に手をつける気にはなれなかった。

「何が起きているのかしら」

杏子が不安げに呟く。

紅もまた小声で言った。

「ここがこんなにあわただしい空気になったことってない。きっと何かあったんだ……聡史だ、きっと」

「まだ聡史君だと決まったわけじゃないわよ」

そう言った杏子の声も弱々しかった。正確な情報が入らない、何が起きているのかわからないという状況は、人を空想の世界に誘いこむ。紅はいても立ってもいられなくなり、金網のドアの部分に指を入れ、持ち上げようとした。

杏子が尋ねた。

「何をしてるの？」

「逃げるの。今は見張りもいないし、何かが起きているならきっと隙がある。逃げるなら今しかないよ」

「そうね」

杏子も立ち上がって、金網のドアの前にやってきた。

「どうするの？」

「このドアがはずれないかと思って」

「無理よ、蝶番はかなりしっかりしてる。鍵の部分を壊しましょう。何か固いもので叩くのよ」

二人は固いものを探し始めた。しかしハンマーの代わりになりそうなものは何もない。

そのとき突然ドアが開いた。紅と杏子はびっくりしてドアを見る。ヘフェではないブラックマスクをつけた男が三人、部屋に入ってきた。紅と杏子は蒼白になって、金網から離れ、ベッドに

駆け寄った。杏子が紅の肩を抱きかかえる。紅が囁いた。

「逃げようとしたのがばれたんだ」

「何とかごまかしましょう」

この男たちの背格好に見覚えがなく、初めて見る気がした。均整のとれた体躯の男が銃を構え、細長い頭部の男は黒いバッグを持ち、いちばん背が低く、ずんぐりとして重心の低い男は手ぶらだった。

銃を持った男が銃口を自分たちに向ける。紅と杏子は互いに身を寄せ、二台のベッドの隙間に座りこんだ。このまま殺されるのだろうか。手ぶらの男が金網の鍵を開けた。紅と杏子は息のみ、縮こまった。三人の男たちは次々と檻の中に入ってくる。紅と杏子の体が小刻みに震え、互いに振動を伝える。自分たちが檻から出されることはあっても、男たちが檻に入ってくることはなかった。自分たちの領域に侵入されたことで、恐怖が増した。紅は恐怖で頭の中が真っ白になる。

「やだ……」

杏子は声も上げられない様子で、男たちを凝視している。目の前に銃口が見えた。

「離れろ」

紅は目をつむって頭を振り、杏子は紅の肩をつかむ手に力をこめる。紅の側頭部に銃口が当てられる。紅はのどを鳴らした。

銃を構えた男が杏子に言った。

「その手を放せ。でないと、この女を撃つ」

杏子は手を放した。その瞬間、紅の目から涙があふれ出した。紅は銃をつきつけられたまま、隙間から引きずり出された。素手の男が杏子ののどに腕を当て、肩を押さえつける。杏子は小さな悲鳴を上げてもがいた。銃を構えた男が言った。

「暴れるな。逆らえば、この女を撃つ」

杏子はもがくのをやめ、真っ青な顔で紅を見た。バッグを持った男が、中から注射器を取り出して、針の先から少し液をたらした。紅の頬を涙が伝う。

「……ねえ、許して。もう逃げようとしなから……」

杏子が頭を振った。

「何するの……やめて……」

男は杏子の袖をまくると、脱脂綿で消毒をして、注射針を射した。杏子を押さえつけていた男はすぐに離れた。杏子は大きく見開いた目で紅を見ていたが、そのまぶたは次第に重くなっていくように見えた。杏子が殺されたのか、眠らされたのかはわからなかったし、それを確かめる術もなかった。

男たちの視線が紅に集中した。紅は次は自分の番なのだと悟り、恐怖で頭がしびれてきた。

誘拐コンサルタントは、N L Fの裏シナリオを考える～十一月三十日（日）午後三時

青山がオフィスに入ってくると、江崎は前置きなく尋ねた。

「保険金はどうなるんだ？」

青山は一瞬驚いたように口をつぐんだが、すぐに言う。

「出ませんよ。二億はあくまでも晴信氏にかかっている保険金です。晴信氏が解放されたら、会社は保険金を払う義務はない。せめてあと一日解放が遅かったら、送金手続きをすませていたのに……くそ！」

青山はコートを脱ぎ、シャツとパンツにノーネクタイという休日らしい姿で椅子にどさりと座りこんだ。

「晴信氏の解放を会社に知られないようにはできないでしょうか。柏木さんから警察に事情を説明して、発表を待ってもら。僕も知らなかったことにして、明日の朝一番で手続きをすませます。あとからばれるでしょうが、それはそのときのことです」

江崎が青山の向かいに腰を下ろす。

「もう遅い。さっきテレビのテロップで流れた」

江崎は応接室のつけっぱなしのテレビを指差した。青山はテレビを見て、また「くそ！」と吐き捨てた。江崎はすでに動揺の時間をやり過ごし、冷静さをとり戻していた。青山をまっすぐ見た。

「俺たちはN L Fにはめられたんだ。表向きの交渉とは別に、N L Fが用意しているシナリオがあった。俺たちはそうとは知らずに、通常の誘拐事件と同じ対応をした。今できるのは、まず裏シナリオを突き止めることだ。これ以上後手後手に回るつもりはない」

「わかりました。まずは状況把握ですね」

青山はうなずく。いつもならすぐにi P a dでデータ検索にとりかかるところなのに、今日は起動すらさせなかった。

江崎が言った。

「今までの流れを振り返ると、交渉そのものはオーソドックスなものだったと見ていいだろう。ミスター誘拐という変化球が人質に紛れこんでいたわりには、全般にオーソドックスすぎたとも言える」

「つまり交渉そのものが真の目的から目をそらせるためのフェイクだったわけですね」

「ということは、真の目的を探るには、オーソドックスな交渉の流れからはずれているポイントを検討すればいい。それは何だ？」

「晴信氏の解放」

青山が一言で言い、江崎もうなずいた。

「メッセージという不可解な要素もあったが、これはN L Fが出したカードかどうかはわからないので、今は除外する。そうすると、交渉の流れの中で、晴信氏の解放だけが大きくはずれ

ている。これを受けて、俺たちは読み違っていたことに気づいたわけだしな。さて、この解放の何がおかしい？」

「一つ目、なぜ晴信氏なのか。N L F が苦しめたいのは晴信氏なのだから、解放は最後になってもいいはずです。さらに晴信氏は四人の人質の中で唯一の金づるなのに、彼を帰しては金をとれなくなります。二つ目、なぜ身代金の支払い前なのか。もし晴信氏を帰すつもりだったとしても、身代金を受けとってからでもいいはずです。三つ目、なぜ身禁法スタートの前なのか。身禁法がスタートしてから晴信氏が解放されれば、家族は警察の捜査対象にもなります。論客である晴信氏にはそのほうが大きなダメージです」

江崎はうなった。

「まったく読めないな。どう考えても辻褄が合わない。俺たちが把握していない状況があるのかな」

「と言うと？」

「例えば晴信氏がN L F と解放について直接取引をした」

青山は頭を振った。

「僕は直接取引はなかったと思います。晴信氏自身がN L F に金を支払うと約束したとしても、それは誘拐保険から出すつもりだったはずで、会社にその連絡はなかった。それに直接取引でもこの時点での解放はありえません」

「たしかにな。直接取引で支払い前解放の場合は、人質が解放されないと身代金を支払えない場合に限られる。本人名義の財産を処分するしか金を作る方法がないとかな。いずれにしろ、直接取引をしたかどうかは晴信氏に確認すればすむことだ。ひとまずこの線ははずそう。他に俺たちの知らないことが起きている可能性は？ 辻さんの孫の件がN L F にばれているというのはどうだ？」

「N L F が小田潤君のことを知ったとしても、身代金を受けとらずに、晴信氏を帰した理由にはなりませんよ」

「そうだな。それじゃやはり俺たちが把握していない状況になったのではなく、最初からN L F に別のシナリオがあったということだ。そうだ.....そのほうがしっくり来る。俺はずっと、何かおかしいと感じていたんだ。N L F には何か目的があった。そしてそれは金ではない」

「金が第一目的なら、身代金を受けとらないうちに、晴信氏を解放するのは妙ですからね」

「それじゃ第一目的は何だ？ 晴信氏の面子をつぶすのが目的なら、身禁法スタート以降のほうが効果的なはずだぞ」

「やはり行きどまりですね」

江崎と青山は揃って沈黙した。江崎は腕を組んで天井を仰ぎ、青山は目を閉じる。

やがて青山が言った。

「N L F は急いでいるって、江崎さんが何度も言ったでしょう。あれは正解でしたね」

江崎は頭を正面に戻した。何か思考にふれるものがあった。

「それだ」

「何ですか」

「オーソドックスな交渉から外れているもう一つのポイント」

「どういうことです？」

江崎は目を閉じて、健康サンダルをぶらつかせ、独り言を呟き始める。

「.....俺はN L Fだ.....俺たちは急いでいる。時間がないからだ。なぜ時間がなかった？ 身禁法スタート前に晴信氏を解放したかったからだ.....金は.....できれば金もとりたい。活動資金はどれだけあっても邪魔にならない。だから本来の計画では、身代金を受けとって、身禁法スタート前に晴信氏を解放するはずだった.....だから最後に紅さんの命を盾にして、大きくゆすった.....」

「つまりこういうことですか。やはりもう一つの目的があって、そちらが第一目的だから、優先させるために解放した。金は第二目的」

江崎は目を開き、青山を見た。

「そうだと思う。金にも執着があるとすれば、いよいよまずくなったわけだ。N L Fは身代金が誘拐保険から支払われるのではなく、別荘を売ったり、銀行からの借入金で支払われると思っている。晴信氏を解放した時点で、身代金がペアになるとは思っていないはずだ。これはN L Fにとっても誤算だから、怒らせるネタになる」

「金か。やはり金は必要なんだ。どうしたらひと晩で億単位の金を作れるんです？」

青山は深いため息をつき、江崎は頭を振る。

「いや、最悪とも限らないか。もし金が第二目的なら、第一目的を突き止めて、それを満たしてやればいい。金を払わずに三人が解放されるほど甘い相手じゃないが、少なくとも金策のための時間は稼げる」

「それはそうですが、第一目的が何なのか見当もつかなければ、満たしてやることはできませんよ」

江崎は足を組んだ。

「さっき君は身禁法スタート前日に解放するのがおかしいという理由について、何を言った？」

「家族は警察の捜査対象からはずれるという点です。身禁法スタート後のほうが、論客である晴信氏には大きなダメージになるはずなのに.....」

「つまりN L Fは晴信氏と家族を警察に逮捕させたくなかったということじゃないか」

青山は面食らったように一瞬沈黙した。それから言った。

「何のために？」

「さあな。晴信氏がN L Fに寝返り、今後はN L Fに協力すると直接取引したとか」

「馬鹿馬鹿しい。本気で言ってるんですか」

「半分は本気だよ。逮捕させたくなかったというのは当たっていると思う。N L Fに寝返ったという理由は思いつきだが」

「その理由がいちばん肝心なところじゃないですか。そこがわからなければ、身代金の支払いを引き延ばしようがないでしょう」

「わかってるよ、わかってる.....おそらくそれはN L Fにとってはとても都合のいいことなんだ」

「つまり家族側にとってはとても都合の悪いことですね」

江崎は大きく息を吐いた。

「鍵は晴信氏だ。彼と話をしないことには、NLFの目的は突き止められない。時間が欲しい」

「もう一度Aに人質の生存証拠を要求して、引っ張ってみますか」

「それはまずい。このタイミングで生存証拠の要求をすれば、こちらにトラブルがあったと知らせるようなものだ」

電話が鳴った。スピーカーで出ると、美登里だった。

「江崎です。青山君も来ています。そちらの状況はどうですか」

「警察からはいろいろ訊かれたけど、身代金を払っていないって言ったわ。それは事実ですものね。これからわたしと香はG県に発つところよ。ただ、主人にはすぐには会えないらしいんだけど……」

「解放された人質は、まずは隔離され、健康診断を受けるんですよ。一般的に言って、解放直後の人質とその家族は心身ともにショックを受けています。そこで健康状態を確認し、身なりを整え、面会可能と判断されてから会えるわけです」

「そう。じゃあこれは通常の手順なのね」

美登里に説明する必要はないが、解放された人質と家族がすぐに面会できない理由がもう一つある。それはバイオテロの可能性がないかどうかを検査するためだ。相手はゲリラであり、ここ最近は社会の支持を失い、追いつめられている。人質に感染力の高い病原菌を植えつけてから解放し、社会を混乱に陥れるという可能性はゼロとは言えない。

美登里が言った。

「ねえ、青山さんもいるのよね」

「はい。すみませんでした」

「いいわよ、もう。それよりちょっと訊きたいんだけど……主人の保険を他の人質のために使うことはできないの？」

「それは致しかねます」

青山は低い声だが、はっきりと言った。

美登里の声が沈む。

「困ったわね。わたしが明日の午前中までに用意できる現金は二千万円だけよ」

美登里の意外な申し出に江崎と青山は一瞬言葉を失った。

美登里は言った。

「万一に備えて、自宅の金庫に二千万円を入れておいたの。出発する前にそちらに立ち寄って、お金を置いていくわ。いいかしら？」

江崎が言った。

「ありがとうございます」

「ねえ、別荘を抵当に入れてお金を借りるまで、何とか引っ張れない？ 二億は無理でも、ある程度のまとまったお金を作るつもりだから」

「やってみます」

青山が言い、江崎が頼んだ。

「柏木さんにお願いしたいことがあります。どういう経緯でご主人が解放されたのか、できる限り早く情報が欲しいんです」

「わかったわ。わかり次第、電話を入れる」

「それと、ご主人が解放されたと電話してきたときのことを教えてもらえますか」

「時間は十二時半ごろ。ちょうど香とお昼をとるところだったから。電話が鳴って、香が出て、『パパ？』って言ったのよ。それでわたしに代わって、それから……初めに何て言ったかしら。ああ、警察なら録音データがあるのに、あのときは頭が真っ白になってしまって」

「ゆっくりでいいですから、できるだけ正確に思い出してください」

「ええと……G県の佐々木さんの家にて、電話番号を聞いたわ」

「何番ですか」

「待って、これね……xxxxの……」

青山がすぐに書き留めて尋ねる。

「僕が電話をかけたら、ご主人と話せるでしょうか」

「どうかしら。もうここにはいないかもしれない。これから警察に電話するって言っていたから、もう保護されてるんじゃない？」

時計を見ると、まもなく五時になるところだった。たしかに佐々木宅に晴信氏がいる可能性は低い。江崎が言った。

「他に何か重要な点はありませんか」

「解放されたのは自分一人だけど、他の三人は生きているって言ったわ」

「本当ですか」

「たしかよ。間違いない」

「それは貴重な情報です。助かりますよ」

美登里の声が明るくなった。

「よかったわ、少しはいいことを伝えられて。主人も機嫌がよかったの。『よくやってくれた、美登里』って言ったのよ。解放直後とはいえ、あの人がわたしを誉めてくれるなんて、何年ぶりかしら」

江崎と青山は視線を合わせる。江崎が尋ねた。

「他には何かありませんでしたか。何でもいいんです。どんな些細なことでも……」

「特にこれというのはなかったと思うわ。とにかくこれから警察に電話をすると言うので、短い電話だったの」

「わかりました。それじゃ、道中お気をつけて。ご主人が無事に帰ってきて何よりでした」

「ありがとう、あなたたちと他の家族の皆さんのおかげよ。こんなことになったけれど、今後もできる限り協力するわ」

「ありがとうございます」

電話を切った。青山がすぐに自分の携帯を出して、メモした番号に電話する。

「佐々木さんのお宅でしょうか。わたくし青山と申しますが、そちらに柏木晴信さんは……失礼しました、どうも」

話の途中で青山は頭を振り始め、携帯を切った。

「遅かった。パトカーに乗って出て行ったと言っていました」

「これで俺たちは晴信氏に直接アクセスできなくなった。あとは柏木さんの連絡を待つしかない」

青山は携帯をテーブルの上に置いて言った。

「やはり晴信氏本人の直接取引ではありませんでしたね」

「ああ。『よくやってくれた、美登里』という言葉は、夫人が動いたから解放されたと思っているってことだ。これでN L Fは別のシナリオに則って動いている可能性が高くなった」

江崎は健康サンダルを投げるように脱ぎ捨てた。サンダルは壁にぶつかって、床に転がる。青山はi P a dを睨み、せわしく指を動かす。今までの交渉の流れのおさらいか、過去データの分析をしているのだろう。

江崎は目を閉じて、考えた――金だ。二億の金。どうすればいい？

午後五時半になり、ニュースが始まる。江崎はテレビのボリュームを上げ、青山も手を止めた。マイクを手にした現場リポーターが、瓦屋根の民家を背景にトップニュースの報道を始める。

「本日、N L Fに誘拐されていた柏木晴信さんが解放されました。解放直後の柏木さんが駆けこんだというお宅の前から中継でお伝えします。本日午後十二時二十分ごろ、こちらのお宅に、柏木晴信氏が助けを求めて入ってこられたとのことです。現在柏木さんはG県警に保護され、明日にはご家族と対面されるとの情報が入っています。なお、他の三名の人質の解放は未だ行われていないとのことです……」

青山が言った。

「柏木さんがご主人と話せるのは明日か。情報が入ってくるのは明日以降ですね」

江崎はテレビをじっと見ていたが、やがて呟いた。

「なぜ昼なんだろう？」

青山は江崎を見る。江崎は首をかしげた。

「通常人質の解放は日没後から夜明け前の間だ。そのほうが人目につきにくいからだ。それなのになぜ晴信氏は白昼堂々と解放されたのか」

「人目につかせたかった？ マスコミの注目を集めたかった？」

「ゲリラの宣伝効果を狙って？ おそらく違う。だが何か理由があるはずだ」

二人は沈黙して、テレビに目を移す。スタジオのキャスターと解説者が話している。

「誘拐されて十五日後の解放というのは、かなりスピーディでしたね。ただ柏木晴信さん一人の解放なので、事件の全面解決とは言えませんが」

「どういういきさつで柏木さんが解放されたのかが、気になる場所ですね」

江崎が言った。

「ミスター誘拐はこれからマスコミに叩かれるぞ。あれだけゲリラと闘えと豪語しておきながら、内部蜂起せずに、自分だけ解放されたんだからな。柏木さんと娘がどこまで持ちこたえられるかが心配だ」

家族チームは、希望をつなぐ～十一月三十日（日）午後七時

柏木晴信解放のニュースが終わった頃、美登里がオフィスにやってきた。紙袋に入れた帯つきの札束二千万円を江崎に手渡し、江崎が預り証を出した。美登里は「タクシーで香が待っているから、行くわね。皆さんによろしく伝えてちょうだい」と言って、足早に立ち去った。

その後家族たちはぞくぞくとオフィスに到着し、午後七時には全員が揃った。家族たちの表情は一様に複雑だった。一人でも解放者があったことは、もちろん喜ぶべきことだ。しかしなぜ晴信氏なのか、なぜ自分の家族でないのか、保険金は下りるのかという心配が、手放しで喜ぶ気持ちを邪魔している。

特に越川夫妻の落胆はひどかった。すっかり顔色をなくした和江が言った。

「あたしはてっきり初めは紅だと思ってた。だって紅の命を盾に脅されたんだから、いちばんに解放してくれたっていいじゃないの。それなのにどうして柏木さんなの……」

晴信氏が解放されなければよかったという意味ではないだろうが、こういう状況では素直に喜べなくても責められない。正志と大塚は和江のように思ったことをストレートに口にするタイプではないので、ただ黙りこんでいたが、和江と同じ失望があることは顔に表れていた。

身を縮めるようにして座っていた静子が、不安そうに言った。

「あの、これからどうすればいいんでしょう」

「三人を助けます」

江崎は言い切った。自分の発した言葉に励まされたように、改めて肚が決まった――三人を助ける。三人はまだ生きているのだから、助けられる。そのために、あらゆる手を打つ。まずは気持ちがあくじけて、ばらばらになりかけている家族たちをまとめなければならない。

「現在わたしたちが厳しい状況に置かれているのはご承知のことと思います。しかしこの難局を乗り越えなければ、皆さんのご家族をとり返せないことははっきりしています。落ちこんでいても、家族は帰ってきません。何も手を打たないというのは、こちらから交渉を打ち切るのも同然だということです。わかりますね？」

越川夫妻、静子、大塚は暗い表情のまま江崎を見た。

正志が青山に向かって言った。

「だけど、どうしろって言うんだ？ 誘拐保険は下りるのか」

「残念ながら、保険金をお支払いすることはできません。しかし柏木さんはG県に発つ前に二千万円の現金をここに置いていかれました。さらに自分が別荘を担保に金を借りるまで、何とか時間を稼いでほしいとおっしゃっています」

青山が答えると、全員が驚いて青山を見た。

和江が信じられないというように言う。

「だけど、ご主人は帰ってきたのに……」

「柏木さんが自ら申し出てくださったことですから」

江崎が言った。

「柏木さんのご厚意を生かすためにも、皆さんががんばるしかないんですよ。午後八時にはAから電話が来るかもしれない」

全員が時間を意識して、時計に視線を向ける。七時十五分。あと四十五分でAからの電話が来るとすれば、それまでに対応策を考えなければならないのだ。家族たちの表情に緊張感が戻ってきた。

江崎は言った。

「青山君とわたしは、N L Fには何か別のシナリオがあったものと推測しています」

大塚が尋ねる。

「別のシナリオって何ですか」

「現時点では具体的にはわかりません。ただ、金銭目的だけの誘拐と見せかけて、実は別の目的があった、晴信氏の解放はその別の目的を実行するために解放されたと思われるのです。柏木さんがご主人と会って、何か情報を引き出してくれば、何らかの予測は立てられるものと考えています」

和江が言った。

「お金が目的でないなら、身代金を払わなくても紅は帰ってくるってこと？」

「それは難しいでしょう」

正志は尋ねた。

「俺はどう言えばいい？」

江崎は腕を組んで、口を閉ざした。言いにくいことを言わなければならないことにためらった。しかし江崎が口を開く前に、青山が言った。

「僕は……僕の意見を申し上げさせてもらえらるなら、金を払えないということを伝えるべきだと思います」

正志は不快そうに言った。

「どういうことだ？ 身代金を払えないと言えということか。無茶だ」

青山は誠意をこめるように正志を見つめて言った。

「N L Fと交渉する際に、極力嘘はつかないほうがいいのです。彼らは警戒心が強く、嘘を嫌います。嘘をつく相手はいつ裏切って警察に駆けこむかわからないので、そんな相手とは交渉したくないと考えて、一方的にビジネスを打ち切ります。交渉以外で救出できる算段がつかない限り、最後までこの信用を崩してはいけないのです」

「だからって身代金を支払えないなんて、俺の口からは言えないよ。だいたい、払うって言ったのを払わないと言え、今まで嘘をついていたことになるじゃないか」

「N L Fも納得せざるを得ない説明を用意するのです。僕は身禁法を言い訳にするのがベストだと思います」

「どうやって？」

家族たちの視線が青山に集中する。

「晴信氏解放によって、柏木夫人は警察に行き、身動きがとれなくなってしまったと説明してください。身禁法では、身代金を払えなくするための具体的な手段として、銀行口座の凍結や不動産

産の売買禁止が含まれているということは、N L Fも承知しているはずですよ。彼女が変に動いたら、資産をすべて押さえられ、払える金も払えなくなると言うのです。警察のマークがはずれるまで待ってくれと頼み、柏木さんの資産を除いて、現在三家族だけで払える金を送金すると言います」

ここで青山は江崎の確認を求めるようにちらりと見た。江崎はうなずいた。これはマニュアルにはなかった自分のアイディアのはずだ。誘拐保険を扱う会社が、身代金の支払いができなくなったときのことをマニュアル化しているわけがない。

江崎は言った。

「わたしも青山君と同意見です。今は交渉を打ち切らせず、続行させることが肝要です。信用を損なわせず、まだ身代金をとれるチャンスが残っているとわからせるのです。身禁法を盾に時間を引き延ばし、晴信氏から情報を引き出して真の目的を突き止め、まとまった金を作れば、勝算はあります」

静子が目を細めて、声を吐き出した。

「……まだ希望はあるんですね」

「そうですよ、辻さん。最後まで決して諦めないことです。一緒にがんばりましょう」

江崎が言うと、静子は表情を緩め、目に涙をにじませた。青山が言った。

「それで皆さん、明日の午前中までにいくら用意できますか」

大塚が言った。

「お約束した二百万円ならもう普通口座に入れてありますから、すぐに引き出せます。その他にたぶん百万円くらいはあると思います。病気などで急に現金が必要になったときに備えて、用意していた分がありますから」

静子が言った。

「うちも百万円なら」

正志が和江に言った。

「うちはいくら出せるんだ？」

和江は口ごもった。

「二十万円くらい……」

「それしかないのか」

「仕方ないでしょ。今月はパートも休みがちで、収入が減っているんだから。あとは今日これが……」

和江はバッグの中から封筒を出した。

「十二万四千七百八十円入っているの」

「何だ、その金は？　へそくりか？」

「違うわよ。カンパ」

「カンパ？」

正志が驚いたように問い返す。和江は言った。

「勤め先のスーパーのみんなのカンパを、今日受けとったの。何かの足しにしてくれって。お金

を出してくれた人の中には、あたしと直接口をきいたことのない人までいたって聞いた。あたしは今月休みがちで、その分みんなにカバーしてもらっているのに、こんなことまで……」

「せっかくの善意ですから、ありがたく使わせていただきましょう。そしてそのおかげで紅さんを取り返せたのだと報告できるように、わたしたちもがんばりましょう」

和江はしみじみとうなずいた。

江崎は急いでメモを書き、正志に手渡した。

「支払えるのは合計二千四百三十二万四千七百八十円ですね」

「ずいぶんとハンパな金額だな。舌を噛みそうだ」

正志は苦笑した。江崎は言った。

「それじゃ皆さん、明日の午前中に現金を持ってオフィスに来てください。一緒に送金手続きをしたほうがいいでしょう」

それから時計を見た。

「もう八時になります。正志さんはメモに目を通してください」

正志はメモを見て、ぶつぶつと要点を読み上げ始めた。午後八時になり、電話が鳴る。

「越川です」

「我々は約束を守った。明日金を送れ」

「そのことなんですが」

正志は唇を湿らせた。

「柏木さんの口座に入れていたお金が動かせなくなりました」

「何だと？ 金は用意してあるから、月曜日には払えると言ったじゃねえか！」

「用意していたお金は柏木さんが管理していたんです。ですが、今日の解放を受けて、柏木さんはG県警に呼び出されてしまいました。下手に動けば、身禁法が適用されて口座は押さえられてしまいますし、それでその、明日全額支払うのは無理かと……」

「引き延ばしか。柏木が帰ってきたから、女房は金を払う気はないと言ってるんだな」

Aの怒気が増した。正志は急いで言った。

「いいえ、柏木さんの奥さんは、警察とのやりとりがすんだら、ぜひ活動支援金を払いたいと言ってます。それと、辻さん、大塚さん、うちの手持ち分だけでも、明日の午前中に間違いなく払います。お約束します」

「いくらだ」

正志はためらうように間を置いた。

「……二千四百三十二万四千七百八十円です」

Aは怒鳴った。

「はした金じゃねえか！ だいたい七百八十円っていうのは何だ！ ふざけてんのか！」

「待ってください、話を聞いてください！」

正志は電話にすがりつきそうな勢いで言った。

「この金のうち十二万四千七百八十円は、家内の和江のパート先のスーパーで、従業員の皆さんがカンパしてくれたという金です。職場の皆さんが活動支援金の足しにと渡してくれたのだそうです。和江はそのスーパーで時給九百円で惣菜を作って、家計を支えています。わたし

がギャンブル好きならば、家族には苦勞をかけどおしできました。わたしはダメ亭主でダメ親父ですから、紅はわたしに愛想を尽かして出て行きました。ここ三年ほど、まともに口もきいてもらえていません。でもこのまま娘と別れたくないんです。お願いします。紅を帰してください。もし帰してくれたら、わたしはギャンブルとはきっぱり縁を切ります。あなたに約束します。辻さんと大塚さんと一緒に、柏木さんにお金を払ってもらえるよう、必ず説得してみせます。お願いします」

「金を送金しろ」

Aは低い声で言って、電話を切った。正志は力尽きたように口を閉ざす。その目は涙で光っていた。そばに寄り添う和江の目もまた涙で濡れていた。

静子が言った。

「きっと帰ってきますよ。越川さんのお気持ちは、犯人にも伝わったと思いますから」

大塚もうなずいた。

「わたしもそう思います。きっと大丈夫ですよ」

江崎と青山は何も言わなかった。家族の涙にほだされて人質を帰すような誘拐犯はいない。この程度で動じるようではプロの交渉人は務まらないし、それなりの訓練も受けているはずだ。だいいちAは正志同様交渉窓口に立っているにすぎず、背後にはブレインがいるのだ。

江崎は言った。

「金を払う意思があるとわかってもらえれば、成功です。交渉を途切れさせてはいけないのです」

その言葉の重みを知っている静子が深くうなずき、和江の肩を撫でた。

青山が言う。

「今夜の通話時間は一分五十八秒でした。逆探知される二分を過ぎないように電話を切ったとも考えられます」

「そうだな」

江崎がうなずいた。

「今夜のAは警察を警戒していたということです。晴信氏解放を受けて、この交渉チームのことが警察にばれていないとも限らないと考えたのでしょう。それなら電話をしなければ安全なのに、危険を承知で電話してきた。しかし電話の内容に新しいものはなく、金がちゃんと支払われるかどうかの確認だけです」

「金への執着か、金に執着しているように見せかけて、別の目的を気づかれないようにするためか。今の時点ではどちらの可能性もありえますね」

「見せかけのためだけなら、今夜の時点での電話はリスクが高すぎる」

「そうかもしれません。でもリスクを冒してでも、目をそらしたいのかもしれませんが」

大塚が言った。

「それは結局どういうことになるんですか」

江崎が言った。

「状況は依然不明ということです。明日の送金後、N L Fの出方を見るのです」

眼前に並ぶ家族たちの表情が晴れやかになったわけではなかった。しかしオフィスに着いたときよりはいくらか明るさをとり戻していた。

紅と杏子は、金網を削る～十二月一日（月）午後十二時

紅は光を感じて、目を覚ました。まばたきするようにして目を開けるとすぐ、自分がなぜ眠っていたかを思い出す。杏子と自分は見知らぬ男たちに囲まれて注射を打たれたのだ。紅は不安になって、見張りを警戒しながら、ベッドの中で着衣が乱れていないかを確認めた。下着もつけているし、体の異常も感じられない。レイプされたわけでも、暴行されたわけでもなさそうだった。紅は寝返りをうつふりをして、わずかに頭を持ち上げ、見張りのいる金網の向こうを見た。誰もいなかった。紅は隣のベッドで寝ている杏子に小さく声をかける。

「杏子さん、杏子さん」

杏子の返事はなかった。しかし自分と杏子は同じ注射で倒れたのだ。自分が目を覚ましたのなら、杏子だって死んだわけがない。紅は思いきって起き上がった。紅は杏子のそばに行き、肩をゆすった。

「杏子さん、起きて。杏子さん」

すぐに杏子は目を覚ました。自分と同様、薬の効果がもう切れていたらしい。

「……わたしたち、生きてるの？ それとも死んじゃった？」

杏子はうつろな目で紅を見上げて呟いた。

「生きてるよ」

紅はそう言って、杏子の頬を叩いた。

「痛っ！ 何も叩かなくてもいいじゃない！」

「このほうが早く目を覚ますでしょ。寝ぼけている場合じゃないよ、杏子さん。見張りがいないの」

紅が立ち上がって金網に向かうと、杏子も上半身を起こした。目をしばたたいて言う。

「本当だわ」

杏子もベッドから出て、金網のそばに来ると、顔をしかめた。

「静かね。見張りたちは何をしてるのかしら」

紅はドアを見た。

「人が来る気配はないね。というより、人がいないみたい……」

紅と杏子は同時に叫んだ。

「人がいない？」

二人は手を止めて、顔を見合わせる。しばらく無言で耳をすませてみた。人のいない家特有の生気のなさが漂っている。紅が言った。

「やっぱり誰もいないと思う？」

「いないみたいね」

「それどういうこと？」

「わからないわ。いったい何があったの？」

「でもこれってラッキーじゃない？」

杏子は一瞬間を置いてから言った。

「それはわからないわね。見張りがすぐに戻ってきてくれたほうが、このまま消えられるよりはいいかも」

「何で？」

「だって食事とトイレはどうするの？ わたしたちだけでは何もできないのよ」

「そうだった」

そう言われると、急にお腹が空き、トイレにも行きたくなってきた。

「やだ、あたし我慢できないかも！」

「我慢してよ！」

「家の外の助けを呼んだほうが早いんじゃない？」

「助けてくれる人がいればね」

紅は大きく息を吸いこみ、力いっぱい叫んだ。

「助けてーっ！」

声は室内にこもるように反響したが、家の外からは何の反応もない。

「だめみたい。山の中だもんね」

紅がふと顔を上げて言う。

「ねえ、見て。テレビがない」

杏子も顔を上げて、金網の向こうのテーブルの上を見た。

「本当だわ。何でテレビを持って行ったの？」

「さあ。何であたしたちが眠らされたのかな」

「さあ……なぜかしら」

「だってレイプされてないでしょ。殺すわけでもない。ただ閉じこめておくだけなら、別に注射なんか必要ないじゃない」

「そうね……」

杏子は困惑しきっているように、短い返事しか返さなかった。眉をひそめて言う。

「わたしたち、どのくらい眠っていたのかしら」

「それもわかんないよね。時間は時計があるからわかるけど、日付がわからないんだもん」

「どうして誰もいないの？ わたしたちは人質なのに、どうしてわたしたちを置いて逃げたわけ？」

「聡史が何かまずいことでも言ったのかな」

「聡史君が何を言うの？」

「わかんないけど……聡史は無事かなあ」

「辻さんと晴信さんもね」

「誰でもいいから誰かに会いたい。ここにいると、頭がおかしくなっちゃいそう」

紅が激しく頭を振る。

杏子が言った。

「何とかしてこの檻を出しましょう。出れば、きっと何かわかるはず。それに窓ガラスを破って外

に出たっていいんだから」

「そうだよ。どうやって出る？」

二人はうーんとうなった。

杏子が言う。

「何か鍵を壊せそうなものはないかしら。ハンマーはないにしても……」

杏子がバッグを引っくり返し始めた。紅もバッグの中を探り、化粧ポーチを開いた。

「いくら金属でも眉バサミじゃ鍵を壊せないよね」

「眉バサミ？ それで金網を切れない？」

杏子が言い、二人はそれぞれ眉バサミを持って、金網に向かう。しかし刃先が短く、金網にはまったく刃が立たない。紅は泣きそうになった。

「だめだ……」

「化粧ポーチの中に他にも使えそうなものはあるわよ。ねえ、これは？」

杏子がとり出したのはステンレス製の爪ヤスリだった。杏子は金網にヤスリを当て、動かしてみる。少し削れた。

「削れることは削れる。でもこの金網を破るには相当時間がかかるわ」

「完全に削りきらなくても、金網を薄くするか細くできれば、眉バサミで切れるかも」

「じゃあこれでやってみる？」

「うん。爪ヤスリならあたしも持ってるし」

二人はすぐに金網を削り始めた。しばらく無言で二人は作業に集中した。まもなく紅が音を上げる。

「手が痛い！」

杏子が言った。

「ここを出たら、一緒にどこか遊びに行かない？ ショッピングなんかどう？」

「いいね。それとあたし、温かくておいしいものも食べたい。コンビニ弁当以外のもの」

「わたしも。冷えた食事にはうんざりよ。おいしいお酒も飲みたいわ」

杏子は笑った。それから二人はまた黙って金網を削った。静かな室内に金属を削る音だけが響いていた。

やがて紅が言った。

「一本削れた」

「こっちもよ」

「よーし、がんばろう！ おいしいごはんとお酒のために！」

トロイの木馬～十二月一日（月）午後二時

午前中家族たちは現金を持って集まり、江崎、青山とともに銀行に行って、身代金を振り込んだ。和江が「ドラマとちがって、あっけない身代金引渡しねえ」と感想をもらし、その後家族たちは解散した。

江崎と青山はオフィスに戻る前に昼食をとろうということになった。江崎が「ハンバーガーショップは断固断る」と言うと、青山は「ファミレスなら行ってもいいです」と譲歩した。そしてそこでも青山はハンバーガーとコーラを注文し、サプリメントをざらざらと飲んだので、江崎はあきれながら、本日のランチを食べた。青山は、「本日のランチの具体的なメニューを確認せずにオーダーする江崎さんより、僕のほうが優れた選択能力を持っていると思います」と言い、江崎は、「本日のランチの最もすばらしい点は、何を食べるかについて頭を悩ませなくても、適当な食事が出てくる点だろう」と言った。

午後二時にオフィスに戻ると、美登里から電話があった。

「わたしよ。よかったわ、すぐにつながって」

「待ってください、スピーカーにします。青山君もいますので……ご主人には会えましたか。お元気でしたか」

江崎が言うと、美登里は答えた。

「昼過ぎに会えたわ。まだ病院のベッドの中よ。健康状態に異常はなかったみたいだけど、頬はこけているし、態度に落ち着きがなくて……そのへんを歩いていたら挙動不審者として通報されるわね」

変わらない美登里の率直さに江崎は苦笑した。

「とにかくお元気で何よりです。こちらは今朝全員で送金をすませてきました」

「よかったわ。これで交渉がつながったわね。それはそうと、いい情報があるの」

「他の人質に関することですか」

「そうよ」

美登里は声をひそめた。

「主人が内緒で教えてくれたの。警察に口止めされているから、くわしい場所は言えないらしいんだけど、人質たちの監禁場所を特定できる情報をつかんでいるって言うのよ」

「何ですって？」

江崎が大声を上げ、青山は目を見開く。

美登里は話を続けた。

「解放のため車に乗りこんだとき、カーナビがちらっと目に入ったって言うの。もちろん一瞬で、すぐに頭に布袋をかぶせられて後部座席に押しこまれたから、完全に記憶しているわけじゃないけど……とにかく地名を覚えているって言うの」

「それはすごい」

江崎は感嘆の声を上げる。

美登里も明るい声で言った。

「それとね、いちおう車に乗る前に耳栓を渡されたいんだけど、その耳栓が古くて移動中の音が耳に入ってきたって言うのよ。かすかだけど、手がかりになる音を聞いたって」

「音も重要な手がかりになりますよ」

「でしょう。しかもまだあるの。辻さんの糖尿病を悪化させないため、主人たちは夜中の二時になると、裏庭を散歩していたって言うの。そのときに主人は監禁されていた家を外から見たから、行けばわかるって言うのよ」

江崎はまばたきをした。

青山が身を乗り出して言った。

「それだけの情報があれば、監禁場所はほぼ特定できますね」

「ええ。監禁場所の付近は人がいないらしくて、昼間行くと見張りに感づかれるから、暗くなるまで待って、場所の特定をするらしいわ。これできっと全員を助けられる」

美登里ははずんだ声で言った。

「だからこのことを踏まえて、そちらも動いてほしいの。わたしとしては、主人の情報で人質を助け出してもらえると助かるのよ。もちろん人命尊重の純粋な気持ちはある。ただね、うちの主人が帰ってきて、今のところはマスコミも喜んでくれているけど、主人が退院してニュース番組に出るようなことになれば、風向きは変わるはず。身禁法に触れていなくても、なぜ一人だけ、どうやって解放されたのかと追及されるのは必至だわ。主人が叩かれるのは自業自得だからかまわないけど、また香が傷つくのはかわいそうよ。主人の情報で全員が助かれば、うちも助かるの」

「わかりますよ」

青山が言った。江崎の頭の中では警報機が鳴っており、返事をできなかった。青山が江崎を見た。

「どうしたんですか、江崎さん」

「いや……」

頭を整理する前に、不用意なことは言えない。江崎は落ち着いた声で言った。

「とにかく情報をありがとうございました。他に何かありますか」

「今のところはないわ。皆さんによりしく伝えてちょうだい。それじゃ」

電話を切った。すぐに青山が尋ねた。

「どうして黙っているんですか」

「出来すぎだ。これが白昼解放の理由。そう思わないか」

青山があきれたように肩をすくめる。

「思いませんね。解放された人質の情報で、監禁場所が特定されるのはよくある話です」

「しかしその情報のほとんどが決め手に欠け、場所の割り出しまでには時間がかかるものだ。こんなに正確な情報を提供できるケースはそうそうない」

「でも相手はミスター誘拐ですからね。一般の人より誘拐事件にくわしいし、何を見るべきかも心得ていたんじゃないですか」

「そうかもしれないが、何かおかしい」

「具体的な根拠は？」

江崎は少し考えてから言った。

「根拠は君に見つけてもらおう。過去データを調べてほしい。解放された人質のうちで、カーナビを見ることができた者はいたか？ 古い耳栓を渡された者は？ 深夜の散歩を許可された者は？」

「馬鹿げている。過去データはすべての人質に適合する一般論ではありませんよ」

「データ主義の君の口からそんな言葉が出てくるとは思わなかったな。いいから、調べてくれ」

青山はやれやれといった様子で iPad に向かい、データの検索を始める。やがて言った。

「解放時にカーナビを見ることができた者、該当なし。古い耳栓を渡された者、該当なし。深夜の散歩を許可された者、該当なし。満足ですか。しかしこの結果に重要な意味があるとは思えません。さっきも言ったとおり、過去に該当者がいなかったからと言って、晴信氏の情報に信憑性がない根拠にはならないからです」

「晴信氏の情報に信憑性はある。ただ、なぜ晴信氏だけがその情報を得られたのかが引っかかるんだ」

「運がよかったというのはいけませんか。江崎さんのお好きな神のご加護かもしれませんよ」

「または仕組まれた偶然だな。しかし意図的に仕組まれたものを偶然とは呼ばない。それは必然となる」

青山は指を組んだ。

「それで？ 江崎さんの言葉をお借りしますが、プロの誘拐犯は意味のないことはしないのでしょうか？ 監禁場所を特定させて、N L F にどんな得があるって言うんです？」

「わからん。だが、今までの流れとの辻褄は合う」

「どう合うんですか」

「簡単だよ。N L F は晴信氏を逮捕されない状態で解放させたかった。警察への協力に集中してもらうためだ。これで N L F にとって都合のいい情報を流せる」

「晴信氏はトロイの木馬ですか」

「本人も気づいていないだろうが、おそらくそうだろう。解放されたミスター誘拐は名誉回復が目先の目標になる。いい情報をつかんでいれば、警察に協力しやすく、名誉も回復しやすい」

青山は両手を組んだまま握りしめて、顎を支え、考えこんだ。

「つまり、監禁場所を突き止めると、N L F にとって都合のいいことが待っているということですね。例えば、監禁場所に人質たちがいないとか」

「それはあると思う。それなら晴信氏は大恥をかく」

「これが N L F の第一目的でしょうか」

「たぶんな。だが、これが第一目的なら、監禁場所に人質がいない程度のことではないだろう。身代金受けとり前の晴信氏解放というコストに見合わない。もっと衝撃的なことだ」

青山が低い声で言った。

「……最も衝撃的なのは、人質の死ということになりますが」

「監禁場所には人質三人の死体があり、晴信氏が犯人だと示唆する証拠が残されているというのはどうだ？ その線なら完全に辻褄が合うぞ」

「思考ゲームをしている場合じゃないでしょう」

「大義が薄れてきたNLFにとって、誘拐はすでにゲームなのかもしれないぞ。今回、俺たちは完全に踊らされた」

二人は同時に口を閉ざす。やがて青山が言った。

「それでどうしますか。柏木さんから警察に話してもらいますか」

「彼女はだめだ。言っても、ご意見は拝聴しましたで片づけられてしまうだろう。第一、柏木さんは晴信氏の情報で三人を助けたいと考えているんだ。熱意を持って警察に説明するとは思えない」

「それじゃ僕が直接警察に連絡します。G県警の前原さんとは面識がありますし、江崎さんは表に出ないほういいでしょう。水面下での交渉がばれてしまいますから」

「頼む。しかし話すにしても、根拠はすべて水面下の交渉時からのものだ。肝心なことを言わず、どこまで信用してもらえるか」

「それはそうですが、今悲観的になるのはまったくの無意味です。話すだけでも話してみましよう」

青山はそう言って、携帯を出して、前原に電話をかけた。青山は個人的な推測として、晴信氏の情報がひょっとすると監禁中の人質を危険にさらすかもしれないことを説明した。電話は短時間で終わり、青山は頭を振った。

「だめです。貴重なご意見を拝聴しましたと笑われましたよ。なぜそんなことを思いついたのかと訊かれても、根拠を提出することはできないんですから、当然です」

「悲観的にならざるを得ないな。だが」

江崎は腕組みをして言った。

「辻さんに頼んで、緊急招集をかけよう」

人質たちは、爆弾を見つける～十二月一日（月）午後五時

夕暮れになり、完全に手元が見えなくなる前に、最後の一本の金網が削れた。二人は人が頭から通れるくらいの大きさに、左右と底辺に当たる金網を削り切った。指の皮はむけて、腕の筋肉は悲鳴を上げており、紅と杏子は金網の前で呆然と力尽きていた。

「あとは金網の上辺部分を押し曲げれば出られるよ、杏子さん」

「そうね……じゃあ一気に。せーの」

二人は同時に金網をつかんで押し、ついに脱出口を開けた。杏子が弱々しい声で言った。

「……ついにやったのね、わたしたち……でも逃亡する体力があるかしら……」

「さっさと出たい、こんなところ！」

紅は頭を穴に突っこみ、先にくぐり抜ける。尻が引っかかり、うしろから杏子が押した。紅が手を貸し、杏子も続いて檻の外に出た。

紅が言う。

「あたし、トイレ！」

「紅ちゃん、元気ね……」

「あたしは檻の中から出られれば、何でもできるって気がしてたの！ これできっと聡史と辻さんを助けて、あたしたちも脱出できるよ！」

「その中に晴信さんも入れてあげてね……」

ドアのそばにあるスイッチをつけると、室内が明るくなり、二人はさらにほっとした。ドアには鍵がかかっておらず、そっとドアを開けて、暗い無人の廊下に出る。階段の上がり口にあった電灯をつけて、ここも明るくする。トイレには紅、杏子の順で入った。用がすむと、杏子が出た。

「本当に見張りはいないんだわ」

紅はますますはりきった。

「まずは聡史と辻さんを探そう。いちばん奥のドアが撮影用の独房だったから、その隣じゃない？」

紅はドアノブをつかんで開け、電灯をつけると、自分たちがいた部屋と同様に、部屋の半分が金網で仕切られた檻が照らされる。そして檻の中には疲れきった様子の聡史と辻がベッドに横たわっていた。

紅は駆け寄って叫んだ。

「聡史、辻さん！」

「紅！ 杏子さんも！」

「どうやってここに来られたんだね？」

聡史と辻は驚いて自分たちを見ると、起き上がってふらふらと近づいてくる。金網越しに四人は対面した。

「あたしたち、爪ヤスリで金網を削ったの」

紅が金網を握りしめ、笑顔を浮かべて言った。辻は金網に近寄って涙ぐんだ。

「そうかそうか、心配してたんだよ……二人とも無事でよかった……」

杏子が尋ねた。

「晴信さんは？」

「わからないんだよ。見張りに連れて行かれたきりで。そのあと聡史君がここに入れられたんだ」

聡史が言う。

「僕たちは注射を打たれて眠らされた。さっき目が覚めたところ」

「あたしたちも注射を打たれたの。目が覚めたのはもっと早かったけど」

紅が言い、杏子もうなずく。

「どうやらこの家には誰もいないみたいなの。あなたたちも出してあげられるわ。聡史君、鍵はどこ？」

「一階のリビングにあるチェストのいちばん上の引き出しの中。階段を下りるとすぐのところだよ。いくつか鍵束があるから、全部持ってきてもらえれば」

「わかった」

紅と杏子はすぐに部屋を出て、階段の壁に手をつき、沿うように下りた。人の気配はないとわかっていても、階段を下りるのは緊張し、知らずに息を止めている。一階は真っ暗だったが、間取りは頭に入っていた。聡史の指示したチェストはすぐに見つかり、鍵束をつかむと、二人はお化けに遭遇することを恐れるように、急いで二階に駆け戻った。

聡史に鍵束を見せると、聡史は檻の鍵をすぐに見分け、二人は外に出た。

辻は拝むように手を合わせて言った。

「越川さんと大塚さんは命の恩人だよ」

「またあ、大げさだよ」

紅は手を振って謙遜したが、悪い気はしなかった。

杏子が聡史に尋ねる。

「どういうことなの、これ？ 見張りはどこへ行ったの？」

「わからない。僕が見張りをしていたときに、こんな命令があったことはないよ」

「あの憎たらしいヘフェがいなければ万々歳だよ。早く逃げよう」

紅が言うと、三人はドアに向かった。廊下に出ると、聡史と辻も交代でトイレに入る。待っている間、紅と杏子は柏木を探して独房を調べたが、鉄格子の向こうには誰もいなかった。

杏子が言った。

「注射を打たれる前に車のエンジン音があったでしょ。もしかすると、あれで晴信さんは解放されたのかもしれないわね」

紅は大きくうなずいた。

「きっとそうだよ。だって、ミスター誘拐は誘拐保険を掛けているんだもん。家族が身代金を払ったんだよ。あたし、思うんだけど、ゲリラはミスター誘拐が狙いだったんだから、あたしたちはもうどうでもいいんじゃない？ それでほっとかれたのかもよ。逃げたければ、勝手に逃げ

ればって感じで」

「そうかもしれないね。それじゃ、わたしたちも脱出するとしようかね」

辻が明るく言い、四人は心配の種を一つ減らして、階段を下りた。

紅が先頭の聡史に言った。

「聡史、電気をつけてよ」

聡史が電灯のスイッチを押すと、見慣れたリビングが静かに浮かび上がる。テーブルを囲むようにソファがあり、カーテンは下りている。オリエンテーションを見たときのテレビは消えていたが、四人は気に留めなかった。それぞれ好きなことを言いながら、すたすたと廊下を抜け、突き当たりの玄関のドアに向かう。

「んじゃみんなでなかよく逃げよー」

「のどが渴いたわ。水分不足の肌荒れが心配」

「水を飲んでから脱出してもいいんじゃないかね。わたしは糖尿病だし」

「糖尿病って水分も摂らなくちゃいけないんですか」

しかしドアを見て、四人は一斉に立ち止まった。

紅がそれを指さして言う。

「何かついてるよ、聡史」

ドアからはワイヤーが伸びており、その先には白く大きな石鹼状のものがつながって、表面にC4と書かれている。

聡史は小声で言った。

「.....あれ、C4爆弾じゃないか.....」

「ええっ！」

三人は大声を上げる。

紅は聡史の腕をつかんだ。

「何とかしてよ、聡史！」

「無理だよ！ 何度も言うけど、僕はバイトの見張り！ 爆弾なんて見たこともない！」

「今爆弾だって見分けたじゃない！」

「だって、C4爆弾って名前くらいは聞いたことがあるから！」

「それだけ？ たったそれだけで爆弾って言ったの？ ちょっと無責任じゃない？」

杏子が割って入った。

「別の出口を探さない？」

四人はこみ上げる不安に押し流されるようにしてリビングに戻り、カーテンをそっと開いて窓を見た。同様に爆弾らしきものが置かれている。四人は真っ青になった。

聡史が緊張した声で言った。

「手分けして出られそうなところを探そう。紅と僕は一階、杏子さんと辻さんは二階を頼んでもいいかな」

「よし」

辻がかすれた声で言い、杏子と連れ立って階段を上っていく。紅と聡史はリビング近くの和室

、キッチン、浴室、洗面室、トイレまで確認した。足が進むにつれて、冷や汗がにじみ出てくる。すべての窓に爆弾状のものが設置されていた。リビングに戻ると、すでに辻と杏子が戻っており、ソファのそばに立っていた。

「二階も同じだ。どの窓にも爆弾らしきものがあったよ」

「一階もです」

聡史が言った。

杏子が弱々しい声で言う。

「助けを呼べば、どうにかなるわよ。聡史君、電話は？」

「テーブルの近くに、親機があったはず」

聡史はすぐにテーブルに向かった。しかし電話にもワイヤーと爆弾がついている。

「だめだ。電話も使えない」

のどの渇きがひどくなり、舌が口内にくっつきそうになりながら、紅は言った。

「じゃあ、あたしたち逃げられないの？」

家族チームの逮捕か、人質の見殺しか～十二月一日（月）午後六時

家族たち全員が江崎のオフィスに集まった。江崎は、晴信氏が監禁場所を特定できる情報を持っていること、しかしそれがN L Fにつかまされたものであれば、人質が危険にさらされる可能性があること、いちおう前原刑事に電話を入れたが、根拠がないため相手にされなかったことを説明した。

大塚が遠慮がちに言う。

「でも晴信氏の持っている情報がN L F側が流したものだというのは、お二人の推測でしょう。もう少し様子を見るというのは……」

大塚が腕時計に目をやった。

「今六時十分。あと二時間弱もすれば、N L Fから電話がかかってくるんでしょう。その電話を受けてから判断しても遅くないのでは……」

青山が言う。

「遅いかもしれませんが。もしこちらの推論どおりなら、N L Fはきっちりと計画を立ててやっていることになります。その場合、僕の考えですが……」

青山はためらうように言葉を切ってから続ける。

「今夜、N L Fからの電話はかかってこないと思います」

「どうして？」

正志が驚いて尋ねる。青山は視線をそらして答えなかった。

正志がもう一度訊いた。

「本当のことを言ってくれ。どうして電話がかかってこないと思うんだ？」

「……電話をかける必要がないからですよ」

正志と和江がきょとんとしていると、大塚が言った。

「それはつまり、すべてが終わってしまうということですか」

「そうです」

「杏子たちが死ぬってことですか」

江崎は答えた。

「どういう形で終わるのかはわかりません」

場は水を打ったように静まった。

和江が江崎と青山にすがりつくように言った。

「何とかしてよ！ そうだわ、その監禁場所を聞いて、みんなで助けに行きましょうよ！」

和江のおよそ現実的でない提案に、江崎は頭を振るしかなかった。

「わたしたちが助けに行くのは無理です」

「じゃあ紅を見殺しにするの！ あんた、何のためのコンサルタントなのよ！」

和江が髪を振り乱して喚き、両脇に座っている正志と静子が和江の腕を引いた。

江崎は言った。

「人質の武力救出はわたしたちの手に負えるものではない。警察を動かすしかないんです。そのためにはこの推論が単なるあてずっぽうではないと理解してもらう必要があります。それには、今まで水面下で交渉していたことを前原刑事に話すしかない」

「でも、それは……」

青山の顔色が変わった。

「待ってください、江崎さん。わたしたちはすでに身代金を払ってしまっています。それも身禁法が施行された日の朝にです。警察に交渉のことを話せば、身代金の支払いを嗅ぎつけられます。そうすれば、ここにいる全員が逮捕されることになるんですよ」

家族たちの顔がこわばった。

青山は江崎を見た。

「このために緊急招集をかけたんですか」

「そうだ。警察にすべてを話して人質を助けるかわりにわたしたちが逮捕されるか、黙ってなりゆきを見守るか。酷ですが、選んでもらうしかありません。そしてその選択は早ければ早いほうがいい」

江崎は家族全員の顔を見渡した。しかし口を開く者はなかった。

紅は、和江に電話する～十二月一日（月）午後六時

とりあえず水を飲もうということになり、四人はかたまってキッチンに行った。冷蔵庫の中身は空だったが、水道水は出たので、それぞれがグラスを水で満たすことができた。グラスを手にすると、また離れることなくリビングに戻り、ソファに倒れこむように腰を下ろす。四人は無言で水を飲んだ。のどの渇きが満たされたためか、紅は急に空腹を思い出した。

「お腹がすいた」

言ってみると、今度は金網を削ったときにできた指のまめが痛くなった。

「手が痛い。あんなに苦労して、金網を破ったのに、結局逃げられないなんて」

「まだ諦めちゃいかんよ。そうだ、このコップの水を爆弾にかけてみようかね。火薬がしけてしまえば、爆発しないだろう。どれ、どっこいしょ」

辻がグラスを手にしたまま腰を浮かせ、聡史があわてた。

「待ってください。爆弾のことを何も知らないのに、水なんかかけて、もし何か反応したら……」

「そうかね。まずいかね」

辻は腰を下ろした。杏子は疲れきった様子で続けた。

「テレビもラジオもパソコンもないから、情報が入らないわね。まるで絶海の孤島に閉じこめられたような気分だわ。絶海の孤島でも、爆弾を仕掛けられてないでしょうから、ここよりはましでしょうけど」

場がしんとした。

杏子は窓の爆弾に目をやった。

「この爆弾、いつ爆発するのかしら」

場がさらに緊張した。

聡史が震え声で言う。

「こ、怖いことをあっさり言うなあ……」

「だってそうでしょ。タイマーはついていないし、起動はしてないみたいだけど……ああでも、リモコン操作で爆破されたら、この瞬間にも吹き飛んじゃうわよね」

「……ぼ、僕を怖がらせても、い、いいことないですよ……」

聡史の歯がかちかちと鳴った。

辻も顔を引きつらせる。

「恐怖で入れ歯がはずれそうだよ……」

紅がぽろぽろと涙をこぼした。

「……オ、オカンに会いたい……」

「越川さん、泣いたらいかんよ」

辻がやさしく声をかけてきた。

しかし紅は涙を止められなかった。

「オカンに会いたい。ついでにオトンにも……オトンはどうでもいいと思ってたけど、最期になるなら、やっぱり会っておきたい気がする……小さいときラッキーをくれたし、そのくらいしかいいことしてくれなかったけど……ねえ何とかして、聡史」

「無理だよ」

聡史は気軽に難題をぶつけてくる紅にうんざりした。

紅はしゃくり上げて、聡史をねめつける。

「どうしてすぐ無理って言うのよ」

「どう考えても無理じゃないか」

「何とかできないの？ 聡史の携帯とかないの？」

「ないよ。見張りに来るときには携帯を自宅に置いてくる決まりになっているんだ」

聡史はそう言ってから、はっとして、三人を見た。

「皆さん、携帯はどうしたんですか」

杏子と辻が言った。

「拉致されたときにとり上げられたわ」

「バスの中で回収されたよ」

「それ、この家にあるかもしれない」

聡史が言うと、三人は目を丸くして聡史を見た。

聡史は続けた。

「人質を解放するときには、タクシー代程度の現金を渡すか、本人の携帯を返すんだって聞いたことがある。携帯を返すってことは、人質の監禁場所に一緒に保管されているんじゃないかな」

全員が一斉にグラスをテーブルに置き、叫んだ。

「探そう！」

聡史が額に手を当てて考えこむ。

「あるとしたら一階だと思う。そういうのを管理するのはヘフェだし、ヘフェはたいてい一階に詰めていたから……そうだ、きっとあれだ！」

杏子が尋ねる。

「あれって何？」

「手提げ金庫。ヘフェは移動するとき、必ずそれを持っていたんだ。現金なんかが入っているんだと思っていたんだけど、人質の携帯は貴重品に入るだろうから」

「よし、手提げ金庫を探せばいいんだね」

辻が膝を叩き、四人は立ち上がる。辻はヘフェの私室だった和室、杏子はキッチンへと散った。紅は聡史と一緒にリビングに残り、袖で涙を拭き、テレビ台まわりを探った。背面は埃だらけで、紅は手についた埃を払う。二人はチェストの引き出しからカーテンの陰、ライトの笠の上まで、室内をくまなく探したが、何も見つからなかった。やがて辻と杏子が戻ってきた。

「ヘフェの部屋は何もなかった。押入れに布団が残っていただけで、それ以外は何も。トイレや風呂場も見たが、なかったよ」

「キッチンと玄関にもなしよ。念のためガスコンロのグリルの中まで見たけど」

紅が言った。

「リビングにもないよ。二階かなあ」

「二階ってことはないと思う。だって二階はバイトの僕らがいるきりで、ヘフェはほとんど上がってこなかったんだから。だけどそんなに難しい場所に隠していたはずはないんだよね。手品みたいにしたりしまったりしていたんだから。それとも貴重品だから、持って出て行ったのかな……」

杏子が眉を寄せて少し考えた。

「ヘフェはいつもどこにいたの？」

「その一人掛けのソファに座っていた。そこはヘフェの指定席で、僕らは座ったらいけないんだ」

「じゃあそのソファが怪しいわ」

杏子が言って、ヘフェ用のソファに座った。

「ここから見える場所にあると思うの。そうすればいつでも見張れるわけだから……ううん、ちょっと待って」

杏子は立ち上がって、ソファのウレタンフォームを持ち上げる。その下はくり抜かれ、手提げ金庫が納まっていた。四人は大声で言った。

「あった！」

杏子が手提げ金庫を引っ張り出して、テーブルに置く。聡史が手を伸ばした。

「鍵がかかっていないといいんだけど……あ、開いた」

黒く重厚な金属の蓋を開けると、中から出てきたのは、ピンクのラインストーンがキラキラと輝く、紅の携帯電話だった。紅はとびついて叫んだ。

「あたしのケータイ！ 恋愛運アップのはずのラッキーデコ電！」

「命あつての恋愛よ、紅ちゃん！ 早く警察に電話して！」

「待ってくれ！」

突然聡史が叫んだ。三人はびっくりして聡史を見る。

「どうしたの、聡史？」

「冷静に考えると、警察は困るかも……」

「何で？」

「だって僕はバイトとはいえゲリラだから。警察が来たら、逮捕される」

聡史はおじけづいていた。

杏子がやさしく言う。

「そんな心配はしなくてもいいわ。わたしたちが聡史君も人質仲間だって言ってあげる」

「でも、僕の家に脅迫電話はかかっていないし、だいたい拉致状況を警察に訊かれたら」

杏子は聖母マリアのように慈悲深い微笑を浮かべた。

「大丈夫。でっち上げましょう」

辻が割って入る。

「わたしは聡史君が警察に逮捕されるようなことがあっては困るなあ。この青年には大きな借り

があるんだよ」

突然杏子の眉がきっとつり上がった。

「だからでっち上げるって言ってるでしょ！ 辻さんまで何を言い出すの！ 命あつての逮捕なのよ！」

「それはそうだが……いや、今のは意味がよくわからない……」

「二人ともあの爆弾が見えてる？ このままじっとしていたら、わたしたちは確実に死ぬのよ！

紅ちゃん、早く警察に電話して！」

「待って、紅！ 僕の決心がつくまで！」

「そうだよ、越川さん、ボーイフレンドの安全を先に考えて……」

「一人の安全より、全員の危険を考えて！ 寝言は寝てから言ってちょうだい！」

杏子は厳しい口調で怒鳴り、紅はパニックを起こし、泣きながら喚いた。

「みんなうるさい！ あたしはオカンに電話する！」

紅は愛用のデコ電を握りしめ、しゃくり上げながら電話する。コール音の中待っていると、杏子がいらついたように言った。

「手短にね。バッテリー切れになったら、しゃれにならないわよ」

「……紅のオカンから警察に通報されるかなあ……」

「されるだろうねえ。覚悟しておいたほうがいい、聡史君。でもわたしは何があっても聡史君の味方になるからね」

聡史が頭を抱え、辻がぽんぽんと肩を叩く。

電話がつながった。

「オカン？ あたし！」

「紅？ 紅なの？」

懐かしい母の大声が聞こえた。

「紅、無事なの？ 今どこなの？ 逃げられたの？」

「元気だけど、捕まったまま。場所はわからないの。たぶんどっかの山荘」

言いながら、また涙があふれてきた。

「あたし、もうすぐ死ぬの。爆弾で殺されるの」

「何、爆弾？ 爆弾って何なの？」

「何が何だかわかんない。ごめんね、オカン、あたし悪い娘だった。あたしとオトンがいつも喧嘩して、オカンはその間に立たされて。家を出たきり帰らなかったし。オカンの作るハンバーグとカレーをもう一度食べたかった。こんな形でお別れするなんて、思わなかった。親不幸な娘でごめんね……」

母は早口で言った。

「わかったよ、紅。その話はあとで聞くからね。今、江崎さんに代わるから」

「え？ 江崎さんって誰？」

回答がないまま、聞いたこともない男の声が聞こえてきた。

「お電話代わりました。江崎といいます」

「あの、紅です。すみません、あたしこっちでいろいろあつて、ちょっと度忘れしていて……ど

ちらの江崎さんでしたっけ？」

「お会いしたことはありません。わたしは誘拐コンサルタントで、紅さんを助けるためにあなたのご両親に雇われたんです」

「そうなんだ、よかった。あたし、記憶喪失になったのかと思った」

紅はほっとして言った。江崎の隣で話しているらしい母の声が聞こえた。

「紅、この人が助けてくれるからね！ 質問にちゃんと答えなさいよ！」

紅の隣で杏子が囁いた。

「いったいどうなってるの？」

紅が首をかしげた。

「わかんない。誘拐コンサルタントとかいう人が出てきたの」

杏子が叫んだ。

「その人、人質救出のプロよ！ わたしたち、これで助かるわ！」

全員の顔が明るくなる。

紅は涙を拭いて言った。

「あたしたち、助かるんですか」

「助けますよ。そのために一つずつ質問に答えてください。そこには紅さん以外の人は誰がいますか」

「えーと、杏子さんと辻さんと聡史」

「聡史君っていうのは誰ですか」

「えっと、その……新しい人質です」

「N L F 側の人間はいないんですね」

「ええっと、いません」

聡史はバイトだし、置き去りにされたのだから、N L F でないと言ってかまわないだろう。

江崎の質問は進んだ。

「そちらの状況を具体的に教えてください。どんなところにいるんですか。住宅？ 倉庫？ 監禁場所の移動はしました？」

「一軒家です。山荘みたいな。最初に連れてこられてから、ずっとここに閉じこめられているんです。注射で眠らされて、目が覚めたら見張りは誰もいなくて……杏子さんとあたしが爪ヤスリで金網を破って檻から出て、辻さんと聡史を助けたんです。ただ、今は爆弾があって出られないんです」

「爆弾か。なるほど」

江崎はようやく合点がいったというように言ってから尋ねた。

「それはどこに何個仕掛けられていますか」

「数は……いくつか。とにかくドアと窓の全部と電話に仕掛けられています。出口がなくて逃げられないの。ようやくケータイを見つけて、今電話しているんです」

「警察に電話しましたか」

「まだです」

「どうして？」

「それはその、何となく……」

江崎に聡史のことを話すわけにはいかない。紅が答えを探していると、江崎は言った。

「その聡史君っていう人に代わってもらえますか」

紅は尋問から解放されたような気持ちで、聡史に携帯を渡す。聡史は驚きながら受けとり、恐る恐る携帯を耳に当てた。

N L F の裏シナリオを突き止める～十二月一日（月）午後六時三〇分

「あの……北島聡史と申しますが……」

時間がない。家族たちと青山に見守られる中、江崎は単刀直入に話を切り出した。

「爆弾を仕掛けたのはあなたですか」

「は？」

心底驚いているというような声が返ってきた。

「いいえ、僕じゃありません！」

「それじゃあなたがメッセンジャーかな。越川さんと大塚さんに、個人的に電話をかけたか」

「え？ ……いや、その……」

「わたしは警察ではありませんよ。助けるために必要な情報をお伺いしているだけです」

「……そうです。電話しました」

「ではゲリラですか」

「バイトですけど、いちおう見張りをやってました……」

これは嘘ではないだろう。ゲリラで山荘に残っているなら、爆弾を仕掛けた自爆ゲリラということになるが、筋金入りのゲリラにしては回答がまぬけすぎる。

「なぜ北島さんはそこに残っているんですか」

「人質に協力して、ばれて。うちの組織はストックホルミングには厳しいんで……」

「それで紅さんは警察に電話するのを躊躇されたわけですか」

「だいたいそんなところですよ……」

「ちょっと待ってください」

辻褄が合っていることは確認できた。江崎は青山に向かって訊ねる。

「青山君、爆弾処理の指示はできるか」

青山が即答した。

「できるわけないでしょう」

「俺もだ」

江崎は電話に戻った。

「いいですか、冷静に聞いてください。昨日柏木晴信氏が解放されました」

「本当ですか！」

「彼の情報から、その山荘はまもなく特定されることになると思います。そうすればすぐに機動隊が救出に向かうはずですよ」

「じゃあ……」

「ですが、救出のためドアを開けたり、交渉のためその山荘に電話をすれば、爆弾が爆発します。N L F はそれを狙っているんです。これが今あなた方が置かれている状況ですよ」

聡史は沈黙した。

江崎は続けた。

「ですから北島さんにはお気の毒ですが、警察には急いで電話してもらわなければなりません。機動隊の突入を止めるしか助かる方法はない。わかりますね？」

「.....わかりました」

「この電話を切ったら、すぐに警察に電話すること。今は説明できませんが、こちらの事情もありますので、わたしのアドバイスを受けたことは伏せておいてください。とにかく今は人命が第一です。北島さんの解放後の身の振り方については、改めてご相談にのりますよ。友人にいい弁護士がいますので、ご紹介しましょう」

「わかりました。ありがとうございました」

「ちょっと待ってくれ！」

年老いた男の声が聞こえた。

「聡史君、電話を代わってくれないかね.....わたしは辻です。家内はいますか。いるなら、代わってもらえますか」

江崎は和江の携帯を静子に差し出した。静子は緊張した面持ちでそれを受けとった。

「あなた、糖尿病は大丈夫なんですか。無茶ですよ、いつも.....え.....潤は生きている？」

江崎と青山は顔を見合わせた。静子は声をつまらせながら、「わかりました」と言って、その携帯を大塚に回した。

大塚は携帯に向かって涙ぐみながら言った。

「ああ、許すよ、スイートハート杏たん。戻ってきたら君を永遠に放さないさ、ハニー、マイ・ラブ。おお愛してる、ベイベー、チュッ」

大塚は妻との濃厚な通話の最後をキスで締めくくり、全員が呆然と大塚を見た。

最後に正志が携帯を受けとり、耳に当てたあと呟いた。

「.....切れてる」

正志は携帯を和江に返し、落胆して肩を落とした。他の三人は目頭を押さえながら、晴れやかな顔で家族の無事を喜び合っている。静子が席を立ち、いそいそとキッチンに向かった。

青山はそんな家族たちを見ながら、明るい声で江崎に言った。

「ようやく第一目的がわかりましたね。これでヤマは越えたと言えるでしょうか」

「いや、最後まで何が起こるか分からないのが誘拐事件だよ」

江崎はそう言ったが、N L Fの第一目的を突き止めたことで、顔がにやつくのを抑えられなかった。

「だが、これで機動隊を止めれば、N L Fの計画は失敗だ。救出作戦によって人質を殺せば、晴信氏と警察双方に泥を塗れるっていう作戦だったんだろう。まあドラマチックな仕掛けだったが、あいにくだったな。爆弾処理が終わるまで気を緩めることはできないが、こっちは迷っていたおかげで交渉のことを警察に話していなかったし、これ以上の金も払わずにすむし、ひとまずまあみろってところだ。俺は人をはめるのが仕事だが、はめられるのは好きじゃない」

江崎は声を立てて笑った。

「メッセンジャーはやはり裏切り者の見張りだったようだ。警察に救出されれば、即逮捕され、

尋問を受けるだろう」

「爆弾に囲まれていて逃げられないんですから、仕方ありませんよ。彼だって死ぬよりはましでしょう」

「逃げられるよ」

「え？」

青山は口をぽかんと開けた。

江崎はにやりと嗤った。

「状況から考えて、山荘は密室じゃない。どこかに脱出口があるはずだ」

「……つまり江崎さんはメッセンジャーをはめたんですか」

「いやいや、ベストの方法を選択しただけだ。もし脱出口を発見する前に機動隊が突入したら困るだろう」

「でも……それじゃいい弁護士を紹介すると言ったのは？ 嘘じゃないですよね？」

「嘘に決まっているだろう。そんな人権派の友人はいない。ゲリラの弁護を喜んで引き受けるような奴なんて、俺のほうで願ひ下げだ」

江崎は平然として言った。

「何を驚いているんだ？ 下っ端でも捕まっているいろいろ内部事情を喋ってもらえるとデータ収集に役立つだろう、A F 保険さん？」

静子がやってきて、茶托に載せた緑茶を差し出した。

「ありがとうございました、江崎さん、青山さん。どうぞ、お茶です」

「ありがとう」

青山は呆然としていたが、江崎は涼しい顔で礼を述べて茶托ごと受けとった。

「潤君も生きているそうじゃないですか。よかったですね」

「おかげさまで……お二人のおかげです。本当にありがとうございました」

「お礼にはまだ早いですよ。でもご主人が助け出されたら、くわしい話を聞けるでしょう。こちらでできることがあれば、何でもおっしゃってください」

江崎は微笑んでから、熱いお茶を飲んだ。静子が「お願いします」と言って頭を下げ、青山がようやく口を開いた。

「辻さん、僕の口からこんなことを申し上げるのは何ですが、江崎さんのことはあまり信用しないほうがいいと思いますよ」

静子はわけがわからないというように首をかしげた。

江崎も不思議になって、青山を見た。

「俺は誠心誠意家族たちのために働いているのに、どうして君はいつも俺にそういう態度をとるんだ？」

いじけた爆弾処理人～十二月一日（月）午後六時四十五分

家族たちとの会話を交わしたあと、重苦しくとげとげしていた四人の気持ちが少し軽くなった。聡史が機動隊の救出作戦で爆弾が起動することを説明し、自ら警察に電話すると言い出した。

紅は尋ねた。

「聡史は警察が来ても平気なの？」

「僕のせいでみんなを巻き添えにして死なせるわけにはいかない。あの江崎さんっていう人が弁護士を紹介してくれるって言うし」

「よかった。あたしも聡史が罪に問われないように言うからね」

「わたしも」

杏子と辻も口を揃えて請合った。紅が急いで一〇番通報しようと携帯に視線を落とす。

そのとき突然リビングのドアが開いた。驚いてドアに目を向けると、最初に銃口、それから一人のマスクをかぶっていない少年が入ってくる。

「ケータイを置け」

紅は急いで言われたとおりにした。少年は紅のほうへ近寄ってきて携帯を奪い、電源を切ると、それをジープのポケットに押しこんだ。少年はどう見ても高校生くらいなのだが、顔色は悪く、口元はきつく引き締まり、目は暗かった。そして額の中央に大きなほくろがある。

辻が言った。

「潤」

潤と呼ばれた少年は辻に銃口を向けた。

「その名前と呼ぶな」

聡史が言った。

「グレー、どうしてここへ？」

「え？ グレーが潤君だったの？」

紅と杏子が同時に叫ぶ。紅が辻に尋ねた。

「潤君って人質じゃなかったの？」

「いろいろあって、今はNLFのメンバーなんだよ」

辻が答え、潤は二人に銃口を向ける。

「もう喋るな。手を上げて、壁際に行け。壁を向いて、手をつけ」

四人は言われたとおりにぞろぞろと壁際に行き、手をついた。しかし紅はしばらくするとそろそろと首だけ振り向いた。潤はテーブルに銃を置き、爆弾つき電話をさわっている。

紅はぎょっとして叫んだ。

「それにさわっちゃだめ！ 爆弾なんだよ！ 危ないよ！」

潤は紅をちらっと見てから言った。

「平気。センサーがついているタイプじゃないから、さわったくらいじゃ起爆しない」

「そうじゃなくて……え？」

四人ははきょんととして潤を見た。潤はワイヤーを指でより分けながら、確認し、ポケットからナイフをとり出すと、何の迷いもなく、チョンチョンと二本のワイヤーを切った。

聡史が潤に尋ねる。

「それで終わり？」

「これで終わり。それほど難しい配線じゃない。ダミーはたくさん入っているけど、トラップはないから。こんなの爆弾に慣れている人間ならすぐに破れる」

紅は疑わしく思って言った。

「でも、そんなに簡単なの？ 映画なんかではもっと慎重にやっているでしょ。爆弾処理はクライマックスで盛り上がるもんだよ」

潤は軽蔑したように紅を見た。

「ワイヤーを数本切るだけの作業で、あんなに盛り上げられるほうがどうかしていると思う」

それからぼそりとつけ加える。

「本当におバカちゃんなんだ」

辻が滂沱の涙を流して言った。

「潤、おじいちゃんを助けに来てくれたんだね！ おじいちゃんは嬉しいよ！」

潤の表情がわずかにゆるんだ。

「他の爆弾はどうする、おじいちゃん？」

「爆破しないようにしてくれ」

すでに全員が壁に手をつくのをやめ、体ごと潤のほうを向いて、作業を眺めていた。潤は窓ぎわで腰を落とすと、爆弾のワイヤーを調べている。

杏子が尋ねた。

「潤君は爆弾にさわるのって怖いとか思わないの？」

「思わない」

杏子は肘で紅の腕をつついた。

「ねえこの子、ちょっとおかしいわよ。どうして恐怖心がないの」

「何か変な子だよ。辻さん……」

紅が辻を見ると、辻は孫に再会できた感激で、「潤、潤」と言いながらソファに倒れこんで泣き崩れており、話しかけられる状態ではなかった。紅は潤に尋ねた。

「潤君ってどうしてそんなに爆弾のことくわしいの？」

潤はワイヤーをナイフで切りながら言った。

「アイルランド留学したから」

「アイルランド留学？」

「N L Fの手配でI R Aに入って、爆弾の技術研修を受けた」

「I R Aって？」

「アイルランド共和軍。爆弾攻撃が得意なんだ」

「ちょっと待ってよ……じゃあI R Aってテロリスト？」

潤は「うん」と言って、もう一本のワイヤーを切断した。

杏子と紅は口に手を添え、ひそひそ声で言った。

「辻さんはあの子を連れ帰るんでしょうけど、あとからかなり苦労しそうじゃない？」

「あんな子が家にいたらやだよ」

潤が次の爆弾に向かうために立ち上がると、聡史が尋ねた。

「いったい今までどこに隠れていたんだよ、グレー？」

潤は足を止めた。

「隠れてない。外から来た」

「どうやって？ だって、ドアも窓も爆弾でふさがっているだろう？」

「洗濯機の裏の壁がぶち抜いてあるんだ」

「は？」

「逃走ルートだよ。監禁場所には必ず秘密の逃走ルートが用意されてる。万一警察に包囲されたときのために」

「逃走ルートなんて聞いたことないけど」

「ヘフェクラス以上のコマンドにしか知らされないから。だけど、この爆弾を仕掛けた奴のことを考えればわかるだろ」

聡史が首をかしげ、潤もまた首をかしげる。

「だってここが密室なら、爆弾を仕掛けた奴はどこに行ったんだよ？ 仕掛けたあと逃げたなら、どこかに逃走ルートがあるはずだろ？」

返事をする者は誰もいなかった。潤があきれたように四人を見た。

「そのくらい誰も思いつかなかったの？」

杏子が気を取り直すように言った。

「それじゃわたしたちはその洗濯機裏から逃げられるってこと？」

「うん」

「それ、早く言おうよ！」

紅が叫んだ。紅と杏子はリビングのドアに駆け寄ったが、潤は止めなかった。辻は潤のそばを離れる気はないらしく、相変わらず涙を流しながら潤の名前をくり返している。

聡史もその場に立ったまま真顔で言った。

「ちょっと待てよ……グレー、今おまえがここにいることを司令部は知ってるわけ？」

「いや」

潤は手を止めずに答えた。聡史は潤の肩をつかんだ。リビングを出て行こうとしている紅が言った。

「何やってるの、聡史？ 今逃げれば、警察に捕まらないよ。爆弾は潤君に任せて、聡史は逃げたほうがいいよ」

「二人は先に行って」

聡史の声ははっきりしており、紅と杏子は足を止めた。

潤が言った。

「放せよ。手がすべって爆発しても知らないよ」

聡史は無言で潤を引きずり、辻の前に連れて行った。それから潤をソファに座らせ、聡史はその横に座り、潤をまっすぐ見て言った。

「おまえを心配してここに乗りこんできたおじいちゃんの前だぞ。嘘をつくなよ。どうやってここに来たんだ？」

「僕はこの山荘に爆弾を仕掛けられたことをあとから知った。それで内緒で引き返した」

「ばれたらどうなるかわかってるのか」

「わかってる」

「本当にわかってるのか。殺されるんだぞ」

辻が目を見張った。

潤は聡史の手を振り払った。

「おじいちゃんの前で言うことないじゃん」

「爆弾処理したあと、どうするつもりだった？」

「考えてない」

「潤、本当なのか。N L Fをやめる気はないのか」

辻は涙に濡れた目で潤を見た。

潤は視線を落とした。

「やめられない」

辻が言った。

「なあ潤、帰ろう。この間おまえが話してくれたことをおじいちゃんは真剣に考えた。おじいちゃんはおまえと一緒に暮らしたいんだ。おまえは頭のいい、いい子だ。やり直せる」

潤は頭を振る。

「やり直しなんて無理。N L Fは裏切り者を許さない。逃げたって追ってくる」

「だけど、おじいちゃんは……」

「もうどうだっていい。やり直しとかそんなのもいい。頭いいとかいい子だって言われるのもうざい。そういうの疲れた」

潤がぼつりと言い、辻は肩を落とす。

ドアの前で話を聞いていた紅が言った。

「あたし、潤君のこと、頭いいとかいい子だとかって全然思わないけどなあ」

「紅っ！」

聡史が血相を変えて怒鳴った。

紅は聡史にかまわず続けた。

「だって、そうだもん。潤君は聡史をだましてたし、あたしのことをおバカちゃんとか呼ぶし、全然いい子じゃない。それに学校の成績はよかったかもしれないけど、その頭のよさを、自分の人生をハッピーにする方向に全然使ってない。あたしは潤君より頭悪いかもしれないけど、ハッピーになろうとしてるもん」

杏子がぱちぱちと手を叩いた。

「素敵だわ、紅ちゃん！ 悟ったわね！」

「誘拐されてからね」

紅は照れ笑いを浮かべた。

杏子は言った。

「わたしも一つだけ忠告があるわ。切迫しているときに、重大な決断を下さないほうがいいわよ。冷静に判断できないから。やり直すかどうかは、いったん脱出してから考えれば？」

聡史も言った。

「なあグレー、僕もたぶん逮捕されるけど、紅の両親が雇った誘拐コンサルタントが、弁護士を紹介してくれるって言ってくれたんだ。だから一緒にその弁護士に相談に行こう。きっと何とかなるよ」

潤はソファの上で膝を抱えて呟いた。

「誘拐コンサルタントなんて信用できない。敵じゃん」

「敵じゃないよ。親切だった」

「親切ってどうしてわかるんだよ。あいつらはゲリラの邪魔ばかりするんだから、弁護士の紹介なんかしてくれるわけない。その上口がうまいから、投降するように仕向けられたんだ。きっとそうだ。そうに決まってる」

「でも……」

「ノゾーキーはだまされたんだよ。はっきり言ってノゾーキーってだましやすいもん。だいたい弁護士に相談したって、暗殺班が来たらおしまいだろ。やり直しなんて無理」

辻が力なく言った。

「潤、おまえがここに残るって言うなら、おじいちゃんも残るよ」

「おばあちゃんはどうすんの。おじいちゃん行ってよ。残るとかそういうのメーワク」

辻は背中を丸めて「潤……」と呟いた。

紅と杏子が二人だけで会話を交わす。

「やっぱり潤君ってあたしよりバカだ」

「人生に開き直りは必要よね」

「あたし、誘拐されて開き直ったもん。これだけトラブルが続くと、もう絶望慣れしたって感じ？」

紅と杏子が最後にふうと大きく息を吐いた。杏子が潤を見て言った。

「バカは死ななきゃ治らないって言うけど、潤君も一度前向きに死んでみたらどうかしら？」

山荘爆発～十二月一日（月）午後八時三〇分

Aからの脅迫電話はなかったが、家族たちは人質の声を聞いたことで、気を楽しんでいた。さらに人質をとり返す目途がついたことで、二人の誘拐コンサルタントへの尊敬と感謝の念が高まっていた。青山は江崎に背を向けて報告書の作成に入り、江崎はその隣で足を組み、爪先に引っかけた健康サンダルをぶらぶらさせながら、テレビを見ていた。

和江と静子が二人に近寄ってくる。和江が言った。

「ここまで来られたのは江崎さんと青山さんのおかげよ。今から静子さんと買い出しに行くんだけど、ビールでいい？」

江崎は和江を見上げて言った。

「いや、アルコールは遠慮しておきます。まだ勤務中ですから」

「何よ、かたいこと言わないの！」

和江は笑いながら江崎の肩をばんばん叩いた。

「依頼人のあたしが飲んでいいって言ってるんだから、いいじゃないの。大塚さんが万札出してくれたのよ。スイートハート杏たんと話せて、財布の紐が緩んじやったみたいね」

和江は最後を小声で言い、フフフと含み笑いをした。

青山がi P a dから顔を上げ、笑顔を浮かべる。

「せっかくのご厚意ですから、僕はいただきます。江崎さんもいかがですか。こんなときに冷えたビールなんて最高に旨いですよ」

江崎は青山を睨んだ。

「君はいつもコーラじゃないか」

「ビールを飲みたい気分なんです」

「勤務中じゃないのか」

「時間外です」

「会社に言うぞ」

「ご勝手に。和江さん、僕はスーパードライをお願いします」

「はいはい。江崎さんも同じでいいの？」

「いえ、俺は下戸ですから」

江崎はそう言ってから青山を睨みつけ、唇を噛みしめた。

そのときテレビから注意を促すポーンという音が聞こえた。とっさに全員がテレビに視線を向ける。画面の上部に臨時ニュースのテロップが流れた。

――G県山中の山荘が爆発。生存者不明。

全員の顔から笑みが消え、血の気が引く。

和江が叫んだ。

「どういうことなの、江崎さん、青山さん！」

江崎は力なく頭を振る。

「わかりません……いったいどういうことだ？」

テロップは二度同じ内容を表示したあと、消えた。全員がテレビを食い入るように見つめたまま動けなかった。

青山が呆然として呟く。

「あのあとすぐに警察に通報して、機動隊を止めたはずですよ？」

「少なくとも俺はそう指示した。彼らは通報しているはずだ」

大塚が言った。

「それじゃ今のは何なんです？」

江崎が言う。

「今の段階ではわからないとしか言いようがありません。NLFが機動隊の突入がないことを知れば、自ら山荘に電話して爆破させるということもあるかもしれませんが、現時点で彼らが警察の情報をつかんでいたというのは考えにくい。山荘内で何らかの事故があったのではないかと思います」

正志が言った。

「何らかの事故って何だ？ 誰かがあやまって爆発させてしまったのか？」

その一言で室内の空気はさらに冷えた。

江崎が言った。

「和江さん、紅さんの携帯に電話してもらえますか」

「ええ……」

和江は真っ青な顔でバッグから携帯を取り出し、電話する。和江は頭を振った。

「電池切れだわ」

青山が言った。

「現段階での推測は無意味です。僕が前原さんに電話してみます。正確な情報が得られるかもしれません」

青山が前原刑事に電話をした。しかし警察もまだくわしいことはわからず、現場に急行している最中だということだった。

江崎が時計を見て言った。

「今八時半です。九時のニュースを待ちましょう」

買い出しに行くと言っていた和江と静子は椅子に腰を下ろした。正志はその隣に座り掌で口元を覆い、身じろぎ一つしない。三人はニュースを恐れるように、テレビに視線を向けなかった。一方大塚は室内をうろうろと歩き回っている。江崎と青山は無言でテレビを睨み続けた。顔色をなくした青山が江崎に向かって囁いた。

「メッセンジャーが決心をつけられずに、人質と一緒に心中を図ったのだとしたら……」

「言うな。酒を飲みたくなる」

山荘崩落～十二月一日（月）午後八時四十五分

紅、杏子、辻の三人は、道路から燃え上がる山荘を見上げていた。炎と火の粉が周囲の山林を明るく照らし、離れた場所に立っていても、熱風が押し寄せてくる。冬の夜とは思えない明るさと熱さだった。

紅が鼻と口元を押さえながら言った。

「煙たい。火事ってすごい臭い。目が痛くなる」

「風のない夜で幸いだったわね。山火事にならないうちに、消防が来てくれるといいんだけど」

杏子が言い、辻が心配そうに言った。

「潤と聡史君は無事逃げたかね」

「逃げたでしょ。全員で脱出したあと、わたしたちが携帯で起爆したのは、ちょっと余裕を持って十五分後なんだから」

「うまくいくかねえ」

辻が心細げに呟く。

紅が力強く言う。

「うまくいかせよう。あとはあたしたちの演技次第だよ、辻さん」

「そうだねえ。二人ともありがとう。潤のためにここまでしてくれるなんて」

「いいのよ。辻さんと紅ちゃんは晴信さんのせいで巻きこまれちゃったんだしね」

「あたしも気にしてないよ。聡史のこともあるし、辻さんにはいろいろ助けられたから」

辻が首を傾けて言った。

「あれ、サイレンの音じゃないかね」

「警察だけじゃなくて、マスコミのヘリにも来てほしいわね。取材してもらって、N L Fの人たちに見てもらわないと困るもの」

そう言って、杏子は髪を手ぐしでとかし始めた。

「ねえ紅ちゃん、わたしキレイ？ テレビに醜く映ったら、ダーリンに嫌われちゃう」

「でもきれいにしたら、演技にならないよ。再会の前にどうにかすれば？」

「それもそうね」

消防車、救急車、パトカーが列を成して到着する。三人はパニックを起こしたように叫んだ。

「あの中にまだ人がいるんです！」

「助けてあげてください、二人が！」

消防隊員は尋ねた。

「何人ですか？ 場所はどこです？」

「一階のリビングに二人」

杏子が言うと、防火服に身をつつんだ消防隊員たちは駆け出して行った。続いて駆けつけた救急隊員が三人に尋ねる。

「危険ですから、こちらへ！ お怪我はないですか！」

三人は「ないです」と言い、救急隊員の誘導で道路を下っていく。

数人のスーツ姿の男が駆け寄ってきた。そのうちの一人が言う。

「G県警警備部公安第一課の前原です。あんたがたが人質だった、越川紅さん、大塚杏子さん、辻明さんですね？」

三人は悲壮な顔でうなずいた。

「何が起きたのか、説明してもらえますかね？」

紅が顔をゆがめて言った。

「一人だけ親切なゲリラがいて、裏切りがばれ、あたしたちと一緒に残されたんです。そしたら突然別のゲリラが怒って入ってきて、二人はもみ合いになって、あとから来たほうが撃たれちゃって。あたしたちはその隙に逃げ出して……そうしたらまもなく山荘が爆発して……でも二人はまだあの中に……」

「……こ、怖かったわ」

杏子が声を震わせ、辻もショックを隠しきれないといった様子でうなずいた。

そのとき背後でひときわ大きな爆発音が上がる。驚いて振り向くと、山荘が崩落するところだった。

エピローグ～十二月六日（土）

残りの人質三人も無事救出されたおかげで、晴信は自分の正当性を堂々と主張することができた。身代金を払ってくれと懇願した映像は、他の人質を殺すと脅されて言ったこと、自分の正義感を利用して、人質三人を殺害する罠のために解放されたこと、身代金は払っていないことを、カメラの前で弁舌爽やかにふるった。世論の矛先は被害者であるミスター誘拐ではなく、N L Fに向けられ、晴信のクリーンなイメージは回復した。

晴れた土曜日の午後、晴信は陽光の降りそそぐ自宅のリビングで、革張りのソファにのんびりと座り、葉巻をくゆらせながら新聞を読んでいた。美登里は一通の封筒を手にして、夫の前に座る。

「あなた、ちょっといいかしら。お話があるの」

「あとにしてくれないか」

「今聞いてもらいたいわ。長くはかからないから」

美登里は封筒の中から晴信と大塚杏子がホテルから出てくる写真を出して、ずらりと並べた。晴信は葉巻を指から膝に落とし、「あちっ」と悲鳴を上げる。美登里は動じず、優雅に微笑みながら離婚届を差し出した。

「N L Fがこのネタを使わなかったから、わたしが使わせてもらおうと思うの。この写真をマスコミに公表されなくなかったら、離婚届に判を押してちょうだい。慰謝料と香の養育費については、弁護士折口さんから連絡がいくからよろしくね」

表参道のオープンカフェで、椅子をわざわざ隣り合わせになるよう移動させ、熱い視線を交わすカップルがいた。

「あーんして、和びょん」

夫の和己が口を開くと、その口にミートドリアののったスプーンを滑りこませる。杏子は首をかしげて尋ねた。

「ね、おいしい？」

「スイートハート杏たんが食べさせてくれるものなら、どんなものでも最高さ。いや、杏たんの作ってくれる料理の次に、かな」

和己は杏子にウインクを送り、杏子は甘え声で言った。

「んもう、和びょんたら。もう一口食べさせて、あ・げ・る」

「杏たんの唇のほうがいい」

二人は人目もはばからず抱き合い、熱いキスをした。その店にいる誰一人として二人の間には入れなかったし、入りたいとも思わなかった。

潤からの連絡を受け、辻は指定された銀行口座に生活費の送金をした。居場所はまだ言えないと言う――「おじいちゃんとおばあちゃんに迷惑をかけたくないから」。十六歳で祖父母の身まで気遣わなければならないなんて、不憫な子だと思う。

辻は静子に言った。

「わたしはもう一度潤を子供時代に戻してやりたいんだ。あの子の背負っているものを少しでもわたしが背負ってやれば、あの子は子供に戻れるだろうか。そうすればあの子は人生はやり直しができるものなのだと信じられるかもしれない」

「それじゃわたしたちは長生きしないといけませんね。もう無茶はよしてくださいよ」

二人は話し合い、娘とかつての婿には、潤の生存について今は話さないことに決めた。

そのときの悪い直感を信じるべきだった。オフィスのドアの外に立っている青山を見て、江崎は言った。

「だからどうしてここに来るんだ？」

「月曜日までに報告書を仕上げなければならないんです。ここだとはかどるんですよ」

江崎は青山を中に入れた。

「酒は持ちこむなよ」

青山はコートを脱ぎ、カジュアルなセーターにジーンズという格好になった。椅子に腰を下ろすと、すぐにテーブルに書類を広げる。それからふと思い出したように言った。

「そうだ、和江さんが電話してほしいって言ってましたよ。訊きたいことがあるって」

「和江さんが？ 何かな」

このときにも江崎の直感は何かおかしいと告げていたのだ。和江が自分の連絡を欲しているとして、なぜ青山経由でそれを伝えてくるのか。しかしささいな引っかかりをやり過ごし、江崎は携帯電話の電話帳から和江に電話をかける。

電話の向こうから英語の声がした。

『ハロー』

懐かしい女の声。一言聞いただけで甘酸っぱさと苦々しさを混ぜたような気分になる。

『この番号……ケンなの？ どうしたの？』

リンダー――江崎はどうにか英語を発した。

『あ……いや……すまん、間違えた』

江崎は動揺したまま電話を切った。青山が目の前で爆笑している。

江崎は顔を紅潮させて怒鳴った。

「青山ッ！」

「未練がましく別れたかみさんの電話番号を携帯に入れているからですよ。和江さんの携帯番号をリンダの番号に書き換えておいたんです」

「な……なん……」

「何でこんなことをしたかって？ 今までさんざんコケにしてくれたお返しですよ。最後にいい

ものを見せてもらいました。江崎さんって意外と女に純情なんだ」

青山は笑いすぎて目ににじんだ涙を拭くと、書類をまとめ、帰り支度を始めた。

江崎は思った――引き抜きはやめた。

紅は解放後、草加の実家で過ごした。母に引きずられるようにして実家に帰ると、家中の至る所に自分の写真が貼ってあり、テレビの前には幼い紅を撮ったビデオテープが山積みになっていた。

母は紅に言った。

「全部オトンが引っ張り出したのよ」

それから母は交渉中の父について話してくれた。交渉の窓口に立ち、紅をとり返すのだという一心で電話でのNLFの脅迫に耐え、立ち向かっていったと言う（ただし、NLFにもう二度とギャンブルには手を出さないと約束したという件については、よく理解できなかったが）。それでも父の奮闘を聞いて、紅の中で父への気持ちが変化した。母の手作りの食事を家族全員でとり、両親が仕事に出たあと、一人で留守番をしながら、アルバムの写真を見ていると、さまざまなことが思い出された。三年も実家を離れていたのに、家の中に自分の居場所を残してくれていたことにも、素直な感謝の気持ちがわいた。

土曜日の夕方、紅は自分のアパートに戻るために、荷物をまとめた。母は勤め先のスーパーから持ち帰った大量の惣菜を持たせてくれた。父は紅に対して遠慮があるようで、自分から話しかけることはなく、番組が終わってもチャンネルを切り替えることのないテレビを見つめている。

紅のほうから言った。

「じゃあオトン、あたし帰るからね。でもお正月にはまた来るから」

父はすっかり白髪になった頭をこちらに向け、びっくりした顔で言った。

「もう誘拐されるなよ」

「いろいろありがとう、オトン」

それから紅は駅まで母に送られたあと、一人東武線のホームで電車を待った。携帯電話が鳴る。公衆電話からだった。紅はとっさに聡史だと思って、電話に出る。

「聡史？」

「うん。そっちは大丈夫？」

穏やかな聡史の声だった。

紅は言った。

「杏子さんも辻さんも元気だよ。警察からは同じことを何度も訊かれてうんざりしたけど、乗りきった。聡史たちも無事逃げられたんだね」

「うん。場所は言えないけど、潤も無事」

「よかった。あのね、聡史……」

紅は訊きたいことがあったのだが、切り出すことをためらった。

「あたし、ちゃんとお礼を言ってなかった。助けに来てくれてありがとう」

「いいよ。紅も無事に逃げられてよかったな」

「うん」

たぶんこの電話が聡史との最後の会話になる。紅はこのとき直感した。思いきって、口を開く。

「聡史に訊きたいことがあるの」

「何？」

「温泉旅行に行く日、どうしてドタキャンしたの？」

聡史は沈黙したのち、静かに言った。

「別れるつもりだった」

「理由を聞かせて」

「紅は僕のことを好きじゃなかったから」

今度は紅が沈黙した。

聡史が言った。

「元気で、紅」

「聡史も」

通話は切れた。二人の関係はあっけなく終わった。

学生時代の友人が結婚を決めたとき、紅はフリーだった。強い焦りが募った。そのときに今まで眼中になかった聡史が視野に入ってきた。聡史は同じ会社年に一年遅れで入社した後輩だった。

――北島君は今まであたしがつきあった男と比べると、ランクがいちばん下。今どきありえない髪型してるし、背も低いし、服のセンスも悪い。そんな彼が、あたしみたいに可愛いめの女をふるわけがない。この人との恋愛なら、きっと傷つかずにすむし、失敗しないだろう。愛される保証付きの恋愛なら、安心。もう実らない恋愛はしたくない。

――最低の男。

聡史は今までつきあった中でいちばんつまらない男だと思っていた。ズボンのポケットに手を入れて、軽く背を丸め、自信なさそうに歩く。甘えてみても、気がきかず、いつも自分だけが我慢してばかり。それなのに聡史とつき合っていると、自分がいかに自分勝手に、打算的な女かと思い知らされた。イケメンとつき合っていたとき、恋に慣れている女の子を演じて、必死で背伸びしていたときのほうがましだった。

――最低の女。

最低だったのは自分のほうだった。紅は聡史とつき合いながら、聡史を見下していた。自分の恋愛はずっと嘘ばかりだった。ハートよりクリスマスや誕生日などのイベントでみじめにならないことを優先してきたから。そっちのほうがみじめだと気づかなかったから。

これで何度目の失恋だろう。しかし今、いつもの失恋とは違うほろ苦さが紅の胸を締めつけた。

薄闇の中、ライトをつけた電車がホームに入ってきた。

紅は自分が必要なものをすべて持っていることに気づいた。誘拐されていたときには、朝食に何を食べるのかすら自分では決められなかったのに、今は自分の意思で乗りたい電車に乗れる。

――今のあたしは何だって自分で決められる。あたしはあたしのパイを見つけよう。みじめで

情けない自分はもうやめよう。

紅は電車に乗った。背後でドアが閉まり、薄闇を照らしながら走り出した。

了

帰宅は未定

<http://p.booklog.jp/book/29096>

著者：東原恵実

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/lexikon0620/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/29096>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/29096>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.